

日本応用心理学会第 61 回大会
発表論文集
1994 9/9-10



城西大学

日本応用心理学会第 61 回大会
発表論文集
1994 9/9-10



城西大学

シンボルマークについて

本大会のシンボルマークは、準備委員の清水公一ゼミで作成しました。
城西大学のイニシャルJ Uを図案化し、Jは日本応用心理学会と城西大
学を重ね、ハートはUと心理学の（こころ）を重ねたものです。



日本応用心理学会第61回大会記念

(於：城西大学清光会館)

目 次

大会日程

公開シンポジウム

公開特別講演

パネル・ディスカッション

研究発表

大会日程

第1日 9月9日(金)

	9:00	10:00	12:00	12:05 13:05	13:15	15:45	16:10 17:00	17:15	19:15				
受付開始		人格1 (A室)	検査・測定1 (B室)	臨床・相談1 (C室)	看護1 (D室)	社会・文化1 (E室)	ポスター発表 (F室)	パネル・ディスカッション1 「女性と母性」 (G室)	運営委員会 (一階会議室)	公開シンポジウム 「人の終焉をいかに看取るか」 (清光ホール)	記念写真撮影 (清光会館一階ロビー)	会員総会 (清光ホール)	懇親会 (水田記念図書館九階会議室)

第2日 9月10日(土)

	9:00	10:00	12:00	12:45	14:45	15:00	16:30
受付開始		人格 2 (A室)		発達・教育 2 (A室)		公開特別講演 「健康教育と心理学」 (清光ホール)	
		発達・教育 1 (B室)		臨床・相談 2 (B室)			
		検査・測定 2 (C室)		看護 3 (C室)			
		認知・感情 (D室)		社会・文化 2 (D室)			
		看護 2 (E室)		産業・職業 (E室)			
		ポスター発表 (F室)					
		パネル・ディスカッション2 「地方行政と心理学」 (G室)		パネル・ディスカッション3 「血液型性格判断, ホントか, ウソか」 (H室)			

公開シンポジウム

第1日 9月9日(金) 13:15-15:45 清光ホール

人の終焉をいかに看取るか

	企画・司会者	共立女子大学	高嶋 正士	1
繁ながり合う”いのち”を	シンポジスト	聖路加看護大学	木村登紀子	2
関係の中で苦悩を越える看取りへ	”	広島大学	鈴木 正子	3
人の終焉をいかに看取るか	”	長岡西病院	森津 純子	4
人の終焉をいかに看取るか	”	東洋大学	恩田 彰	5

公開特別講演

第2日 9月10日(土) 15:00-16:30 清光ホール

健康教育と心理学

講演者	早稲田大学	本明 寛	6
-----	-------	------	---

パネル・ディスカッション1

第1日 9月9日(金) 10:00-12:00 G室

女性と母性

— フェミニズムの視点から —

	コーディネーター	城西大学女子短期大学部	橋本 泰子	7
女性学における「母性」	話題提供者	城西国際大学	矢木 公子	8
現代女性文学にみる母性あるいは母親像	”	城西大学女子短期大学部	長谷川 啓	9
映画の中の母親像	”	城西大学女子短期大学部	上村 雅子	10
現代女性のライフスタイル	”	城西大学女子短期大学部	藜沼 康子	11

パネル・ディスカッション2

第2日 9月10日(土) 10:00-12:00 G室

地方行政と心理学

— なぜ、いま、地方自治体に心理学なのか —

	コーディネーター	城西大学経済学部	渡辺 好章	12
	”	人材開発情報センター	外島 裕	
情報発信とそのフィードバック過程における心理学の課題 — 春日部市「かすかびあん」AIのケース —	話題提供者	東京国際大学	志津野知文	13
環境行政と心理学	”	埼玉県庁	横山 正明	14
マスメディアの観点から	”	テレビ埼玉	田中 寿一	15
地方行政と心理学(経営心理学の観点から)	”	亜細亜大学	馬場 房子	16

パネル・ディスカッション3

第2日 9月10日(土) 12:45-14:45 G室

血液型性格判断、ホントか、ウソか

	コーディネーター	城西大学女子短期大学部	藤田 圭一	17
血液型と性格 — 論争の焦点	話題提供者	立馬株式会社	井口 拓自	18
古川竹二の「血液型気質相関説」について	”	福島大学	佐藤 達哉	19
能見正比古の「血液型人間学」について	”	日本大学	大村 政男	20
医学的立場から血液型性格判断を考える	”	日本女子体育大学	富家 孝	21

研究発表

人格 1

第1日 9月9日(金) 10:00-12:00 A室		座長	齋藤幸一郎	
1	現代青年の宗教観と宗教活動	共立女子大学	○高嶋 正士	22
2	漱石文学と心理学との関連についての一考察	城西大学女子短期大学部	藤田 主一	23
3	(取消し) 自己と自我への一考察	田中心理学研究所	田中熊次郎	—
4	左右優劣と器用さの分析的研究(3)	東邦大学	稲松 信雄	24
5	人生観の外面相と内面相	東京家政学院大学	○永澤 幸七	25
6	精神テンポに関する基礎的研究(第74報告)	白梅学園短期大学	林 潔	26
		常磐大学	齋藤幸一郎	
		早稲田大学	三島 二郎	
		玉川大学	寺沢 充夫	
		日本女子体育大学	○望月 稔	
		附属二階堂高等学校		

検査・測定 1

第1日 9月9日(金) 10:00-12:00 B室		座長	田中富士夫	川島 大司
1	サンプル数の諸問題(5)	東海女子大学	○川島 大司	27
	— サイコロを使った期待値と実測値のずれについて —	早稲田大学	久米 稔	
2	MMP I 新日本版のティーンエイジャー基準	中京大学	田中富士夫	28
3	注意配分検査における反応時間について	航空医学実験隊	竹内 由則	29
4	顔写真による目撃者の同定判断(2)	科学警察研究所	渡辺 昭一	30
	— 同定精度と判断の確信度, 目撃供述との関係 —			
5	大規模顔画像データベースの検索シミュレーション	科学警察研究所	○足立 浩平	31
	— 特徴キーワードによる方法 —	〃	渡辺 昭一	
		〃	鈴木 昭弘	
6	操縦パフォーマンスに及ぼす断眠の影響	航空医学実験隊	○垣本由紀子	32
	— フライトシミュレータにおける変化 —	〃	竹内 由則	

臨床・相談 1

第1日 9月9日(金) 10:00-12:00 C室		座長	林 潔	新田 茂
1	ミニバウムテスト診断の客観化に関する基礎的研究Ⅲ	江戸川女子短期大学	福井 嗣泰	33
	— 性格検査との関係について —			
2	心理書簡法による生活習慣の改善についての研究	人吉農芸学院	○新田 茂	34
		神戸少年鑑別所	上垣 博和	
3	情緒表示規則, 解読規則についての検討	白梅学園短期大学	○林 潔	35
		獨協大学	瀧本 孝雄	
4	知的障害児の歩行判定に関する一考察	北星学園大学大学院	○青山真奈美	36
		北星学園大学	豊村 和真	
5	読詩による詩歌療法の境界例への適用・その2	横浜心理カウンセリング研究所	宇佐見万喜	37
6	長期経過からみたそううつ病者の人格水準	成城墨岡クリニック	成田 猛	38

看護 1

第1日 9月9日(金) 10:00-12:00 D室		座長	越河 六郎	安藤 詳子
1	色彩認知の研究(第二報)	川崎医療短期大学	○關戸 啓子	39
	— 看護婦における空腹の影響 —	千葉大学	内海 滉	

2	看護教育の現場における目測の判定能力の研究 — 色彩認知と身体諸症状とM P I との関係 —	奈良県立医科大学 附属看護専門学校	○元山 美貴	40
		〃	堀口 陽子	
		群馬県立医療短期大学	原口 知子	
		千葉大学	内海 滉	
3	精神作業に及ぼすBGMの効果 — 看護学生64名に内田クレペリン検査を行って —	奈良県立医科大学 附属看護専門学校	○堀口 陽子	41
		〃	元山 美貴	
		千葉大学	内海 滉	
4	看護職員の自我同一性 — 看護学生と臨床実習指導者の比較 —	名古屋大医療技術短大部 名古屋大医療技術短大部 千葉大学	○安藤 詳子 渡邊 憲子 内海 滉	42
5	看護婦の安全態度スケールの作成	東邦大学医療短期大学 自治医科大看護短期大学	○荒木美千子 松下由美子	43
6	病棟における看護の労働負担評価	労働科学研究所	越河 六郎	44

社会・文化 1

第1日	9月9日(金) 10:00-12:00	E室	座長	尾入 正哲	濱 保久	
1	日本人の生活意識(1) 自然環境	相愛大学		高橋 敷		45
2	欲求構造と環境問題	航空医学実験隊		廣島 克佳		46
3	オフィス環境快適性評価の試み(4) パーティションの導入と混雑感に関する検討	京都大学		尾入 正哲		47
4	住環境の快適性の比較研究	北海道大学大学院 北星学園大学		○島山 彰文 大坊 郁夫		48
5	冠婚葬祭の実態と意識に関する地域比較研究	北星学園大学		濱 保久		49
6	(取消し) 生涯学習の指導者のイメージ	文教大学		稲越 孝雄		—

ポスター 1

第1日	9月9日(金) 10:00-12:00	F室				
1	社会的欲求の比較文化的研究 韓国と日本の学生の比較について	立正大学 白梅学園短期大学		○斎藤 勇 荻野 七重		50
2	日本の家族関係 — 祖父母と孫の関係 — (2)	北海道教育大学		小川 隆章		51
3	道案内文への評価(Ⅲ)	上智大学		古寺 充		52
4	災害避難所における心理学的問題	日本大学		村井 健祐		53
5	現代勤労者の余暇活用に関する研究	大阪産業大学 松下電工カウソリソグールム		○森下 高治 中尾 忍		54
6	学生のキャリア意識に関する一考察	人材開発情報センター		○片岡 大輔 外島 裕		55
7	(取消し) 投資家行動における心理的要因の考察	東京大学		佐々木真哉		—
8	加齢による課題対応行動の比較	関西女学院短期大学		向井 希宏		56
9	世論調査にみる不安感の潜在構造	憫東京工学		本多 敏雄		57
10	モノの類似感のメカニズムの解明の試み	富士通(株)		大沢 光		58
		〃		○王 晋民		
11	モノの印象語の特性分析と分類の試み	富士通(株)		大沢 光		59
		〃		○水口 有		
12	看護婦のストレスコーピングとその効果	東京大学大学院		塚本 尚子		60

人格 2

第2日	9月10日(土) 10:00-12:00	A室	座長	長谷川孫一郎	松田 君彦
-----	----------------------	----	----	--------	-------

1	かかわり方の発展にかんする研究 (28) 集団における補助自我的リーダーの役割について	文教大学 東京都女性情報センター 文教大学 大正大学	○小原 伸子 青木 玲子 佐藤 啓子 長谷川 真由	61 62
2	人間関係の変容 可能性としての人格 (10)			
3	関係状況における自己に関する研究 (Ⅱ)	日本心理劇協会	土屋 明美	63
4	自己愛人格尺度の作成	富山大学	山本 都久	64
5	自己開示行動の認知と対人魅力	鹿児島大学	松田 君彦	65
6	役割の志向性に関する検討	日本大学大学院	時田 学	66

発達・教育 1

第2日	9月10日(土) 10:00-12:00	B室	座長	吉川 晴美	山田麻有美	
1	「関係学・心理劇式 集団状況・発達評価法」の基礎研究 — 関係概念の形成について —	児童臨床研究会			矢吹美美子	67
2	(取消し) 音響伝達でろうあ者は変わるか — 生まれつきのろうあ者も会話ができるか —				金田 富美	—
3	「幼児の音の好悪について」	千葉明德短期大学			山田麻有美	68
4	妊産婦の母性発達に関する研究 (1) — 感情と妊娠動機との関係 —	日本大学大学院 日本大学			○和田 佳子 花沢 成一	69
5	親子関係の発達に関する研究Ⅰ — 大学生の親子関係について	東京家政学院大学			吉川 晴美	70
6	親子関係の発達に関する研究Ⅱ — 親子関係の変遷の認知について	東京家政学院大学			義永 睦子	71

検査・測定 2

第2日	9月10日(土) 10:00-12:00	C室	座長	関 陽子	三井 利幸	
1	手書きひらがな文字数量化法の試みと評価	科学警察研究所 "			○高澤 則美 関 陽子	72
2	漢字の構造と書字行動との関係	科学警察研究所 "			○関 陽子 高澤 則美	73
3	平仮名及び算用数字による筆者識別Ⅱ	愛知県警察本部 愛知県立旭丘高等学校 愛知県警察本部 "			○菅原 博嗣 川村 司 若原 克文 三井 利幸	74
4	枠内署名筆跡の筆者識別	愛知県立旭丘高等学校 愛知県警察本部 " "			○川村 司 菅原 博嗣 若原 克文 三井 利幸	75
5	多変量解析による筆者識別 — 鑑定手法への導入 —	愛知県警察本部 " "			○若原 克文 菅原 博嗣 三井 利幸	76
6	変死動向 (Ⅲ)	愛知県立旭丘高等学校 愛知県警察本部 "			○三井 利幸 若原 克文	77

認知・感情

第2日	9月10日(土) 10:00-12:00	D室	座長	山岡 淳	豊村 和真	
1	「香り」の評価方法としてのイメージ連想法の有効性 — 嗅覚とイメージ —	(株) ジャパン リサーチ コンサルタント			岩村 暢子	78
2	方向感覚に関する一考察	北星学園大学			豊村 和真	79

3	キルリアン写真による気功の心理生理学的研究(2)	MOA九州生命科学研究所	蔵本 逸雄	80
		〃	〇内田 誠也	
		〃	菅野 久信	
4	気功訓練に伴う不安傾向の変動	日本大学大学院	〇薛 永斌	81
		日本大学	山岡 淳	
		〃	大村 政男	
5	音刺激と振動刺激の生理心理学的影響(1)	日本大学	〇山岡 淳	82
		日本大学大学院	時田 学	
6	プロレス観戦の心理	日本女子体育大学	富家 孝	83

看護 2

第2日 9月10日(土) 10:00-12:00 E室

座長 松尾 典子 川本利恵子

1	看護学生の性の考え方・行動に影響を及ぼす要因の分析 (その4)	東京女子医大看護短大 千葉大学	〇村本 淳子 内海 滉	84
2	描画テスト・GHQ・CASに示された看護学生の健康 度についての検討(2)	産業医科大医療技術短大 山口大学医療技術短大部 山口大学大学院 千葉大学	〇川本利恵子 金山 正子 田中マキ子 内海 滉	85
3	看護学生の情意的発展 その3 看護実習別の特性	日本赤十字 武蔵野女子短期大学	金井 悦子	86
4	看護短大生の死に関する意識調査	秋田大学医療技術短大部 千葉大学	〇松尾 典子 内海 滉	87
5	看護学生と大学生における劣等感と自己教育力	東京都立医療技術短大 〃 千葉大学	〇森 千鶴 佐藤みつ子 内海 滉	88
6	看護教育による精神病に対する看護学生の意識構造の変化 — 3年間の継続的研究 —	山口大学医療技術短大部 山口大学 産業医科大医療技術短大 千葉大学	〇金山 正子 田中マキ子 川本利恵子 内海 滉	89

ポスター 2

第2日 9月10日(土) 10:00-12:00 F室

1	青年期の自己開示に関する研究(4) — 対人関係の親密さとの関連について(3) —	鹿児島大学	今林 俊一	90
2	「血液型性格学」は信頼できるか:第11報 [I] — キャテルの16PFとの関連(その1) —	日本大学 富士短期大学	〇大村 政男 浮谷 秀一	91
3	「血液型性格学」は信頼できるか:第11報 [II] — キャテルの16PFとの関連(その2) —	富士短期大学 日本大学	〇浮谷 秀一 大村 政男	92
4	発達についての社会意識と家族意識	茨城大学	中原 弘之	93
5	大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてII	長野県短期大学 日本女子大学	〇藤田 勉 久東 光代	94
6	大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてIII	尚美学園短期大学 尚美学園短期大学 日本女子大学	川島 真 〇川島 真 久東 光代	95
7	ストレス刺激に対する拇指球上MVの変動	長野県短期大学	藤田 勉	96
8	感情の特殊な表現文字について	鳥取県警察本部	徳田 豊	97
9	適応度テスト開発について(その2)	日本大学大学院 川村学園女子大学 統計数理研究所 日精研リサーチ	中島 彩花 松井 洋 土屋 隆裕 〇玉井 寛	98

10	適応度テスト開発について(その3)	統計数理研究所 川村学園女子大学 日精研リサーチ	○土屋 隆裕 松井 洋 玉井 寛	99
11	児童が認知する顔の目立ちやすさの要因	山口県科学捜査研究所 山口大学	○福本 純一 福田 廣	100
12	日付推論におけるアクセシビリティ仮説の検討	警視庁科学捜査研究所 学習院大学大学院	○越智 啓太 相良陽一郎	101

発達・教育 2

第2日 9月10日(土) 12:45-14:45 A室		座長	高橋たまき	黒田 淑子
1	中学生のクラスの動機づけ構造の認知に関する検討	筑波大学大学院	谷島 弘仁	102
2	コンピュータ学習時における初心者の心理的特性Ⅱ	日本女子大学	久東 光代	103
3	獣医系大学のカリキュラムについて — 就職動向から見た一考察 —	麻布大学	岡本 善之	104
4	文章産出からみた理解	日本女子大学	高橋たまき	105
5	教育評価の研究(その34) — 生涯学習時代に於けるあり方をさぐる —	大泉四期会	岸本 英男	106
6	大学教育における心理劇(4) — 演習における多種多様な活用 —	お茶の水女子大学	黒田 淑子	107

臨床・相談 2

第2日 9月10日(土) 12:45-14:45 B室		座長	飯塚 幸子	大瀧 法子
1	長期入院中の精神分裂病患者の生活環境が痴呆様症状の出現及び進行に及ぼす影響について — 老人健康度検査によるコントロール群との比較検討 —	下館病院 江戸川女子短期大学	○石川 正人 福井 嗣泰	108
2	介護場面における行動観察による老年期痴呆の障害像	蕨サンクチュアリ 白梅学園短期大学 " "	○大瀧 法子 萩野 七重 木下 安子 小林 結美	109
3	高齢者の研究 — アンケート調査による —	城西大学女子短期大学部 " "	○橋本 泰子 佐藤 嘉晃 市川 康夫	110
4	複雑な家庭背景から発病した音大中退の境界人格障害	横浜市立大附属浦舟病院	飯塚 幸子	111
5	乳幼児の成長発達および家庭環境条件に関する研究	佐賀医科大学 産業医科大医療技術短大 千葉大学	草野美根子 中 淑子	112
6	エイズ啓蒙期におけるエイズの意識 — 看護婦の場合 —	産業医科大医療技術短大 " " 佐賀医科大学 千葉大学	○内海 滉 ○中 淑子 新小田春美 深田 高一 草野美根子 内海 滉	113

看護 3

第2日 9月10日(土) 12:45-14:45 C室		座長	佐藤みつ子	山本 勝則
1	看護場面における接触の研究(第4報) — 对人的接触における意識構造 —	北海道大医療技術短大部 千葉大学	○宮島 直子 内海 滉	114
2	看護場面における言語的コミュニケーションの研究 (第1報)	久留米大学 千葉大学	○久木原博子 内海 滉	115
3	看護場面における指導者および学生の患者に対する言語量の研究Ⅷ	秋田大学医療技術短大部 千葉大学	○山本 勝則 内海 滉	116

4	小児看護学実習におけるコミュニケーション能力が向上するための指導方法 — 第3報 —	東京女子医科大看護短大 千葉大学	○岡村 千鶴 日沼 千尋 内海 滉	117
5	他者からの影響と自己評価的意識	東京都立医療技術短大 千葉大学	○佐藤みづ子 森 千鶴 内海 滉	118
6	喫煙の研究 — 禁煙による心身への影響 —	埼玉医科大学附属病院 千葉大学	○飯島 昭子 内海 滉	119

社会・文化 2

第2日 9月10日(土) 12:45-14:45 D室		座長 大坊 郁夫	山田 隆	
1	電話利用の心理学的研究 ～「電話スキル」について～	(助)郵政国際協会	山田 隆	120
2	異文化コミュニケーションの研究 I	山手心理教育研究所 大東文化大学	○高橋 浩子 中村 安子	121
3	異文化コミュニケーションの研究 II	大東文化大学 山手心理教育研究所	○中村 安子 高橋 浩子	122
4	外国・外国人の受容に関する認知的研究	北星学園大学大学院 北星学園大学	○田中 直子 大坊 郁夫	123
5	人名によるステレオタイプのイメージの形成	北星学園大学	大坊 郁夫	124
6	中国・台湾における日系進出企業に対する地域住民の評価	人材開発情報センター 〃	○外島 裕 片岡 大輔	125

産業・職業

第2日 9月10日(土) 12:45-14:45 E室		座長 大沢 光	高石 光一	
1	商業集積における商店主の経営意識 ～後継者問題を中心に～	中小企業事業団 朝日大学	○高石 光一 荻久保嘉章	126
2	中小企業の組織環境に関する研究 1 ～S県を例とした労働環境への投資について～	東海大学短期大学部 〃 〃 〃 〃	○辻 昭 小森田哲哉 小林 東 佐野 毅 松田 浩平	127
3	中小企業の組織環境に関する研究 II — S県における組織風土因子の構造について —	東海大学短期大学部 〃 〃 〃 〃	○佐野 毅 辻 昭 小森田哲哉 小林 東 松田 浩平	128
4	大学生向就職適性検査 Career Focus に関する研究(7) — 診断結果と就職後の適応状況との関連性について —	宇都宮大学 鶴見大学 宇都宮大学 大学生向職業適性検査 共同研究会	○橘川 真彦 松原 達哉 服部 環 国方 健一	129
5	大学生向就職適性検査 Career Focus に関する研究(8) — 検査の利活用と就職後の適応状況との 関連性について —	宇都宮大学 鶴見大学 宇都宮大学 大学生向職業適性検査 共同研究会	○服部 環 松原 達哉 橘川 真彦 国方 健一	130
6	顔の表現用語とその分析	富士通(株)	大沢 光	131

公開シンポジウム

公開特別講演

パネル・ディスカッション

人の終焉をいかに看取るか

企画・司会者 共立女子大学 高 嶋 正 士

ここ10数年前から「臓器移植」、「脳死」、「ホスピス」、「医の倫理」、「尊厳死」、「ターミナルケア」、「ビハラー」等々の言葉がさかんに用いられ、また、これに関するシンポジウムや研修会や書物も多く見られるようになりました。新聞を見ると、どこかでこれらの問題を扱っているのが現況です。

これは、日本ではタブー視されがちな「死」の問題に多くの人々が関心を寄せ、誰もがいつかは体験しなければならない問題（釈迦は、死は生けとし生きるものの定めであると説かれた）に、どのように対処すればよいのか、また、いかに看取るかを真剣に考えるようになったからだと思います。しかしながら、これらの問題は大変むずかしいのであります。

われわれが、自らの「死」を目前にしたとき、あるいは他者の臨死に接したとき、何ができるでしょうか。この度の日本応用心理学会第61回大会準備委員会で角度をかえて「公開シンポジウム」として、広くすべての人に関わる重大な今日的課題をとりあげることにいたしました。はからずも私が企画・司会を受け持つことになりました理由は、昭和37年（1962）渡米した際にアメリカの2・3の病院における臨床心理学の応用の実態を見学したことに始まります。昭和39年（1964）に島田総合病院に週一回非常勤として勤務するようになって以来、当時の院長島田信義氏と心身医学の導入を目指し、心身症患者に対する心理療法やカウンセリングを行ってきました。その一つに院長から臨死患者のベッドサイドに、時間のある限りいて欲しいといわれたことを思い出します。当時すでにターミナルケアの一端をになっていたことになりました。このような体験を何回か行なってきました。

今日、ターミナルケアが一般の人々の間で関心をよぶようになった理由は、人々の死に場所が家庭から病院へ移ったということがあげられます。人々は病院で生まれ、病院で死を迎えるようになってしまいました。特にガン患者だけについてみますと、その90%以上は病院で死を迎えているという結果が出ています。そのことは、家庭において家族に見守られながら亡くなっていった昔と違い、現在では病院の中で多くの機械に囲まれ、家族との十分な交流もないまま、寂しく孤独な死を迎える人が多くなっています。

治る見込みのない患者は病院の中で孤独に陥り、痛みに苦しみつつ、多忙な病棟の個室で、人々から見捨てられ、隔離され、また、周囲に重荷を感じさせる存在となっています。

ホスピスはひとことでいえば、末期の病状にある患者や家族に、温かい心のこもった、また、苦痛を和らげることを中心としたケアを提供することだといわれています。日本におけるホスピスは、主としてキリスト教にもとづく病院でのみ行われていました。

これに対して、1985年に田宮仁氏によって提唱された「佛教ホスピス」を「ビハラー」（Vihāra）と呼び、佛教に根ざしたターミナルケアが、日本で初めて新潟県長岡市に誕生しました。本日のシンポジストとしてお招きした森津先生は、長岡西病院のビハラー病棟の女医長さんです。ビハラーという言葉はサンスクリットの「休息の場、僧院、または寺院」と訳されます。

ホスピスもビハラーも、死に向かいつつある人は、まだ人生の大切な時間を生きている人であるということに重要視し、また、患者自身もそう感じられるように人間的看護（心のケア、支え）をします。

日本はいまや世界第一位の長寿国となりましたが、「自分の死は遠い」という幻想を生みだしているところに「死」への関心はうすらいでいきます。その奥には心底に根強くある、死を恐れ、忌み嫌う傾向を補強しているからです。しかしながら、いかに回避し遠ざけようとしても「死」は必ずやってきます。しかも忌み嫌った「死」との直面は、人生の最終期を悲惨なものにするという反省がとくに医療現場から出ました。

Care（世話、看取り）：患者に死を受容させることではありません。死に際して、不安や孤独をもって行き場のない怒りに、心を病めている人々に対し、それをそのまま「そういった生」を受けとめ、ゆるし、支え、少しでも痛みを癒していくことだと思います。ホスピスもビハラーも、その人らしく生きる心の手助けをすることにあります。

「人の終焉をいかに看取るか」のシンポジウム企画者としての意図を示し、四名の諸先生にそれぞれの立場からお話をさせていただくことにいたします。

繋がり合う¹⁾いのち²⁾を

木村登紀子
(聖路加看護大学)

次のような問の設定のもとに、本報告者が昨年来国で受けたCPE (Clinical Pastoral Education) 研修と、自分自身の親しい人々との死別体験を踏まえて、この報告を展開させてみたい。「問」とは、「どんな状態で、どんな風に、いのちを終えるにしても、それぞれの人が”その人らしく”充実して生き抜く(終焉を迎える)ことを可能にするためには、どのような心理的なケア、体制、理念が必要か」である。(※1,2,3)

1. 上記の問を言い換えれば、いのちの「普遍性・平等性(どんな状態、どんな風であっても)」という横軸と「独自性・個別性(それぞれの人がその人らしく)」という縦軸の接点として表現することができそうである。例えば、人間は生涯にわたり発達を続け、最終段階の課題は「統合」であるとするエリクソン、E. H.、死の心理過程の最後を「死の受容」とするキューブラー・ロス、E.、「意味への意志」と死を引き受ける態度価値を強調するフランクル、V.の説は、いずれも死を前にした時の人間のひとつの理想的な範型である。しかし他方では、人生の途上で病気や不慮の事故にあって死ぬ人、赤ん坊や重症心身障害者、痴呆老人など、自分の生命(生と死)の意味を意識できない者も居る。上記の「どんな状態の誰でもが充実して--」に照らせば、これらの人々もそれぞれらしく自己の発達の終局点、生の完成としての死を迎えられるのであって欲しい。そのためには、医療の場に、単なる心身の「健康」や「発達」の概念ではない何か別の理念が導入される必要がある。「人間としての健やかさ」概念(※1)や、病気や障害があっても無くても独自な人格として「ふつうに生きること」が当たり前であるという見方(※3,4)は、その点に挑戦している理念と言えよう。これを具体的に実現した例としては、進行性筋萎縮症の患者と家族が中心になって開いた「仙台ありのまま舎」とそのホスピス「太白ありのまま舎」があり、示唆するところが大きい。こうした理念に基づけば、例えば癌の告知も、望む人には誰にでもその人に合った告知ができるよう、ケアの方法とその体制作りに努力が払われることになる。また、死の不安に直面することなく家族に守られて終焉を迎えることも、知らされない権利を行使することも、暗黙のうちに察して看取り看取られる関係も、それぞれが重視されることになる。

2. 「いつでも誰でも」を具現化している例: 米国の多くの州立病院では、こころのケアのための部門(Pastoral Services)を置くことが義務づけられている。本報告者が研修を受けたP州立病院の場合、数人のチャプレンと研修生が交代に、24時間体制で常駐し、院内のどこでも誰でもいつでも無料でサービスが受けられるシステムであった。救急室・各種の集中治療室・癌病棟ではもちろん、一般病棟でも、外来でも、死を意識したり死に直面する際、各々の事情と個性にしたがって、長期的・短期的にこころのケアが提供される。そのために、研修では、先ず「どのように患者(家族)の側に居るか」の訓練が重視される。また、保険会社からの費用の補填がなくとも、病院にチャプレンを常駐させることには、患者は、身体的・心理的・社会的な苦痛だけでなく、魂の(spiritual)苦悩をもっており、それをケアするのは当然とみなすキリスト教の思想がある。

3. 終焉と看取りの文化の創造: この研修において、死に臨んでいる患者が”It's time to go.”と言って、死を引き受けることを選択する場面に時々遭遇した。幼少時から、自立、選択と責任を重視されて育つ国民のインフォームド・コンセント、セルフケア、そして終焉や看取りと、われわれの文化におけるそれらとは、同じ行為も意味する内容が自ずから違ってくる。日本人の心性に合った看取りの方法を育てなければならぬ。高齢化社会を前に、これは急務である。また、各人が自己への洞察に基づいて、どのような生を全うしたいのかを決めてゆけることも大切である。それには子どもの頃から生涯にわたる健康教育(死の準備教育)も必要である。そして、洋の東西を問わず、究極的には、逝く者も残される者も、死を超えて繋がっているとの実感こそが、両者を癒し得るのである。どんな状態にあっても、根源的な深いところで、お互いがこころ(いのち)において、繋がり合っているとの人間観が、終焉と看取りの文化と具体的なケアの中核的理念として据えられる必要があるだろう。

- 1)木村:医療人間学へ向けて(1990,1992,1994,学会抄録)
- 2)木村:医療従事者のための患者学(1988~1990,連載)
- 3)得永:「病い」の存在論(1984,地湧社) (中)
- 4)木村:ターミナルケアにおけるカウンセリング(印刷)

関係の中で苦悩を越える看取りへ

鈴木正子

広島大学医学部保健学科

はじめに

私は看護学の立場から、人間の存在、時間、主観、客観、身体といった方法論を吟味しつつ、癌患者の生きられる苦悩に強い関心を持っている。長く自然科学的機能主義の方法論によってきた看護学は、統合を求められる終末期の看取りのあり方にも例外無く影響を及ぼしている。今日医療の高度化とともに患者への負担は大きくなり、患者がその状況を乗り越え、最後まで十分に生きることが可能とするには、人間存在としての疾病や関係のありようへの方法論的問い直しが求められる。こうした観点を踏まえ、看取りのあり方として、三つの点に関し述べる。

1) 「身体としての存在」への慈しみ

癌患者の苦悩を見ると、全体身体即存在であることが分かる。これまでの考えでは一つ一つ悪いところへ働きかけ、その悪い部分が修復されれば、自然に全存在ごとよくなっていくと錯覚してきた。癌になったと知った患者は全身でその衝撃を受ける。「ガンとショック、辺りの景色まで違って見えた」、「足が重く、身体が重く、普通でなかった。へたり込むように力が抜けた」と。また、手術に際しては「癌イコール死、おっばいにサヨナラと入浴した」、「女でなくなる、さびしい。親から貰った子宮傷つけて申し訳ない」、「暴力的に、子を生めない身体になった」と、身体の喪失を苦悩する。まさに損なわれたのは臓器の部分ではなく、身体として存在するその人そのものであることを示している。治療行為や検査、処置、日常のあらゆる世話を単なる身体部分への介入、仕事と認識する限り、患者の苦悩と医療者の関係はまさに遠く隔たるであろう。

2) まわりの人々との関係への覚醒

「はじめに関係ありき」と言ったのはM.ブーバーであるが、自らを癌と知った直後から、患者はまわりの人々との関係の変化を体験する。もはや自分家族や職場の仲間から離れた、違った世界にいる存在と感じ、ひとり孤独に陥る。しかし、疾病を自分のこととして受容し、癌を乗り越えて行くのもまた、まわりとの関係によってである。疾病のあらゆる経過の中で、家族と長い時間話し合い、家庭で、職場で、趣味で人々との開放的な関係に生きる人は、たとえ身体的に苦痛が残っていても、比較的将来を楽観し、今を楽しく過ごす方向を見いだしている。一方、家族が患者に暴力的となったり、急に冷たくなったり、対話が途絶えている場合、配偶者をはじめ家族を頼みとできている患者は、身体が医学的に治癒ないしは軽快している場合にも、将来を悲観し、疾病を受容できていない。すなわち、患者、家族ともに、身近な関係そのものに覚醒し、関係を生きることが可能とすることへのアプローチが必要であることを示している。

3) 「死んでいくこと」に向き合う

癌患者が苦しむのは概念的な「死」ではなく、この身体が死んでいくこと、もはや近い将来自分が居なくなり、人と別れなければならないことである。繰り返し揺れてさまざまに表現される。祖父母や父母の死のときをなつかしく思い自分も穏やかになりたいたいと願うと言いつつ、自分がまもなく死ぬであろうことに向き合えなくて苦しむ姿が種々に示される。こうした時間を人間はひとりでは越えることは困難である。真に関係の中で行われる豊かな看取りのときが期待されるゆえである。

人の終焉をいかに看取るか

森津純子

(長岡西病院)

ホスピスってどんな所

- ・ホスピスは特別なことをするところではない
- ・疼痛、症状緩和
- ・今までの生き方、価値観を尊重するところ
仕事一筋で生きたい、家族と静かに暮らしたい
- ・自分の生き方を選択できる
静かに余生を過ごしたい、
いろいろ充実した活動をしたい
- ・治療を選択できる
化学療法、民間療法、心理療法
- ・死に方を選択できる
点滴も何もしない、点滴のみする、
何でもやって、少しでも生きたい
- ・個別性の重視
- ・残された時間を自分らしく生きる
- ・生活の後に医療がついてくる
- ・家族も患者と同じように支える
- ・Not doing but being
- ・「できない」ことを認め、
すべてをありのままに受け止める
- ・生病老死
生まれたものは、だれしも病にかかる。
年をとる。そして必ず死んでいく。

スライド、症例提示

- ・病棟紹介
22床(個室12床)、家族室、談話室など
- ・レクリエーション
季節の行事、お食事会、お茶会、
カラオケ大会、コンサート、お誕生会
仏教行事
- ・90歳のおばあちゃん、リハビリがんばる
ねたきりの人でも、手厚い看護で普通の生活に
戻れる
- ・看護婦さんは12歳
86歳になっても死ぬのはやはり怖い
心の支えになったのは12歳のお孫さん
- ・野外コンサートへ行こう！
肺に転移があって、水が溜まっても、
コンサートに行けた
- ・そよ風と痛み
なかなか取れなかった痛みがお散歩に
行って取れた
- ・お刺身会
不自由な身体で刺身をさばいて、
医療スタッフをもてなしてくれた人
- ・文化祭
絵を描いたり、舞台監督の仕事をしたり
することで痛みがなくなることもある
- ・遺族の集い
家族を失くした人々の悲しみを癒せるのは、
同じ体験をした人

人の終焉をいかに看取るか

恩 田 彰

(東洋大学文学部)

1 看取りの意義

「人の終焉（臨終・死）をいかに看取るか」ということは、一般にターミナル・ケア（terminal care）の問題として取り扱われている。ターミナル・ケアとは、死、すなわち生から死への境界に臨んだ人へのケア（医療・看護）である。これに近いことばとして、パリアティブ・ケア（palliative care）、ホスピス・ケア（hospice care）、ビハーラ・ケア（vihāra care）などがある。パリアティブ・ケアは、人が死にいく過程に敬意を払い、身体的苦痛を緩和し、心理的、霊的なケアをすること、ホスピス・ケアは、臨死患者に身体的、心理的、社会的、霊的な苦痛を軽減するホリスティックな（全人的な）ケアをすること、またビハーラ・ケアは、仏教の知恵や方法を活用した悟りと救いを伴った看取りであり、田宮仁が提唱したものである。

ターミナル・ケアの目的は、死にいく人がその人らしく生命を全うするように援助することである。内容は人によって異なるが、その苦痛や不安を緩和し、または除去すること、さらにその人の生きる質（quality of life）を高めることである。

心身の苦痛を緩和し、手厚い介護を行なうのは、医療・看護の仕事である。次に心の不安、恐怖や悩みの克服は、心理治療、カウンセリングの問題である。特に死や死後の世界への不安や恐怖については、精神科医、臨床心理士、カウンセラー、宗教家による「癒し」や「救い」と「悟り」の問題の援助が大切である。また家族の生活費、医療費の支払いや子どもの将来などの社会的問題は、ソーシャル・ワークの仕事である。また家族は、患者の身の周りを世話したり、話を聞き、患者の手を握り、そばに坐っていることで、患者の心の支えとなる。ターミナル・ケアは、従来の治療や延命を主とした医療から、「癒し」としての全人的な医療・看護への転換を示している。そこで治療のみならず、癒しまたは救い、悟りといった、従来宗教で扱ってきた問題まで扱うようになってきたのである。

2 どのように人の終焉を看取ったらよいか

(1) 死生観の確立 患者だけでなく看護者もいつか自分も死んでいくのだという自覚を以て、死の過程に敬意を払って患者に接することである。臨死患者の多

くは、死後の生命に希望を持つことで、大きな救いを得ているという。自分の死生観や宗教を患者に押しつけてはいけませんが、看取る人は、自分の死生観を確立しておくことが必要である。

(2) 死の苦痛と不安の傾聴と共感 臨死患者は、直面している自分の身体的苦痛や不安や恐怖または心配事について、じっと聞いてほしいと思っている。そこでこれらの患者の話すことを傾聴し、その気持をあるがままに共感的に理解し、受容することである。

(3) 患者との交わり 臨死患者は、誰かと交わり（かかわり、リレーション）を持ちながら、死を迎えたいと思っている。言語的コミュニケーションだけでなく、身体をさすったり、手を握ったり、または黙ってベッドのそばに坐っているとといった、非言語的コミュニケーションを行なうことが大切である。これによって患者の苦痛や悩みは、軽減されるのである。

(4) 死の準備教育 これは身近に死を考えるための体系的な教育方法論である。死について学んだ人は、死の不安が緩和し、極端な死への恐怖から解放されるという。教育を通じて成熟した死生観が確立されることが必要である。人生を全うするためには、誰もが直面しなければならない死に対して、適切な準備をすることが必要である。それは人生をよりよく、創造的に生きるための教育である。

3 看取りと臨終行儀

ターミナル・ケアは、欧米ではホスピスを中心にキリスト教関係者が医療スタッフとチームを組んで行なってきたが、わが国でもホスピス・ケアが行われている。最近仏教関係者がこのホスピスに相当するビハーラをつくって活動を始めている。そこで日本におけるターミナル・ケアを行なうのに、参考になるものとして、日本の看取りの基本的形態ともいえるべき「臨終行儀」がある。臨終行儀は、仏教思想にもとづいて、臨終の人の心得と看取りの作法（行儀）について示したものである。その主なものについてあげてみよう。(1) 臨終の人のために別の建物をたてて病者をそこへ移す。臨終の準備をする。(2) 善知識（指導者）や看護者が、そばにいて、慈悲の心を以て宗教的行的援助や、身辺の世話をする。(3) 病者の悩み、不安、罪悪感をよく聞き、心の浄化と安定をはかるのである。

健康教育と心理学

本明 寛

(早稲田大学名誉教授・女子美術大学理事長)

《問題の提起》

健康教育のテーマとして、生活習慣の点検と改革、健康増進プログラムの作成、健康維持・増進の社会的支援組織づくり、健康教育を通しての自己の再評価・再認知、健康増進の実践の方法等の問題がある。教育的方法を通しての健康教育の実践は、いわばゆりかごから墓場までといわれているし、学校、職場、家庭を通して、健康価値の追求こそ人の生きる意義であるといわれている。

健康教育の問題を心理学という切り口でとらえてみると、次のような手がかりが得られよう。

1. 人間を環境や外的圧力に強く影響される存在としてのみでなく、目的や価値をもち、個としての自己決定できる主体的な機能をもつ存在として考える。人間の生きる目的は「所有」することのみでなく、「よく生きる」という点を忘れてはならない。

2. 人間がよく生きるために「健康の維持・増進」は不可欠のものである。人生50年から80年へ、あるいはそれ以上の長丁場のライフサイクルが現実化している。我々の生活の中に生じる健康の問題解決に役立つ心理学の知識・情報・原理・方法を提供しようという立場である。

3. アメリカでも1960年代以前には、学校における健康教育は生物や体育の授業科目の一部とされ、教科として重視されていなかった。我が国では、Health Educationの訳語として「衛生教育」「保健教育」が使われてきた。また、企業では一般的に「健康管理」の言葉が健康教育の意味に用いられていた。最近における健康教育の定義は、L. W. グリーンの「健康な行動への自発的な適応を促進するあらゆる学習体験」G. C. ストーン編の「健康心理学」の中では、「健康教育とは人々の行動を変えるように勧める説得的方法の使用のことである。普通これは、健康や病気についての知識を増やし、それらに対する態度を変えるようにすることによってなされる」と述べている。前の定義では、「自分の健康は自分で守ることを自覚させる」の意味が、後の定義では、「方法として説得、目的は健康についての態度（ライフスタイル）を変革させること」と言い直すことができる。

4. 日本も今は政府、地方自治体がエイズ問題から熱心に健康教育を取り上げている。今年の7月のエイズに関する国際会議が横浜で開かれて、1万5千人の参加者があったという。エイズの対策は予防以外に今日のところ最良の方法はない。これこそ健康教育の問題である。こうした現実の問題から、健康維持・増進

には自分のライフスタイル（例えばタイプA）の自己点検の問題が改めて注目され、さらに一般的に自己の行動傾向の点検と改革という問題が強く指摘されるようになった。

5. 「ストレス」という言葉が一般化し、日本の政治的、経済的、社会的な重圧が、個々の人間にストレスラーとして影響し、様々の形でストレス症、ストレス状態を生み出していることを誰もが痛感している。ストレスに強い人間をつくる教育、カウンセリングなどが問題となっている。

以上簡単に列挙した項目こそ、今日の人間の健康価値追求の意義、また広く自己実現の概念に含まれる意味と思うのである。

《結論》

心理学の立場からこれらの問題解明のためにどのような理論が考えられるのか。これに対して、L. W. グリーンは、次のものをあげている。

1. Learning Theories (e.g., Thorndike; Skinner)
2. Group Dynamics (e.g., Kurt Lewin; A. Zander)
3. Communications Theories (e.g., Hovland)
4. Diffusion Theories (e.g., Beal, Rogers)
5. Health Belief Model (Hochbaum, Rosenstock)
6. Social Learning Theory (Bandura)

また、グリーン教授の理論をもとに、J. P. アレグランテは患者教育プログラムに関係する心理学の理論として次の5つをあげている。

1. Self-Efficacy (Bandura)
2. Stress and Coping (Lazarus & Folkman)
3. Learned Helplessness (Abramson)
4. Social Support (Casell; Berkman & Syme)
5. Relapse Prevention (Marlatt)

我々の研究グループでは、ストレス調査とパーソナリティ調査を行って、健康教育へいかに介入できるかを研究してきた。その一つの結論は、健康問題に介入する学術的方法として、広い視野に立って問題にかかわる源泉を考え、その関係を検討することが必要だということである。また、ライフスタイルの点検は個人の傾向のみでなく、その人がどのような他者との親和関係、あるいは社会的支持を保っているかを十分にとらえる必要がある。

女性と母性 - フェミニズムの視点から -

コーディネーター 橋本泰子 (城西大学女子短期大学部)

話題提供者 矢木公子 (城西国際大学) 長谷川啓 (城西大学女子短期大学部)

上村雅子 (城西大学女子短期大学部) 藤沼康子 (城西大学女子短期大学部)

はじめに

日本では60年代からの急激な高度経済成長期に、男性は企業戦士の名のもとに働き続け、ついに燃えつきた。今度は女性に頑張って欲しいということで、80年代は「女性の時代」と持ち上げられ、「マドンナ旋風」が吹きまくり、華やかな女性キャスターやタレント達が女性議員に変身した。

これまで固く閉ざされていた男性優位の管理職への道も、1986年に男女雇用均等法が施行され、やっと男女平等の光りがさしてきた。ところが、ベルリンの壁が崩れ、世界の経済体制の大きな変化の流れに伴い、これまで膨らむだけ膨らんでいた幻想のバブルがはじけ、不況の波が女子大生の社会進出に歯止めをかけた。就職への門戸は固く閉ざされ、氷河期から、今年は、猛暑で水不足にもかかわらず土砂降りと言われ、暗い影を落としていることは否めない。

- 女子大生の主婦業先祖回帰願望 -

近年、これまで世界に類を見なかった超スピードで、高齢化社会が進行している一方で少産化現象の危機が叫ばれている。これほどまでに女性が出産しない理由としては、女子の高学歴と社会進出による高齢出産・育児のために仕事を手放したくない・仕事も育児も両立させるための物理的環境が整備されていない・経済自立をしているために結婚しない・結婚していても、二人の生活を充実させるためにDINKSを選択する・子供が公害汚染等による自然破壊や厳しい競争社会で生活することは幸福か、等さまざまな事が考えられる。

さて、女子大生が毎日、炎天下、リクルートスーツを着て足を棒のようにして歩き回って就職活動をして、仕事が見つからない。「仕方ないから永久就職もしようか。女性は家庭に入って子育てするのが、一番の幸せだ」といった半ば自嘲的に主婦業を望む声が多くなっているような気がする。最近、夫婦別姓の導入や、夫婦が5年以上継続して共同生活をしていない時には、離婚請求が出来るといった民法改正試案が検討され、いずれ実施される運びになるであろう。そうすると以前よりは、永久就職も安住の地とならぬと考えられる。

- 悲惨な臨床ケース -

長年、大学病院の臨床の現場で、その時代を反映するさまざまな悩みを抱えた子供から成人までのケースに出会った。父親が企業戦士や単身赴任で家庭に不在、母親が子供に過干渉・過保護で、身動きが取れなくなった登校拒否児や自立できない若者達。それから夫が子供を欲しがるので退職して産んだが、夜泣きがひどく、姑から育児が下手だ、怠けている、と叱責され、夫は頼りにならず、独身に戻りたい。子供の泣き声を聞くと、両手で耳をふさいでうずくまってしまう。あ

るいは、母親になった実感がなのまま1年過ぎ、毎日の育児に疲れた。このままだと子供を殺してしまうか、自分が死ぬかどちらかに決めないと生きていけないと思い詰め、マンションから飛び降り自殺した若いキャリアウーマン。育児ノイローゼで入院中に、姑に子供がなつてしまい主婦としての自身を喪失、電車に飛び込み命は助かったものの、両足を切断したあどけない母親達等である。

これらの症例の背後には、二世帯、三世帯に渡る母・娘を巡る家族関係の問題が潜んでいることが多い。

- 今、なぜ母性を問いただすのか -

これまで、戦前、戦中、国力を強化するために、女性が生産を産むことを強いられた歴史があった。現在、社会風潮として少産化の危機が叫ばれ、若い女性が標的になり、折り悪しく、就職難でもある。だから、家庭に入り出産、育児のコースに安易に乗る事は、後で大きなしっぺ返しにあうように思えて仕方がない。このような時代にこそ、フェミニズムの視点から女性と母性に関して、きっちりと見直しておく必要があるものと思われ、企画した。次の専門分野の方々から話題を提供して戴いた。

- (1) 「女性学の成立過程」と「フェミニズムにおける母性の定義と位置づけ」 矢木公子氏
- (2) 「社会学の視点から、かつての農村における女性と現代の女性の生き方」 藤沼康子氏
- (3) 「ハリウッド映画に登場した父権性社会における理想的な母親像と再現」 上村雅子氏
- (4) 「男性作家の描く母親像、女性作家の描く自由な母親像との比較」 長谷川啓氏

四氏の解説により、隠されていた「母性幻想」のベールが取られ、21世紀に向かって一人の人間として自由に生きるための活眼が開かれたものと考えられる。

女性学における「母性」

矢木 公子
(城西国際大学)

1. 女性解放運動（ウーマン・リブ）と女性学の課題

1960年代なかばアメリカに端を発し世界中に広がっていった女性解放運動は、19世紀末から20世紀初期にかけて社会に影響を与え女性の社会的権利、とくに参政権の獲得に収斂していった女性解放運動と解放の方向が異なり、第1に女性自身の内面の解放を志向したところから、それと区別してウィメンズ・リベレーション（ウーマン・リブ）と呼ばれる。それは女性自らがアイデンティティの追求と女性役割の問い直しを通して意識変革を行い、「女性の論理」によって社会構造を検討してそこに貫徹する女性抑圧を告発し、さらにそこから女性の主体性・能動性の確立を目標とした。

女性学（Women's Studies）は、ウーマン・リブや学生運動等の60年代に既成価値を問い直した社会運動が大学教育にもたらした「女性の視点からする、学問の見直し運動」（井上輝子）であり、教育改革運動である。女性学は、従来の教育・研究が「価値自由」と「客観性」を基盤にしているといながら実は男性の価値観と「主観性」を暗黙の前提としていることを明らかにするとともに、それまでアカデミックな領域で無視され排除されてきた女性を対象にして女性の視点からのアプローチを学際的に展開していった。

女性学、とくに社会科学として女性学の課題は、社会と文化が規定している性役割（女性役割と男性役割）がたんに生物学的性（sex）に由来するだけでなく、社会的・文化的性（gender）に負うところが大きく、後者は普遍でなく歴史・社会的に限定されたものであることを実証し、これまでの性役割が固定化して維持されてきた過程で女性自身がその共犯関係にあったことを明らかにし、女性や他の社会的弱者にとって抑圧のない社会の再構築に寄与するパラダイムを提示することである。

日本においては、70年代末から研究会や学会が結成され、大学・短大において女性学講座が開設され、現在高等教育機関の24%（268校）でカリキュラムの中にとり入れている。

2. 日本における「母性」

「母性」という用語は、1918（大正7）年に平塚らいてう・与謝野晶子・山川菊栄・山田わかが発展した「母性保護論争」において初めて登場した、近代社会の産物である。

日本の近代化における「母性」は、近代女子教育が推進した「良妻賢母」の必須要因としてよき「臣民」を育成することだけにとどまらず、近代日本社会を構成する「家」の「凝固剤」（鹿野政直）として社会を維持すること、さらには戦時下において「国家的母性」として国民の精神の拠り所と国家に奉仕する精神の象徴として社会的機能を果たしていった。

戦後においては、女性が社会的発言をする際のアイデンティティとして機能し、それはまた平和運動や母親運動の結合原理として働いた。さらに高度経済成長期には産業社会を支える家族の核となる女性の特性と位置づけられて、家族の結合剤として働くことが期待された。

3. 女性学における「母性」

近代以降、以上のような歴史的展開を経てきた「母性」は、批判できない聖域として存在するものとなっていた。ウーマン・リブははじめて女性自身の視点から「母性」の負の面を語り始めた。社会的に期待される「母性」と現実にも母であることのジレンマを女性が次々と明らかにすることを受けて、80年代なかばから女性学は「母性」をめぐる問題が何かを追究していった。

「母性」の歴史的展開から、この言葉はさまざまな意味を混在させている。そこで、用語の定義からはじめて、（1）生物学上・医学上の「母性」（2）心理・行動としての「母性」（3）社会・文化としての「母性」（4）宗教としての「母性」と区分できることを明確にした。女性解放運動と女性学は（3）（4）のレベルの母性幻想に陥るものを批判し否定するのであって、（1）（2）のレベルの現実にも母であることを否定しているのではないこと、60年代以前は圧倒的に子どもの代弁者と自負する男性の専門家と社会の視点からの「母性」が強調されたが当事者の一方である母（女性）の視点からの「母性」を明らかにしていった。その中で、産むことと育てることは直結しないこと、「母性」で表される特性は女性特有の本能ではなく相互作用によって開発されるものであり、男性にも開発を要請される人間特性であることを実証していった。その結果、「母性」に代わる用語として「育児性」（天野正子・大日向雅美）「次世代育成力」（原ひろ子・館かおる他）等が提唱されている。（参考文献リストは会場で配布）

現代女性文学にみる母性あるいは母親像

城西大学女子短期大学部

長谷川 啓

今回のシンポジウムでは、女性が入学を許可されなかった大学へ戦後はじめて入ることのできた世代の女性作家から、1970年代の全共闘世代の女性作家までを取りあげ、母性に対する考え方や作品の中の母親像について検討してみたい。

まず戦後世代の高橋たか子からみていくと、同世代の河野多恵子らに共通する母性嫌悪の意識を感知することができる。それは何よりも、女性の生を長く性別役割の中に閉じ込めてきた父権制社会への反逆が、制度としての〈母性〉への反逆という形で噴き出てきていることの証拠といえよう。高橋たか子はエッセイ「性一女における魔性と母性」で、〈母性は秩序の側にあり、魔性は反道徳の側にある〉と明言しているが、それも〈女とは究極のところ母性なのだ〉という安全な思想によって、女が眠らされているとすれば、私は、女はそれだけのものではないと主張したい〉という、男性社会でつくられた従来の女性イメージへの抗議から生まれていることが了解できる。つづけてたか子は、自分の小説に登場してくる女主人公はみな魔性の女であり、〈私が自分というものを開放して書けば書くほどますます魔性がのさばり出てくるのである。女が本当に女自身を解放した時に魔性が顕現するのではないだろうか〉と語っている。また、〈女には魔性の女と、母性の女、娼婦と母、この二通りのタイプがあると分類したのは男性である。しかし私には、二通りのタイプとは思われない。たまたま何事かによって自分に目覚めた女が魔性の女なのであり、目覚めない大多数の女は魔性の部分を生理的にさせたままでいるだけなの〉であって、世間のしきたりに合わせている普通の女の内部に潜んでいるもう一人の女、それが魔性の女であり、したがって目覚めるとは自分の内部に、すなわち自分が真に欲するものに目覚めることであると言う。〈内部の女は、自分の存在が全的に生きるために、危険なことを敢えてする。隠蔽された真実を生きるようにする時、かならず毒が生じる。その毒は他人を害するふに働くのである〉といい、だから目覚めた女とは、決して現状の自分に満足しない女であり、もともと女は現状に満足し続けることのできないという宿命を持っていたはずであること。なぜなら、目覚めはタブーを犯すという形で行われるから反道徳なのであり、その意味でエデンの園のイヴこそ目覚めた最初の女であると説く。そのアンチ・テーゼとして強調されたの

が、男性の夢が支えてきた母性のシンボルとしての聖母マリアであり、イヴのように不安定ではなく、我が子とのつながりにおいて現実を受けとめ、現状を肯定し、充足して安全に存在している。母であり純潔である女を讃美することで男性は安全であり、マリア讃美をしている限り真実を見ることの危険はないと述べている。

高橋たか子は男性文化に追いつこうとした近代化論的な女性解放論の中で育った世代だが、次に、幼年期から男女共学で育っているため男女同権意識を強く持ち、前世代にあった男性および男性文化へのコンプレックスがないため、逆に強い母性嫌悪がうかがえない1960年代安保世代について見ていこう。たとえばその一人である森瑤子は、「夜ごとの揺り籠、舟、あるいは戦場」で、内部に巢食うデーモンのために娘をチック症状に陥らせ、自立にむかって離陸しようとする母親像を描き出している。さらに、「家族の肖像」では、三人の娘をもつ作家である母の、血の騒ぎを鎮めるために小説を書かずにはいられず、抗鬱剤に救いを求めるしかく氷づけの憂鬱から脱することができない姿、夫よりも情事の相手との間に濃厚な性関係があつて、もはや夫にはく欲望の混じらない情〉しか抱けない姿を描いているのである。

周辺に押しやられてきた女性文化の、再検討の時代に入ったフェミニズムの季節に、全共闘世代の津島佑子が書いた作品には、60年代安保世代が引きずっていた父・母・子という三角形の〈近代的家族〉の構図はもはや稀薄になっている。また知性を追い求めるあまりに母性から離陸を志向しがちだった近代的女性像とは違って、むしろ制度としての〈母性〉ならぬ産む性を武器にした女性を扱っており、離婚後の母子家庭を描いた「光の領分」「氷原」では、娘を連れて男と泊まり歩く、およそ母性意識などとは異なる母親像を表出している。「山を歩く女」ではさらに、両親の反対を押しきって私生児を産み育て、〈つまらない社会の約束ごと〉に縛られず、〈子持ち山姥〉のように〈自然に即したたくましい〉野生的な母親像を描出しているのである。このように三世代を辿ってくると、〈母性〉への反逆による父権制への反逆から、産む性を武器として父権制を越える営みへと、女性作家たちがはばたいていることが読みとれる。

映画の中の母親像

上村 雅子

(城西大学女子短期大学部)

映画は長い間、男性中心に作られてきたメディアであり、男性の製作者の手によって、男性観客のために作られた「息子の物語／男の物語」が大半であった。したがって、女性、特に母親が中心的な存在として語られることは少なく、主体的な母性というものも、映像に現われることは稀であった。

1970年代に入り、女性運動に直接的な影響を受ける形でフェミニズムの動きが映画評論や製作の現場で現われるようになり、それまではあまり語られることのなかった母性や母親といったものが映像の中で見直されるようになった。

フェミニストの実験映画作家であり理論家でもあるローラ・マルヴィーとピーター・ウォーレンは、母性を主題に父権的言語を問い直した映画『スフィンクス の謎』の中で、「私たちは父親の世界に住んでいて、そこでは母親の場所は抑圧されている。母親であることをどう生きるか、あるは生きないか、ということが女性たちのジレンマの根底にある」と語っている。

最近の女性監督による映画の中で、母性や母と娘の関係が古典的な母親像を打ち破る多様な形で示されているものが目につくが、このような傾向も映画界におけるフェミニズムの成果として評価できるものである。

エディプス的な男の世界を中心に描いてきた映画史の中で、一般に母親の声は抑圧されており、不在であった。しかしその中で稀ではあるが「母の物語」が語られることもあった。ここでは、ハリウッドの代表的な母物映画『ステラ・ダラス』の古典的な母親像を例にとり、母の言説がいかに現われ、そしてそれが父権制の論理にいかに絡めとられていくかを検証してみたい。

1937年に、女性映画を得意としたキング・ヴィダー監督の手によって、バーバラ・スタンウィック主演で作られたこの映画は、娘のための母親の自己犠牲をテーマとして母性愛神話を賛美した典型的な作品となっている。映画のストーリーは上流階級出身の男と結婚した主人公が育ちの違ひ故に、夫とは反りが合わず、ほとんど別居状態のまま、一人娘を育て上げるが、夫には幼なじみで裕福な未亡人の愛人がおり、また娘にも恋人ができたため、娘の母として相応しくないと感じた彼女は、娘の幸福のために身を引くというものである。映画のラストで娘の結婚式の様子を窓の外か

ら覗く主人公のステラは、娘の幸せそうな顔を一目見ると、満足そうな笑みを浮かべて立ち去る。娘のために自分を犠牲にするのが母親の愛情であり、幸福だというわけである。

この作品で注目すべき点は、主人公ステラの性格付けである。強く勝ち気なステラは云わゆる良妻賢母規範におさまらない女性であり、従順で貞淑な妻の役割は最初から放棄しているかに見える。結婚しても奔放に振る舞う彼女は、上流社会にそぐわない派手な服やアクセサリを身にまとい、夫が注意するとくっつき合い、夫の転動にもついて行かず、男友達とも積極的につき合うという風に、自己の欲求に忠実な女性として描かれており、彼女の母性もまた、彼女自身の主体的な欲求として提出されている。ここに提示されるのは主体的な母性をもつ個性的な母親像である。

しかしながら、この個性的な主人公は、その性格故に母親失格の烙印を押され、彼女自身もその父権的論理に従うことになる。自己の欲求に忠実だったステラが最終的には、自ら愛する娘と別れるという自己犠牲の結末を受け入れるのである。映画は理想的な母である父の再婚相手の家で行われる結婚式のシーンで終わるのだが、実の母親のステラはこの理想的家族から除外されている。ここでは皮肉にも母親の不在により、理想的な父権制家族が完成するのである。

『ステラ・ダラス』は主体的な母性を登場させた上で、それを批判し、排除しようとする。しかもこの排除のプロセスは、母親自身の選択ということによって正当化される。最終的に母親は家族から除外され、母親の犠牲は美化されて母性愛神話が完結するのである。

『ステラ・ダラス』は『ステラ』と改題され、1990年にベット・ミドラー主演で再映画化された。このリメイク版は、母親がシングル・マザーであることを除けば、1937年度版とほとんど変わらず、有名なラストシーンもそっくりに再現されており、父権的論理が母親の言説を支配する構造もそのままである。

女性の映画作家たちが、新しい母親像を創造している一方で、相変わらず主流の商業映画は古典的母性神話を再生産し続けているというのが今日の映画の状況である。ステレオタイプの母親像や母性神話の構造をいかに解体し、新しい表象を生み出すしていくのが、これからの映画製作に課せられた課題であろう。

現代女性のライフスタイル

藤沼 康子

(城西大学女子短期大学部)

伝統的日本社会においては、女性は労働力提供者として期待される存在であった。家庭という場が生産と消費双方の機能を果たしていた時代において、重要な労働力として女性は期待されていたのである。そもそも婚姻も、嫁という新しい労働力を得てのちには子どもが一家の働き手となるための、出発点とも考えられる。戦前の日本研究が農村社会学においても行われたように、かつての日本社会はその大半が農村社会であったといえる。農村においては、嫁として嫁いできた女性は田畑で農作業をすることが仕事であった。

一方で女性は、家の継続性を重視する社会の中で、跡継ぎを含めた子どもを産むことも期待されていた。女性の一生は、生家の娘として誕生し成長をかさねるのであるが、そこでは多くの場合はいずれ婚出していくものと考えられていた。そしてある年齢になると、嫁入りの話が持ち上がり、それは必ずしも配偶者の選択が本人以外のところで行われた社会ばかりではないが、どこかに婚出してゆくものと女性は考えられていたのである。嫁入りした女性たちは、婚家においては非常に重要な労働力として扱われた。そのような家族の中で女性たちは嫁という立場におかれ、それは妻・母・主婦という面よりもはるかに強調されていたのである。そしてまた、家の継承者である跡取りを産むことが期待された。

出産は、婚家で行う場合も生家で行われる場合も地域により存在するが、いずれにしろ出産直前まで仕事をしていたという。出産そのものは女性の役割であるが、生まれてきた子どもの育児を担当するのは誰かということになると、必ずしも女性にのみ期待された役割ではなかった。そもそも育児に特定の誰かをあてるといふ余裕がなかったとも考えられる。たとえば日本海沿岸の多くの地域でエジコやツグラといわれる育児用具が使われていた。それは、わらなどで編んだもので、産まれた赤ん坊はその中にいられ日中の多くの時間をその中で過ごした。朝親たちがたんばに仕事にでかけるとき、赤ん坊はその中に入れられ、縁側などにおいていかれる。昼になって親たちがもどってくると、抱き上げられエジコの外に出される。その時に中に敷かれたわらを出して、鬮に干すという。そして、また親たちが仕事にいくときに、エジコの中にも

どされた。しかし、赤ん坊は成長とともにエジコの中で動きだし、じっとしていなくなる。エジコから外へ出てしまっただけでは危険であるが、それでもできる限りエジコの中に子どもを入れておき仕事がしたいと、おとなたちは子どもをへこおびのようなものでしばりつけておいたという。

また、伝統的な日本社会において子どものしつけはそのすべてを親や家族が行うべきものともされていなかった。「よい村人」とはとくに秀でた人をさすのではなく、村落社会で考えられるところの恥をかかず、不義理をしない、いわゆる「十人並み」の人をいった。そのような社会は、新しいメンバーである子どもたちをその社会にふさわしい人間にするよう社会全体でしつけをおこなったのである。

このような庶民の社会に、明治以降いわゆる武家の家族の在り方が取り入れられるようになってきた。武士の家では家長である男が外で仕事をし、その一方で妻や子は内にいるものである。つまり、そこには妻あるいは母を仕事とする女性が存在することになる。そこでは子どもを育てることが母である女性の重要な仕事となり、あるいはいかなる子どもに育てるかにより女性が評価されることにもなった。

母という地位を得た女性たちは、「母性」という価値基準により判断されるようになり、よい母であることがよい女であることと見られた。そこでは母親らしくない女性は排除され、母性と女性性が同一視されていたのである。

しかし、現在女性のライフサイクルは大きくそして激しく変化を見せている。結婚年齢の上昇、少子社会の傾向、平均寿命の伸びなどにより、女性が子育てにかかわる期間がその一生の中に占める割合が減少している。脱親期とも称される40代後半からの30年間にもおよぶ時間を、いかに過ごすかは女性の一生を考えていく上で大きな問題となっている。

かつての庶民の女たちは母性などを取り立ててその評価基準とはされなかった。そしてその後日本社会はイデオロギーとしての母性を確立し女性に要求してきた。そして現在「産む性」である女性たちは、新しい形の「母性」を自ら確立していこうとしているといえよう。

地方行政と心理学

—なぜ、いま、地方自治体に心理学なのか—

渡辺好章

城西大学

1 はじめに

コーディネーターとして、パネル・ディスカッションのフレームワークを、あらかじめ設定しておきたい。

サブテーマの「なぜ、いま、地方自治体に心理学なのか」が討論のフォーカル・ポイントになる。

4名のパネラーより、「マーケティング・コミュニケーション」、「行政担当官」、「マスメディア」、および「経営心理学」の観点から、なぜ(WHY)、いま(NOW)なのかに加えて、どこで(WHERE)、どのような(WHAT)応用心理学的実験が、いかに(HOW)おこなわれているかについても、ご検討いただきたい。

以下に、討論のたたき台として、「なぜ」と「いま」に関して、大まかに論点を整理してみた：

2 「なぜ」地方自治体に心理学か

●国民的ニーズ・・・いま国民は、「心の豊かさ」を求めている。心の豊かさとは、安心・安全・安楽・安住など、安らいだ心の状態である。

福祉、教育、防犯、防災、救助、文化、風土、交流、祝祭、就職、交通、生活基盤など、人の心の豊かさにかかわるサービスは、主として行政が提供している。

いま、求められているのは、全国均等なサービスではなく、住民の心的ニーズにマッチした、質の高い効率的な地方行政サービスなのである。

●社会的ニーズ・・・いま地方自治体に「チェンジ・エージェント」（改革触媒）機能が求められている。

豊饒の国に住む現代人は、ライフスタイルの修正を迫られている。常に「右上がり」のGNP追求には限界があり、発展途上国の人々が豊饒社会に仲間入りすれば、自然環境や資源エネルギーの制約を免れない。

独裁者の強権や中央政府の統制によって、国民の消費を制限し禁止することが難しいならば、生活者の自覚と自制によるライフスタイルの修正を待つしかない。それを現実的な方法で実現できるのは誰か？

地方自治体の「チェンジ・エージェント」機能に、有用なツールとして心理学の認識が高まるだろう。

●国際的ニーズ・・・経済大国日本の役割について、アジア諸国のみならず、世界中の注目が集まっている。

世界の飢饉、貧困、犯罪、疫病、災害、紛争、公害、人権問題に対して、「日本はカネは出すが、ヒトを出さない」という批判の声が大きい。中央政府に出来ず、

企業や団体や個人が単独では手を出しにくい、広い意味の国際交流を、誰が主体となって実践するのか？

現に、先駆的な地方自治体では、草の根レベルの国際交流を促進している。相手の文化や価値観の相違を正しく認識して、相手のプライドを尊重する国際交流は、心理学に負うところが大きい。

3 「いま」必要な理由は

●脱皮の好機・・・「国から地方へ」とする地方分権の動きがいま高まっている。

顧みれば、地方分権の歩は遅々たるものであった。広域行政やパイロット自治体など部分的改造の努力はあったが、変化は93年の半ばに始まったとみてよい。地方分権は細川政権の政治課題として掲げられ、村山内閣では三党政策合意の基盤となった。折りからの、規制緩和の外圧と内需拡大の経済活性化も追い風となって、地方分権の実現に有利に作用している。

だが、仮に日本社会が、中央主権と生産本位の体制を嗜好するのなら、地方自治体に心理学は無用である。

●自立の能力・・・地方分権の動きに対して、地方自治体の行・財政能力と経営能力の不足が、必要以上に問題視されている。首長の相次ぐ汚職と政争に加えて、役員や職員の「親方日の丸」意識がそれだ。

しかし、地方分権は構成員の自治能力に信頼を置くことから始まる。まず、地方自治を構成する地域住民が、「自己責任」を自覚して、新しい自治の秩序形成に努力しなければ、地方分権は始動しない。そして、自治体側も、魅力あるビジョンを掲げ、「自己責任」を明確にし、論より証拠と実践してみせることである。

●必要な能力・・・住民を「管理」するのか、地域を「経営」するのかで、必要とされる能力は異なる。

「経営」するならば、当然、マネジメントやマーケティングの理念と技法が要求される。特に、顧客（住民・国民）志向のマーケティング理念と、その市場調査、需要予測、ニーズ分析、新製品（サービス）開発、品質管理、顧客満足度測定、広告PRなどコミュニケーション、顧客や職員の動機づけなどの技法は有用である。そして、それらの技法のベースに心理学が存在することは言うまでもない。

結論として、要するに、いま「行政心理学」の研究とその体系化が待たれているのである。以上

情報発信とそのフィードバック過程における心理学の課題

— 春日部市「かすかびあん」A I のケース —

東京国際大学 志津野 知文

地方自治体にとって、対市民、対議会、対庁内、対国家等のコミュニケーション活動が重要な課題となってきた。大分県の一村一品の活動等がきっかけとなり、一時、自治体A I (AREA IDENTITY)がブームとなったことがあった。最近では、激変する環境への自治体の対応策として、A Iが必要欠くべからざる施策として認識されている。

春日部市が市制40周年の周年行事の一つとして、A Iチームを発足させたのは、'93年1月のことである。若手職員が手弁当で集まり、議論を重ね、論議を重ねて、CONCEPTを設定しはじめた。「交流革新」というような定番コンセプトも発想されたが、固有性に難があるというので一蹴され、「かすかびあん」でいこうという女性メンバーからの発想が、全員の同意を得ることになった。自然・文化に恵まれた春日部で、楽しく豊かに過ごす「かすかびあん」のライフスタイルを創ることでA Iを作動させてしまおう、というのである。つまり、市のA Iコンセプトをかすかびあんのライフスタイルに射像させてしまおうというのである。この全体図を示しておこう。

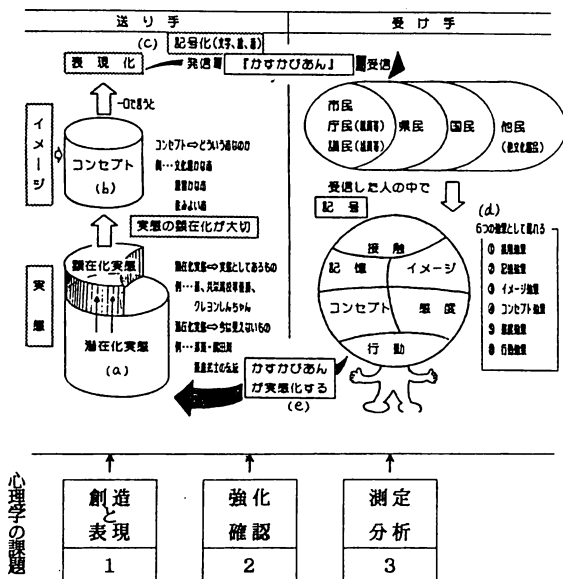
この図は(a)春日部の持っている潜在の実像を探り出し、それを表面化し、それ等を纏めて(b)コンセプトへ抽象化し、人々に分かりやすい記号で(c)表現化(例、かすかびあん)発信し、人々に訴える。その(d)接触状況や、反応状態を決定分析する。しかし、(e)人々の抱いた「かすかびあん」像が果たして本当であろうか、「かすかびあん」をとりまく環境はそのとうりであろうか、これ等を確認し、そうでなければ消去しないように実態化策をたて直す。これが一連の循環過程である。

その際、心理学的課題として、以下3点が考えられる。

1. コンセプトを生み出し、それを表現化していく
CREATIVITY PROCESSの解明とその推進策。
2. 人々との接触状況や、反応状態を測定・分析する方法の開発。
3. 記号と実態との差異の検出技術の開発およびその記号を強化するための方略。

地方行政の心理学の中、A Iコミュニケーションに関してはこの3点が新しいテーマとなるであろうし、これらの諸開発が今後の応用心理学の課題としていくべきであろう。

A Iのイメージ図
(A I活動の原理と効果の相関図)



環境行政と心理学

横山 正明

埼玉県環境部環境総務課主幹

1 環境行政の新展開

地方の環境行政は昭和40年代に全国的な規模で発生した「公害問題への対応」を契機として始まった比較的あたらしい行政分野です。この時代の環境問題は、地域に暮らす人々にとって、自分の日々の生活に直結した「地域問題」でした。「複合汚染」という問題が叫ばれた中であっても、公害の発生源は日常の生活圏にある事象でした。

これに対して、「今日の環境問題は、資源採取と不要物排出の量と質が自然の循環の容量を超えてしまったため生じたものと言える」（平成6年版環境白書：環境庁）と捉えられています。この中では、問題は人間生活と自然とのかかわりというベースで捉えられ、一方で「地域」を超えたグローバルな施策展開の必要を提起するとともに、他方では私たち生活者一人一人のライフスタイルの革新をテーマとする必要を提起しました。

2 地方は新しい行政課題にどうかかわっているか

個人のライフスタイルの革新をテーマとして施策を展開することは、長い間権力をバックにした許可や補助金、融資等による政策誘導行政を実施してきた自治体にとっては、新しい分野の問題として位置づけられています。こうした新しい分野の問題については、一般的に言って自治体には専門家が育っていない場合が多く、うまい対応ができていないのが実情であろうと思います。

こうした新しい分野の問題は、個人のメンタルな部分に訴え、一人一人に何らかの行動を起こしてもらうことを目的とした施策を講じるものである場合が多く、例えば、地域を世界に開かれたものとするための「国際化」、地域を見直し活性化するための「地域づくり」、自治体の意識革新を目指した「C I・イメージアップ」等多くのものが入るものと思います。

このように、新しい分野の仕事が増えているとは言うものの、依然として自治体の仕事は、個人の権利・利益にかかわる仕事が多く、透明性・公平性を維持するため比較的短期の人事異動システムによ

って担当者の交替があるのが通常です。そして、この人事異動システムが専門家の育成を更に難しくしています。その結果、この分野の専門的な仕事は、コンサルタント、市民団体等の力を借りなければ維持するのが難しくなっているのが実状です。

3 意識改革を行動に結び付ける原理は

平成6年度環境白書（環境庁）は、環境問題におけるドイツ人と日本人の認識と行動を比較し、「我が国においては、環境問題に対する認識は高まってきており、現在のライフスタイルを変える必要は分かっているものの、まだ認識と行動が一致していないという傾向が見られる。」と分析しています。

ドイツは環境教育の先進国であるといわれています。その教育手法は日本の知識重視教育に比べると大地、自然に触れさせその大切さを体得するという五感の体験の方が重視されているように思われます。日本でも環境教育が重視されるようになって来ましたので、今後さまざまな環境教育手法が開発されるものと思いますが、こういった分野も心理学の活用される分野ではないかと思っています。

4 環境行政と心理学の交錯事例

先頃、東京都が生活ゴミの処理袋を半透明にすることを提案し、都民の抵抗にあって延期の憂き目にあっていました。相当研究した結果でしょうが、いずれにしても都民の心理に対する読みが十分ではなかったと言えましょう。

ドイツのホテルに泊まると、きれいなタオルはハンガーにかけておけばクリーニングしないまま残しておいてくれます。クリーニングが環境に与える負荷を考えてのことだそうです。汚れてなくても着たから洗う、お客さんが使わなくても、一度出したものだから洗う、という最近の風潮を改めて考えてまいります。

環境問題は一人一人の人が自分のライフスタイルの変革に取りくまなければなかなか解決するのは難しいと思います。そして一人一人の意識に訴える手法は、心理学を専門とする方々にご教示いただく分野であろうと思います。

マスメディアの観点から

テレビ 埼玉 常務 田中寿一

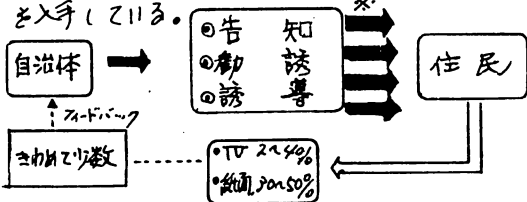
1 地方自治体のメディア利用

<行政情報の特長>

- ・ 公平性、・ 平穏性、・ 没興味性、・ 非利得性
- これらの特性にもかかわらず、都道府県レベルの自治体においては、次表の利用状況である。

メディア区分	予算比率(%)	利用団体数
定期刊行物	27.0	35 団体
新聞紙面購入	10.1	全
テレビジョン	31.6	全
その他	31.3	—

これらの広報活動は、最終的には住民の信頼と、協力を得ることを目的としている。その結果を、住民からの意向、「真実」反応」としてフィードバック情報と入手している。



※各種メディア活用 (接触率) (自治体調査から)

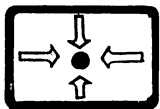
住民年間1人当りの広報予算は300~400円である。

2 他国と欧米との比較

地方自治体の発達が「域型都市」のヨーロッパにある。

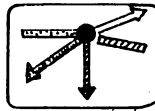
- ① 地方自治体は「オレ達の街」
- ② その運営に属しているのが「公務員、それ故に、オレ達に奉仕するのは当然」
- ③ その人件費等の街の運営費の原資が税金、という考え方が強い。それと比べ日本では、
- ④ 地方自治体は、中央の「手先、末端」。
- ⑤ 公務員は「お役人」であって住民に奉仕する存在とは考えられていない。
- ⑥ 税金は寄付金に近いもので「取らね損」と考える。

欧米の場合>



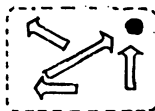
住民の意識が「求心的」に市庁舎へ指向する。
●印：市庁舎

<日本の場合>



行政とは、場合によっては甘える対象であり、必要時以外は遠ざけなければならないと考えている。

<米国の場合>



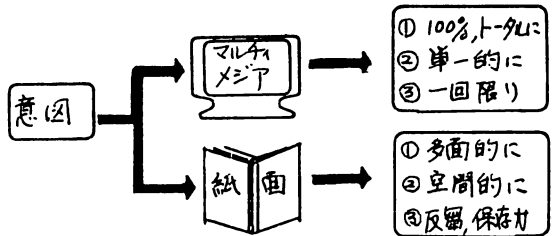
これらに比べ、米国は国土の広大という物理的な特長から「独立性」のある街という意識は強い。

さらに、「不可視物」である情報に対して日本人は無償意識が強いが、欧米人は有償意識を有する。その差を端的に示す事例が、日・仏の電話番号案内業務にもあらわれている。

日本ではかつて、無制限に案内はタダであった。その背景には、他人への情報伝達に「金」がかかっていることと理解できなかった国民性があり、この姿勢が行政情報発信反応へつながらている。これと比べ、仏国では番号案内専用の検索端末を数十万戸の家庭に配布（必要とする個人が自ら操作・検索する）いわゆるミニシステムを稼働させた。これが今話題になっている双方向コミュニケーションの成功パターンともなった。

3 マルチメディア時代にむけた自治体の対応と戦略

映像、画像を主体とする。マルチメディアでは、発信者(自治体)の意図を次のように特長をもって伝達できる。(発信者) (メディア) (受信者)



自治体はマルチメディアを過信することなく、それと併せての特長ととりまぜた広報体制、をとるべきである。

さらに、予算比上 広報9：広報1の比を改めて、軽視感と嘆く前にフィードバック情報入手のために資金人材を投入し検討しなくてはならない。マルチメディアの双方向機能とさらに活用すれば、「電子式直接民主主義」も決して夢ではなからう。

以上

馬場 房子

(亜細亜大学 経営学部)

1. はじめに

地方自治体という組織の有効性にとって、経営心理学の研究成果を援用することは大変有益であると考えられる。最近の経営心理学の研究成果によれば、組織の有効性の基準は一つではなく複数あるということが明らかになっている。例えば、馬場昌雄(1983)は、組織の有効性の基準として、「外的環境への適応」、「内部構造の安定と維持」、「成員の業績」の三つをあげているが、このような複数の基準をバランスよく満足させていくことは、民間の企業組織だけでなく、地方自治体という組織にとっても大切なことであると思う。

つまり、各都道府県でも、市町村でも、組織の有効性の基準が一つでないところに、組織のトップである都道府県の知事や市町村長の経営理念が重要であると言えることができよう。また、組織に関係する集団のニーズを知ることも重要になると思う。そのために、経営心理学のアプローチを役立てることが、今後ますます必要になるだろう。

2. トップの経営理念の重要性

東洋経済新報社は、656都市を対象に、「住みよさ」についての独自の調査を行っている(1994.5.14. 週刊東洋経済、52~61p.)。住みよさで全国第一位になったのは、島根県出雲市である。周知のとうり、市長の岩国哲人氏は5年前まで、アメリカ民間企業の副社長であった人である。「行政は最大のサービス業」という考えを持ち、「強くやさしい出雲市」、つまり、災害に強く、足腰の強い都市、教育と福祉に力を入れて、人にやさしい都市をつくらうとすることで、この5年間で出雲市は大きく変わったといわれている。いかにトップの経営理念が地方行政にとっても重要かを示している事例と言えるだろう。

3. 組織に関係する集団のニーズの把握(住民、職員、社会など)

出雲市の事例でも示されているように、トップの経営理念は、あくまでもそこに住む住民のニーズを満足させるものでなくては、うまく行かないと思う。もちろん、住民のニーズは複雑であって、かならずしも全ての人のニーズが同じものではない。人間にとって基本的なニーズである生理的要求や安全の要求などの満足は共通する面があるが、どの程度、福祉面に力を入

れるかということになると、コストとの関係が深いので、住民のコンセンサスが必要になると言えよう。そのためには、住民のニーズをよく知ることが必要であるし、そこに、経営心理学のアプローチが役に立つと思う。

また、組織の有効性を高めるためには、そこで働く人々、つまり職員の行動が大切であることは言うまでもない。いくらトップが旗を振っても、組織で働く人々のやる気がなければうまくいかない。組織が設立されたときには活き活きと働いていた人々も、いつの間にかマンネリ化してしまい、組織がよどんでしまう例は、枚挙にいとまがない。そこで、経営心理学では、「組織の活性化」の問題が大きく扱われてきているし、さらに最近では、「組織文化」の問題も研究されている。地方自治体においても、そこで働く人々の活性化、即ち、意識革命は、同じく重要な問題であると思う。

さらに、どんな自治体も、他の社会的組織と無関係では生きていけない。例えば、ゴミの問題一つを取り上げても、これは、地方自治体だけの問題ではなくて地球全体の問題でもある。従って、人間一人一人がいかに生活すべきかについて、共に考えて行動するための場を提供することも大切であると思う。

4. 「行動科学のアプローチ」

地方自治体という組織の有効性を高めるために、経営心理学の研究成果を援用することが有益であるだけでなく、さらに、経営心理学のアプローチを用いることも有益であることは、すでに述べたとうりである。経営心理学は、組織に関係のある人間行動の科学的研究であり、その方法として、私は「行動科学のアプローチ」を提唱している。具体的には、ウォッチング、ヒアリング、サーベイ等により組織に関係のある人々の行動を知ることである。そのさいに、ただ単に人々の目に見える行動だけでなく、目に見えない行動、すなわち「心」をも理解しようとしているのである。

5. 「B理論」のすすめ

1990年に、超自己実現人観に基づく理想のモチベーション理論として「B理論」を提唱した。是非、地方自治体の経営にもこの理論を役立ててもらいたいと考えている。

血液型性格判断, ホントか, ウソか

コーディネーター 藤田主一(城西大学女子短期大学部)
話題提供者 井口拓自(立馬株式会社) 佐藤達哉(福島大学)
大村政男(日本大学) 富家 孝(日本女子体育大学)

1993年5月, 白佐俊憲・井口拓自による『血液型性格研究入門』という本が川島書店から出版された。白佐は「血液型性格判断の概観」という論文を『北海道女子短期大学研究紀要』26号(1991)に載せている。また, 井口は「血液型と性格は関係あるのか? — これまでの研究の概観と今後の展望 — 」という卒業論文を, 東京大学教育学部教育心理学科に提出している(平成2年度)。赤門の中からこのような卒論が出たことには, 一種の驚きと欽びを感じるものである。

I. 血液型性格学始め: ABO式の血液型と人間の気質・性格が関連しているという考え方は, 1916年7月25日の『医事新聞』に発表された原来復・小林栄の論文に端を発している。論文名は「血液ノ類属的構造ニ就テ」である。その後, 帝国陸海軍の軍医たちがこぞって兵士の個性研究に適用したが, 全くといっていいほど見るべきものがなかった。しかし, この考え方は古川竹二(1891-1940)によって新しい展開をし, ここにわが国独特の血液型性格学の源流を見るのである。かれが日本心理学会の機関誌『心理学研究』2巻4輯に掲載した「血液型による気質の研究」(1927年8月)はエポックメイキングなものといえよう。

II. 古川から能見へ: 古川はABO式の4型の血液型ごとにその性格の一般的特徴や長所・短所を記述したり, 団体気質というユニークな概念を提唱したりして大いに活躍したが, 約12年ぐらいで崩壊してしまった。試行錯誤というよりは, 思考錯誤というべきであろう。この崩壊から約50年間, 端境期のような空白の時期が出現する。この学術的な研究がなかった時代に出現したのが能見正比古(1925-1981)の「血液型人間学」である。この偽科学は古川学説をたくみに変造したもので, 素朴な古川学説にサーカスのピエロのようなメイクをさせて「魔法の輪」の中にひっぱり出したといえよう。

III. 批判論の台頭: 能見が1971年に『血液型でわかる相性』を青春出版社から刊行した1年前に, 目黒澄子と宏次による『気質と血液型』という本が現代心理研究会から出版された。しかし, 会員頒布であったため注目されることが少なかった。そこで能見は「鳥なき里の蝙蝠」のように暴れまわったのである。正比古

のカリスマ的な性格とその筆力に依存していた血液型人間学は, その死とともにかけりを見せてきた。そして, 1984年9月の日本応用心理学会第51回大会における大村政男(日本大学)の発表「血液型性格学は信頼できるか」を迎えることになる。正規の心理学会における研究発表はこれを皮切りに漸次増加してくる。心理学関係の学術誌への投稿では, 佐藤達哉(福島大学)と渡邊芳之(北海道医療大学)の業績があげられる。

『心理学評論』35巻2号(1992)に掲載された「現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究」がそれである。日本心理学会で発行している「J Psy A Newsletter」№8(1994)においても, かれらは高く評価されている。今後, 批判論は次の6つの方向に進むと思われる。(1)古川学説の歴史的研究, (2)ポピュラーサイコロジストによって粉飾された古川学説の研究, (3)心理学の標準検査による血液型性格研究, (4)血液型性格判断を信じている人たちに関する研究, (5)対人認知様式と血液型性格判断の研究, (6)血液型ブームの研究, などがそれである。(1)の分野については溝口元(立正大学短期大学部)に負うところが非常に大で, 溝口を中心とした心理学史の研究会も開催されている。(4)については, 大村の「FBI効果」や, 詫摩武俊・松井豊の「血液型ステレオタイプ」がある。松井は心理学者の中では非常に早期に血液型性格判断に興味を示した人で, 日本社会心理学会第30回大会(1989)で発表した「血液型性格学に関する統計的検討」ワークショップ“社会的認知研究を身近に: 「血液型性格判断」をめぐる”では, 1980年・82年・86年・88年のデータを分析している。(5)については坂元章の論説がある。1994年7月発行の『現代のエスプリ』324号に載っている「血液型ステレオタイプと認知の歪み」は優れたものといえるであろう。

医学の分野では高田明和(浜松医科大学)の反論はよく知られているが, 富家孝(日本女子体育大学)や中原英臣(山梨医科大学)は社会現象のさまざまなところに評論を加えている。「血液型人間学の嘘」「文藝春秋」(1985年1月号)もその1つである。

これから, 血液型性格学の分野はさらに百家争鳴の世界になるであろう。

血液型と性格 — 論争の焦点

井口拓自

(立馬株式会社編集部)

最近の心理学界には、一般社会での「血液型ブーム」が下火になったのと入れ代わりに「血液型批判ブーム」が到来したかのようである。筆者は決して血液型性格判断の主張を肯定しているわけではないが、心理学界での議論の流れには若干疑問を感じる点もある。ここでは、これまでに論議的となってきた事柄や、筆者が個人的に今後の論争の発展を期待する事柄について、いくつか述べてみたい。

1. 調査対象者の数・偏りと無作為抽出の問題

「血液型人間学」の提唱者、能見正比古・俊賢は、否定的な学者の研究が数百人程度を対象としたものであることを再三批判し、自己の調査の対象者が数万～十数万に及ぶことを誇ってきた。しかし、これは有意性検定の原理からいって妥当な批判とは言えないし、数万～十数万という数も雑多なデータの「のべ数」であるらしく、額面通りには受け取れない。

さらに、能見の調査対象者は、主に彼の本の読者カード返送者だったようで、「サンプルの偏り」について批判を受けてきた。そして、心理学者側から無作為抽出による否定的研究が現れたことで、この問題には決定的な一撃が加えられたようである。

しかし、翻って考えてみると、有意性検定を用いた一般的な心理学の研究の中で、無作為抽出がどれほど行われているのか、という疑問もわいてくる。こうしたことなどから、血液型と性格について研究を行ってきた心理学者の中で、心理学の研究自体に対する自戒・反省の念を述べる人が増えてきている。

2. 差別・偏見と応用の実態

心理学者の間で差別・偏見の視点からの血液型性格判断に対する批判が徐々に増えてきている。最近、ブラッドタイプ・ハラスメントという用語も提唱された。確かに一部の人は特定の血液型に悪いイメージを持っているらしく、大きな差別の火種となる可能性があるという意味では筆者もこうした批判に異存はない。

しかし、血液型性格判断は人間の尊厳を侵し始めているとまで述べたり、ナチスドイツとの類似性を強調したりする心理学者もいる。これは取り上げ方がいささか大げさすぎるのではないだろうか。この分野の研究論文に枕詞のごとく使われる「血液型による人事教育」についても、その実態はきちんとした調査で明

らかにになっているわけではなく、逸話的事例によって語られているにすぎないのである。真に深刻な社会的問題と呼ぶべきような差別的応用はどの程度なされているのだろうか？ 本格的な調査と、それに基づいた議論が期待される。

3. 生理的作用説と遺伝子作用説

仮に血液型と性格に相関関係が見られたとしても、その因果的なメカニズムにはどのようなものが考えられるというのだろうか。能見は、血液型物質が全身に存在することを強調し、型物質の生理的作用により性格との関連を説明しようとした。これに対して医学者は型物質は重要な機能を持つものではないこと、また肝心の脳には(ほとんど)存在しないことを理由に否定的な見解をとることが多かった。

しかし、これとは別に遺伝子の「連鎖」あるいは「多面作用」によって血液型と性格を関係づける考え方もある。海外での血液型と性格に関する研究はおおむね理論的前提としてこの遺伝子作用説をとっている。性格に関係するような特定の遺伝子が見つまっているわけではないという点において、この説も具体性を伴ったものとは言えないが、血液型と性格の関係の「可能性」を示すには十分な説ではないかと筆者は考える。

4. 血液型と性格は関係ないと断定できるか？

この分野に関する心理学的な研究は、もはや「関係の有無」を論ずる段階を過ぎ、「なぜ信じられているのか」といった点に関心が集中しているように思われる。諸研究の成果を概観してみると、血液型と性格には少なくとも実用に役立つような大きな関係があるとは考えにくい。しかし、血液型性格判断の否定は、必ずしも血液型と性格の関係の全否定を意味しない。血液型性格判断提唱者のすべての主張が検証されたわけではないし、心理学者の研究でも一部有意な項目・特性が見られたケースもなかったわけではないのである。また、近年の海外の研究でも示唆的な結果は得られている。そして、その理論的な枠組は前述した遺伝子作用説によって与えられてもいるのである。

筆者は血液型と性格にまったく関係がないと断定するのは時期尚早だと考えるものであり、「血液型性格判断の検証」とは違った観点から血液型と性格の関係を調べていくことも可能だろうと考えている。

古川竹二の「血液型気質相関説」について

佐藤達哉

(福島大学行政社会学部)

古川竹二(1891-1940)の独創的な学説=血液型気質相関説は、なぜ、どのように生まれたのだろうか?彼は、その着想について「暗示を得て」としか説明していない。また、そこから私たちは何を学ぶべきなのか?

1. 学説を用意した文脈

文脈¹ 日本における血液型検査の移入

20世紀初頭に発見された血液型検査の技術を日本に移入したのは医師の原来復である。彼は医学的な意味で血液型に注目したのだが、「血液ノ類属的構造ニ就イテ」という論文(原・小林, 1916)において、実験中「奇異ニ感ズタル」点として、B型だろうと思った人はB型だった。それは細身で優しそうな人である。ことを報告している。

輸血を通して血液型に関心をもった軍医たちも幾つか血液型に関する論文を執筆しているが、その中でも初期の論文にあたる平野・矢島(1926)は、中隊別血液型、階級と血液型などを調べた論文を発表している。

日本においては、血液型の4つのカテゴリーが、人間の個人差に関する変数として認識されずにはいられなかったのである。もちろん、その理由は明確ではない。だが、わが国で初めて血液型の検査を行った人物が既に「血液型の当てっこ」のようなことをせずにはいられなかったということは興味深い。

文脈² 個性の時代の到来

明治維新後に西洋の近代を丸ごと輸入しようとしたわが国。教育制度についても同様だった。国民皆教育を目指し、教育制度が整えられた。しかし、早くも明治後期には、知的劣等児の教育の問題や入試過熱の問題に悩まされることになる。

これらの問題に対しての1つの解決策は、知性以外の個性に注目することであった。大正時代は「個性という言葉が氾濫」する時代(山下, 1982)であったが、それは今でいう性格についての個性が着目された時代であった。

2. 古川の履歴

古川は明治24(1891)年、長崎の医師の家系に生まれた。大正5(1916)年、東京帝国大学哲学科教育学専修を卒業し、その後大学院を経て東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)に奉職している。入試選抜委員を務めることが多かった。

雑誌『心理研究』に彼は「知能試験と学業成績」を発表した(古川, 1920)。入学試験に使用しているメンタルテストが入学後の成績を予想し得るか、という問題を扱っている。彼によればその予測は概ね良好で

ある。ただし、児童の気質が影響を及ぼす場合には予測が多少ずれるということを書いている。おとなしい子は新しい環境では力を発揮できないことがある。ということである。彼は児童の気質を「積極-消極」という分類軸で捉えようとしていた。

3. 文脈と履歴の接点

古川が彼なりの学説を生成した要因としては、①入試や授業を通じて児童の個人差に関心があった②教育現場における気質面重視の傾向③医師の家系に生まれ、血液型に親しみをもちた、ということが考えられる。

ここで重要なのは、彼がまず気質について関心を持っていたことである。血液型はあくまで気質を捉えるテクノロジーだったのではないだろうか。知能が知能検査で捉えられるように、気質が血液型で捉えられはしないか、というのが古川の「暗示」ではなかったか。

4. 学説の意義と限界

古川学説の意義としては、①教育における現場志向の理論②知能重視主義からの脱却を目指す(=個性の多様化)③客観的な気質把握(=教師の主観的評価を排除)といったことがあげられる。

また、学問的意義の他、血液型が「自分のことを考える手段」として人々に受け入れられたという点は重要であろう。四民平等、近代的自我の芽生えの時代であるとはいえ、多くの人は、自分が何者かなどということは考えようもなかったはずである。血液型はその隙間に巧妙に入り込んだのではないだろうか。

限界としては、①血液型による人間分類が錯覚である可能性②他研究者の追試がうまくいかなかったということがあげられよう。古川にとって不幸だったのは血液型という指標があまりに明快で、追試の結果も明快なものになってしまったということである。これが体型その他の類型であれば、肯定するにしても否定するにしてももう少し曖昧なままでいられたらう。

翻って今日の血液型性格判断ブームを考えると、一般人たちは決してきちんとした研究をするわけではなく、印象だけで「関係あり」としている。この点は社会心理学の課題であるので触れないが、厳密な調査とちょっとした論理的思考があれば、血液型と性格の関係は錯覚だと誰もが認識できるはずである。

5. 学説から学ぶべきこと

今日、古川の学説は主に「血液型」に注目されているだけだが、むしろ、その教育への熱意や気質理論からこそ学ぶべき点が多いと考えられる。古川が直面していた教育評価の問題は「新しい学力観」の「やる気の評価」などが抱える問題と一脈通じるものがある。

能見正比古の「血液型人間学」について

大 村 政 男

(日本大学)

序 説 かつて『STERA』という雑誌に「紅白歌合戦」の出演歌手の血液型がその曲名とともに掲載されたことがあった。志水一夫は「ステージで倒れたら輸血でもするのか」と皮肉っている。しかし、わたくしはプロ野球の選手やJリーグの選手をはじめ、衆・参両院の議員も血液型をオープンにしたほうが良いと思う。それは「血液型と性格とは関連しない」というわたくしたちの考え方に実際の証左を与えてくれるからである。城西大学女子短期大学部から発行されているPR誌『JOSAI』にも Successful beauty の全身像とともにその血液型が記載されている。もちろん、個人の血液型を明らかにすることは支持派の人たちにも利潤を与えることになる。それでもかまわないのである。支持派・批判派、ともに良いデータがほしいことはいうまでもない。血液型性格論争はエンドレスな戦いである。優れた武器がないとバトルには勝てない。その武器こそ良いデータにほかならないのである。ただ、最近、この論争は両者に決定的な勝利というものがないということ、もしもあるとすれば相手が飽和したり、死没してしまったときである、という考えを持ってきた。「007：死ぬのは奴ら」なのか？

能見正比古の出自 『週刊現代』（1985年3月16日号）の「にんげんファイル '85 能見俊賢」の記事や「ABOの会」の機関誌『abo mate』などを参照して能見正比古の出自を尋ねてみよう。

1925年（大正14年）7月18日（土）、満洲（中国北東部）の奉天（瀋陽）で生まれた。金沢一中卒業、旧制四高を経て、1947年に東大第二工学部電気工学科を卒業、さらに東大法学部政治学科に進学した。学生生活は実に多彩で、学生寮における自治会活動や文学・演劇を中心とする文化活動においても衆人の先頭に立って活躍した。血液型はB型。社会人になってからはペン一筋の生活に入り、雑誌・百科事典の編集や創作評論活動にその才能をいかんなく発揮した。大宅荘一の弟子。大宅からは「怪獣」という渾名をつけられたという。そういうイメージを持っていた。1978年6月に「ABOの会」（血液型人間学研究所主宰）を設立し、7月に『abo mate』の見本号を、10月に創刊号をそれぞれ刊行している。1981年10月30日（金）10時30分、新宿三越の「レディス友の会」で講演中に倒



【古川 竹二】 【能見正比古】 【溝口 元】

れ、そのまま永眠した。行年56歳（死因は心筋梗塞）。能見の性格は自由奔放で、凝り性だったという。彼の没後、長男の俊賢が後を継いだだが、1986年4月、研究所の機関誌は68号をもって休刊した。俊賢は一時休刊とするが、いずれ季刊の血液型情報誌として復刊したいといっている。それからもう8年にもなる。

能見正比古はなぜ血液型に注目したのか これについては『現代のエスプリ』（1994年7月）に『能見説と古川説の比較とその問題点』と題して記述しておいた。正比古は『血液型でわかる相性』（1971）、『血液型人間学』（1973）、『新・血液型人間学』（1983）でみな違う契機を書いている。共通していることは血液型気質関連説の古川竹二（1927）にほとんど触れていないことである。正比古はある著名な性格心理学者に「大宅先生からこれ（血液型と性格）をやるともうかるぞ」といわれたのでやり始めたともいっている。

古川学説と能見のコピー 能見正比古の「血液型人間学」は古川学説のたぐみなコピーなのである。古川があげた各血液型の特徴を国語辞典的に解釈しなおして並べ、それに若干の香辛料を加えたものにすぎない。例えば古川が、B型は、淡泊・快活・楽天的・物事を長く気にしない・派手・移り気・果断・慎重さなし・動揺・意志弱し、と書くと、能見はそれを受けて、気軽・淡泊・人がいい・だまされやすい・開放性・散漫・非常識・大胆・わがまま・慎重さ不足・煮え切らない・お天気屋、と置き換えていく。このような単純なトリックでもわからない人がいて（心理学者でも）、能見と古川は別なものとして済ませている。とんでもない洞察の悪さである。古川学説は目分量統計であってもデータは存在した。しかし、能見正比古にはデータがない。ないはずである。古川学説のコピーだからである。古川学説は、その「偉大な錯覚」のため自壊した。そのコピーはこれからどう生きるであろうか？

医学的立場から血液型性格判断を考える

冨家 孝

(日本女子体育大学)

会社が人事採用の資料に使用するという事は、この種の性格分析に医学的な根拠があると判断してのことなのでしょう。実際には血液型が個人の性格に影響を与える—という学説が医学界で認知されたことはありません。それどころか、精神科の分野で血液型をテーマにした論文で学位が出されたケースもいままで聞いたことがありませんし心理学の分野で学同としてとりあげられたこともありません。つまり医学的には学同的な価値を認めていないということなのです。我々など、医学的根拠はゼロだと断言してよいと思いません。今まで、血液の専門家の方々が、声を大にして、血液型性格分析を否定しなかったのは、あまりにばかばかしかつたからだと思うのですが、我々はあえて反論をかくことにしました。これからかくことは、血液型についての医師の常識です。特別な説は一つもありません。

まず血液型とは、いかなるものかという説明から始めましょう。皆さんご存知のA B O血液型は、1901年、ウィーン大助手のランドスタイナーという人が発見しました。それから10年後、輸血で人が死ぬことが多いのは血液型の不一致によるものだということが発見され、一挙にA B O型の知名度があがった訳です。しかし、血液型というのは、実はA B Oや、R h +、—だけでなく、いろんな型があります。現在、はっきり分かっているだけで、約80種240型。医学部の授業で習うのは、せいぜい10種類です。何故、その中でA B O式血液型だけが有名かというと、輸血などの際には、この3つの血液型だけは注目しなくてはならないからなのです。間違えた血液型を輸血すれば、重篤な症状が起り、生命にかかわってしまうわけです。また、A B O型は親子鑑別に使われることも有名になった原因かも知れません。

A B O型が医学的に重要であり、特徴的なのは、この2つの問題だけです。血液型とはいったい何なのかといいますと、「赤血球の膜の上にどの様な型物質を持っているか」ということにつきます。例えばA型の場合、「赤血球の膜の上にAという型の物質を持っている」のです。ちなみにこの型物質が抗原になりますので「赤血球の膜の上にAという抗原を持っている」とも言えるのです。このAという抗原をもつ人の赤血球の膜の上には、他の種類の血液型の抗原も沢山ついているわけです。それなのに、なぜさして特別な型物質とも思えぬA B O式の型物質だけがその人の性格に影響を与えることができるのか、とてもその可能性は考えられません。血液型というのは遺伝子で決まるわ

けですから、赤血球の上にAならAという抗原を作る遺伝子は存在します。しかし、その遺伝子が同時に人間の気質も担うとは考えにくいし、さらに、その遺伝子だけで性格全体が決まるなんて考えられないのです。一歩ゆずって、赤血球上の抗原と性格に関連があったとしましょう。そうすると、我々が医学部で習った10数種類の血液型の組み合わせを考えただけで9,800万通りあることになります。ほぼ日本の人口に匹敵するわけで、これでは「一人一人の性格は違う」といっているのと同じだし、確認されている80種類の組み合わせを考えれば、地球の人口をはるかに越してしまうことになります。

この程度のことなのです。また、血液型に類するものは、動物にも存在します。大部分の動物は人間と同じ反応を示す抗原を赤血球の膜の上に持っています。血液型性格分析を応用すれば、上野の山のボスザルは「大将型」のO型でなければいけなし、忠犬八子公は「従順型で責任感のある」A型。ウサギとカメのウサギさんの方は「ちゃらんぼらん」なB型になる。動物だけではなく、バイ菌だって、この抗原を持っているわけで、もしA B O型の抗原が性格に影響を与えることができるのなら大変です。バイ菌にもキャラクターがあることになります。百日咳の菌、赤痢菌、プロテウス菌などは、人間の抗原と同じものをもつことで有名ですが、そうすると「権力志向」の赤痢菌、「天才型」の百日咳などというものが存在することになる。

それに、現在では先端技術のバイオテクノロジーがあります。バイオテクノロジーを応用すれば、人間のA B O式血液型の遺伝子をクローニングして大腸菌や枯草菌(納豆菌)に入れるのも自由自在。インスリンを作る遺伝子や成長ホルモン産生遺伝子は大腸菌に入れるのと同じように比較的簡単に行えます。そうすれば、「陽気な」大腸菌や「社交的な」大腸菌なんて言うのも作れるのでしょうか。

結局、血液型性格分析が「科学」の仮面をかぶって論じている根拠は、全部統計の段階なのです。

研究発表

現代青年の宗教観と宗教活動

○高 嶋 正 士
(共立女子大学 家政学部)

藤 田 主 一
(城西大学 短期大学部)

[I] 課題と目的：青年期は一般に宗教的な時代といわれ、ある程度の宗教的関心をいただくが、これは内的自我への適応のひとつとも見られる。

現代の青年は、占いや霊の世界、超常的な現象、特に高校生から大学生にかけての女子青年は、様々な種類の占いに強い関心を示し、依存している傾向がある。その理由は、単なる好奇心や将来のことが知りたい、悩みごとを自分ひとりでは解決できないなどが挙げられる。一方、男子青年も占いに興味を持ち、科学では証明できないもの、例えば、UFOなどに高い関心を示している。最近の宗教は特に呪術的行為に走る傾向が見られる。戦争を知らない現代青年は、受験戦争の体験のみが強く残り、また「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」に重点が置かれるようになってきた。

本研究は、現代青年が神秘的なものや呪術的なものにどの程度の関心を持っているか、またその時の彼等の心理状況などを考慮しながら、現代青年の宗教観と宗教活動の関係の実態を明らかにしようとする。

[II] 対象：本調査の対象は大学女子(235名)を中心とし、比較のために大学男子(200名)と高校女子(88名)の総計523名である。調査期間は平成5年7月中に行われた。

[III] 方法：調査は下記に示す要領で実施された。
問1. 現在の青年の間で宗教的行為として考えられる要因をいくつか取り上げ、興味あるもの、信じているもの、関わっているものに該当するもの全てに答える。また、該当する項目に対して、どういうところに興味を覚えたか、それらによって何らかの変化があったか等の記述式による質問を設け自由記述させる。
問2. 「宗教」という言葉に対するイメージを5項目に分け、該当するものにすべて答える。
問3. 一般的に宗教行為と思われるものを21項目取り上げ、該当するものにすべて答える。
問4. 「宗教」に対してどの程度の興味及び関心を持っているか、また参加の有無の実態について調べ、それらの理由及びきっかけ等を記述させる。
問5. 被験者自身についてのself-analysisのための質問18項目を用意して回答を求めた。(回収率 女子大1、2年97.3%、3年100%、男子88% 高校女子100%の結果を得た)

[IV] 結果と考察：現代青年は、宗教への関心度は低いにも拘らず宗教的行為をし

表1 青年の神秘的呪術的のものへの関心の興味があるもの

	大学 男子	大学 女子	高校 女子
1	霊の存在 (59.4%)	占い (71.5%)	霊の存在 (84.3%)
2	UFO (45.2%)	霊の存在 (49.8%)	占い (45.4%)
3	占い (31.0%)	UFO (28.4%)	UFO (27.9%)

表2 信じているもの

	大学 男子	大学 女子	高校 女子
1	霊の存在 (59.4%)	霊の存在 (57.5%)	霊の存在 (81.0%)
2	UFO (38.8%)	占い (28.1%)	UFO・占い (25.6%)
3	占い (13.8%)	UFO (19.2%)	水晶パワー (7.0%)

表3 関わっているもの

	大学 男子	大学 女子	高校 女子
1	占い (11.0%)	占い (30.8%)	プロミスリング (29.1%)
2	プロミスリング (7.7%)	霊の存在 (3.0%)	占い (28.8%)
3	霊の存在 (8.5%)	プロミスリング 水晶パワー (2.1%)	水晶パワー (4.5%)

表4 祈願係数

	両除-祈	両除-開	祈-開
大学生<女子>	0.811	0.831	0.351
大学生<男子>	0.971	0.430	0.378
高校生<女子>	0.928	0.353	0.083

ている青年が非常に多い。これらの現象は、正月三ヶ日に初詣に出かける青年が多く、また占いをしってもらうためにお金と時間を費やしている。このことは青年の将来に対する不安、精神状態の不安定さを表しているようである。また祈願行為、お守り、占いといった現世利益的宗教行為や墓参りを、宗教を意識せずに行う青年の心理には、習慣化され一種のレジャーと捉えている傾向が見られる。若年層になればなる程、宗教的行為をしている者、神秘的・呪術的のものを信じ、関わっている者が多いように思われた。また、神秘的・呪術的の者に対する関心が高い反面、信じている青年が少ない傾向も見られた。これらに惹かれる背景としてマスコミの影響が大きい。「安らかな心、精神を保つため」に宗教があると肯定的な宗教観を持っている者が多いにも拘らず宗教活動に対しては否定的な態度を示す青年が多かった。これは豊かな社会の中で、普段の生活には「心の豊かさ」よりも「物の豊かさ」の方を大切にしている青年が多いからであろう。しかし、いざ困難や挫折に直面した時に支えになるのは「心の豊かさ」であり、それは呪術であり、神仏であり、宗教なのであると考えている現代青年の宗教観に見られる。

漱石文学と心理学との関連についての一考察

田中 熊次郎

(田中心理学研究所長)

I 目的

漱石には今も人気があり、高校の国語教科書採用数で第1位を占めているという。それは、巧みな名文、真摯な人柄にもよるのであろうが、さらに、漱石文学が当時の諸科学、とりわけ心理学の理論を基礎としているという事実もあることを明らかにしてみたい。また、その心理学が、経験的実証的のみ制限されることなく、深く現象学的実存的思想にも接近していることを知り、心理学の在り方の参考の資としたい。

II 方法

① 漱石の著作・論文・手紙・作品などの検討

(例) 文学論・文芸の哲学的基礎・私の個人主義・思い出す事など・漱石全集月報、菅虎雄や鈴木三重吉への手紙、行人・ころろ・道草・明暗など。

② 漱石研究家の意見などの検討

(例) 小宮豊隆・杉山和雄・和辻哲郎・江藤 淳・瀬沼茂樹・本田顯彰・荒 正人、など。

III 結果の概要(注目すべき点のみ)

① 文芸科学としての文学論

漱石は、英文学を専攻したが、文学そのものに疑問を抱き、英国に留学してからも悩み続け、遂に、「文学書を読んで文学いかなるものかを知らんとするは、血をもって血を洗う如き手段である。」と悟り、「心理的および社会的に、文学は如何なる必要あって、この世に生まれて存在し発達し退廃するかを極めん。」と決意し、心理学・社会学・哲学および生物学・進化論などの書まで数十冊を購入して読んだ。しかし、帰国してからは、家計のために一高および帝国大学に1週22時間も出講した。そこで、遠大な計画は断念、大学の講義を整理し出版したのが「文学論」である。

第1編：文学的内容の形式は(F+f)である。Fは認識的要素で、fは情緒的要素である。Fの説明は「意識焦点波動」の説による(モガン C.L.Morgan、スクリプチャー E.W.Scripture)。f情緒は文学の試金石。(リボト T.A.Ribot、ベイン A.Bain、ジェームズ W.James)。

第2編：恐怖・悲哀などの情緒を直接に経験することは非常な苦痛であるが、文学を通じて間接に経験する場合には、爾後に快感さえ喚起する。人々に間接経験による楽しみを与えるという事実が、文学を世界に永く存続せしめる一原因であるといえよう。

第3編：科学はHOWの疑問を解くのみであるが、文学はHOWのほか WHYなどの疑問にも応じる。

第4編：科学者は理性に訴えて黒白を争う。文学者は生命の源泉たる感情に訴えて幻想(illusion)を呼び起こす技法を競う。

第5編：個人の意識の焦点が集まって集合意識(時代思潮)となる。或る時代の標準をもって、あらゆる作品の批判をするのは意識推移の原則を知らないからである。(マッシュ H.G.Marshall、W.ジェームズ)

② 文芸の哲学的基礎(講演速記に加筆)

文学論の大前提をなすもので、「意識現象が唯一の真実在である」から説き、私・時空・数・因果の法則などは便宜上の仮定、と断じている。(W.ジェームズ)

さらに、「読者が作品の現わす理想と合して、作者の気魄が無形の伝染により社会の大意識に影響するならば、自己の使命を完うしたといえる。」という。

③ 私の個人主義(講演速記に加筆)

自分の幸福のために自由に個性を発展していく、と同時に他人の自由と個性を尊重すべきである。

④ 思い出す事など(朝日連載の小品)

修善寺の病床で、ジェームズ教授の著「多元的宇宙」を読み感深し。その後、教授の訃を知って悲しむ。

⑤ 神経衰弱の三重吉への手紙

現下の世では正しい人が神経衰弱になると存じ候。

⑥ 「ころろ」(代表的作品の1つ)

現実には恋の勝利者でありながら、心の中では罪悪感に悩み、ついに自殺するという明治時代の恋愛の深刻な悲劇の描写である。それは、事実の核心には、その人だけの「ころろ」の問題があると語っている。

IV 考察

漱石は、心理学者で哲学者であったジェームズの影響を受け、時代を先取りする偉大な思想家となった。作品にはつねにセオリーが潜められている。また、細かい心理の描写によって人の心を打つ。それは、殆ど内省法によるものであるが、極めて具体的であって、立派な心理学者であったといえよう。(和辻哲郎)

尚、門下の若者達に手紙や対話などを通じて、「それぞれの個性を尊重しつつ自己実現を援助する」という誠実なカウンセリングの実践者であり、真の人間教育者であった。(荒 正人)

左右優劣と器用さの分析的研究(3)

○永沢 幸七 林 潔
 (東京家政学院大学) (白梅学園短期大学)

問題

器用さの個性化は、大脳皮質運動の対象性に要因があるとされている。

人間では約85%が左側の皮質運動野が右側より発達しており、これがほぼ右利きと一致していることが明らかである(ただし、左利きの人の右側運動野が大きいとは限らない)。人間の身体には四肢を始め、視覚や聴覚や、行動態度における発達過程につれて、左右優位が器用さにあらわれてくるものであるといわれている。

側面優位の生活、すなわち行動態度の左右形成が不適応の原因となってくる場合もみられる。この身体の各部にわたって左右優位性を正確に測定し、その優劣をよくみきわめ、日常生活、運動競技全般にわたっての訓練と向上に促進を与える場合もみられる。

方法

この実験の項目は、従来の予備実験の結果から、全部で15種を選定した。

項目1は永沢(1980)がpointingと称し、dominant eyeの実験に用いたものである(矢野薫夫医博の助言)。

まず正面に向かったの標識に、右手あるいは左手を伸ばして、両眼に合わせる。次に片目毎につぶって凝視する。標識に一致した方が被験者の利き目となる。すなわち、最初左右の目を開いたまま左右の何れかの手を伸ばして、その人差指の線上の端に標点をあわせる。次に片目で順番に標識を見る。点線の端から離れずに一致した方がdominantである。実験者には分からないが被験者には明瞭となる自己診断である。

次に項目2は、メガホン状の筒を逆にして対象を見る方法で、マノスコープと呼ばれる(他者診断)。これらをつくめ、質問内容は次のとおりである。

-
1. ポインティング (pointing, 自己診断)
 2. マインスコープ (manoscope, 他人診断)
 3. 手を組む (両手を合わせた時どちらの親指が上になるか)
 4. タオルを絞る

5. 足を組む (上にする足)
 6. 靴をはく時左右いずれの足を先にはくか
 7. 階段を昇りはじめる時左右いずれの足から先に昇りはじめるか
 8. 腕を組む時 (上になる方)
 9. 後ろから突然呼ばれた時 (どちらを振り向くか)
 10. 服を着るとき
 11. はしを持つとき
 12. 自転車に乗るとき
 13. ハサミを使うとき
 14. トランプをきるとき
 15. 改札口で切符を機械に出入するとき
-

また、Beck Depression Inventory (BDI) を自己評定尺度として実施した。BDIは21項目から成るうつ傾向測定のための尺度である(得点は0から63までを分布する)。これらの実験を、前回に引き続いて、東京地区の学生男女計150人を被験者として実施した(1993-94年)。

結果と考察

側面化は大脳皮質運動野の非対象性に原因があるとされている。視覚には個人により左右どちらかの視野が優位に働いており、その側の眼を優位眼という。また、無意識的に球を蹴ったりする足を利き足と呼んでいる。

これらの条件と、うつ傾向測定のためのBDIの得点とは、ほとんどの項目では相関がみられなかったことは前回と同様であった。BDIとの間に相関がみられたのは先の表にあげた諸条件のうちで、改札口で切符を機械に入れるときの条件のみであった。右利きを前提として作られた改札口でのこの行為は不自然でもあるということであろうか。いずれにしても、左右優劣とうつ傾向とは特に関連は見いだされなかった。

左右優劣と性格傾向と関連づけについては、他にも方法を求める必要もあると思われる。あわせて、データを加えてさらに検討する予定である。

人生観の外面相と内面相

齋藤幸一郎

(常磐大学)

【目的】

私はこれまで、被験者の意識を直接的につかまえる方法として「共感的観察法」が必要であることを主張してきており、昨年の本学会では、その共感的観察法のひとつの応用としての「共感的問答法」ともいえるべき方法を用いて被験者の人生観の同定を試みた結果を発表したが、今回の研究では、人生観といっても、大まかに分ければ、そこには人生観の外面相・内面相といった二つの領域を区分することができるのではないかという仮説に立ち、この仮説のもとで「共感的問答法」を試みるなら、結果として何が得られるかを探索することを目的とした。

【方法】

1) 被験者：——大学の第3学年在学中の私の担当するゼミナール所属の全員、すなわち男子4名、女子8名、計12名の学生。

2) 実験期間：——1994年度春 semester。

3) 「人生とは……」命題の収集：——教室の場で全被験者たちに、一種のSCT(文章完成法検査)の形式からなる印刷物(B4版)の用紙を配布、それに記入してもらった上で回答を求めた。但し項目数は20個、文初の言葉はどの項目もすべて「人生とは」であり、それに続けるべき文章の記入スペースが2行分設けられてある。すなわち被験者たちは、「人生とは」で始まる文章を20回にわたって自由に思い浮かべてそれらを記入することを求められたわけである。時間制限は設けなかったが、最も早い被験者が約8分、最も遅い被験者でも約19分で記入を完了した。

4) 共感的問答法の実施：——問答法の実施は、個別的に私と各被験者とがテーブルをはさんで対面する形で行われた。まず、その被験者が記入したSCT回答のコピーを被験者と私がそれぞれ手にした上で、第1段階ではそこに書かれてある20項目の人生観命題のうち最も被験者自身の「本音」といえるもの、つまり本音項目を順に5項目、指摘してもらったが、その際、指摘された一つ一つについて順次、どのような意味でそれが本音なのか、あるいは本音に近いのか、について、実験者たる私が「共感的に」納得できるところまで十分に時間をかけて問答していった。第2段階では、こんどは逆に、「本音」から最もかけはなれ

た、いわば、最も無関心な命題、つまり無関心項目5項目を指摘してもらったが、これらについては問答にあまり多くの時間をかけなかった。第3段階では、本音項目、無関心項目、ならびにそれら両者の中間に位置する10項目つまり中間項目が、被験者本人の精神構造の中でどのような位置を占めているかを話題にして共感的問答を行った。問答時間は最大35分、最小22分、平均約29分であった。また、問答のプロセスはテープ録音された。

【結果】

各被験者が指摘した5つの本音項目のそれぞれが、SCT20項目中の第何番目に記入されていたものであったかを調べてみたところ、平均9.96番目つまり大凡中央値となった。すなわち、被験者たちは一般にSCT式の回答記入に際して、自分の本音だからといって初めに記入したり、逆に本音だからかえって後になってから記入するといった特別な傾向があったわけではない、ということがわかった。

つぎに、全被験者中4名では、本音項目として指摘した5項目の命題は、誰の場合も、その人なりのある一つの意味内容を別な言い方で表現しただけのものであった。また、他の7名では、本音として指摘した5つのうち4つまでが同一の意味内容を示すものであった。しかも、以上11名のどの被験者においてもその意味内容は、例えば「諸行無常」とか、「日進月歩」などと表現できるような単純明快なものであった。つまり被験者の大部分(12名中11名)においては、本音のものとして指摘した5項目中、全部もしくは4項目までが、それぞれの被験者の内面の「ある一つのもの」を言葉を変えて表現したものとなっていたのに対し、こうした現象は、無関心項目もしくは中間項目に関してはみられなかった。ここに本音項目のひとつの特徴をみてとることができる。

しかし、残りの1人の被験者においては問答段階で本音として指摘された5項目はどれも、例えば、「人生とは人の一生である」というように、単なる事実とか辞書的意味の叙述に終わっていた。すなわち、この被験者だけは自分の本音を隠そうとする一種の逃避を試みていたとみられ、結果として、この1人は本実験における例外者として扱わざるを得なかった。

精神テンポに関する基礎的研究 (第74報告)

三島 二郎
(早稲田大学)

寺沢 充夫
(玉川大学)

○望月 稔
(日本女子体育大学附属二階堂高校)

目的：本研究は精神テンポに関する基礎的なパイロット研究として実施するものであるが、今回は踏切に関する調査を取り入れ、それとの関係を調べる。今まで行われてきたように聴覚領域⁽¹⁾、運動領域⁽²⁾の精神テンポを測定しこれらの調査との関連を検討する。

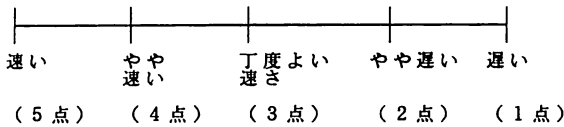
方法： A：今回は運動領域では、閉眼して机上を指頭打叩させ、10秒間隔で打叩数を5回測定し、2～3分を経ながら、相互に影響されない間を保ち、5回実施し、その最大頻数を精神テンポとした。

次に聴覚領域ではユニバーサルメトロノームにより断続音を聞かせ、丁度よい速さを調整法によって選ばせ、これを5X5回実施し、その最大頻数を精神テンポとした。

B：生活テンポとして、クレペリン用紙を用い、加算を丁度よい速さで行わせ、各1～2分の休憩をおきながら、5回実施し、その平均値を測定した。

C：踏切に関する調査用紙の一例は

踏切の警音は



で選択法で実施した。さらに、踏切(4項目)、警音(4項目)の総点を上記し()内の点数配分によって求めた。

D：特に、歩行者対象に車の少ない踏切を選び歩行者の歩行の速さを測定する。

被験者は中・高・大・一般の方々を合わせて100名余に及ぶ。実施期間は平成6年6月～8月

結果：(1)これらの測定結果はA、B、C、実験により、次のように相関を調べた。

1. 精神テンポ(Tapping) 2. 精神テンポ(Metronome)
3. 生活テンポ 4. 踏切を渡る速さ等(4項目の総点)
5. 警音の速さ等(4項目の総点)

Table 1. 相関係数表 12名

	1 Tapping	2 Metronome	3 加算	4 踏切	5 警音
1		0.832	0.340	0.494	0.660
2	**		0.458	0.587	0.607
3				0.233	0.254
4		*			0.123
5	*	*			

Table 1. は各5領域の相関係数を示している。

これより注目すべきことは警音がtapping, Metronomeの精神テンポと相関がかなり有り5%Levelで有意である点で、警音がわれわれ精神テンポへ近似していることが考えられる。

(2)次に運動領域において踏切の歩行状態を記録した。10m単位で歩行速度を測定した。

Figure 1. 踏切の図 [警音65～75 decibel]

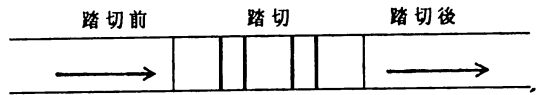


Table 2. 踏切歩行 sec/10m

		踏切前	踏切	踏切後
男	M	5.95	5.44	7.28
	SD	1.11	1.02	1.18
女	M	7.15	6.54	8.70
	SD	1.58	1.44	1.85
全	M	6.68	6.10	8.14
	SD	1.85	1.73	1.67

28名

Table 2. は踏切前・踏切・踏切後の歩行速度の10m単位の平均値と標準偏差を示している。これより、踏切で歩行が速く、踏切後で速度が下降している。

「踏切前と踏切後」「踏切と踏切後」の歩行速度の平均値間にはt検定で有意差が認められた。

Table 3. 踏切を歩いて渡るとき(大学生他28名)

	速い・やや速い	丁度よい速さ	やや遅い・遅い
頻数	16	12	0
%	57.1	42.9	0

Table 3. は踏切に対する調査の内観報告であるが中・高・大学生計100名の結果は「速い・やや速い」が32%であった。踏切前では精神テンポ・踏切では学習テンポ・踏切後は生活テンポの如き歩行があると思われるが、なお検討していきたい。

サンプル数の諸問題 (5)

—サイコロを使つての期待値と実測値のずれについて—

○川島 大司

久米 稔

(東海女子大学 文学部)

(早稲田大学 文学部)

サンプル数の諸問題 (1)¹⁾ (2)²⁾ (3)³⁾ (4)⁴⁾ において質問紙法人格検査を用いて、標本のサンプルをどれくらいにすればもとの標本集団に類似するかを検討した。

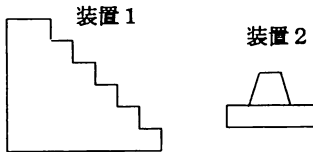
度数分布、累積度数分布、分散の分布、平均値の分布の結果から、もとの標本集団から50以上のサンプル数を抽出すれば、もとの標本集団に類似した分布が得られた。しかし、因子分析の因子負荷量、二乗和、寄与率、累積%の値の結果からでは、もとの標本集団から100のサンプル数を抽出しても、もとの標本集団の値に類似せず、各群間のばらつきは大きいということがわかった。

そこで、本稿ではサイコロの目の理論的な出現回数と実際の出現回数との関係を調べる。

{目的}

サイコロはおのおのの目が理論的には1/6の確率で出現することになっている。そこで、実際にさいころを使つて、どれくらいの試行回数で理論値に近づくのか、また、どのような曲線で、理論値の漸近線に近づくのかを検討する。

{方法}



装置1の階段から装置2の押し板でサイコロを押し、下に落ちて出た目の数を測定する。サイコロの置き方を均等にするために、次のような順序でサイコロを置きこがす。

サイコロの振り方

- ①サイコロを装置1の中央部、階段側一番前に置く。
- ②サイコロに前もって印をつけ、その印が階段側上から見て、左下になるように置く。
- ③装置2で軽くサイコロを押し、ころがす。
- ④出た目を測定する。
- ⑤同じ目で時計方向に90度回転し①~④を繰り返す。
- ⑥同じ目で4回測定する。
- ⑦次の目で①~⑥を繰り返す。
- ⑧①~⑦の要領で3000回繰り返す。

被験者

3人に別々のサイコロを渡し、一度に3000回試行するのではなく、適当な試行回数で休憩をとり、3000回行つた。

図1

サイコロの
理論値と期待値

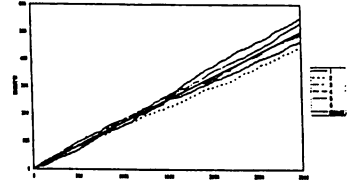
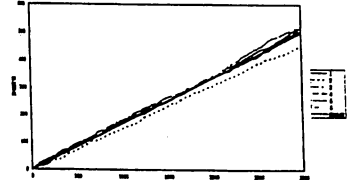


図2



{結果と考察}

図1、図2はそれぞれサイコロを3000回ころがして、各目の出現回数を50回ごとに累積し、グラフにプロットしたものである。1~6はそれぞれ目の種類を表し、理論値は漸近線としてプロットした。被験者3人の結果から、2種類違った出現の仕方をしたものを取りあげた。

図1では、5の目は最初から理論値に近づいている。1、4、6の目は理論値より多く離れていく。逆に、2、3の目は理論値より少なく離れていく。

図2では、3、4、6の目は理論値に近づいている。1、5の目は理論値より多く離れていく。2の目は最初から理論値より少なく極端に離れていく。

この結果から、試行回数が増えるにしたがい、理論値より離れていく傾向がある。そこで、さいころの精度に問題があるのかもしれないので、コンピュータで乱数を使い、架空のサイコロの実験を行った。その結果、実際にサイコロを使った場合と同じような結果が得られた。

{文献}

- 1) 川島大司等：サンプル数の諸問題 (1)，日本応用心理学会第56回論文集，1989
- 2) 川島大司等：サンプル数の諸問題 (2)，日本応用心理学会第57回論文集，1990
- 3) 川島大司等：サンプル数の諸問題 (3)，日本応用心理学会第59回論文集，1992
- 4) 川島大司等：サンプル数の諸問題 (4)，日本応用心理学会第60回論文集，1993

MMP I 新日本版のティーンエイジャー基準

田中 富士夫
(中京大学 文学部)

問題 提起

近年、臨床場面でMMP Iを青年期に適用する場合が増えている。MMP Iの適用範囲は16歳以上であるが、成人資料を中心とした標準化集団の基準をそのまま青年期に当て嵌めて良いかどうかは疑問である。というのは、われわれの経験でも、人格上に然したる問題をもたないのに F, 6, 8が高いpsychoticなプロフィールを示す例に出会うことが時々あるからである。

本研究の目的は、ティーンエイジャーのMMP I結果を標準化集団の基準と比較した上で、青年期用の基準を作成すべきかどうかを検討することである。

方法

13歳から18歳までの中学生、高校生の男女計1437名の被検者(表1)にMMP I新日本版を冊子式(タイプA)で集団実施した結果(? < 30)を資料とした。

表1. 被検者の性別・年齢別内訳

	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	計
男	88	75	100	150	105	115	633
女	81	75	131	219	169	129	804

結果

1. 基礎尺度の平均値の比較

各年齢・性別毎に基礎尺度(?を除く)について平均得点(粗点)を算出し、年齢間並びに標準化集団と比較した。標準化集団は、居住地・年齢・職業・教育歴を平成2年の国勢調査結果に按分比例して抽出した

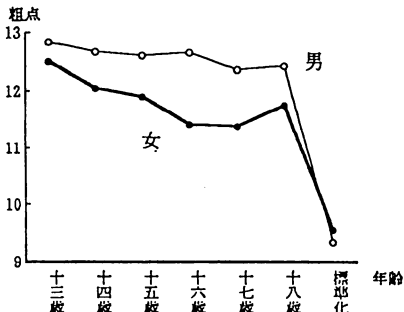


図1. 年齢別にみたPa尺度の標準化集団との比較

男500名、女522名の標本であって、平均年齢はそれぞれ39.52歳と43.41歳である。

その結果、Fは年齢と共に低下する傾向があった。標準化集団と比べると、ティーンエイジャーの得点は明らかにLとKで低く、F, Pa, Pt, Scで高いことがわかった。一例として図1にPa尺度の場合を示した。

2. 平均プロフィールの比較

標準化集団の基準に基づいて各尺度のT得点を求め平均プロフィールを描いてみると、ティーンエイジャー集団の特徴が把握しやすい。図2は13歳と18歳の男の平均プロフィールを示している。この二つのプロフ

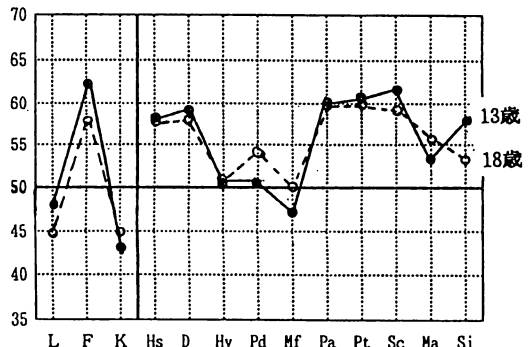


図2. 13歳と18歳の平均プロフィール(男)

イルは、山型の妥当性尺度パターン、D, Pa, Pt, Scの各尺度が約1標準偏差高いことなど異常所見と言えないまでも成人健常者ではあまり出現しないパターンである。女子の場合も事情はほぼ同様であった。

考察

ティーンエイジャー(13歳から18歳まで)のMMP I基礎尺度の平均得点を調べると、標準化集団の平均得点と明らかに差が認められる尺度が存在することが知られた。この結果から今直ちにティーンエイジャーの基準を提案するのは差し控えるが、少なくとも中高生年代の被検者に対しては標準化集団の基準とは別の基準を設ける必要がある。

13歳から18歳までを一括した基準を設けるべきかどうかは、今後19歳以降の大学生年代に同様な検討を加えた上で結論を出したい。

注意配分検査における反応時間について

竹内由則
(航空医学実験隊)

【目的】

注意配分検査は、1 試行の検査の中で、反応時間が数10秒から数10秒に及ぶという点で興味深い検査である。今回は注意配分検査における反応時間の分布について検討した。

【方法】

【注意配分検査(Attention Distribution Test)】
パーソナルコンピュータ画面上に7×7のマトリックスが表示され、0から48までの数字がランダムに配置されている。マウスにより順番に数字をクリックする。誤った反応の場合にはブザーが鳴り、正答するまで続ける。クリックごとの反応時間を記録した。

【被験者】男性5名(平均年齢37.4才)、全員コンピュータ操作には習熟している。

【実施方法】1日1回、勤務時間内の任意の時間に実施した。実施回数は30回である。

【結果】

試行中期の11～20回目の試行、計480反応(48×10)を分析対象とした。なお、誤反応はほとんどなかったため、最初の反応を対象とした。

図1に示すように、ローデータの反応時間分布は、大半が2秒以内で10秒を超える場合が若干存在するという指数分布に似た型となる。このデータを対数変換し、ヒストグラムを描くと1秒付近に谷を持つ双峰性の分布を示す(図2)。図から境界値を1.05秒とし、これ以下の反応をfast response型と呼ぶことにする。fast response型の分布型は左端をカットした正規分布に近いものであった。

残りのデータは1.08～35.88秒と広い範囲に及んでいる。このデータを大きさの順に並べ替え、回帰直線の当てはめを行った(図3)。データを大きい方から1つずつ削除していき、その都度当てはまり具合を赤池の情報量基準(AIC=n・log(rss/n)+2・q)を用いて検定した。直前の値との差が2以下となるまで繰返したところ、境界値は0.05秒と判定された。これ以下の反応をmiddle response型、それより遅い反応をdelayed response型と呼ぶことにする。

fast response型には、175反応(36.5%)が含まれ、平均反応時間は0.60秒(SD 0.172)であった。middle response型は、270反応(56.3%)、平均反応時間4.05秒(SD 2.268)、delayed response型は、35反応(7.3%)、平均反応時間14.09秒(SD 6.091)であった。

以上は1被験者の例であるが、この傾向は全員に共通していた。

【考察】

fast response型の反応時間は単純反応時間に相当すると考えられる。次に押すべき数字が隣接していた、あるいはすでに発見していた場合、または1回の視走査の中で発見できた場合などにこの反応型となると思われる。

middle response型は通常の搜索反応、delayed response型は搜索の失敗の繰返しであろう。delayed responseの場合には、焦燥感を伴った一種の心理的ブロッキングが出現することがある。

今後は、疲労やストレスによりどの反応型が影響を受けるか、また生理的反應との関係などについて検討していく予定である。

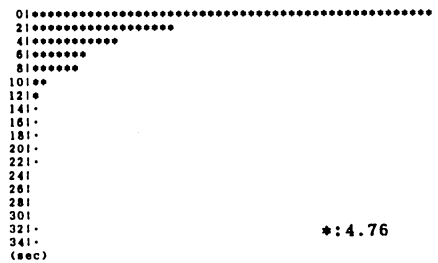


図1 反応時間分布(ローデータ)

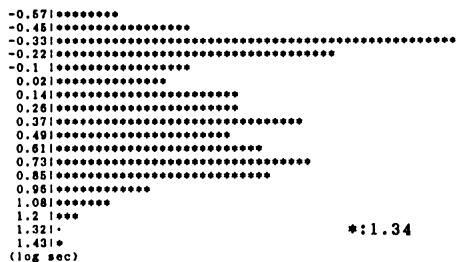


図2 反応時間分布(対数変換後)

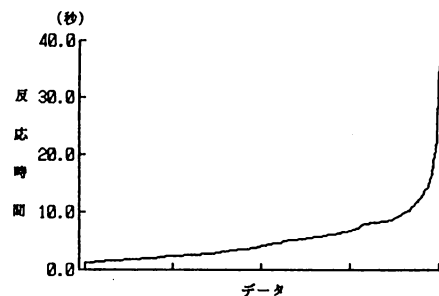


図3 反応時間の大きさ順に並べたデータ(1.08秒以上を対象)

顔写真による目撃者の同定判断 (2)

—— 同定精度と判断の確信度、目撃供述との関係 ——

渡辺 昭一

(科学警察研究所)

【目的】

一般に目撃者は、写真面割りによる同定判断を試みる前に、犯人の特徴についての言語的記述を求められる。この犯人についての特徴と被告人のそれとの一致の程度や特徴表現の詳細度などにもとづいて、写真面割りの信用性評価がなされている裁判例が、最近になっていくつか出ている。また、写真面割りの同定判断について確信があればそれだけ判断の正確さも高いことを示す研究がある中で、確信度と正確さの間には何の関係もないことを示す研究もある。

この研究は、次の問題について検討することを目的とする。(1) 犯人についての目撃者の記述に関するいくつかの尺度は、写真面割りの同定精度に関連があるか。(2) 同定判断に対する確信度と同定精度との間には、どのような関連があるか。

【方法】

被験者 被験者は80人(男性14人、女性66人)で、年齢は18~38歳であった。これらの被験者を40人ずつ、面割り写真に犯人が含まれる(犯人存在)条件と犯人が含まれない(犯人不在)条件に割当てた。

材料 被験者に目撃させるための出来事として、模擬犯行場面のビデオ録画を作成した。その内容は、一人の男性(犯人)が路上で拾った財布の中のキャッシュ・カードを使って、銀行の自動支払機から現金を引き出すという、3分間のストーリーからなる。

面割り写真は、次の方法で作成した。年齢、体格、髪の長さが犯人とほぼ同じ位で、眼鏡、髭、ほくろ等の特徴のない58人の顔写真を収集した。これらの顔と犯人の顔との類似性評定(n=20)に基づき、類似性の低い順に9人と最も類似性の高い1人の写真を選定した。犯人存在の面割り写真は、類似性の低い9人の写真をディストラクターとし、これに犯人の写真を加えて10人で構成した。犯人不在の面割り写真は、犯人に最も似ていると評定された写真を無実の容疑者とし、犯人の写真と入れ替えた。

手続 被験者(目撃者)に、犯行場面のビデオ録画を目撃させた。その直後に、被験者がビデオ録画の内容を復唱するのを防ぐため、3分間の挿入課題を行わせた。続いて、犯人の顔の特徴や印象等についての記述(目撃供述)

を得るために、記憶再生課題を行わせた。10分経過後、写真の中に犯人がいるとは限らないと告げて写真面割りを行い、判断の確信度を5段階尺度で評定させた。面割り写真は、実験者が1枚ずつ継続的に提示した。

結果の処理 犯人の特徴についての被験者の再生プロトコルを、顔の特徴、年齢、印象などの分節に区切り、さらに、それ以上分割すると意味を失うと考えられる最小の項目単位に分割した。これらの項目の数を再生項目とした。各被験者の再生項目について、犯人役の人物の同僚二人が独立に、犯人の特徴と一致しているかを判定した。各再生プロトコルについて、犯人の特徴と一致していると判定された項目数には、判定者間に有意な相関があった($r_{(78)}=.78, p<.01$)。そこで二人の判定者が一致と判定した項目数の平均を一致項目とした。

【結果と考察】

表1に、写真面割りの同定精度と目撃者の確信度、再生項目数および一致項目数の平均を示す。

目撃者は、犯人存在条件において47.5%が犯人を正しく同定したのに対して、犯人不在条件では72.5%が「犯人はいない」と正しく否定した。同定判断に対する確信度は、犯人存在条件では誤判断よりも正同定した目撃者のほうが有意に高い($t_{(78)}=2.27, p<.05$)。しかし、犯人不在条件では、正否定と誤判断の間に有意な差を生じなかった。再生項目数は、犯人存在、不在のいずれの条件においても同定精度と関連がなかった。一致項目数については、犯人存在条件のみに記述の一致と同定の正確さとの間に関連があった($t_{(78)}=2.13, p<.05$)。

本実験の結果は、面割り写真に犯人が存在する場合にのみ、確信度と同定精度との間の関係を支持するものである。犯人の特徴についての記述の正確さと同定精度との間には関連があるが、記述の完結性とは関連がないと思われる。

表1 写真面割りの同定精度と目撃者の確信度、再生項目数および一致項目数の平均

面割り写真の構造	目撃者の同定判断 (%)	平均確信度	目撃者の記述		
			平均再生項目	平均一致項目	
犯人存在	正(ヒット)	19(47.5)	3.42	7.89	4.87
	誤(ディストラクターの同定)	7(17.5)	2.57	7.71	3.71
	誤(誤否定)	14(35.0)	2.79	6.50	3.82
犯人不在	誤(無実容疑者同定)	3(7.5)	2.87	6.33	2.17
	誤(ディストラクターの同定)	8(20.0)	2.88	8.75	4.25
	正(正否定)	29(72.5)	3.17	8.03	4.64

大規模顔画像データベースの検索シミュレーション — 特徴キーワードによる方法 —

○足立浩平、渡辺昭一、鈴木昭弘
(科学警察研究所)

1. 目的

特徴キーワードによって、顔画像データベースから目撃対象の顔を検索する方法が考案されている^{1), 2)}。この検索手法は、データベースが、各顔画像について複数被験者が記述した特徴データによって構成される場合(複数登録者法)¹⁾と、一名の被験者が記述したデータによって構成される場合(個人登録者法)²⁾の二方法に大別できる。いずれの方法も、データベースは、(顔画像)×(605種のキーワード)³⁾の行列で表せ、行列の要素は、キーワードの記述比率(複数登録者法)、または、記述の有無を表す二値(1・0)変数(単一登録者法)となる。こうしたデータベースの中から、目撃者証言に合致した顔画像が検索される。

さて、上記の検索手法の精度をみるため、100名の顔画像の特徴データを記録したデータベースを構成し、検索実験を行った結果、高い検索精度が示された。しかし、実際の検索場面を考えると、データベース中の顔画像の数は100名といった少数ではなく、千名あるいは1万名以上の多数であろう。すなわち、こうした大規模データベースからの検索精度の評価が必要となるが、実際に大規模データベースを構成することは不可能である。そこで、実データを近似した大規模データベースを人工的に構成し、検索精度の評価を行う。

2. 方法

概要：検索実験では一般に、データベース中のいずれか1つの顔画像を目撃した被験者の証言に基づいて、検索を行う。つまり、データベース中の顔画像の1つは目撃対象で、他は非目撃対象となる。本研究では、目撃対象の顔に関する特徴データは実データとし、非目撃対象の特徴データは、次節で述べる方法で計算機によって生成する。例えば、9,999個の非目撃対象データを生成すれば、それらに目撃対象の実データを加え、計1万名の顔画像に関する(模擬的)大規模データベースが構成できるが、これを対象にして検索実験を行う。

非目撃対象データの生成法：(1)実験データ(100名の顔の特徴を30名の被験者が記述したデータ)から、各顔について605種の各キーワードが記述される比率を求め、この比率をロジット変換して $-\infty$ から $+\infty$ の値をとり得る連続変数に変換した。この変数が多変量正規分布に従うと仮定し、その母数を、実データへ適合するように考慮して上記の変換後データから推定した。

(2)得られた多変量正規分布に従う乱数ベクトルを生成し、乱数ベクトルの要素を逆ロジット変換し、比率データとした。(3)以上の比率データに、目撃対象の実際の比率データを加え、複数登録者データベースを構成した。(4)上記の比率データを適切な閾値によって二値化したデータに、目撃対象の実際の二値データを加え、個人登録者データベースを構成した。

検索実験：延べ240名の目撃者(データベースとは別の被験者)の各証言について、上記の各データベースを対象とした検索精度の評価を行った。すなわち、データベース中の各顔画像との合致度を求め、目撃対象の顔の合致度が最大であったとき、「ヒット」とした。

3. 結果・考察

データベース中の顔画像数を変えたときのヒット率を表1に示す。表1より、顔画像数が増加しても、それに比例して検索精度が下がることはなく、徐々に精度の減衰率が緩やかになることがわかる。また、複数登録者の場合より個人登録者データベースの方が検索精度が低くなると言われるが、顔画像数が10万近くの多数になると、両者の精度がほぼ等しくなっている。すなわち、10万名の顔画像の検索結果をみると、いずれのデータベースも比較的高い精度を保ち、ヒットは15~16%、つまり、100件の検索中15件以上で、目撃対象を10万名の候補から1名に絞り込めるという結果であった。一般に、応用場面に即した検索実験を行うことは難しいが、本稿で示したような数値実験を通して、実際場面をシミュレートすることも有効であると考えられる。

表1. 複数・個人登録者データベースの顔画像数(N)とヒット率

N	100	200	300	400	500	600	700	800	900	
複数	75%	68%	65%	64%	61%	57%	55%	54%	53%	
個人	35%	31%	27%	26%	25%	23%	23%	23%	23%	
N	1千	2千	3千	4千	5千	6千	7千	8千	9千	
複数	51%	45%	41%	38%	37%	35%	34%	33%	33%	
個人	23%	23%	21%	21%	20%	19%	19%	19%	18%	
N	1万	2万	3万	4万	5万	6万	7万	8万	9万	10万
複数	31%	26%	23%	21%	20%	19%	18%	17%	17%	16%
個人	18%	15%	14%	14%	15%	15%	15%	14%	14%	15%

文 献

- 1) 足立、渡辺、鈴木：心理学研究, 63, 55-59, 1992.
- 2) 足立、渡辺、鈴木：行動計量学, 20, 97, 1992 (大会発表要旨).
- 3) 足立、渡辺、鈴木：応用心理学研究, 17, 53-10, 1992.

操縦パフォーマンスに及ぼす断眠の影響

- フライトシミュレータにおける変化 -

○ 垣本由紀子、 竹内由則

(航空医学実験隊)

目的: 第35回日人人間工学会の発表に引き続き、24時間断眠が操縦パフォーマンスに及ぼす影響についてフライトシミュレータを用いた検討する。

方法: 被験者は100時間以上の操縦経験を有するシミュレータパイロット6名(28-45歳)。装置として、当航空医学実験隊所有のT-2型航空機の性能を模擬し、CGI方式による模擬視界を有する固定型操縦席のフライトシミュレータを使用した。本実験に先立ち、十分習熟させた後、約1時間のシナリオにそってフライトを実施した。実験手順は、第1日目:コントロールデータの収集と翌朝までの断眠、第2日目:午前、午後1回ずつのフライト、第3日目:リカバリーデータの収集を行った。生体負担測定項目:フライト中は、心拍数、呼吸、眼球運動の測定。その他実験期間中、2時間毎及びフライトの前後にCFP, PCパフォーマンステスト(注意配分、記憶、計算の組み合わせ、約10分所要)、パフォーマンス自己評価、自覚疲労症状、唾液コルチゾール、尿中カテコールアミン レベルを測定した。なお、フライト中の飛行諸元は、自動的に記録される。被験者は、フライト中、高度±100ft、速度±5kt、方位角±0°を維持するよう求められ、これからの逸脱及び逸脱時間をエラーとした。**結果及び考察:** フライトパフォーマンスについては、操縦の基本となる水平飛行を取り上げ、水平飛行の主要諸元である高度、速度、方位角について影響を調べた。

Tab. 1に高度及びSD値の平均を示した。平均値で見ると、許容値内に収まり、平均値間でも差は認められなかった。しかし、SD値では、フライトの後半大となる傾向を示し、特に断眠に引き続くFLT 1の後半顕著に大となった。エラー率(逸脱時間)で示すと、FLT1, FLT2ともフライトの後半に著しく増加した。速度変化に関しては、平均値、SD値とも顕著な変化は見られなかった。機能変化を知るひとつの手掛かりとして、心拍数(拍/分)の相対的变化をみるとFig. 1 のようになる。個人差が著しいが、一例を除き、断眠後著しく低下し(コントロール値から、90~65%)、FLT2の終了まで継続する例がほとんどであった。エラー率の大きさと心拍数の変化率の大きさは必ずしも一致しないが、概して顕著な機能低下が、フライト後半のエラー率の増加に関連することが推測された。しかし、操縦パフォーマンスの自己評価スコアでは、コントロール値と変わらない評価を被験者は一致して示した。一方、PCパフォーマンステストの記憶テストを例にとると、2桁、4桁の記憶では、断眠後も引き続き学習が認められたが、6桁の記憶の場合は、断眠後顕著に成績が悪くなる傾向を示した (Fig. 2)。比較的簡単な記憶では、24時間断眠ではほ

んど影響を受けないが、6桁と難易度が高くなると機能低下の影響を受けやすいのではないかと示唆された。

まとめ: 一般に断眠がパフォーマンスレベルを低下させることはよく知られているが、操縦パフォーマンスにどのように影響するかについては必ずしも明確ではない。本実験結果は、これら研究の第1段階ではあるが、24時間断眠においても、注意の集中を要求されるパフォーマンス維持に影響が見れることが示唆された。

本研究は門尾孝是、西 修二、水本清氏との協同研究である。

Tab. 1 断眠後の高度変化(許容値15,000±100ft)

条件	コントロール		FLT 1		FLT 2	
	前半	後半	前半	後半	前半	後半
平均値 (ft)	15026.3 (45.2)	15000.8 (26.2)	15017.2 (58.5)	15016.5 (73.3)	14985.8 (28.2)	15053.2 (59.2)
SDの 平均	66.3 (27.7)	67.8 (31.5)	74.2 (40.1)	100.5 (40.5)	56.0 (9.7)	89.1 (34.9)

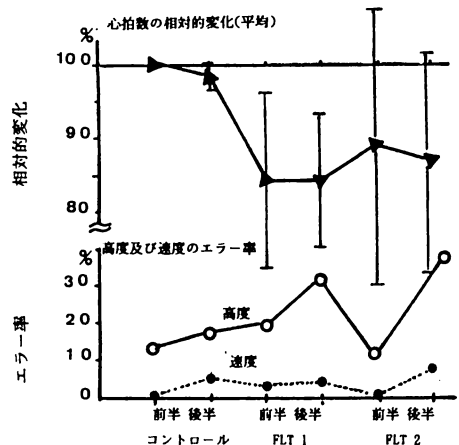
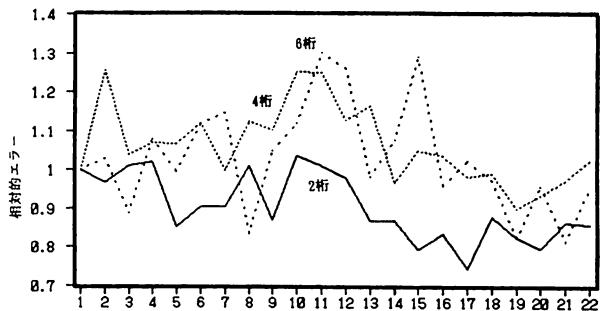


Fig. 1 心拍数の相対的变化とパフォーマンスエラー



No. 10-12:0200-0500, No. 13-16:after sleep deprivation
Fig. 2 記憶テストの定容

ミニバウムテスト診断の客観化に関する基礎的研究 Ⅲ

— 性格検査との関係について —

福井 嗣 泰

(江戸川女子短期大学)

初回の報告は、心理療法過程の回復方向とMINIBAUM-TEST(MBT)の変遷(死→再生・混沌→統合・貧→豊・固着→柔軟等)との一致性、性格類型と樹木画特徴の関連、そして、第Ⅱ回報告では、樹木画特徴とMMPIの臨床尺度得点との相関、幹と冠の比率と精神発達の間接関係を捉え、MBTの基準関連妥当性を検討してきた。

目的

今回は、YG性格因子(12種)を通じた基準関連妥当性を検討する。①抑鬱性、劣等感、神経質、思考的外向、社会的外向などの高得点群(H群)と低得点群(L群)に被検査者を分け、H群とL群の樹木特徴の差を明らかにする。②MBT樹木状態(芽吹き～枯れ木)において顕著となるYG性格特性を抽出する。

方法

検査：①MBT[8×8cm 枠、3分描画、HB鉛筆、条件1.心に浮かぶ1本の木を描く。条件2.1とは異なった木を描く。条件3.芽が出てきた木、花が咲いた木、実が成った木、枝が折れた木、幹が倒れた木、枯れた木の中から1本選択して描く。]と②YG性格検査の2種を同一被検査者(Sub)に同日に連続して実施。

Sub：18～20才の男女205名。

検査期間：1983～4年7月までの2年間。

樹木画評価項目 特徴：1.高さ、2.冠の縦(最大)、3.冠の横、4.幹(冠下から地面)の長さ、5.右外幹から幹中心、6)幹の中心の太さ、7)幹の地面の位置の太さについて、mm単位で測定。樹木状態：1.枝折れ、2.幹折れ、3.幹傷、4.切り倒れ、5.芽吹き、6.花咲き、7.実なり、8.枯れ木、9.花散る、10.実落ちについて有無を数えた。樹木画の主観的評価：1.茂り大きい—小さい 2.筆圧強—弱 3.大人—幼稚 4.上手—下手 5.強い—弱い、々しい、8)生き生きした—死にたい、7)美しい—汚い、8)楽しい—苦しい、9)にぎやかな—淋しい、10)動的—静的、11)安定—不安定、12)正常な—異常な、両極5段階評価尺度を用いた。

結果の処理

個人のYGの12種の尺度値を標準得点化した。その得点に基づいてH群(3.7～5.0)とL群(0～1.5)に分け、両群の評価項目の平均、標準偏差を求めた(各群の人数は平均21名)。両群の差の検定は、コラン、コッス法を用いた。MBTの条件3に従って6群に分け、前述と同

様にYGの得点と樹木評価項目の平均、標準偏差を算出。

結果と考察

1. 概括的傾向：樹木画の性格に関する情報量は、MBT条件3>条件1>条件2順となり、条件3の樹木状態の選択性を持たせたものが、気分や性格の測定に際して適していると言える。しかし、条件1は、条件3と異なった情報を測定できるため、検査方法としては両条件の並行実施が望ましい。

2. 目的①：樹木特徴でH群とL群との間で有意な差が認められたものは次の通りである。(※は、有意水準0.1=※ 0.05=** 0.01=***)。

抑鬱性が大きい→条件1:冠の横幅狭くなる**、根元の広がり小さい**、高さが低い*、実なり*、幼稚な感じ***、異常な感じ**、不安定な感じ*。条件3：冠の横幅狭くなる***、根元の広がり小さい***、冠の縦幅狭くなる**、幹倒れ**、苦しい感じ***、淋しい感じ***、弱々しい**、死にかかった**、静的**、不安定な感じ**となった。劣等感が大きい→条件1:幹の中心の太さ細い**、根元の広がり小さい**、筆圧が弱い***、弱々しい**、不安定**、幼稚*、下手*、淋しい*。条件3：幹(冠下から地面)が長い*となった。神経質である→条件1：幹の中心の太さ細い**、根元の広がり小さい**、不安定***、弱々しい**、異常な感じ*。条件3：幹倒れ**、異常な感じ***、苦しい**、上手*、死にかかった*となった。思考的外向→条件1:木の高さが高い*、正常な感じがする***。条件3：冠の縦が大きい**、幹倒れ・枯れる・枝折れがない**、下手**、楽しい**、茂りが大きい*、生き生きした*、にぎやかな*、安定*となった。社会的外向→H群とL群に有意な差無し。

3. 目的②：樹木状態 芽吹き→抑鬱性・劣等感が低く、一般活動が低い結果となった。花咲き→客観的・協調的・社会的外向・抑鬱性が低く、攻撃性でない。実なり→思考的活動性が高い。枝折れ→攻撃性・回帰性・協調性が無く、劣等感が高い。幹倒れ→抑鬱性・回帰性・劣等感・神経質・客観性欠如・攻撃的・のんきでない・一般的活動性等が高く、思考的活動性・支配性・社会的内向が低い結果となった。枯れ木→神経質・劣等感が低く、支配性が高くなった。この結果は、これまでの研究とも極めて一致していると言える。

心理書簡法による生活習慣の改善についての研究

○ 新田 茂
(人吉農芸学院教育部門)

上垣博和
(神戸少年鑑別所鑑別部門)

〈 問 題 〉

矯正教育施設に収容された少年たちの時間的展望は、質量が乏しく不連続の傾向があると報告されている(勝俣:1972, 大橋他1992, 都筑:1993, 河野:1993)。

少年たちの更生には、未来への明確な指針と見通しを持った健全な生活習慣の確立が必要である。見通しを欠いた生活習慣に内在する問題点への気づきと改善のきっかけがつかめるような生活指導が望まれる。

〈 目 的 〉

矯正の現場で容易に実施でき、生活習慣の改善に関する基礎的な矯正教育効果が確保でき、さらに実施者の力量に応じて展開可能な簡便な処遇技法を考案する。

〈 方 法 〉

「心理書簡法」の時間的展望の四次元モデル、生活日課表、生活(日課)分析(新田:1994)、「LAC法」の生活行動分析計画図(松原:1989)、「ライティング法」のコース・オブ・ライフ作図(福島:1994)等を参考にし、時間的展望に関する研究結果と矯正教育の実務経験から得られた知見を活用する。

〈 結 果 〉

「生活計画表」による生活(計画)分析を考案した。生活計画表 (1)用紙:A4版横、(2)記入欄:5(12)項目×約10年、(3)種類:①生活計画表タイプIは、時

間経過(行)が、概ね1年後から10年後まで。②生活計画表タイプIIは、2~3年前から7~8年後までの約10年間。(4)記入方法(列)は、①仕事欄:就労と職業上の資格取得に関して、②家族欄:家族構成と婚姻による家族構成の変化、居住地と住居形態に関して、③自分のしたい事欄:少年自身の趣味や希望等、家族に関する行為、車の購入予定と購入費用等について、④収入欄:就労による月収と年収について、⑤貯金欄:希望の預金月額と年額について等である。

対 象 新入時(予科)・中間期教育過程(本科)生
教 示 出院したら色々やりたいと思っていることがあるでしょう。自分のこれからの生活を予想して、生活計画表に出院後の生活設計を書いてみよう。

指導内容 (1)労働問題面:経済的自立には就労による収入が必要なことへの認識を深めさせる。(2)家庭問題面:自立に対する自覚を促し、家族構成の変化、特に婚姻に伴う責任について考えさせる。家族の動向に目を向けさせる。(3)自己実現の問題面:何をしたいのかを再確認する。趣味や娯楽によりストレスを解消し、生活をエンジョイする方法を考えさせる。(4)経済問題面:家庭生活の基盤、生活費と収支のバランスを考えさせる。自分のしたい事も経済的裏付けがないと何もしないということを理解させる。(5)(1)~(4)を総合的に時間的展望の観点から因果関係を理解させる。

〈 考 察 〉

生活計画表という形式で一覧表にすることにより、約10年間の中期的時間経過を把握しやすい。自分のしたい事の記入により課題に対する興味を喚起できる。

「生活計画表」から「心理書簡法」への展開

「行」をターゲット:「何年後の私」からの課題等
「列」をターゲット:車を購入するまでの私等

親子関係の課題の場合:親子関係が、(1)良好:「親孝行ゲーム(お母さんを旅行に連れて行ってあげよう)」、もしも作文(もし、お母さんを旅行に連れて行くとしたら)、家族旅行計画案作成等。(2)不良:何年後かに、少年自身が父親になったと想定して、親の立場で「少年院にいる息子へ」の課題を設定する。

〈 付 記 〉

本研究は、人吉農芸学院教育部門専門官谷山敏也法務教官(中間期教育過程担当)との共同研究である。

〈生活計画表I〉

※ 年収=月給×12ヶ月+ボーナス 年 歳 年 月 日 名前 _____

		オ 1年後	オ 2年後	~	オ 10年後
仕事				~	
	資格等				
家族					
	結 婚				
自分の したい事					
	車購入				
	費 用				
収入	月 給				
	ボ ナ ス				
	年 収 ※				
貯金	月 額				
	年 額				

情緒表示規則，解釈規則についての検討

○林 潔
(白梅学園短期大学)

瀧本 孝雄
(獨協大学)

目的

われわれは先に、日豪米の学生を対象とした社会生活についての意識調査を行った。自由記述の質問で、日本と日本人についてのイメージをたずねたところ、特にオーストラリアの学生から、(日本人は)感情の抑制が基本にあるので危険である、自分の考えを直接いわないなどに対する不審の感情の反応がみられた。

これらの点については、相互のEmotional Display Rulesの差も大きな条件として存在するものと思われる。

このような結果を受けて、このEmotional Display Rulesについての国際比較研究を計画した。本報告は第1報として日本人のEmotional Display Rulesについて、(1)肯定的情動表出と否定的情動表出との差異。(2)公共の場面では情動表出が抑制されるであろうという仮説について。(3)一般的情動表出とそれぞれの情動表出傾向との関連について。(4)一般的情動表出傾向と各場面に対応する情動表出傾向との関連について検討する。

方法

Emotional Display Rulesの質問紙を、首都圏の短期大学の学生169人に対して実施した(94年8月)。

結果

まず、いつも自分の気持ちを表現しますかという、5段階評定の質問についての反応は、平均3.11、標準偏差.64であった。これはわずかに自分の気持ちを表現するという程度の反応を示唆する。同じ5段階評定の質問を快、不快の情動について行つところ、快よりも不快情動の方がより強く表出されていることが理解できる。

次にいくつかの場面に對する、情動表出についての反応を求めた(情動の分類はEkman(1975)による)。

	幸福		驚き	
	M	SD	M	SD
1) 仲の良い友人と一緒にいます	2.77	.45	2.83	.37
2) 家族と一緒にいます	2.38	.69	2.47	.64
3) 他の人たちと一緒にいます	2.14	.61	2.22	.61
4) 教室にいます	2.21	.66	2.22	.61
5) 職場にいます	2.05	.64	1.97	.60
6) 自分の部屋に一人でいます	2.53	.69	2.47	.71

悲しみ 怒り 嫌悪 恐れ

	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1)	2.33	.62	2.15	.68	2.08	.63	2.15	.69
2)	1.95	.83	2.58	.58	2.27	.71	2.05	.78
3)	1.56	.57	1.50	.60	1.46	.58	1.68	.58
4)	1.56	.60	1.57	.61	1.50	.63	1.63	.60
5)	1.42	.56	1.48	.61	1.42	.59	1.51	.57
6)	2.69	.56	2.61	.65	2.42	.72	2.42	.73

この結果、公共の場にいる場合は、自分の情動を抑制する傾向があることが理解できる。

次に自分の情動を表出する傾向と、快、不快の情動表出についての質問との間の相関係数を算出した。

この結果、自分の情動を表出する傾向と相関のみられるものは、怒り、感情を害する、嘆き、興奮、悲しみ、悩み、いらだち、不満、不快、恐れ、不機嫌、勇気、喜びであった。また同じ試みを、各場面に對して行った。情動表出は、仲の良い友人、教室というなれた場所が両者の関係のみられる所である。

考察

いつもの自分の気持ちの表現については、やや自分の気持ちを表現するという程度の反応を示唆するものにすぎない。その意味で感情表出は、いまだに抑制されたものが表示規則となっているといえよう。

肯定的情動表出と否定的情動表出との差異については、快情動よりも不快情動の方がより強く表出される傾向がある。対人関係の規則として、いわゆる減点法が優位とされているということでもあろうか。

公共の場面では情動表出が抑制されるであろうという仮説については、公共の場にいる場合には自分の感情を抑制する傾向があることが理解できる。従って仮説は成立したといえる。

一般的情動表出と肯定的、否定的情動表出との関連については、先にあげた情動に相関がみられた。これらは、他の情動よりも比較的ストレートに表現されやすい情動なのかもしれない。一般的情動表出傾向と、いくつかの場面に對する情動表出とは、情動表出は、仲の良い友人、教室というなれた場面が関連する。自分の部屋にいる場合相関が低いのは、情動をぶつける対象がその場にいないためもあるのであろうか。

知的障害児の歩行判定に関する一考察

○青山 真奈美 (北星学園大学大学院文学研究科社会福祉学専攻)

豊村 和真 (北星学園大学)

●目的

知的障害児は知的発達とともに運動発達にも遅れがみられる。特に歩行は人間の最も基本的な移動運動であると共に、特徴的な歩行はノンバーバルコミュニケーションとしても大きな意味をもつ。豊村ら(1992)は歩行を客観的に評価する方法としてビデオを用いた歩行判定を試みている。本研究の目的は、優れた歩行判定を行なうための方法論的試みともいえるビデオ使用による歩行判定の特性について再検討することである。

●方法

被験者はH中学校特殊学級に在籍する13~15才までの女子7男子6名、障害種類はダウン症2・精神遅滞8・自閉症3名でIQは28~77だった。体育館に20m程の歩行コースを設定しその間を自然歩行させ、その様子を正面と側面からビデオカメラで記録した。これを大学生判定者10名に視聴させ評価表(表1参照)を用いて6段階評価による歩行判定を行なった。判定者間での判定結果の一致度をみる指標として、各項目の判定者間での評定の標準偏差を100倍した値(以下100倍偏差という)を用いて分析を行なった。したがって100倍偏差が0であれば全員の判定が一致していることを示し、値が大きくなる程判定結果がばらついていることになる。

表1 評価表の項目

①顔・首が傾いているか	⑬内股か
②顎がつきでているか	⑭外股か
③両腕をふっているか	⑮腰が下がっているか
④おなか突き出ているか	⑯前を見ているか
⑤上半身が揺れているか	⑰飛びはねているか
⑥上半身が傾いているか	⑱フラフラするか
⑦つまさき立ちか	⑲動作がゆっくりか
⑩地面を蹴る力弱い	⑳手足に力入っていないか
⑪ドンドン音をたてているか	
⑫足を引きずるか	㉑一定のリズムか
	㉒歩行の上手さ

*評定は程度が大きければ6、みられなければ1、不明は?

●結果と考察

1) 被験者側の特性でいえば、判定のばらつき小さい被験者は6項目で判定者全員が評定を「1」(該当する歩行動作がまったくみられない)となっている。また同じ被験者のQ24の判定は評価が高くまた、ばらつきも

小さい。歩行の細部において評定「1」が多いことが総合的にもよい評価を導いていると考えられる。一方Q24だけをみた場合、100倍偏差が最小である被験者は、判定結果から歩行は下手であると判断されている。豊村らでは、総体的判断は日常を対象として判定するよりもビデオのほうが適しているのではないかと考えられた。これに加えて今回の結果からは、大変上手か大変下手の両極端に属する場合に総体的判断が一致しやすいといえる。判定のばらつきが大きい被験者については、教示内容の理解が不十分で歩行コースを走ってしまったため歩行動作としての情報量不足が細部の判断にも総体的判断にもかなり影響していたと思われる。2) 項目別にみると、ばらつきが小さいのはQ4, 9, 13, 19であり、豊村と柏木(1991)が指摘した如く動作が大きく明瞭な動作が一致しやすい。ばらつきが大きい項目はQ1, 23で、Q1については質問文の意味するところが判定者に十分理解されていなかった可能性が推測された。Q24のリズムは定量的評価が困難であったと思われる。被験者別項目別100倍偏差のうち値が60以下のものを見ると、その評定の内訳は全て「1」か「2」で該当の動作がみられないかもしくは殆どみられないということである。このことから100倍偏差が小さいことが即一致度が高いとはいいきれず、該当する歩行動作の程度が小さいときは判定が一致しやすいといえる。

3) 一致度に関して性別・障害種類について項目毎に分散分析を行なったが有意な項目はなかった。障害の種類については今回は人数に偏りがあるので統計学的分析から積極的結論を導くのは不適切であろう。IQの高低による判定のばらつきへの影響をみるために回帰分析を行なった結果Q14, 18, 20が5%水準で有意だった。これらの結果は一見するとIQが高い程判定が一致しやすいことを示しているようだが、前述のように100倍偏差の値が小さいのは該当する項目が観察されていないことである。したがってこれらの項目についてはIQが高くなるほど特異性を認めないと解釈される。

4) このように改めて場面を設定し歩行を再現させる方法には限界がある。それは教示の理解力によって対象者が制限されたり、必ずしも日常と同等の歩き方を再現できるとは限らないなどの事実によって示された。

読詩による詩歌療法の境界例への適用・その2

横浜心理カウンセリング研究所

宇佐見万喜

1 はじめに

前回の発表に続き、境界例水準のクライアント（以下BPD）に読詩療法を試みた事例を報告する。

BPDは感情や情緒は豊かではあるが、その特徴である投影性同一視などにより感情が動きすぎたり、感情の連続がなくなったり、現実否認を行ったりする。

面接に読詩を導入することによりクライアントの感情を、リアルタイムに水路づけすることができるのではないかと考えた。詩歌に守られながらクライアントの感情が育つのではないかと考えた。面接は折衷的精神療法を行ったものであり、読詩療法を主体に行った精神療法ではない。しかし、読詩を用いたことが治療機転となる体験を得た。

折衷的精神療法の面接の中で詩を使う時期と詩の種類、およびその使い方について考察を行った。

2 事例の概要

クライアント：Y子 23歳 女性 OL

主訴：過食 嘔吐 下剤使用

家族構成：父 51歳 母 47歳 妹 17歳

生活歴と現病歴：思春期に入って太りはじめてきた。

大学に入った頃より容姿を気にすることすらなくなり過食を続けた。身長157センチ、体重64キロとなる。大学3年の頃よりセンナ（下剤）を毎日使用し、また二日に一度の嘔吐により、ほぼ標準体重に戻る。しかし、過食と嘔吐と下剤使用は就職後も治まらず、症状と将来に不安を感じて来所する。

心理テストの結果：SDS 34 KMI 40

適用した療法：来談者中心療法的カウンセリング・自律訓練法（以下AT）・読詩。

3 面接経過

面接回数は34回、全体を4期に分けて記す。

【第一期】 1回～10回

面接一回目では、過食と嘔吐と下剤使用の状況を詳しく語っていたが、2回目の面接時から幼児期に一人でいたことを話し始めた。小学校1年生のとき、妹が誕生。母は妹に甘く、溺愛していた。自分は母に甘えたいと思ったことは一度もない。しかし、妹がわがままを言ったりした時、母が妹を甘やかすと無性に腹が立った。妹が高校生になってからは、妹のやることなすことが癪にさわり、毎日いらいらしている。

☆ATはこの時期には導入していない。

【第二期】 11回～18回

☆ATを導入。標準練習を習得。標準練習の重感練習を習得した頃から落ち着き始め、いらいら感が減少してくる。それと同時に過食が少しづつコントロールでき始めてくる。標準練習がほぼ習得し終わった頃、「小さい頃寂しかった」と言って涙する。18回目に「紙の船一母に寄す（謝冰心）」を提示。自分は今まで母を求めていたのに、何故素直になれなかったのだろうと語る。

【第三期】 19回～23回

会社で同僚のOLが自分には話をしてくれない。昼食事に疎遠にされるとその相手を心底憎むと述べる。シュベルビエルの三編（「聞きなさい、遠くからでも」貝殻と耳」「追憶」）に、強い共感を示した。

【第四期】 25回～34回

恋人が出現する。結婚を申し込まれ、躊躇するが結婚を決意する。「ゆずり葉（河井醉茗）」により、親から子へとつながってゆく命の存在を考えた。

4 考察

クライアントは母を求める気持ちを意識化することを密かに恐れていたと思えるが、「紙の船」により自らの気持ちを味わえる様になった。その後シュベルヴィエルの比喩に守られながら自らの攻撃性と不安と対象希求をより強く表出できた。「ゆずり葉」により受容感と祝福を得られたといえる。

詩歌の使用の特徴を考察した。

(1) 時期-1：クライアントが親子関係や家族歴など意識レベルにある出来事を話し終えつつある時期であり、かつ情緒的な洞察に至り切れない場合柔らかな介入として使用。

(2) 時期-2：AT標準練習が習得できた頃が適切。AT習得により達成感を得、自尊感情が生まれ、また感情のコントロールがある程度可能になっているため現実を守りつつ内的世界に入ることができる。

(3) クライアントの知的水準はやや高めであることが望ましい。文学作品である詩歌を読解できる力を必要とする。

長期経過からみたそううつ病者の人格水準

成城墨岡クリニック 成田 猛

はじめに

Kreapelin, E. (1913) は、そううつ病では、「一般に、その経過は、周期性、相期性、完全寛解などを特徴とし、その予後も人格解体は認められない」と定義した。Glatzel, J. (1968) は、統計的な研究結果を踏まえ、「そううつ病の6.8%には、発症から平均9年後、平均4回の病相を経た後に、欠陥ないし残遺状態が認められる」とした。Wieser, St. (1969) は、その残遺状態を「そう病的色彩を伴った者には、適応能力の低下、葛藤緊張の増大、常同的な思考、想像力の低下が、うつ病的色彩を伴った者には、心氣的傾向、自己不全感などが認められる」とした。Schulte, W. (1975) は、「そううつ病の中でも、そう病相主体の経過をもつ者に、残遺状態が起こり易い」と述べている。近年、そううつ病には、臨床的に、そう病、うつ病の慢性化とは異なる残遺状態が存在するという所見が多く見られるようになってきている。

目的

そううつ病の診断のもとに長期に渡り、治療を受けている患者の人格水準の一側面を明らかにするために、同一患者に対してロ・テストを、一定期間(約10年)において、再施行することで、長期経過によるテスト像の変化の有無を検討する。

対象

これまで精神神経科を受診し、そううつ病と診断され、その後も同一病名で治療を受けている患者25例(男性16例、女性9例)である。

方法

再テストまでの期間は、平均9年7ヵ月である。一回目施行時の平均年齢は、34歳7ヵ月。二回目の施行時の平均年齢は、45歳5ヵ月である。ロ・テストは、一、二回目とも患者が急性期や増悪期にある時をさげ施行した。通常は、寛解期(病状安定期)である。両テストは、いずれも報告者が行った。ロ・テストの整理、記号化は、Klopper法に準拠した。総合的な人格水準をみるため、片口らによる修正BRSも算出した。なお、平均形態水準を(Av.F.L)を求めるに際し、反応拒否は0.0の形態水準をもつひとつの反応として計算した。

結果

そううつ病の患者に対して、約10年の期間においてロ・テストを施行した(両テスト時とも寛解期)。各カテゴリーの平均値とWilcoxon Testの結果を表1.に示す(紙面の都合で一部カテゴリー省略)。そううつ病の患

者では、表1.に見るように、平均形態水準(Av.F.L)、修正BRSに5%水準の有意差が認められた。しかし、他のカテゴリーでは、差が認められなかった。両テストの内容分析では、一回目は、比較的統制のとれた人格像であった。二回目では、色彩によく反応する軽そう病的な色彩が認められた。逸脱言語表現は、前者よりも後者に多く出現した。

表1.ロ・テスト各カテゴリーの平均値

項目	一回目	二回目	有意差	項目	一回目	二回目	有意差
TR	13.7	11.5	NS	Rej	0.8	0.9	NS
F	35.1	39.8	NS	RT/	18.8	18.0	NS
M	12.9	13.3	NS	A/N	15.8	15.8	NS
FM	18.5	20.1	NS	A/C	21.8	17.6	NS
FC	10.5	10.2	NS	P	37.8	39.8	NS
CP	8.9	11.3	NS	CR	4.9	4.2	NS
H	15.9	18.5	NS	PL	1.2	0.8	P<.5
A	49.8	43.5	NS	BRS	-11.2	-16.5	P<.5

考察

約10年の期間においてのロ・テストの結果は、平均形態水準(反応の質的側面)、修正BRS(人格の総合水準)の指標に有意な差を認めるものであった。前者の低下は、現実検討力、客観的な認知判断力の脆弱化を反映する。後者の低下は、人格水準の低下・荒廃の方向を反映する。この結果は、そううつ病者が長期に病相を反復していくうち、彼らの人格の基底(内的資質)に緩慢な解体化が発生してくることを示唆していると考えられる。次に、内容分析の結果は、適応能力の低下、葛藤緊張の増大、思考の貧困化を反映する。そううつ病者の病相の反復は、結果として病識の脆弱化、社会適応の困難性を生み出していると推測される。以上、本結果からは、「そううつ病にも、欠陥ないし残遺状態が存在する」という指摘は、極めて妥当性の高いものであることが窺える。評価に値するといえるであろう。この見解を更に精度の高いものにするには、初発年齢、病相の頻度、期間、間欠期の期間など統制し、さまざまなパラメーターを用い、長期に渡る研究が必要であることはいうまでもない。

色彩認知の研究(第二報)

-看護婦における空腹の影響-

○關戸 啓子 (川崎医療短期大学)

内海 澁 (千葉大学)

<目的>

どの様な色が食欲を増進させるのか、また美味しく感じさせるのかといった研究は多くみられる。しかし、空腹の程度による色彩認知の変化に関する研究はない。そこで、実験的に空腹の程度を変え、色彩認知がどの様に变化するかを検討し、第一報として第20回日本看護研究学会において報告¹⁾した。第一報では看護学生と看護婦を被験者として実施し、結果を比較検討した。今回は、看護婦の場合において、空腹が色彩認知に及ぼす影響に、年齢・食習慣・肥満度等がどの様に関連を示すのかを検討することを目的とする。

<方法>

1. 看護婦10名を被験者とする。
2. 被験者は前日の20時までに夕食をすませ、それ以降絶食とする。当日朝(8:30)と昼食前(12:30)と昼食後(13:30)に後述する色彩弁別テストを2回ずつ実施する。同様の実験を期間をあけて2回実施する。
3. 色彩弁別テストとは、中間色を何色と認知するかをテストする方法である。今回は、赤色と黄色・黄色と緑色の組み合わせで実施した。各組の中間色をDIC.GR AF-Gカラーチャートから20枚選び、それぞれ2枚ずつ計80枚の色彩カードを作成した。赤色と黄色・黄色と緑色の箱を準備し、色彩カードを被験者にランダムに渡し、類似していると思う方の色の箱に投入させた。時間制限は特に設けなかった。
4. 色彩弁別テストの結果は、弁別された色彩カードを得点化し、重み値として計算した。よって、色彩が転換したと認知された点を本研究では重心と称する。
5. 被験者に臨床経験年数・身長・体重や食習慣等に関するアンケートを実施した。

<結果>

1. 赤色と黄色の弁別では、空腹の程度が増すに従って赤色を多く認知しており、分散分析において有意差が認められた($F=4.16, df_1=2, df_2=117, F>F_0$)。
2. 年齢との関連では、若い看護婦の方が赤色と黄色の弁別では黄色を、黄色と緑色の弁別では緑色をより多く認知する傾向がみられた。
3. 臨床経験年数との関連では、赤色と黄色の弁別においては、経験の少ない看護婦の方が黄色をより多く認知する傾向がみられた。

4. 朝食の習慣との関連では、黄色と緑色の弁別において、朝食を「いつも食べない」人は、空腹の程度に関係なく結果が一定である傾向を示した。

5. 肥満度との関連では、赤色と黄色・黄色と緑色のどちらの弁別においても、標準体重群に比べてやせ群と肥満群は朝と昼前のテスト結果の差が大きい傾向を示した。

6. 色彩弁別テストに要した時間は、赤色と黄色・黄色と緑色の組み合わせによる差はないが、朝に比べて昼前は少ない時間で弁別している傾向がみられた。

<考察>

1. 赤色は食欲を増進させる色として報告²⁾³⁾⁴⁾されている。このため、空腹が一番強い昼前に赤色と黄色の弁別において、赤色を多く認知する結果になったのだと思われる。一方、黄緑色は食欲をそそらない色として報告²⁾されている。よって、赤色と黄色の弁別に比べて、黄色と緑色の弁別は空腹の程度による影響が少なかったのだと思われる。

2. 年齢や臨床経験年数によって色彩弁別テストの結果に差がみられ、空腹の影響の受け方が年齢や臨床経験年数によって変わることが示唆された。

3. 朝食を「いつも食べない」人は、今回の実験条件は普段の食習慣と同じであるため、黄色と緑色の弁別結果に空腹の影響があまりみられなかったと思われる。

4. やせ群と肥満群が、標準体重群に比べて空腹の影響を受けやすいのは、やせ群と肥満群はやはり各自の体型に関心を持っており、日頃から食事に対するこだわりが強いためではないかと考えられる。

5. 色彩弁別テストに要する時間が昼前に一番短いのは朝に比べて、慣れのために短くなるとも考えられる。しかし、昼食後に少し時間が長くなることから考えると、昼前は空腹のため早くテストを終らせて昼食を食べたいという気持ちがはたらくためだと思われる。

<文献>

- 1) 關戸啓子, 内海澁: 色彩認知の研究-看護婦における空腹の影響, 日本看護研究学会雑誌, 17(臨時増刊), p103, 1994.
- 2) 加藤雪枝, 他: 生活の色彩学, 朝倉書店, 1993.
- 3) 末永蒼生, 他: 色彩学校へようこそ, 晶文社, 1993.
- 4) 滝本孝雄, 他: 入門色彩心理学, 大日本図書, 1990.

看護教育の現場における目測の判定能力の研究

- 色彩認知と身体諸症状とMPIとの関係 -

○元山美貴・堀口陽子

奈良県立医科大学附属看護専門学校

原口知子

群馬県立医療短期大学

内海 澁

千葉大学

はじめに

様々な色彩が混在する看護場面の中で、事物の判断に影響する色彩の心理的効果を考える必要がある。

看護教育の場では、患者の社会的・心理的背景を認知することによって適確な看護診断を学生に学習させている。この学習過程にも人間個々の認知能力に影響すると考える。色彩の影響はその1つと考えた。

今回、その基礎的資料として重さの目測に影響する色彩を、さらに心理的背景で判断に関与する睡眠、空腹、疲労の身体諸症状及び性格を看護婦と看護学生に対して比較・検討した。

実験方法及び対象

(1) 原色である赤・青・黄・緑と明度の両端にある白と黒の6種類を選んだ。

(2) 10×10×12cmの大きさで、95gと105gの2種類赤・青・黄・緑・白・黒の箱を作成した。また、判断の基本として10×10×12cmの大きさで、100gの茶色の箱を作成した。

(3) 被験者に提示した色の順序は、6種類の色を赤・青・黄・緑・白・黒に対比させ、95gと105gを組み合わせ12通りの順序を作成した。

(4) 実験前には、睡眠、空腹、疲労の状態を知るために、5段階評価による質問紙を記入させ、10回の実験が終了した段階で、MPI性格検査を行った。

(5) 対象は、千葉大学附属看護学校の学生(2年生)10名、文部省看護婦学校教員講習生11名の合計21名である。被験者の年齢構成は、19~39歳である。

(6) 実験期間は、平成5年11月~平成5年12月までである。

結果及び考察

実験結果は、赤・青・黄・緑・白・黒の組み合わせにより、それぞれの誤った回答数を合計して統計処理をした。

1) 身体諸症状の結果

(1) 看護学生は疲労を感じていない時に誤る割合が低くなるが、看護婦は逆に疲労を感じている時に誤る割合が低くなっていた。これは、疲労という身体条件が重さの目測の際に何らかの影響を与えているものと考えられる。(図1)

(2) 睡眠については、赤・青・黄・緑の組み合わせ

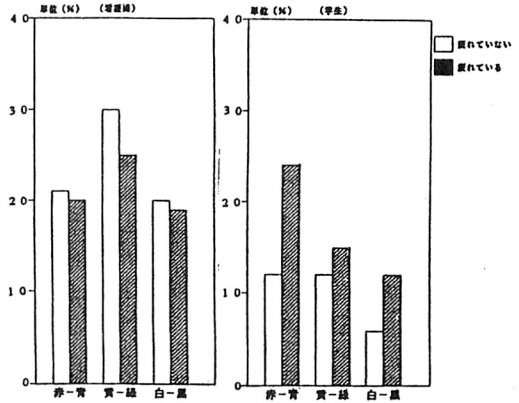


図1 疲労の有無と色判定の誤りの割合

で疲労と同様の結果を得た。看護学生は睡眠を十分と感じた時に誤りが少なく、看護婦は逆に睡眠が不十分と感じている時により注意する事を経験的に身につけているのではないかと考える。

(3) 空腹については、看護婦と看護学生とで誤る傾向が逆になる。それは、色彩によりその傾向が異なることは空腹が重さの目測の際に何らかの影響を与えるものと考えられる。

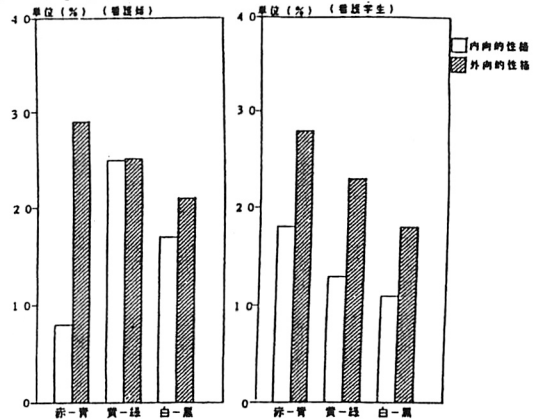


図2 E尺度の性格群、看護学生と色判定の誤りの割合

2) MPI性格検査の結果

看護婦・看護学生の両方に外向的性格群に誤りが多い。特に看護婦では赤・青に、看護学生では黄・緑で誤りが多くみられた。これは看護婦は重さの目測に単純な色である赤・青からの影響を受けやすく、思春期である看護学生は発生学的に黄・緑への感受性が大きいのではないかと考える。(図2)

精神作業に及ぼすBGMの効果

— 看護学生64名に内田クレベリン検査を行って —

○堀口 陽子

元山 美貴

内海 澁

(奈良県立医科大学附属看護専門学校)

(千葉大学)

I. はじめに

近年、日常生活においてBGMは広く普及している。特に作業の場では、BGMを使用することによって、作業能率が上がるとされている研究も数多くある。

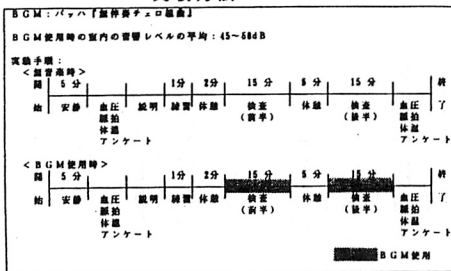
作業には、精神的作業と身体的作業の2種類がある。精神的作業は作業の内容が主として、思考・推理・判断などの心的活動を必要とする作業であり、身体的作業は、身体もしくは筋的活動を内容とする作業をいう。今までに報告されているBGMの研究のほとんどは、身体的作業についての研究であった。それらの研究結果では、BGMを使用することにより身体的作業能率は向上するとされている。しかし、精神的作業についての研究はあまり例がなかったため、BGMが精神的作業に及ぼす影響について、内田クレベリン精神検査を用いて、調査したので報告する。

II. 実験方法

1. 対象：18才～22才までの右利きで聴力障害のない健康なN看護専門学校の男女64名
2. 実験期間：平成5年10月18日～11月8日
3. 実験方法

精神的作業能率をみるために、数の加算という単純な作業により精神的作業をみることができ、かつ集団に対しても行えるクレベリン検査を選んだ。被験者のうち32名はBGMを聞きながらクレベリン検査を実施し（以下BGM群とする）、残りの32名はBGMを聞かずに同検査を実施した（以下無音楽群とする）。実験に使用したBGMは、リズムが安定しメロディが目立たずチェロの低い音が響き渡り安定感を与えるという、パッハの『無伴奏チェロ組曲』を使用した。実験手順は表1に示す。

表1 実験方法



III. 結果および考察

BGM群と無音楽群の計算量の平均を比較すると、計算量はBGM群1777.5、無音楽群1664.5、誤謬量はBGM群0.275、無音楽0.412とBGM群がより計算量が多く、誤答が少ない結果となった。

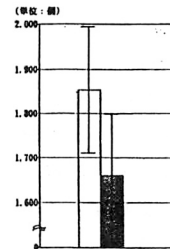
音楽に関する学習体験があると答えた者と、ないと答えた者の計算量と誤謬量を比較すると、無音楽群では習い事の経験の有無による差は小さいものであった。しかし、BGM群では音楽に関する習い事の経験がある者ほど計算量が多く、誤謬量が少ない結果となった(図1)。

次に、ふだん勉強の強時音楽を聞く者と聞かない者で、計算量と誤謬量を比較した。ここでも、BGM群の方が計算量が多く、誤謬量が少ない結果となった。

さらに、勉強時音楽を聞かない者に比べ音楽を聞く者ほど、BGM群と無音楽群の差は大きいものとなった(図2)。これらの結果より、音楽に関する学習体験や、ふだんから音楽を聞きながら勉強する習慣のあるという者ほど、BGMを使用すると効果的であるといえる。

実験に使用したBGMのイメージ別に、計算量の平均の比較をした。「嫌い」「やわらかい」「暗い」「低い」「こちよい」「単調」というイメージをもつ人ほど、計算量が多い。(図3) また、BGMのイメージ別に誤謬量の平均の比較をすると、「嫌い」「かたい」「暗い」「低い」「速い」「耳障り」「単調」というイメージをもつ人ほど誤謬量は少ない結果となった。今回使用したBGMである『無伴奏チェロ組曲』は、一台のチェロで演奏されている低音で単調な曲でリズムも安定している。曲のイメージとして暗く、低く、遅い印象をうける。音楽のイメージを正確につかんでいる人ほど作業能率は上昇するといえる。

【計算量】



【誤謬量】

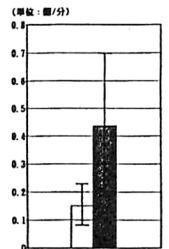
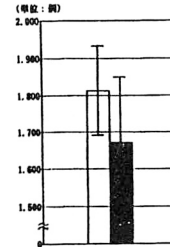


図1 音楽に関する学習体験あり
□ BGM群 (N=13)
■ 無音楽群 (N=7)

【計算量】



【誤謬量】

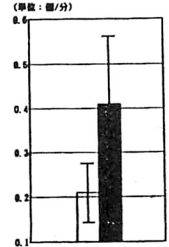


図2 勉強のときに音楽を聞く

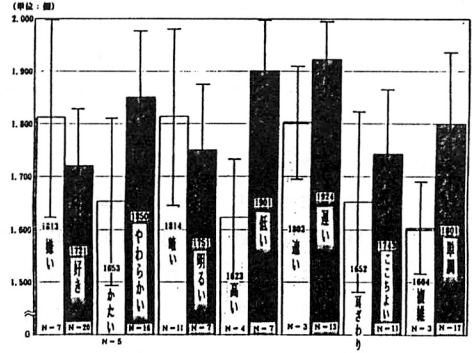


図3 音楽のイメージと計算量の平均

看護職員の自我同一性

—看護学生と臨床実習指導者の比較

○安藤 祥子

渡邊 憲子

内海 晃

(名古屋大学医療技術短期大学部)

(名古屋大学医療技術短期大学部)

(千葉大学看護学部)

〔研究目的〕

看護職における職業的同一性はどのような経過をたどって発達していくのだろうか。筆者らはこれまで看護学生の職業的同一性形成について検討してきた(1)。今回は、看護学生が臨床実習を通して出会い、最も身近な存在として、そこに看護婦像を描くであろう臨床実習指導者について調査を進めた。本研究の目的は、看護学生と看護職員について、職業領域と価値領域に関する自我同一性の構造を比較検討することである。

〔研究方法〕

対象は、国立医療技術短期大学部の看護学科の学生235名と、臨床実習指導者講習会受講者の看護職員348名である。

調査方法は、看護学生には、松下らの開発した自我同一性地位テスト(「非常によく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階評定尺度、48項目)を自記式質問紙法にて実施した。看護職員には、上述のテストを一部修正し実施した。

分析方法は、看護学生と看護職員の自我同一性地位テストの回答を各々因子分析し、バリマックス回転法により8因子を抽出し、その因子構造を比較検討する。

〔結果〕

因子分析によって抽出した8因子について、エリクソンの自我同一性理論に基づくMarcia, J.E. の四つの自我同一性地位の概念を採用し、中西の同一性地位の尺度により以下のように命名した。看護学生の場合は、累積寄与率47.9%で8因子を抽出し、職業の同一性達成因子・価値の早期完了第1因子・価値のモラトリアム因子・価値の拡散因子・職業の拡散因子・職業のモラトリアム因子・価値の早期完了第2因子・雑因子と命名した。看護職員の場合は、累積寄与率48.9%で8因子を抽出し、職業の同一性達成因子、職業のモラトリアム因子、価値のモラトリアム因子、価値の同一性達成因子、価値・職業の早期完了因子、価値のモラトリアム・同一性拡散因子、価値・職業のモラトリアム因子、価値の同一性拡散因子と命名した。(表1)

表1 8因子の命名

	看護学生		看護職員	
	領域	地位	領域	地位
f1	O	A	O	A
f2	V	F(1)	O	M
f3	V	M	V	M
f4	V	D	V	A
f5	O	D	V, O	F
f6	O	M	V	M, D
f7	V	F(2)	V, O	M
f8			V	D

領域：職業 = O, 価値 = V

地位：早期完了 = F, 同一性達成 = A

モラトリアム = M, 同一性拡散 = D

〔考察〕

上位4項目の同一性地位に着目すると、看護学生の場合は、順に同一性達成、早期完了、モラトリアム、同一性拡散と四つの地位が含まれているが、看護職員の場合は、同一性達成とモラトリアムの二つの地位にままとまっている。

上位4項目の領域に着目すると、看護学生の場合は、第1因子が職業領域であるが、他の3因子は価値領域である。看護職員の場合は、第1因子と第2因子が職業領域で、第3因子と第4因子が価値の領域である。

これらの結果から考えると、看護学生の場合より看護職員の方が、職業観・価値観ともに「自分なりの確立した、或いは、迷いながらも努力している」というあるまとまりをもった意識を持っていると思われる。今回、看護学生と臨床実習指導者の自我同一性の構造について概観し比較できた。しかし、臨床実習指導者は看護職員集団の中でリーダーの役割を担う立場であり、看護職員一般の傾向との違いも予測される。今後、看護職員一般を対象に調査を進め検討していきたい。

(文献)

1)安藤祥子他：看護学生の職業的同一性に関する研究—家族の影響、日本応用心理学会 第59回大会発表論文集, P88

看護婦の安全態度スケールの作成

○荒木美千子（東邦大学医療短期大学）

松下由美子（自治医科大学看護短期大学）

〔目的〕医療事故を生じやすい心的傾向性をあらかじめ予測し、医療事故防止を図るための「安全態度スケール」を作成する。

〔用語の定義〕安全態度：生命尊重を基調とする安全への心的傾向性（長山1968）

回収数（率）は712（87.3%）であった。

2）結果及び考察

安全態度スケールに完全回答した男性1名を含む428名を対象に、スケールの信頼性・妥当性の検討を行った。

1. 調査票の作成

①項目の構成と設定

スケール作成にあたり、運転者の安全態度を構成する3要素を参考に、責任帰属の方向性に3項目、規則遵守に3項目、行動の粗さに2項目を設定した。それに加えて、看護婦の仕事上の特徴と思われる社会的外交性尺度を3項目設けた。更に、看護婦の医療事故原因に関する意識調査（松下1994）を参考に、医師の指示受けについての態度1項目、同僚との関係性についての態度1項目、知識・技術の未熟さについての態度2項目、整理・整頓についての態度1項目を追加し、計16項目を設定した。

態度測定についてはクレッチ（Krech1962）らが態度を認知、感情、行動の3つの成分から成ると考えていることに着目し、上記16項目各々を3成分に該当するように表現し、計48項目を作成した。

②回答の妥当性を検討するための尺度としてLie- Scale 8項目を作成した。

以上合計56項目のテストを作成し、「あてはまる」（4点）から「あてはまらない」（1点）までの4段階の設問を設けた。

③安全態度を測る外的基準として、調査日よりさかのぼって過去半年間に調査対象者が起こしたミス・ニアミス把握するために、先行研究を参考に看護婦が起こしやすい事故項目を29項目設けた。

2. 予備調査

上記手続きで作成された調査項目の内容と表現が適切であるかどうかを判定するために、看護婦、看護教員合計31名に調査を行った結果、48項目中10項目が答えにくい内容或いは表現として指摘された。

3. 本調査

1) 調査方法

関東地区にある4病院のスタッフ・ナース816名を対象とした。調査方法は、各病院の看護部を通じて調査票を配布し、個人別の郵送法により回収した。

①回答の妥当性

Lie- Scale 8項目の平均点は 2.30 ± 0.33 であり、虚構性の低い方に傾いているため、回答全般に一応の妥当性があると判断した。しかし、Lie- Scale 得点が総計24点以上のものが17名みられ、これらは回答の妥当性が極めて疑わしいことから分析対象から外した。

②項目の妥当性

G-P分析を行った結果、48項目中19項目に、安全群と不安全群の間に有意差が認められた。

③因子的妥当性

上記19項目を対象に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、累積寄与率30.3%で、「マイペース因子」、「不確実な知識・技術の因子」、「非主体的指示受け因子」、「安全義務軽視因子」、「責任外部帰属因子」の5因子と独立項目として「整理・整頓」、「経験の少なさ」、「同僚への気配り」の3つが抽出された。

④内的整合性

クローンバックの α 係数による分析を行ったが、スケール全体の α 係数は0.27であり、十分な信頼係数とはいえないが、5つの因子を構成する項目間の α 係数は、0.65~0.85という高い信頼性を示した。

4. 結論及び課題

全体として、有意な結果を得ることができたと思われる。今後の課題として、累積寄与率が30.3%と低かったことから、看護婦の安全態度を構成する因子が十分にとらえていないと考えられるため、更に検討し、より精度の高いスケール作成を目指したい。

〔文献〕1) 長山泰久：交通心理学の問題点（現代心理学9）ミネルヴァ書房，1968。2) 松下由美子他：看護婦の安全態度に関する研究—医療事故原因に関する意識構造—。第20回看護研究学会雑誌，130，1994。3) Krech, D. et al. *Individual in society*. New York : Mc Graw - Hill, 1962.

病棟における看護の労働負担評価

越 河 六 郎
(労働科学研究所)

はじめに

病院における看護職者の業務は、最近の医療技術の進歩や、社会情勢の変化に対応した形で大きく変容を示している。勤務条件を基本的に規定する、日勤、昼夜、深夜の交代制。2-8 体制、ひいては 3-9 体制といった夜勤時の人員構成と月間の夜勤回数の標準設定、また、昼夜2交代勤務制、夜勤専門職制などもみられる。週休2日制、労働時間短縮の問題も大きい。

さらに、計算機による看護業務のシステム化の動きや、看護ケア方式の変更・チームナーシングからプライマリーナーシングへの移行も、試みの段階から定着しつつある。

主として病棟看護業務の、こういった変化については、それぞれの過程での評価がなされており、不都合がある場合はなんらかの改善がなされている。しかしどちらかというと、効率性や経済的側面の「効果」が強調されがちで、看護サービス・ケアの質的側面や患者への影響、看護職者への負担の増減に関する実態の点検は少ないようである。

本報告は、看護業務の、いわゆるシステム化の効果を探る目的で行った研究調査の結果の一部である。

1. 看護業務量の病棟比較

表1は、総合病院(1,420床)の産科と循環器内科の2病棟を対象として実施したタイムスタディの結果(30秒スナップ法・1,992年12月)をまとめている

表1. 看護婦1人1直平均業務時間量(分)

業務内容(項目数)	産科(N=46)	循内科(N=33)
1. 直接ケア(5)	170.8	117.8
2. 間接ケア(4)	82.8	103.1
3. 検査・治療(2)	49.3	82.9
4. 記録・点検(1)	116.1	134.2
5. 管理業務(3)	4.0	4.6
6. クラーク業務(1)	1.8	0.2
7. 助手業務(1)	0.4	0.2
8. 物品管理(3)	17.1	21.5
9. 食事・他(1)	70.8	85.2
計	513.1	549.7

看護業務の分類は、いまのところ羅列的な段階のものであるが、本研究では対象となった病院の看護部の討議をもとに、中分類で21項目区分としてまとめている。「直接看護」では、観察・巡視、オリエンテーション、身のまわりの世話、各種測定などを含む。

「間接看護」は、報告・連絡、病室環境整備等である。

2. 労働負担の主観的評価

表2は、CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)への応答結果を示している。

表2. CFSI 応答(特性別平均訴え率)

特性項目	産科	循環器内	全体
1. 力尽の状態	17 20	29 29	28 28
2. 一般的疲労感	38 30	35 36	41 38
3. 慢性疲労	46 48	58 57	59 56
4. 身体不調	16 22	17 13	26 25
5. 労働意欲低下	20 16	30 21	29 21
6. 気力減退	25 30	47 36	38 39
7. 不安感	25 23	36 24	33 32
8. 抑うつ感	28 29	45 27	37 36
N(前・後)	23 23	17 17	894 842

対象は、上記タイムスタディを実施した病院の全病棟である。表中、前・後とあるのは、看護方式(プライマリ・ナーシングの導入)の変更の前後を示している。その間、約1.2か月の経過があった。

CFSIは、心身症状・違和感の有無を問う評定尺度(81項目)である。8特性に分類されており、結果は、男女別のレーダーチャート図(基本パターン)に載せて疲労徴候の度合いを判定する。

CFSIによる、看護方式変更「前」「後」の評定結果は、病院全体では、大きい差は出ていない。調査時点のいろいろな事情も絡んでいるので、それを調べないと結論的なことは言えないが、「労働意欲低下」への「平均訴え率」でポイントを下げている点は目につく。循環器内科の看護婦では、「気力減退」「不安感」「抑うつ感」で改善効果が出ていると考えられる。

(本研究は平成5年度文部省科学研究費による)

日本人の生活意識(1)自然環境

高橋 敷(おさむ)

(相愛大学人文学部)

研究の意図と内容

今日、日本人の国際性、また異質性についての論議は盛んで、異文化理解に関する研究も多様である。だが相互の文化ショックの深層には、まだ十分把握されない日本人の生活意識の問題が複雑に存在する。その分析と統合こそ、次代の地球社会人をめざすわれわれの教育的課題であろう。本報告ではこれら国際比較調査の全容を示すとともに、第一回として気候、風土など「自然環境」に関する因子を分析し吟味した。

研究の方法とデータ

1978から現在にいたる、日本およびヨーロッパ、南米での、主調査(カルチュア・ショックの国際比較)と、二次調査(問題点・中規模)、3次調査(小規模・挙手、面接など)の集計と検証、分析、考察による。

主調査は、在日外国人(3~5年、65国414人)在外日本人(同、46国199人)に対し、コメントとともに異文化接触当初と現在との日本(人)評価の差求めた。

二次調査の主なものは・・・

- ★異文化適応の自己評価(同化、統合、拒否など)
- ★宇宙人イメージ調査(個人および国別作品)
- ★公害や環境破壊についての原因と責任 など

三次調査の主な内容は・・・自然水、ごみ投棄、異気象、植物の成育などに関する安心度調査、自然破壊関する切迫感調査など。

なお、以上調査に関係を持ち、また協力をえた機関や団体は・・・海外ではケルン(ドイツ)、オリエンテ(ベネズエラ)、ワンカイヨ(ペルー)各大学と、マドリッド、ローマなど七都市の小・中・高校のクラス。国内では大阪府の文化振興室、同PTA協議会、教育研究所連盟と多数の学校園、またKK近畿日本ツーリスト外人センター、KKジャパン・ビジターズ・ビューローなどである。

調査研究の経過とその結果

主調査の構成は ア、日本の自然環境 イ、日本人人間性 ウ、公共のマナー エ、交際と人間関係 オ、日本での社会生活 カ、日本の伝統と固有文化・・・六分野別、合計120の因子からなる。ここでは外国の日本(人)への敬意と、逆に交際能力(ウ、エ)での厳しい指摘がみられる(表参照)。在外日本人の側で強い自己批判への傾斜と、所属意識に関わる分野(アオ、カ)での安定した自信が対照的である。

異文化接触当初と≥3年後の日本(人)評価の平均

	在日外国人から		在外日本人から	
自然	+1.5	+3.7	+2.8	+4.8
人間	+3.6	+4.7	+4.8	-2.4
マナ	-1.6	-4.1	-2.7	-4.2
関係	-1.5	-5.1	-2.4	-4.3
社会	+3.5	-3.3	+2.6	+3.8
伝統	+0.9	+2.2	+0.7	+2.8

(各人±10段階評価 基準値=0 とする)

「ア、自然環境」を評価する因子 (◎○×※ 回答)

気候の温暖 四季の変化 日照 湿度 水質 大気
土 花と緑 騒音 風景景観 自然保護(破壊)
動植物 清潔 ゴミや廃棄物 他() ()

[日本人の傾向] 四季の変化(◎) 気候の温暖(◎) 水質(○)

[外国人の傾向] 風景景観(◎) 水質(◎) 清潔(◎) 騒音(○) 花と緑(○) 四季の変化はヨーロッパ人○アジア人×※

二次分析では、意外に日本人の異文化への適応性が高いこと。だのに「外人は異人、宇宙人は怪獣」の排他性(怪獣度? $=c/2a+b$)。自然への信頼(汚染の浄化作用、気象の調整機能、植物の成長信仰等)の大きさに驚く。反面、汚染の原因や責任については逃避志向が強くなる。・・・☆宇宙人イメージ c 怪獣、b 地球人同様、a より美しく進化

考察と今後の問題

以上の調査にはさらにデータの不備を補う関連分析が必要になるが、面接やケース追跡の資料も加えて次のように考察している。

★ 異文化接触での日本人の「物分かりの良さ」は、反面の「集团的帰属感」とりわけ「自然環境での優越感」によって補償されているのではないか。

★ 自然環境への信頼が、安心になり、さらに「甘え」を生んでいる。ために自然環境の事故に対しても、私たちに責任の意識が乏しく、そのかわり不安や恐怖も少ない

★ ここで責任をとられると、解決に替わるものとして「神話」が創案される。公害や汚染は「国土が狭いから」「文明国だから」など。〔cf. 「日本のように環境的に広く開放された土地に大気汚染などがなぜ多くおこるのか?」ドイツでのシムボより〕

★ 自然への「甘え」を分析し、「神話」の概念を打破して、行動責任に結びつけることが、次代への環境づくりのスタートとなるだろう。^{cf} (配付資料 I, II)

欲求構造と環境問題

廣島克佳

(航空自衛隊 航空医学実験隊)

【概要】

環境問題を解決するにあたって望ましい欲求構造について、考察した。単純な欲望制限論は妥当ではないと考えられた。金額等数量的な事物への欲求が問題であろうと考えられた。

【欲求拡大と環境破壊に関する素朴な理論】

欲求と環境問題については、単純に欲求を拡大することが環境問題を悪化させるとの観点が主流であると見て良いだろう。

しかしながら、この関係は、石油等のような再生不可能資源や、動植物の一つの種さえ消滅させる程の激しい、限界的状況においてのみ妥当するものと言える。例えば、柴田&植田(1992)は、塩素等の毒物の蔓延及び生態系の物質及びエネルギーの循環の破壊こそが問題であり、単なるエネルギー及び物質消費量の増大は必ずしも環境破壊ではないとする。本田(1994)は水田の環境における効能を論じ、人間の活動が寧ろ物質とエネルギーの循環を促進し、自然を豊かにする、との見解を示す。

しかしながら、現代社会においては、農林水産業は物質面において土地等から収奪的になっており、石油に大きく依存している。そして、衣食住全てが石油からの生産物に依存している。石油は有限な資源であり、そこからの生産物は生物が容易に分解できないものが多く、二重に消費は生態系を圧迫すると言える。

この構造の元では、如何なる形態の欲求であれ環境破壊に繋がるとの議論は極めて説得力に富むものと言える。

【商品経済との関連についての考察】

かかる構造は、一般に商品経済の進展により形成されたと言える(降旗その他1988)。この構造はそれ自体環境問題であり、しかも上述のような硬直した概念を維持するだろう。よって、商品経済の過剰な発達傾向は是正されるべきであり、これを支持・助長する各種構造について考察する事が重要となる。以下、特に欲求について論ずる。

【商品経済下の数値化された拡大する欲望】

欲求または欲望一般を考察すれば、少なくともホメオスタシス説に依る限り、各種の指標において有限である。欲求は自我のあるべき姿を補強するために生じる、との観点からすれば(コームズその他1988)これも無限大に拡大する可能性は低いものと考えられる。

しかしながら、現代商品経済は金銭により数値化された欲望を指向しており、欲望は無限に至る事を渡植(1986)は指摘する。また、現在の商品経済は、欲望を無限に刺激する形で発展を続ける必然性がある事を、佐伯(1993)は指摘する。さらに、常に増大する欲望は、現代アメリカ人ひいては先進工業諸国の普遍的な心理構造であるとワクテル(1983)は指摘する。

経営者等はより明白に数値化された欲望、即ち限り無く資本を増大させる欲望に駆動されている可能性があると思われる。資本の拡大のみを指向する傾向が高まっているとの指摘(トッテン1994)は、この考えを支持するだろう。対して、高額金銭を狙っていると思われがちな宝篋投資者も、その欲望内容は具体的であり(廣島1990)、性質を異にする。また、ワクテル(1983)も通常の場合、金銭的に表現された尺度に依らないで欲求充足行動は為されるとする。

また、新しい消費が提供される事によって欲望が喚起され、消費が増大するのであるから、この意味でも、欲望を積極的に拡大する主体としての経営者等に注目するべきであると思われる。

しかしながら、廣松(1990)が指摘するように、経営者等も激しい競争に曝されており、即ち積極的に欲望を拡大しようとする中核的な人々も強い社会的環境の影響下にある。そこで、発達の観点から無限の欲望へ至る場への考究が必要であると思われる。

【結論：個別の対象への欲求体系の形成と継承】

以上のことから、環境問題解決にあたって、単純に欲望を制限するべしとの議論は成立し難い事、金銭に数値化された形態ではそれへの欲望は増大しやすい事を考えると、「エネルギーと物質の循環構造を形成し、促進する方向で、科学的具体的に個別の欲望を形成する」社会的枠組みが望まれるものと考えられる。

オフィス環境快適性評価の試み(4)

パーティションの導入と混雑感に関する検討

京都大学文学部

尾入 正哲

1. はじめに

オフィスにおけるプライバシーの確保, また作業への集中の面から, パーティション(各自の席回りのついた)の導入が有効であるとされる。ここではオフィスの新築移転にともない各自の席にパーティションを設置した事例を対象に, 移転前後の質問紙調査の結果から混雑感と室内イメージの変化について検討する。

2. 方法

東京のある建築会社で, オフィスが超高層テナントビルから, 新築されたインテリジェントビルに移転する前後で質問紙調査を行った。有効回答数は移転前調査では648名, 移転後は558名。設計・技術業務を行う者が90%以上であった。移転前後で回答に対応のついた対象者は223名。

調査は室内環境に関する質問冊子を作成して行った。ここでは, その中からパーティションに関わる項目を取り出した。また, ワーカーの感じる混雑度/プライバシーの評価のため, 尾入(1988, 1989)の調査項目(〇×式)の中から4項目を選び, 応答数を合計して「混雑度訴え値(0~4の値をとる)」とした。混雑感評価のために選んだ4項目は「部屋に人が多すぎる」「他の人がいることがわずらわしい」「隣の席が近すぎる」「部屋にいるとくたびれる」であった。

移転前調査は1988年8月に行われた。その後, 年度末初のオフィスの移転をはさんで, 移転後調査を1989年8月に行った。

3. 結果

図1に移転前のパーティションの状況と, パーティションの必要性についての回答結果をあげる。移転前にはパーティションが「現在無し」と答えた者が全体の60%いる。その中では「個人で必要」が40%程度, 「グループ単位で必要」が25%ある。必要なしとする者も多いが, 必要であるとする者では比較的混雑度訴え値が大きい。移転前からパーティションがある席の者は, ほとんどが必要性を認めている。

図2は移転後の混雑度訴え値の, 移転前からの増減を示している。移転後は調査対象者のほとんど全ての席にパーティションが設置され, かつ設置に満足している者(図2にあげた者)が大多数であった。訴え値

については変化のない者が多いが, 次いで1点減じた者が多く, 混雑感が改善の方向に向かっている。訴え値の平均でみれば移転前0.80であったものが0.44に減っており, 移転前後で統計的に有意な差があった($t(173)=4.93 p<0.01$)。

4. 考察

パーティションの導入による混雑感の緩和がみられたが, 本事例ではパーティションの質に満足度が高かったこと, 回答者の多くが設計・技術などの業務に就いていたことなどが背景にある。また室内イメージの評価結果からは, 自席での「落ちつき」が大きく増している。「開放感」についてもパーティションの導入で, やや改善されることがわかった。パーティションの効果のみならず, オフィス全体が整然とした感じになったこともよろう。自席に「マスコットを置く」などの個人的な行動は, 特に増えなかった。(本報告は労働科学研究所による鹿島建設委託研究の一部である)

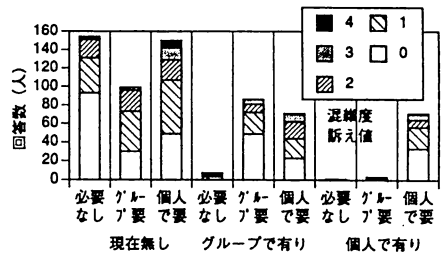


図1 移転前のパーティションへのニーズと現状

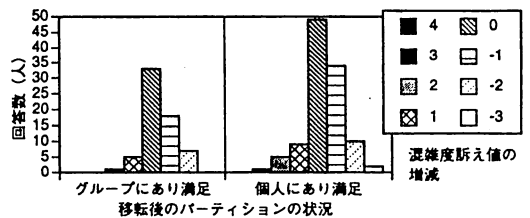


図2 移転後の混雑度訴え値の増減

文 献

尾入正哲 オフィス環境快適性評価の試み(1), 日心52回大会発表論文集, 1988
 尾入正哲 オフィス環境快適性評価の試み(2), 日心53回大会発表論文集, 1989
 尾入正哲・越河六郎 オフィス環境快適性評価の試み(3)-香り空調の効果, 産組心8回大会発表論文集, 1992

住環境の快適性の比較研究

○ 鳥山彰文
(北海道大学大学院地球環境科学研究科)

大坊都夫
(北星学園大学文学部)

【研究の目的】 本研究の目的は第一に住環境に関連した地域整備計画策定のために地方都市が持つ地域特性および諸要因の構造を明確にし、それらの重要度を評価するための方法を確立することである。本研究では住環境の諸要因を安全性および健康性、利便性、人間性および社会性、快適性および文化性、自然の5要因に分類した。

第二に住民が地球規模の環境問題を地域社会の様々な活動の中でどのように位置付けて行動しているかを把握することである。

以上の諸点を都市の中心部、郊外、および農業地域の住宅地において検証する。

【方法】 札幌市豊平区の1地区の主婦・单身女性を対象とした。調査は学生調査員が直接各家庭を訪問し、調査用紙の配布および回収を行った(回収率62.9%、112世帯/178世帯)。実施期間は1994年8月23日から30日までである。調査内容は被調査者背景、以前の住まいと比較した(あるいは現在の住まいに関する)住環境の諸要因の改善度、近所の友人数、地球環境問題への関心度、ごみに関すること(c.g. ごみの分別の有無、1週間に排出されるごみの量、リサイクル活動への参加の有無等)である。

【結果】 ごみの量と町内会活動の参加の有無との関連については、「参加する」群(平均1.86個)の方が「参加しない」群(平均3.00個)よりも有意に($p < .05$)少ない。

現在の住まいの入居動機を因子分析すると、2因子が抽出された。第1因子は「交通機関の利便性」、「生活環境のよさ」、「自然環境のよさ」の項目で因子負荷量が高く、「利便性・環境」の因子である。第2因子は「職場の勤め」、「近隣に親類がいる」の項目で因子負荷量が高く、「他者動機」の因子と言える。

住環境の改善度の因子分析では、5因子が抽出された。第1因子は、「子供の教育」、「プライバシーを守る」、「緑の量について」、「道路や遠方からの騒音」の項目と関連性が高く、「自然環境」の因子である。第2因子は「災害上の安全性」、「防犯上の安全性」、「日照」の項目で因子負荷量が高く、「安全性」の因子である。第3因子は「都心へのアクセス」、「スーパー等の利便性」、「病院への利便性」、「最寄りの駅からの距離」に代表され、「利便性」の因子である。第4因子では「家の広さ」、「間取り」の項目で因子負荷量が高く、「家の機能性」の因子である。第5因子は「空気のきれいさ」、「家賃・購入費」、「眺望」と関連が高く、「快適性・経済性」の因子と言える。

転居の回数を基準変数、住環境の改善に関する諸項目を説明変数とした重回帰分析では、「金融機関への利便性」($p < .01$)、「空気のきれいさ」($p < .01$)、「日照」($p < .01$)の項目において有意に転居の回数との正の結び付きが高かった。

総合的な住環境の改善度を基準変数、住環境の改善に関する諸項目を説明変数とした重回帰分析では「隣近所からの騒音」($p < .01$)、「日照」($p < .01$)、「スーパー等の利便性」($p < .01$)の項目において有意に総合的な住環境の改善度との正の結び付きが高かった。

近所付き合いの重要度を基準変数、地域の友人数を説明変数とした重回帰分析では「子供の関係での友人」($p < .02$)、「町内会やサークルでの友人」($p < .02$)の項目において有意に総合的な住環境の改善度との正の結び付きが高かった。

近所の友人数と環境問題の認識度との正準相関分析では「共通の趣味の友人」と「飲料水の質」、「オゾン層破壊」との間に正の相関が見られた($p < .01$)。

【考察】 ごみの量が町内会活動、リサイクル活動への参加者で有意に少ないことは、各家庭のごみの分別が完全に徹底している点を合わせると、地域主導で資源の保護に取り組むことが可能であることを示唆している。

現在の住まいの入居動機では、「交通機関の利便性」や「生活環境の良さ」という項目の平均値が5段階評価でそれぞれ3.57、3.46と他の項目に比べて高い値である。因子分析においてもこれらの項目が第1因子の負荷量が高い点も考慮すると、住民は利便性、生活環境を重視していることがわかる。このことは転居回数の重回帰分析でも転居回数と利便性、自然環境の項目との関係が強いことから明白である。また、住環境の改善度の因子分析では第1因子が「自然環境」の因子である。住居を持つ点では、経済的要因等よりもむしろ利便性、自然環境も含めた生活環境を重視しているようである。

近所の友人数と環境問題の認識度との関係では近所付き合いの多さと地球環境問題への関心が高まりとが関連していることが示唆された。

(本研究をご指導して下さいました北海道大学加賀屋誠一助教授に深く感謝いたします。)

冠婚葬祭の実態と意識に関する地域比較研究

濱 保 久

(北星学園大学文学部)

【目 的】

冠婚葬祭はその地域の文化であると同時に、人々のコミュニケーションスタイルの象徴でもある。本研究は、旧の代表としての京都と新の代表としての北海道の冠婚葬祭の実態と意識を比較し両地域の特色を明らかにすることを目的としている。

【方 法】

被調査者：北海道：女性既婚者87名，女性未婚者60名。京都：女性既婚者69名，女性未婚者97名。
(既婚者は40代，50代。未婚者は20代)

調査時期：1993年7月から10月までの4か月間。

調査方法：北海道と京都の大学の講義時に，20代の姉のいる者に調査用紙(本人用と親用)を配布し，後日の講義時に回収した。(回収率：北海道49.0%，京都55.3%)

調査項目：調査票は，結婚披露宴，葬儀，節分などに関する実態と意識に関連する項目で構成された。

【結果と考察】

(実 態)

結婚披露宴について：これまでに経験した披露宴について，会費制が多いと回答したのは，北海道の親で86.2%，子で96.0%，京都の親で0%，子で8.0%であった。終戦後の新生活運動が定着した地域はごく僅かであるが，北海道はその代表的地域であるといえよう。

葬儀について：通夜か本葬のどちらかにしか参列しない場合に，通夜に参列すると回答した者は，北海道の親で96.1%，子で94.1%であった。一方，京都では親で3.6%，子で41.3%であった。また，これまで参列した葬儀の場所について，北海道では，斎場(58.3%)，寺・神社(24.3%)，公民館等(15.9%)が多く，自宅(0.8%)はほとんどいない。一方，京都では自宅(90.6%)が圧倒的に多い。さらに，これまで参列した葬儀の香典返しについて，後日半返しが多いと回答したのは，北海道の親で7.6%，子で7.1%，京都の親で95.3%，子で57.4%であった。北海道においては，香典の金額にかかわらず海苔などを当日参列者に一律に渡す形式が一般的である。

節分の豆まきについて：かつては北海道も煎り大豆をまいていたが，現在では約8割の者が落花生をまいている。落花生をまく風習は，東北や九州の一部でも見

受けられるが，京都では全くない。また，豆以外の物をまいたことがある者は，北海道では31.7%で京都では2.5%であった。

(意 識)

結婚披露宴について：北海道では，親(87.4%)も子(81.4%)も本心から会費制を志向している。一方，京都でも本心では会費制を志向する者が親で47.0%，子で40.0%と予想以上に多いことが明かとなった。また，両地域とも，会費制志向者はその理由として合理性をあげているが(北海道：81.7%，京都：79.7%)，京都の招待制志向者は，伝統重視と心理的理由が大きな理由になっている。

葬儀について：北海道では親(91.8%)も子(89.5%)もほとんどが通夜参列志向であるが，京都でも親の14.1%，子の38.9%が通夜参列志向であった。その理由として，自分の気持ちに叶うからという心理的な理由をあげる者が多かった。また，香典返しについては，北海道では親(87.8%)も子(82.5%)も一律返しを志向しているが，京都でも約半数の者が一律返しを志向していた(親：46.2%，子：49.4%)。その理由として，両地域とも合理性が最も多く選択された(北海道：78.3%，京都：80.8%)。

節分について：煎り大豆志向者の割合は，北海道の親で32.1%，子で10.7%，京都の親で95.4%，子で91.2%で，その理由として伝統の重視が最も多く挙げられた(北海道：70.4%，京都：74.0%)。

【討 論】

京都では，伝統の継承が当然視されており，当人はやり方を変えたり，あるいはやめたいと思っても，他人の目を気にするあまり実行できず，個人内に葛藤を生じている。一方，開拓当時の経済的，物理的状況から伝統を継承することが困難であり，また，県民のるつぽでもあった北海道において，冠婚葬祭の形態はその時々の人々に最もフィットした形で形成され，あるいは選択されてきた。したがって，多くの者は現在のやり方に不満を感じていないが，しかしながら，一部には伝統回帰志向の傾向が認められ，合理性一辺倒ではない北海道の二重構造が確認された。

(本研究の遂行に際し，森 仁氏，本永謙次氏の協力を得たことを記し謝意を表す。)

社会的欲求の比較文化的研究

韓国と日本の学生の比較について

○ 斎藤 勇
(立正大学)

荻野七重
(白梅学園短期大学)

序：斎藤・荻野(1992, 1993)は H. A. Murray の NEED-PRESS 仮説に基づいた欲求・行動調査票を作成しつつある。個人のパーソナリティーは、その人の欲求構造においてその一面を知ることができると考え、この欲求・行動調査によって得られる各個人の結果は、その人のパーソナリティーの一面を示すことになる。さらにこの欲求・行動調査法によって文化の異なる国民を調査し、その結果を比較したとしたら、各文化それぞれの国民性の一端を客観的に知ることができると言えよう。

目的：本研究の目的は、最近とみに交流が深まっている隣国韓国と日本の若者(大学生)の欲求構造の調査を通し両国の国民性の共通点と相違点を検討するである。

方法：

被調査者 韓国の大学生152名(男子76名、女子76名)。日本の大学生152名(男子76名、女子76名)。

調査法 48項目(各質問項目が、個々の欲求に対応し、4項目が一つの欲求群を構成する。表1参照)からなる質問項目に対して、欲求面と行動面について5点尺度法(どちらともいえないを0点とし、-1から+3点まで)で回答する質問紙調査法。

手続き：授業の中で配布、回収。

結果と考察：達成欲求を始めとした48欲求とそれぞれの実際の行動について評定値の平均値を求め、日本と韓国それぞれについて男女別に示したのが表1である。またこの48欲求を12の欲求群に分類し、各欲求の合計点の平均値を求めた結果が表の下方に示されている。

この結果から、全体としては日韓の学生は同じような欲求・行動傾向を持っていると思われるが、次の点にかなりの差異が認められる。一つ

には、欲求・行動ともに、韓国の若者の方が男女とも権力傾向、指導傾向が有意に高いことである。他方、欲求において日本の若者が男女ともに高いのは恭順欲求であり、男子で高いのが、流行、愛情、趣味欲求である。また別の一つの相違点は、全体的に韓国の学生の行動における評定値が日本の学生のそれよりも高く、特に女子においてその差が顕著なことである。

表1. 欲求と行動における日本と韓国の学生の比較 (t検定 ***:p<.001 **:p<.01 *:p<.05)

欲求	欲求				行動							
	日本(m)	韓国(m)	p	日本(f)	韓国(f)	p	日本(m)	韓国(m)	p	日本(f)	韓国(f)	p
A群 1 達成	2.46	2.39		2.55	2.50		0.70	0.53		0.46	0.86	*
	2.42	2.47		2.59	2.57		0.71	0.93		0.64	0.83	
	1.61	2.08	*	1.38	2.50	***	0.00	0.25		-0.33	0.04	
	2.54	2.03	**	2.49	1.97	**	0.76	0.97		0.38	0.55	
B群 1 権力	1.59	1.96	*	1.43	2.08	**	-0.07	0.41	**	-0.30	0.22	***
	1.54	2.04	*	1.47	2.11	**	-0.08	0.30	**	-0.33	0.24	***
	0.42	0.96	*	0.13	0.50		-0.29	0.14	**	-0.38	-0.22	
	0.88	2.12	***	0.80	2.12	***	-0.04	0.87	***	-0.16	0.51	***
C群 1 指導	0.79	1.38	**	0.28	0.88	**	-0.01	0.54	**	-0.17	0.18	*
	1.04	2.04	***	0.75	1.78	***	0.20	0.71	**	-0.04	0.68	***
	1.05	1.78	***	0.72	1.66	***	0.29	0.96	***	0.16	0.64	*
	1.67	2.12	**	1.95	2.00		0.57	0.83		0.55	0.78	
D群 1 親和	1.93	1.55	*	1.59	1.41		1.20	1.33		1.29	1.42	
	1.64	1.14	*	1.79	1.41		0.83	0.84		0.68	1.07	*
	2.09	2.36		2.26	2.45		0.63	1.26	***	0.51	1.04	***
	1.66	2.93	*	1.80	2.08		0.97	1.20		0.99	1.22	
E群 1 権力	0.78	0.70		1.17	0.89		0.26	0.61	*	0.83	0.66	
	1.53	1.11	*	1.25	1.28		0.24	0.36		0.38	0.30	
	0.79	0.96		0.89	0.67		0.32	0.42		0.41	0.41	
	1.41	1.17		1.95	1.54	*	0.47	0.68		0.97	1.00	
F群 1 服従	0.76	0.54		0.88	0.74		0.74	0.58		0.92	0.89	
	1.72	1.83	*	1.66	1.78		-0.16	0.20		0.37	0.21	
	0.83	0.33	*	0.88	0.03	***	-0.04	-0.20		0.24	-0.46	***
	0.53	0.59		0.38	0.42		0.53	0.38		0.39	0.46	
G群 1 安心	0.91	0.64		0.88	1.12		0.89	0.72		0.97	0.91	
	1.24	1.53		1.42	1.97	**	0.75	1.05		0.79	1.14	
	2.00	2.16		2.20	2.33		0.97	1.59	***	0.92	1.54	***
	1.20	1.09		1.55	1.83		0.89	0.80		1.33	1.24	
H群 1 拒否	1.79	1.24	**	1.24	1.17		1.00	0.83		0.61	0.50	
	0.08	0.54	*	0.03	0.38		0.11	0.39		0.07	0.18	
	1.91	1.68		1.91	1.87		0.30	0.58		0.12	0.50	*
	2.26	2.25		2.28	2.25		0.97	1.18		0.79	1.08	
I群 1 反発	1.13	0.72		0.87	0.46		0.32	0.24		0.17	-0.09	
	1.18	0.72		0.95	1.01		0.47	0.33		0.16	0.37	
	0.45	0.63		0.17	0.21		0.18	0.30		-0.24	0.03	
	0.57	0.34		0.08	-0.03		-0.14	-0.05		-0.41	-0.26	
J群 1 流行	1.26	0.30	***	0.91	0.89		0.50	0.24		0.12	0.46	*
	2.08	2.08		2.36	2.37		0.38	0.66		0.07	0.82	***
	1.75	1.79		1.70	1.89		0.66	0.71		0.51	0.75	
	1.62	1.64		1.54	1.53		0.01	0.28		-0.16	0.18	*
K群 1 愛情	2.01	2.24		1.91	2.47	***	1.09	1.37		1.22	1.79	***
	1.49	0.64	***	0.63	0.57		0.46	0.42		0.07	0.14	
	1.37	1.42		1.80	1.54		0.72	1.00		1.07	1.24	
	2.33	2.07		2.22	2.41		0.50	0.53		0.37	0.91	**
L群 1 愛	2.05	2.49	**	2.04	2.37	*	0.63	1.50	***	0.76	0.76	
	1.70	1.80		1.75	1.71		0.47	0.88	*	0.63	0.39	
	2.21	1.68	**	2.14	1.86		0.67	0.93		0.32	0.75	*
	2.74	2.37	***	2.82	2.53		1.68	1.13	*	1.17	0.97	
A群(達成)	9.03	8.97		9.01	9.54		2.17	2.68		1.16	2.28	*
B群(権力)	4.43	7.08	***	3.84	6.80	***	-0.47	1.72	***	-1.17	0.75	***
C群(指導)	4.55	7.32	***	3.70	6.32	***	1.04	3.04	***	0.50	2.29	***
D群(親和)	7.33	7.08		7.45	7.34		3.63	4.63	*	3.47	4.75	**
E群(依順)	4.50	3.93		5.26	4.38		1.29	2.07		2.59	2.37	
F群(服従)	3.84	3.29		3.80	2.96		1.07	0.96		1.92	1.11	*
G群(安心)	5.34	5.42		6.05	7.25	*	3.51	4.17		4.01	4.83	
H群(拒否)	6.04	5.71		5.45	5.67		2.38	2.99		1.58	2.26	
I群(反発)	3.33	2.42		2.07	1.66		0.83	0.82		-0.32	0.04	
J群(自己表現)	6.71	5.82		6.50	6.68		1.55	1.88		0.54	2.21	***
K群(愛情)	7.20	6.37		6.57	6.99		2.78	3.32		2.72	4.08	***
L群(愛自由)	8.70	8.34		8.55	8.46		3.46	4.45	*	2.88	2.88	

韓国の春川専門大学助教片茂永文学博士と金成恩氏のご協力に謝意を表します。

日本の家族関係

— 祖父母と孫の関係 — (2)

小川隆章 (北海道教育大学釧路校)

「問題」 英文による祖父母と孫の関係に関する文献を読んでいると日常の日本語に置き換えにくい用語が出てくる。一つは grandparenthood である。日本の家族社会学の文献では祖親性と訳されている。祖父母である時期をさす場合は祖父母期と言及されている。またもう一つは grandparenting である。筆者は以前の論文の中で仮に「祖父母行動」と訳してみた。「祖父母役割」とした方が良いような文脈も有るようである。本研究では、この祖父母行動乃至は祖父母役割について孫から見た祖父と祖母の役割の差異について検討してみたい。ニューゲートンら(1964)は祖父母に個別に面接して祖父母行動のスタイル乃至タイプを①フォーマル、②遊び相手、③親代わり、④家父長的、⑤遠い存在、の5個に分類した。本研究ではこの5つのスタイルを用いて孫から見た望ましい祖父・祖母についての資料を得ることを第一の目的とした。孫の望む祖父母のタイプが彼らの実際の祖父母の認知と関係があるかどうか興味がある。また前回の調査(小川, 1993)の結果に基づき祖父と祖母で尊敬する理由に違いがあるかどうか、検討してみたい。さらに尊敬する理由と祖父母を不快に思うことの理由について同居経験の有無による違いについても検討してみたい。

「方法」 北海道の4年制大学2校、短期大学と看護専門学校各1校の学生340名(男子163名、女子177名)に質問紙調査を行った。ニューゲートンらが設定した祖父母の5個のスタイルを要約したものを見せて各自の4人の祖父母がどの程度それにあてはまるか尋ねるとともに、直接的にその5個のスタイルの中から望ましい祖父母のタイプおよび自分の両親に将来どのタイプの祖父母であって欲しいか、について回答を求めた。

「結果」 1. 孫から見た好ましい祖父と祖母のタイプは祖父・祖母ともにフォーマル、遊び相手、親代わり、の順に好ましいという回答が多いが、祖父については祖母についてよりも「フォーマル」の選択が多く、逆に祖母の方が「親代わり」の選択が多い。自分の両親に将来どんなタイプの祖父母になって欲しいか尋ねた。「将来、あなたが結婚して子どもができた後、あなたのお父さん(お母さん)には上記5個の祖父母のタイプの中では、どのタイプの祖父(祖母)であってほしいですか」と尋ねた。全体的には前述の一番好ましい祖父母の回答と同じ傾向である。父親には「フォーマル」が一番多く、次いで「遊び相手」が多い。「親代わり」は極少ない。そ

して、「家父長的」が少しだけでも見られた。一方、母親に期待する祖母のタイプは「フォーマル」が一番、次に「親代わり」と「遊び相手」が並んでいる。「家父長的」はごく少ない。「遠い存在」も少数だけれども回答があった。また、ここで興味深いことに、一番望ましい祖父と父に期待する祖父の型はきわめて良く一致しているが、一番望ましい祖母の回答と自分の母親に期待する祖母の型は微妙なズレがあった。後者の方が有意に「親代わり」の選択が多かった。

2. 望ましい祖父母の回答と彼らの実際の祖父母がニューゲートンらの5個のタイプに当てはまる程度との関連が見られた。例えば、父方祖母が「遊び相手」に①当てはまる、②少し当てはまる、③当てはまらない、と回答した者の3群で、「一番望ましい祖母」の型として「遊び相手」を挙げたものが50%、28%、11.7%と明確な差が見られた。

3. 祖父母に対する尊敬理由として14個の理由のうち祖母の方が祖父についてよりも有意に多くの回答者が指摘する尊敬理由は、*性格が良いから、*大変苦勞している、*働き者である(働き者であった)、*年をとっても元気であるから、*子供の頃世話をしてもらったから、*現在、世話になっているから、*話相手になってもらえるから、であった。一方祖父の方が有意に多いのは「立派な功績を持つ」の1つだけであった。なお、大学生の中で祖父母との同居経験のある者(155人)と無い者(184人)に2分して、尊敬の理由を比較すると、祖父では差のある理由は見当たらなかった。祖母については前者の方が多くあげている尊敬理由は、*子どもの頃世話になった、*現在世話になっている、の2つ、逆に、後者の方が多い理由は、*性格がよいから、の1つであった。

4. 質問17として「あなたは、ご自分の4人の祖父母のうち、どなたかを「いやだな」と思ったことがありますか」と尋ね「そのような経験のある人は、次に挙げる理由のなかで当てはまるものいくつかでもいいですから、0印をつけて下さい」とした。同居経験の有る者の方が多く挙げているものは、*ガンコである、*干渉しすぎるとき、*心配しすぎるとき、*母の悪口をいう、*不潔なとき、の5つであり、逆に同居経験の無い群の方が多く挙げているのは、*他の孫と比較して不公平にされたとき、1つのみであった。

道案内文の評価 (III)

古寺 充

(上智大学 文学部)

熟知した場所の道案内文を読み、わかりやすさを評定させたところ、評価基準として道順・情報量・表現・ランドマーク・距離情報などがあげられたが、各評価基準について、各評定者の判断に個人差が認められた(古寺,1993)。

さらに同じ道案内文を用いて、対象場所を知らない者を評定者としたところ、あげられた評価基準については同様な結果であったが、各案内文の評価に偏りが見られた(古寺,1994)。しかし、道案内文評価の偏りが、呈示順が同じだったため位置効果によるものであった可能性もあり、今回の研究では、異なる呈示順の質問紙を用いる。

さらに各道案内文について、見出された評価基準ごとに評価を行なわせて、道案内文評価と各評価基準との関係を検討する。

方法

被験者 都立看護専門学校学生および私立女子大学学生 148名

質問紙 質問紙は道案内文とそれらに対する質問、および方向感覚能についての質問から構成された。

道案内文

四ツ谷駅麴町口改札から上智大学認知心理学研究室までの5通りの道順の道案内文6種類で古寺(1993)と同一のものを用いた。順序効果を相殺するため呈示順が異なる5セットの道案内文を作成した。

道案内文についての質問

各道案内文について0点から10点で評価させた(質問1)。次に、道順・文章表現・ランドマーク(目印)・簡潔さ(文章)・イメージ・距離・情報量の7つの基準について同様に0点から10点で評価をおこない(質問2)、さらに各基準について重要と思うものを列挙させた(質問3)。

方向感覚についての質問

自己の方向感覚を非常によいから非常に悪いまでの5点尺度評定させた。

結果

各案内文の評価に有意差が認められたが($F(5,720)=7.10, p<.001$)、呈示順間に差はなかった($F(5,720)=0.67, P>.05$)。したがって、案内文の評価に偏りがあることが示された。

すべての評価基準において、案内文の評価点に有意差が見られた。

各評価基準間の相関を求めたところ、すべての組合わせにおいて有意な正の相関がみられたが、道順-簡潔さ・文章表現-ランドマーク・文章表現-イメージ・ランドマーク-イメージ・ランドマーク-情報量・簡潔さ-イメージ・イメージ-簡潔さの7つの組合わせにおいて、.500以上の正の相関が得られた。

各評価基準について評価者が重要であると判断したものは、ランドマーク(73.7)、イメージ(61.9)、文章表現(55.1)、簡潔さ(40.7)、道順(39.8)、距離(39.0)、情報量(32.2)の順番で重要であるとされたものが多かった(括弧内は%)。

考察

案内文評価において、古寺(1994)と同様に各道案内文の評価に差が認められた。高く評価された道案内文は古寺(1994)と同じものであり、今回の研究において、道案内対象地域を知らない評価者は、同じような評価基準で判断することが確認されたといえる。

半数以上の評価者が重要と指摘したランドマーク、イメージ、文章表現であることは、古寺(1994)において述べたように、評定者が道案内文を読んで、対象地域の認知地図を形成するにあたり、各案内文の情報を統合してサーベイマップを形成するというより、各案内文のルートマップを形成することが重要であることが示唆される。

目的地に辿りつくという目標を達成するために、いくつかの中間目的地(subgoal)を適切に指示し、その連続性を正しく認識(ルートマップ表象の形成)できることが、案内文として求められる。用いられた中間目的地が複数のパスによって、いくつかのルートで結び付けられていたとしても、その知識(サーベイマップ表象)は必要ない。したがって、道案内文や電話による道案内のような場合において、ルートマップ形成という点から、どのような情報を与えることが適切であるかが示されるといえる。

古寺充 1993 道案内文の評価 日本応用心理学会第60回大会発表論文集 p.140-141.

古寺充 1994 道案内文の評価II 日本教育心理学会第36回総会発表論文集 p.33

災害避難所における心理学的問題

村井健祐

(日本大学文理学部)

<はじめに> 地震、噴火、水害などのような自然災害によって一地域が大きな被害にあったり、あるいはあう恐れのある場合、災害避難所が開設される。避難所では、期間が長くなればなるほどトラブルや不満が多くなりがちである。災害による物心両面のいたで、不安などによって、あるいはプライバシーのない状況から起こってくる人間関係面での社会的問題が多い。これは状況が状況であるだけにある程度やむを得ない問題でもあるが、ちょっとした配慮で少しでも快適性を増すことができる問題をも含んでいる。そこで無用なトラブルを回避し、少しでも落ち着いてすごせる避難所とするためにはどうしたらよいかの知恵を、被災体験者自身と避難所開設の行政担当者からの体験談によってまとめることにしたい。

<方法と対象> 今回特に対象としたのは、公民館とか体育館などのような集合の避難所についてであり、以下二つの災害について調査を行なった。

有珠山噴火災害(1977年8月8日~10月19日)

三原山噴火災害(1986年11月15日~12月20日)

有珠山噴火の場合、洞爺湖温泉近郊の町営体育館公民館等12施設に約1300名を収容。

三原山噴火の場合、東京都、静岡県のスポートセンター、区民センター等約90施設に約10,000名を収容。

(1) 調査対象者 上記二つの災害時に被災者、または行政担当者として関係した人々を対象とした。

有珠山関係 5名 三原山関係 9名

(2) 方法 調査対象者に対する個別式面接法によった。

質問項目は二つである。一つは災害時の状況を回想的に語ってもらう中から、避難所での生活の様子に話を向け、さらにその際の困難、不満、トラブルを聴取した。そして質問2として避難所開設にあたっての要望、提案などについても言及してもらった。

<問題点と解決策> 質問について聴取された項目は、60数項目の多岐にわたったが、これらのうち私的なもの等(例: 真っ暗でないと私は眠れない)を除き普遍性をもつもの、対策可能なものをまとめると以下のようになる。

I. ほとんど全員の挙げた項目

(1) プライバシーがない 避難所はいわば雑居状

態であり、遮蔽物がないため「個」を保つことができない。他人から家族単位の生活をのぞかれる、着替えも自由に出来ない、寝顔をのぞかれる等。これらがたいへんなストレスとなる。

(2) 夜、雑音がうるさく眠れない 子どもの泣き声、せき払い、おしゃべり、いびき、足音等雑音が気になる。音をたてまいとするとなおつらい。

II. 多くの人の挙げた項目

(1) 食事が変化なく飽きる

(仕出し弁当はすぐ飽きる、栄養がかたよる、等)

(2) 夜寝る時、電気の照度は落ちるが明るくて眠れない

(3) 洗濯が不自由、物干場が少ない

(4) 何もすることもない毎日がつらい

(5) 長電話、大声などマナー悪いのが多い

III. 収容先の状況によって異なる項目

(1) 床に毛布だけでは背中が痛くつらい

(2) 暖房で空気が乾燥しつらい

(3) 子どもの遊び場がなく困った

(4) 情報が不足しいらした

(5) 役所の人の応待が不適切、不親切

(6) テレビのチャンネル権がなくつらい

次に質問2についての回答は以下のようなものであった。

(1) プライバシーの確保について、できるだけ小部屋に収容し、少人数単位ごとに入れるようにする

(2) カーテンで仕切る

(3) プライバシー確保のために物かげが作られるだけでも良い(ダンボールを積み上げるだけで良い)

(4) 当初の炊出しの後、当番制で炊事したが好評で喜ばれた(有珠山の例)

(5) 硬い板張りの床も、簡易畳を敷けば解決

(6) TVを何台か用意しチャンネルを分ける

(7) 電話番、炊事番などは連帯感を持たせる

(8) 当番やきまりなどできるだけ自治的組織で運営する(有珠山の成功例)

以上のように被災者の困窮、苦痛、不満は多岐にわたる。また実際の体験をもとにした提案の多くは実行可能なものである。新たに避難所を開設する必要が生じた際には、これらの結果を生かすべきであろう。

現代勤労者の余暇活用に関する研究

○森下 高治
(大阪産業大)

中尾 忍
(松下電工カンパニョーラ)

問題) 1992年のわが国勤労者の年間総実労働時間(全産業)は、ついに2000時間を切り、1972時間に達した。

そこで、勤労者が余暇の活用について、自らの余暇の過ごし方をどのように打ち立てるかは、充実した生涯生活を展開するため、21Cに向けた大きな課題である。

今回、労働組合が企画した余暇活用のアイデア募集で応募のあった資料から、余暇活用の問題をとらえ、勤労者の余暇のライフスタイルを分析する。以下、2点を問題とする。

1. 男女による余暇の活用(計画)方法に特徴が見いだせるか。

2. 文化活動やスポーツ活動について、男女の年齢群(若年者群と非若年者群)に違いがみられるか。

方法) 対象は、3社の労働組合に加入する組合員(18610名)のうち、応募のあった男性609件、女性271件、計880件を対象とする。人数の内訳は男性591名、平均年齢31.08歳、女性258名、25.16歳、計847名である。調査の詳報について、長期休暇やリフレッシュ休暇を連続5日以上、一週間程度を限度として、休暇活用のアイデアを自由記述法にてA4版サイズの用紙を配布し記入を求めた。なお、優秀な計画は企画実施の支援、費用の補助を報償として労働組合が用意した。調査期間は、94年10月1日から11月10日までとした。

結果と考察) 1. 男女による余暇活用計画について(全体) Tab.1と2に示す通り、活動領域を3つに区分すると、文化、スポーツ、旅行(目的が伴う旅行は省く)に分けられるが、最も高い領域は文化、次にスポーツ、旅行の順となっている。

Table 1. 領域別男女による余暇活用(計画)の結果(%)

	男性	女性
文化活動	475 (70.06)	242 (73.78)
スポーツ	154 (22.71)	63 (19.21)
活動	49 (7.23)	23 (7.01)
旅行	878 (100%)	328 (100%)

Table 1-2. 若年・非若年者群にみられる余暇活用(計画)の結果(%)

	若年者群		非若年者群	
	男性	女性	男性	女性
文化活動	213 (83.20)	130 (71.82)	262 (76.83)	112 (76.19)
スポーツ	91 (27.00)	35 (19.34)	63 (18.48)	28 (19.05)
活動	33 (9.80)	16 (8.84)	18 (4.69)	7 (4.76)
旅行	337 (100%)	181 (100%)	341 (100%)	147 (100%)

・ 男性年齢群(-20歳) 296名 非若年者群(30歳-) 262名 女性年齢群(-24歳) 147名 非若年者群(25歳-) 166名 男性年齢群(25歳-) 296名 女性年齢群(25歳-) 166名

キーワード: 勤労者, 余暇, ライフスタイル

2. 文化活動, スポーツ活動における男女による年齢群の違いについて

1) 文化活動の検討 男女間の文化活動の差異は, $\chi^2=3.944$ $df=2$ $P>.05$ で有意な違いは認められなかった。

次に男性の3領域の違いは, $\chi^2=8.688$ $df=2$ $P<.05$ で差異が認められ, 遊び, スポーツ観戦, パチンコなどの娯楽が若年者群が約40%を占めた。一方, 温泉, キャンプ, 森林浴などの健康・自然活動は非若年者群が42%で最も高い。しかし, 創作・研さんの活動は両群の割合は殆ど同じで変わらない。

Table 2. 若年・非若年者群にみられる文化活動の種類別結果(%)

	若年者群		非若年者群	
	男性	女性	男性	女性
創作・研さん活動	8 (3.78)	10 (7.60)	18 (6.87)	6 (5.36)
①物作り (日曜大工など)	11 (5.16)	4 (3.00)	24 (9.18)	4 (3.57)
②歴史 (神社、仏閣巡りなど)	24 (11.27)	10 (7.60)	24 (9.18)	2 (1.70)
③研さん (資格の取得、坐禅など)	4 (1.88)	2 (1.54)	2 (0.76)	-
④福祉 (友愛事業への参加など)	9 (4.22)	6 (4.62)	5 (1.91)	6 (5.36)
⑤鑑賞 (美術、音楽、映画など)	4 (1.88)	3 (2.31)	4 (1.53)	4 (3.57)
⑥美術、音楽活動 (陶芸、楽器演奏など)	3 (1.41)	2 (1.54)	6 (2.29)	-
⑦読書	63 (29.59)	37 (28.47)	83 (31.69)	22 (19.65)
健康・自然活動	37 (17.37)	33 (25.38)	26 (9.92)	31 (27.68)
①健康 (温泉、保養など)	18 (7.51)	7 (5.38)	52 (19.84)	11 (9.82)
②自然 (田舎暮らし、牧場など)	12 (5.63)	3 (2.31)	32 (12.21)	5 (4.46)
③キャンプ	65 (30.52)	43 (33.07)	118 (41.98)	47 (41.98)
娯楽・観光・その他	16 (7.51)	22 (16.92)	12 (4.58)	9 (8.84)
①グルメ	41 (19.25)	17 (13.08)	41 (15.05)	22 (19.64)
②観光 (旧交、見物など)	28 (13.14)	11 (8.46)	16 (6.11)	12 (10.71)
③娯楽・その他 (パチンコ、遊園地など)	85 (29.57)	59 (38.46)	69 (26.34)	43 (38.39)
小計	213	130	262	112

一方, 女性の違いは, $\chi^2=3.170$ $df=2$ $P>.05$ で有意な違いは認められなかった。理由として, 被調査者が30歳以上35名と少ないところに原因があるように思われる。Tab.2

2) スポーツ活動の検討 男性の若年者はスキー、釣り、マラソン、ツーリングが比較的割合-14%が高い。

これに対して女性の若年者はスキーが30%を越え, 次にサイクリングが続いている。スキーは非若年者も高いが, 非若年者が21.4%で10%の開きがある。

また, 男性の若年者は多くの種目にまんべんなく割合が高いのに比し, 逆に女性は非若年者にこの傾向が見いだされる。

学生のキャリア意識に関する一考察

○片岡大輔 外島 裕
人材開発情報センター

【はじめに】近年の産業構造の変化とともに、勤労者のキャリア意識が心理学的研究の対象となってきた。また、従来から学生の進路決定や就業意識を対象に多くの調査がおこなわれてきている。さらに、女性における社会的環境を視点にした研究もさかんである。キャリアという概念は周知のように、従事する職業・職務・職位に関する連続的な過程をさしている。したがって、学生の進学や就業も広義のキャリア形成の一部であると考えられる。今日、企業内研修において、個人の今までのキャリアを振り返らせ、自己洞察を深めるものがある。多くの場合、そうしたキャリア開発の研修に参加する人は、いわゆるマネージャークラスの中年期にある人々である。職業生活において、自己のキャリアを認知し目標を形成する機会は、ある程度キャリアを経た中年期にあたえられるだけでなく、もっと早期の段階におこなわれることも重要であろう。従来からは進路指導などで学生に就業指導がおこなわれている。今後はさらに、近年のキャリア研究の成果をフィードバックしたものが望まれると考える。

いままでの学生の進路意識・進路選択の研究でとりあげられたキャリアに関連した意識や態度には、進路決定時期・自己効力・志望の明快さ・自立意識（とくに女性において）などがある。従来の研究では、自由記述や文章完成法などを用いたものが多い。今回の報告は、きわめて素朴であるが、進路決定時期・自己効力とキャリア目標（ここでは自分の将来の進路に関する目標）意識との相互関連を質問紙法をもちいて探索するものである。

【方法】対象者：都内看護学校1年生77人・平均年齢18.7歳・SD1.0 質問紙：年齢・学歴や看護学校への進路決定時期をたずねるフェイスシートと、自己効力に関する質問項目5つ・キャリア目標に関する質問項目5つ（いずれも「あてはまらない」1点～「あてはまる」4点の4段階評定）、そのほかいくつかの自由記述欄や質問項目から構成した。なお、キャリア目標に関する項目は山本（1993）を参考にした。

【結果】表1は、各項目の素点を集計し、アプリオリに構成した各測度の平均・SD・ α 係数である。質問項目が少なすぎたためか α 係数は十分な値ではなかった。表2は、各尺度間の相関分析の結果を示したもの

である。分析の結果、キャリア目標意識と自己効力感との間のみに有意な相関が認められた ($r=.39, p<.01$)。自己効力感を強く持っている学生ほどキャリアに対しての目標や計画をしっかりと持っていると言えそうである。どちらの測度も肯定的な自己評価という点で共通しているとも考えられる。キャリア思索意識は、ほかの2つの測度とは有意な相関を示さなかった。キャリア目標についての関与感でも自己肯定的な人は、たびたび考えたり相談したりはしないようである。表3は、看護学校進学決定時期をキャリア選択時期として想定し、小学生以下・中学生・高校1・2年生・高校3年生の4水準での各尺度における平均とSDである。分散分析の結果、キャリア選択時期は有意な主効果を示さなかった。今回の質問項目でたずねられているキャリア目標関与感や自己効力はキャリア選択時期ととくに関係がなかったようである。

今後は、素朴な質問文解釈による他に、測度としての要件を満たす尺度による職業生活早期におけるキャリア意識の調査が必要であると考えられる。

表1 各尺度の項目と平均・SD

	平均	SD
キャリア目標意識 ($\alpha=.71$)	9.2	1.76
自分の進路について明確な目標をもっている	3.6	0.63
自分の進路の目標を達成するための計画を持っている	2.9	0.80
自分の進路の目標を達成するために努力している	2.7	0.77
キャリア目標意識 ($\alpha=.68$)	6.1	1.36
自分の進路についてたびたび考える	3.2	0.71
自分の進路について親や友人によく相談する	2.8	0.91
自己効力感 ($\alpha=.62$)	12.2	2.10
自分の高校のときの成績はよかった	2.1	0.84
今の学校の成績はよい	1.7	0.62
自分の目標はたいいてい実現することができる	2.7	0.68
自分の将来は自分で決めることができる	3.7	0.57
自分は有能な方だと思う	2.0	0.61

表2 各尺度間の相関

	キャリア目標意識	キャリア思索意識	自己効力感
キャリア目標意識			
キャリア思索意識	0.13		
自己効力感	0.39**	0.07	

**p<.01

表3 進路決定時期と各尺度得点・SD

	進路選択時期			
	小学生N=10	中学生N=16	高校1・2年生N=25	高校3年生N=25
キャリア目標意識	9.8(2.1)	9.4(1.6)	8.7(1.7)	9.2(1.8)
キャリア思索意識	5.3(1.7)	6.1(1.3)	6.2(1.2)	6.3(1.4)
自己効力感	12.3(1.8)	12.5(1.8)	12.2(2.5)	12.0(2.1)

加齢による課題対応行動の比較

向井 希 宏
(関西女学院短期大学 コミュニケーション学科)

【目的】 技能という観点からみた作業方略や被験者の作業に対する構えの分析には、組立課題を用いたこれまでの研究から、材料の使われる順序に注目した「作業の流れ図」から得られるデータが有用である。今回は、課題対応行動の比較ということで、同一材料を使用するが、必要な材料部品数に倍近い違いのある2種類の組立課題における「作業の流れ図」をもとにした分析結果の比較を通して、技能習熟の特徴とその構造について考える。

【実験】 課題は、28個の材料部品からなり比較的組立の容易な「手押し車」と、47個の材料を用いる構造の複雑な「乳母車」の組立である。被験者は課題ごとに高齢者各5名で、作業台の右壁面に提示されたモデル図を手がかりに連続10回の組立を行う。

【分析】 作業中の被験者の行動はVTRに収録し、各被験者の作業方略を、組立に使用される材料の用いられる順序に注目して分析・記述する。

組立に必要な材料をネジ、車輪、棒に分類し、組立課題を、作業者の側からみて左側・中央部・右側に分け、課題の左右対称性も考慮して材料を横方向にならべて通し番号をつけた解析シートを作成する。『どこでどの材料を用い、どのネジでどこの箇所をネジ締めしたか』がわかるように、●:正しい材料を取る、○:正しい組合せでネジ締めする、▲:間違った材料を取る、△:間違った組合せでネジ締めする、w:ネジをはずす・材料を元に戻す、という5つの『ブロック要素』により作業の流れ図を作成する。その流れ図をもとに、

組立試行にともなうブロック要素数、ネジ締め回数、左右の材料を同時に取った回数、同じ材料を2度取った回数を算出し、その推移で課題による対応行動を比較する。こうすることで、課題の構造理解による試行錯誤の混乱や思考の固着という要素が除かれ、作業の段取りのプロセスが明確になる。要素動作時間分析とは別の観点から、“作業の骨組み”と“作業の段取り”の違いが明らかになる。

【結果および考察】 観察される組立行動の特徴としては、いずれの被験者も、組立1回めにはまだ作業手順が定まらず、間違った材料を取ったり、分解してネジを締め直したり、いったん手元にとってきた材料をそのまま放置して必要と思ったとき再び取りなおしたり、つけ直すという無駄な動作・行動が多い。しかし、3~5回めで一応各人の作業パターンが定まり、組立10回めでは、ネジ締めにとりまわ材料選択がほぼ完璧に行われる。これは、組立所要時間の減少傾向にはつきり示される。しかし、ブロック要素数でみた減少傾向には、所要時間の減少傾向とは少し違いがみられる。つまり、組立所要時間の減少傾向は、組立行動の特徴と関連する形で試行2~3回目で急激に減少するが、ブロック要素数の減少傾向はやや緩やかになる。この傾向は、向井(1993)の若年被験者の場合にも観察されたが、高齢者の場合特に顕著である(図参照)。

この両群の違いは、(1)個々の要素動作時間の短縮と、(2)組立の手際よさ(ブロック要素数の減少)という2種類の技能習熟要因を考えた場合、若年者では、特に課題の構造が簡単な場合には、この2つの面の習熟が同時に進行するが、高齢者では、まず動作時間の短縮、続いて、作業の段取りの改善という進行の仕方を示す。組立課題の構造が複雑になると、若年者群でも組立ストラテジーに2段階の流れがあることがうかがえる。

しかし、作業の段取りも確定し、無駄な動作がなくなつて、ブロック要素数が必要最低なものになつても、組立所要時間の個人差は依然存在する。この点については、“動作速度”や“適性”という問題とも関連し、さらに別の観点からの検討が必要である。

【参考】

- (1)向井(1991)日本心理学会第55回大会論文集 P.886
- (2)向井(1993)日本心理学会第57回大会論文集 P.675

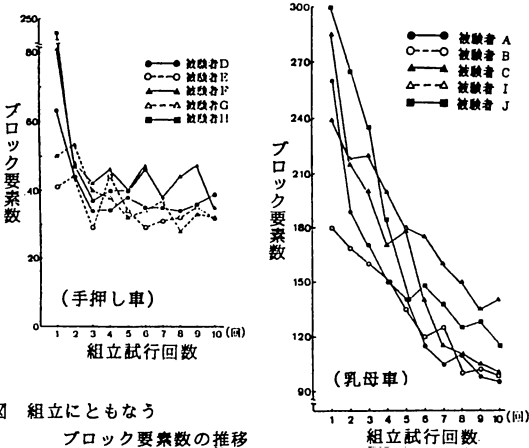


図 組立にともなう
ブロック要素数の推移

世論調査にみる不安感の潜在構造

(株)東京工業
本多敏雄

【目的】東京都では「都民の生活実態と意識」の世論調査を継続的に実施している。この世論調査における不安感についての被験者の反応の潜在的な特性を推論することを目的として、コロイド化学における浸透圧の知見を参考として考察を試みた。

【方法】①資料：解析のための資料としては、次の3つの世論調査の結果を用いた。すなわち、東京都社会福祉基礎調査「高齢者の生活実態・平成2年度」「都民の生活実態と意識・平成3年」「中高年女性の生活意識・平成4年」における不安感の年齢層別統計結果(百分率)を用いた。②解析：将来の生活意識については、年齢層により反応の確かさ(年齢層別統計値の比重)が異なると仮定した。例えば、若い人では不安はあるがまあいかなるだろう/高年齢者では今後の生活に対して幻想を抱かないなどである。そこで上記の世論調査の年齢別統計結果に、次のような比重をかけた。③上記世論調査の項目に従って、年齢層を20~29才/30~34/30~39/35~39/...80才以上の12のグループに分別した。④80才以上の年齢層の比重を1/75~79才を2、以下順次に35~39才を10/30~39を10.5/30~34を11/20~29才を12と配分した。この配分した比重を分母とし、上記年齢層別統計結果を除した。

【結果】①図1~3に不安感の加重平均値と年齢層別グループとの関係をプロットしたものを示す。各プロットに結んだ曲線の相関係数は高く、最少でも0.93である。したがって、外挿値(年齢層別指標がゼロにおける不安感の加重平均値軸との接点)の信頼性は高い。この外挿値の意味は(グラフ上からは)、年令がゼロである時の不安感の度合いを示す。

②不安感の統計結果と年齢層との単純なプロットを行うと、いずれも凹凸を示す。一方、加重平均を行った場合には、図1~3のように、右上りの曲線を示す。この右上りの曲線は、凹凸の形とは異なった解釈を与える。すなわち、高齢化するに伴って、不安を感じるグループは益々不安感が増大する。逆に、不安を感じないグループは、高齢化するにつれて益々不安を感じなくなるという傾向を意味している。

【考察】①発想：コロイド溶液の濃度の関数として浸透圧を測定する。この測定値をプロットすることにより分子量が求まる。浸透圧の式を準用するならば図1~3の外挿値は、この世論調査における不安感の心理的分子量を意味していると考えた。②外界からの刺激と人の心：外界からの刺激は、人の心の中に微粒子を形成させる。この微粒子は、刺激の質と量および受取る人の段階に対応して、様々な分子量の微粒子を形成する。知識や経験の深い人ほど、この微粒子の濃度が高い。また、ある刺激について個人差があるのは微粒子の形と分子量が異なることによる。③被験者の反応：被験者が世論調査の質問に遭遇する。被験者はここで初めて質問を意識する。ここで意識するとは、溶媒(空の心)と溶液(被験者の知識や経験などの微粒子が心の中に分散している状態)の間に、半透膜が固定された状態をいう。心(溶媒分子)が半透膜を通過する。その結果、感覚の強さが自覚できるほどに高くなり平衡状態に達する。この高さが、世論調査の結果である。④結論：以上の考察と図1~3の結果から不安がある階層は高分子量(高次で複雑)、不安がない階層は低分子量(低次で単純)という構造的な特性があるのではなからうかと考えた。

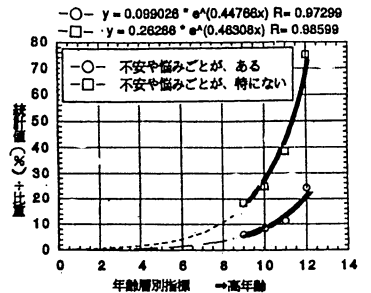


図1 高齢者の不安や悩みごとと年齢層との関係 (出典：東京社会福祉基礎調査・平成2年度版の資料を基に、加重平均を行ったもの)

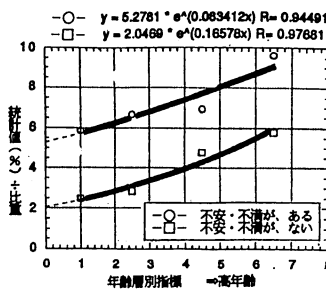


図2 (母層) 子育てに関する不安・不満と年齢層との関係 (出典：東京社会福祉基礎調査・平成3年度版の資料を基に、加重平均を行ったもの)

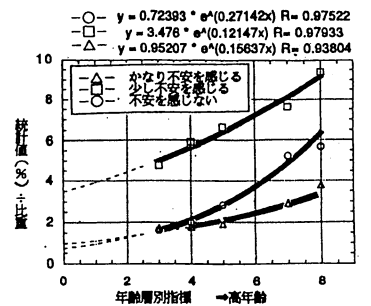


図3 中高年女性が感じる不安と年齢層との関係 (出典：東京社会福祉基礎調査・平成4年度版の資料を基に、加重平均を行ったもの)

モノの類似感のメカニズムの解明の試み

大沢 光 ○王 晋 民
(富士通株式会社・感性技術推進室)

1. はじめに

筆者らは、「個々のモノの印象の判断のデータと2つのモノの類似感の評定のデータを、ニューラルネットワークモデルで対応づければ、2つのモノの類似感、個々のモノの印象の判断のデータから予測することができる。」を仮説として、モノの類似感のメカニズムの解明の試みを行った。

2. 「印象の判断」と「類似感の評定」の実験

調査対象(モノ)として、「ビジネスバッグ」と「ハンドバッグ」のカラー写真20枚ずつを用意し、回答者に、まず、1つの種類のモノの20枚のカラー写真について、筆者らが選択した40個の印象語のそれぞれが当てはまるかどうかを判断させた。ちなみに、これらの印象語は、これらのモノの外観に対するすべての印象語の中から、意味やニュアンスが互いに独立し、また、回答数が多いものを選択した^[1]。

次に、20枚のカラー写真の中から任意の2枚を選択し、この組合せについて、「似ていない」から「似ている」までの5段階の尺度で、類似感の評定をさせた。

1種類のモノの評定の後、他の種類のモノについて、同じ評定をさせた。回答者は、A、B、Cの3名で、回答者には、20枚カラー写真のすべての組合せの190通りのうち、95通りについて、評定させた。

なお、実験の結果の中には、同じ印象と判断されたモノ同士が「似ていない」、同じ印象の組合せと判断された2つのモノの類似感の評定が「異なる」といった論理的な矛盾は、存在しなかった。

3. 「印象」と「類似感」の対応付け

それぞれの回答者の評価結果について、2つのモノのそれぞれの印象語の判断データを入力とし、2つのモノの類似感の評定データを出力とする「階層型のニューラルネットワークモデル」(個人モデル)を想定し、これらの入力と出力を“学習”によって対応付けた。

2つのモノのそれぞれの印象の判断は、40個の印象語のそれぞれについて、(1)「2つとも当てはまる」、(2)「一方だけが当てはまる」、(3)「2つとも当てはまらない」の3つの値を入力データとし、2つのモノの類似感の評定は、「似ていない」から「似ている」までの5つの値を出力データとした。

ニューラルネットワークモデルの中間層の数は1層で、最初は、ユニット数を1個とし、これで学習できない場合には、順次、ユニット数を1個ずつ増し、学習できる“最小モデル”を構築した。ちなみに、最小モデルの中間層のユニット数は、5~8個であった。

4. “最小モデル”の感度分析

(1) それぞれモノのそれぞれの回答者の“最小モデル”に対して、40個の印象語1個の判断を、それぞれ「当てはまる」を「当てはまらない」に、「当てはまらない」を「当てはまる」に変化させ、モデルの感度分析を行った。実際には、2つのモノの類似感の評定した95通りについて、入力の変化に対応した出力の変化量の平均値を、その印象語の感度の評価値とした。

この結果は、たとえば、回答者Aの「ビジネスバッグ」の

「知的な」「機能的な」「目立つ」「洗練された」「古くさい」「シンプルな」などであり、感度が低かった印象語は「汚れそうな」「使いにくそうな」「実用的でない」「真面目そうな」「派手な」などであった。また、「ハンドバッグ」で、感度が高かった印象語は、「機能的な」「洋服に合わせやすい」「和服に合う」「柔らかそうな」「上品な」「丈夫そうな」など、感度が低かった印象語は、「学生用」「パーティー用」「遊び向」「旅行用」「使いにくそうな」「汚れそうな」などであった。

(2) 次に、40個の印象語のうち、2つの組合せについて、感度分析を行い、印象語の組合せについて、「相乗効果」と「相殺効果」を評価した。つまり、2個の印象語の入力を“同時に”変化させたときの出力の変化量が、それぞれの印象語を“単独に”変化させたときの出力の変化量の和よりも有意に大きかった場合、その印象語の組合せは「相乗効果」があり、反対に、出力の変化量の和よりも有意に小さくなった場合には、「相殺効果」があるとした。

回答者Aの「ビジネスバッグ」と「ハンドバッグ」の“最小モデル”は、いずれも、いずれの印象語の組合せも、相乗効果は小さく、また、相殺効果は見られなかった。

(3) これらの結果は、個々のモノの印象と2つのモノの類似感に対応づけるモデルの構造は、比較的簡単なものであることを暗示している。また、個々の回答者について、感度の高かった印象語について、判断をさせれば、こういったモデルを利用して、2つのモノの類似感が予測できる可能性があることを暗示している。

この試みの問題点として、これらの結果のうち、ある部分は、回答者A、B、Cで、“一致していた”が、他の部分は、“そうではなかった”。“一致していた”部分は、より安定した一般性のある結論であるが、“そうではなかった”部分は、たとえば、ほかの印象語の評定を考慮するなど、より適切な実験と検討が必要であろう。

5. おわりに

この稿の最初に述べた仮説は、別の言葉でいえば、「モノの“高次な”心理感覚である『類似感』は、“別の次元の”心理感覚である『印象』の組合せで説明できる。」ということ、もし、これが成り立てば、意匠や商標など、工業所有権での類似感の判定のほか、モノの外観のデザインの類似感の評価などに、利用できる可能性がある。

今後、この仮説を検証するため、この試みをより精緻なものとするほか、他の種類のモノについても、同様の実験と分析を行う予定である。

【文献】

[1] 大沢光・水口有：モノの印象語の特性分析と分類の試み、日本応用心理学会第61回大会論文集、平成6年9月

この研究は、通商産業省・工業技術院の産業科学技術研究プロジェクト「人間感覚計測応用技術」の一環として、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)と社団法人人間生活工学研究センター(HQL)を経て、委託を受けて実施したものである。関係の方々に謝意を表する。

モノの印象語の特性分析と分類の試み

大 沢 光 の 水 口 有

(富士通株式会社・感性技術推進室)

1. はじめに

筆者らは、モノ(生活用品や工業製品)の外観についての「心理感覚の計測」や「感性工学」などに関する研究^{[1][2]}の前提として、表現用語(説明語と印象語)の調査と分析を行っている。この稿は、このうち、モノの印象語の意味特性と回答特性の分析、および、印象語同士の距離概念を利用した分類を試みた結果の報告である。

2. モノの表現用語の調査

「ビジネスバッグ」「ハンドバッグ」「紳士用腕時計」「婦人用腕時計」のカラー写真(それぞれ100~200枚)を対象にして、自由申告法に基づいて、それぞれの写真につき、各8名の回答者に、印象語を回答してもらった。

結果は、「ビジネスバッグ」について、回答者1名当たり、平均5.2語の印象語を回答し、延べでは、18957語の印象語の回答を得た。ハンドバッグ、紳士用腕時計、婦人用腕時計については、回答者1名当たり平均で、それぞれ3.4語、5.4語、4.0語であった。

3. モノの印象語の「特性分析」

(1) 回答された印象語には、同じ意味でも、表記や表現の違いがあるので、これを整理すると、1つの対象につき、印象語の「意味の異なり」は、ビジネスバッグ、ハンドバッグ、紳士用腕時計、婦人用腕時計について、それぞれ168語、175語、135語、132語あった。ちなみに、4つのモノの印象語の「意味の異なり」は、互いにその内容のバランスをとった。

(2) 「ビジネスバッグ」と「ハンドバッグ」の印象語(意味の異なり)は、合計すると204語あり、このうち、139語(68%)が共通であり、これらの印象語は、すべての回答数の97%を占めていた。ビジネスバッグだけの印象語は、「銀行員が使いそう」などの29語(11%)で、回答数の2%を占め、ハンドバッグだけの印象語は、「ワンピースに合う」などの36語(18%)で、回答数の1%あった。

また、「紳士用腕時計」と「婦人用腕時計」の印象語は、合計で139語あり、このうち、共通の印象語は128語(92%)で、回答数の99%と、ほとんどの印象語が共通であった。

さらに、「ビジネスバッグ」と「紳士用腕時計」の印象語は、合計で198語あり、このうち、105語(53%)が共通であった。ビジネスバッグだけの印象語は、「沢山入る」「持ちやすい」などの63語(32%)、紳士用腕時計だけの印象語は、「時間が正確」「腕になじむ」などの30語(15%)で、それぞれモノの種類に固有の印象語であった。

これら4つのモノの印象語は、かなりの部分が共通しており、また、これらの共通の印象語で、すべての回答の97~99%を含んでいることが分かった。

(3) 次に、「ビジネスバッグ」と「ハンドバッグ」に共通な204語の印象語の回答数をみると、上位の36語(18%)で全体の70.3%、52語(25%)で80.4%、79語(39%)で90.2%を占めていた。「紳士用腕時計」と「婦人用腕時計」に共通な140語では、上位28語(20%)で全体の70.0%、42語(30%)で80.0%、64

語(46%)で90.2%を占めていた。さらに、ほかのもの組み合わせ、あるいは、それぞれのモノだけでも、ほぼ同様な傾向であった。

したがって、これらのモノの印象語の回答数の上位約20%を占める約40語を選べば、約70~80%の回答を含められることが分かった。

4. モノの印象語の間の「距離」による「分類」

(1) 感性工学的な発想に基づいた心理感覚モデルの構築のための「同時関係分析法」^{[1][2]}を利用して、2つの印象語の間の意味やニュアンスなどの近さ(同時関係)を評価し、これを2つの言葉の間の「距離」とみなして、クラスター分析を行い、モノの印象語の機械的な処理による分類を試みた。

結果として、「ビジネスバッグ」の印象語は、27個のグループに分類でき、同じグループに分類された印象語は、互いに「似た」内容、他のグループに分類された印象語は、互いに「違った」内容であり、全体として、私たちの常識に「合った」ものであった。

「ハンドバッグ」「紳士用腕時計」「婦人用腕時計」の印象語も、それぞれ26個、23個、24個に分類でき、その結果も、私たちの常識と「違わなかった」。

したがって、モノの印象語は、調査の結果を機械的に処理して、私たちの常識に「合った」分類ができる可能性があり、また、約200語ある印象語は、その意味やニュアンスの近さから、20~30個のグループにまとめられることが分かった。

(2) また、「ビジネスバッグ」「ハンドバッグ」「紳士用腕時計」「婦人用腕時計」のそれぞれの印象語の分類結果を比較すると、あるモノで、同じグループに分類された印象語同士は、他のモノでも、同じグループに分類されているものと、そうではないものが見られた。したがって、印象語の意味やニュアンスのまとまりは、モノには「依存しない」部分と「そうではない」部分があることが分かった。

5. おわりに

この稿で報告した試みは、モノの印象語の「意味の異なり」「回答率」「意味やニュアンスの近さ」などから、互いに「独立した」標準的な印象語を選択するための検討と考えることもできる。今後、モノの印象語の「情報論」的な特性の分析を含めて、研究を進める予定である。

【文献】

- [1] 大沢光:「ヒトの感覚モデル」の構築の試み、日本応用心理学会第60回大会論文集、平成5年9月
- [2] 大沢光:「心理感覚モデル」の構築のための「同時関係分析法」の開発、情報処理学会第49回(平成6年後期)全国大会論文集、平成6年9月

この研究は、通商産業省・工業技術院の産業科学技術研究プロジェクト「人間感覚計測応用技術」の一環として、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)と社団法人人間生活工学研究センター(HQL)を経て、委託を受けて実施したものである。関係の方々には謝意を表す。

看護婦のストレスコーピングとその効果

塚本 尚子

(東京大学大学院医学系研究科)

ストレス事態におけるコーピング研究はすでに数多く行われている。しかし、どのようなコーピングを行うことが、より望ましい効果をもたらすかについては一致した結果が得られていない。本研究では看護婦集団を研究対象とすることにより、ストレスの違いと、回顧によるバイアスを最小限にし、コーピングとその効果をより明らかにとらえることを試みた。

激務を3交代、あるいは2交代でこなすという厳しい現状の中でストレスにいかに対処していくかは、看護婦の職業適応に関連を持つと予想した。すでにコーピングには、状況に依存するものと、特性に影響されるものがあることを明らかにした(塚本, 1992)。比較的一貫して用いられるコーピングは、長期的な効果に影響を及ぼすと考えることができる。そこで看護婦を継続しようとする意志、実際の継続の年限、職業への満足度、好意度、そして健康度を効果の変数としてとらえ、コーピングとの関連性を検討する。

<手続き>

(被験者) 全国病院の看護婦(准看護婦、保健婦、助産婦を含む) 227名(内2名看護士)。

(方法) 全国の病院の看護婦(看護士)を対象に、郵送もしくは直接、病棟単位と個人の両方から依頼し回収を行った。回収率は約80%であった。

(質問紙) 質問紙は、人口統計学的項目、現在の健康度、看護婦についての好意度、満足度、職業継続の意志などについての諸項目および、コーピング尺度を含んでいる。ストレスは自由記述とし、それらに対するコーピングを5段階で評定。この尺度は問題解決、社会的援助の探索、問題回避、抑圧コーピングの4つの下位尺度から構成されている。

<結果>

コーピングと看護婦の職業好意度、職業満足度、看護婦継続に意志、継続の年数、健康度との関連を検討するためにこれらの変数をそれぞれ基準変数とし、4つのコーピングの下位尺度の尺度得点を説明変数として重回帰分析を行なった。このうち有意な結果の得られたものは職業への好意度、満足度、そして健康度の3つであった。

職業好意度

職業好意度では、重回帰係数 $R=.28$ ($p<.01$)、決定係数 $R^2=.08$ であった。問題回避コーピングで標準偏回帰係数 $\beta=.28$ ($p<.001$)であり、好意度に影響を及ぼしていることが明らかになった。

職業満足度

職業満足度では、重回帰係数 $R=.22$ ($p<.01$)、決定係数 $R^2=.05$ であった。問題回避コーピングで標準偏回帰係数 $\beta=.13$ ($p<.05$)、抑圧コーピングで $\beta=-.28$ ($p<.01$)であった。問題回避コーピングの選択は職業満足度に正の影響を及ぼすが、抑圧コーピングの選択は負の影響を及ぼしていることが明らかになった。

健康度

健康度では、重回帰係数 $R=.29$ ($p<.01$)、決定係数 $R^2=.09$ であった。問題回避コーピングで標準偏回帰係数 $\beta=.25$ ($p<.001$)、抑圧コーピングで $\beta=-.19$ ($p<.01$)であった。職業満足度、職業好意度と同様に問題回避コーピングは健康度に正の影響を及ぼし、抑圧コーピングは負の影響を及ぼしていることが明らかになった。

<考察>

重回帰分析の結果より、問題回避コーピングと抑圧コーピングが、適応の指標である職業満足度、職業好意度、健康度について影響力を持つことが検証された。これらのコーピングは比較的一貫して用いられており、個人の特性との関連が強いことはすでに示した(塚本, 1992)。問題回避コーピングは、職業の好意度、満足度、健康度のいづれにも正の影響を持ち、抑圧コーピングは、満足度、健康度に対し負の影響を及ぼしていることが明らかになった。状況に依存して用いられる問題解決コーピングは、職業の満足感や、健康度には影響を及ぼさないであろうと予測された。本研究の結果、問題解決コーピングは、いづれの変数にも影響力はなく、この予測と一致する。特性要因と状況要因に影響され生起する社会的援助の探索コーピングでは、これらの変数との関連性は見いだされなかった。

かかわり方の発展にかんする研究(28)

集団における補助自我的リーダーの役割について

○小原 伸子 青木 玲子 佐藤 啓子
(文教大学) (東京都女性情報センター) (文教大学)

I. 目的

自己・人・物の関係状況における人間関係の諸相について、関係学的立場(創始者:松村康平)から、以下の観点について明らかにする。

(1) 自己・人・物の接在共存状況を志向する幼児の集団活動状況における補助自我的リーダー(※)の役割について明らかにする。

(※)補助自我的リーダーとは、複数のリーダーチーム(L1:総監督・方向性機能、L2:内容性機能、L3:関係性機能)のL2・L3の役割のリーダーたちのことを示す。

(2) 心理劇プログラムの実践における補助自我的リーダーの特色と意義について明らかにする。

II. 方法

行為法・参加観察法・実践法

III. 経過

文教大学幼児集団研究会における特別活動「母と子のための心理劇—スター劇場—」(1993年11月26日)の活動資料を基に分析・考察する。

IV. 分析・考察

(1) 補助自我的リーダーの役割機能(表1参照)

① L1の方向性における補助自我的役割

- ・方向性に内接、集団に内在(表1-1)
- ・方向性に内接、集団に内接(表1-2)
- ・方向性に接在、集団に内接(表1-3)

② 集団の補助自我的役割

- ・方向性に内接、集団に内接(表1-2)
- ・方向性に接在、集団に内接(表1-3)
- ・方向性に外接、集団に内接(表1-4)
- ・方向性に外在・集団に内接(表1-5)

③ 個の補助自我的役割

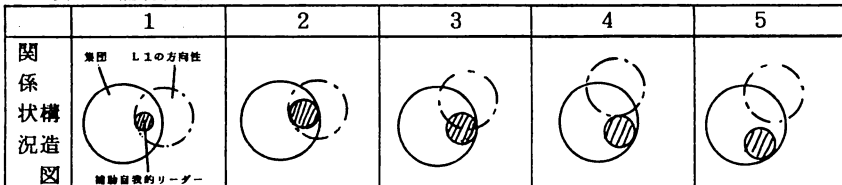
- ・方向性に外接・集団に内接(表1-4)
- ・方向性に外在・集団に内接(表1-5)

(2) 補助自我的リーダーの特色

① 方向性を具体化するかかわりのより内容が促進・発展するように援助する。

実践例1: L1の「空にはどんなものがあるかな?」という問いかけに、L2・L3は、L1の問いを拡声したり、幼児の言ったことを「月って言っています」と、代弁する。

<表1: 補助自我的リーダー機能の語型>



実践例2: L1が「ここはどこまでも続いている広いお空です。空には、お星様がいっぱい輝いています。」というアナウンスに、L2が部屋を暗くする。

② 方向性に対して、集団がダイナミックに展開・発展するようにかかわる。

実践例1: L1の「これからみんなで、大きな星になってみよう」という提案に、L2・L3のそばにいる幼児や母たちに誘いかけながら、手をつないで大きな星を演じる。

③ 個々の動きを集団に位置づけ、個々の自発性・創造性を引き出すかかわりをする。

実践例1: どんなお星様になるか相談のとき、母子共にどんな星になるかイメージが成立しやすくなるように、個々にかかわる。

④ 人と物、人と人、人と状況の媒介的かかわりをして、個々の動きを大切にすかかわりをする。

実践例1: 星の様子をみんなでそれぞれ創った時、花の咲いている星・いろいろの山のある星・動物のいる星など、一つ一つ落とさないようにL1や集団に伝える。

実践例2: ピンク星の所では、幼児の希望で“セーラームーン”を歌うことになり、幼児中心に歌が歌われ、母やL2・L3たちは、手拍子や体でリズムを取りながら、側面的にその活動を援助している。

⑤ 方向性とは異なる個の動きも大切にしながら、方向性と個が先でかかわるようなかかわりをする。

実践例1: 黄色星のどんな方法でご招待しようかと言う相談のとき、机に隠れて遊び始めた幼児たちをとらえて、黄色星のメンバーが机に隠れて、変身と言ってでくる「変身ショウ」を展開した。

V. 総括的考察

(1) 補助自我的リーダーがいることにより、L1の方向性・集団の発展・個々の動きのどれもが活かされて展開している。

(2) リーダーの補助自我的役割機能の諸型の発揮されることで、自己も人も物も活かされる状況(接在共存状況)が具現化されやすい。

(3) 補助自我的リーダーの特色と意義

- ① 内容促進的役割
- ② モデル・例示的役割
- ③ 自発性・創造性の開発的役割
- ④ 媒介的役割
- ⑤ 連携・誘導的役割

<参考文献>

① 青木玲子・佐藤啓子「母と子のための心理劇—母と子の役割遊びを通して—」日本保育学会第44回大会論文集 1991

人間関係の変容

可能性としての人格 (10)

長谷川孫一郎

(大正大学人間学部)

研究の目的: 前回報告した人格の中心となる自己イメージの変容がいかにして可能になるかを明らかにするために、まず各年代毎の重要な人物との関係についてそのイメージの変容を取り上げる。今回は、YとTの大学生に実施した各種調査結果を総括し考察したい。

調査の方法: 各調査は回顧式的自由記述文である。

a. 「私の生い立ちと今の私」(年代別)

1989~1992年, 6回, Y, 男159, 女196,
1993, 1994年, 2回, T, 40, 100,

b. 「おとなと子どもの関係、その変化」

1987年, 三・四年次学生, Y, 男64, 女85,
1988年, 二年次学生, Y, 21, 29,

c. 「重要な人物との関係と変化」(年代別)

1990~1992年, 3回, Y, 男80, 女87,

d. 「印象に残っている教師」(年代別)

1988~1991年, 9回, Y, 男193, 女355,

e. 「体験した友人関係、同性と異性」(年代別)

1988~1991年, 6回, Y, 男201, 女287,

f. 「親子関係の変化」1992年, Y, 男28, 女21,

なお、a, c, e, fは就学前、小学校時代、中学時代、高校時代、大学入学後に、dは小学1~3年と4~6年、中学校、高校時代に分けている。

調査の結果: 主な結果は次の通りである。

a. 「私の生い立ち」に現われた人間関係の変化

就学前には父母、同胞、近隣の友人、幼稚園や保育園の人、小学校では家族・近隣の友人、教師と同級生
中学では同級・同学年の友人に部活の仲間が加わり、
高校・大学ではさらに同性や異性の親友を含めた広い
交際が加わるが、調査年度が新しいほど狭くなる。

b. おとなと子どもの関係の変化

各年代を通じて多いのは、親と子(男18, 女34)で
教師と生徒は(男2, 女3)と少ない。そして一般的に
大人と子ども(男14, 女16)大人の知らない子どもの
世界(男19, 女38)子どもから大人へ(男23, 女23)
の変化をあげている。二年次学生と三・四年次学生を
比較すると、大人への絶対の信頼から不信へ、または
依存から分離した関係へ推移し、子どもの立場から大人
に過剰な期待をもって大人を非難したり、女子の中
には子どもを純真無垢と美化し、子どものままでいた
いという願望もみられる。しかし三・四年次になると

大人としての自覚や大人の現実を直視する態度もみ
られるが、この推移は年齢性差よりも個人差が大きい。

c. 重要な人物との関係の変化 ()内の人数は男:女

「自分にとって重要な意味をもった人との関係、印
象と影響」について記述された人物を年代別にみると、
小学校では教師(50:25)友人(20:24)家族(20:26)
中学校では友人(32:39)教師(25:39)家族(6:12)
高校では友人(26:33)教師(24:16)家族(4:14)部
活(3:10)異性(7:6)、大学入学後は友人(17:34)
家族(9:15)教師(6:4)部活(3:2)異性(7:12)な
どであり、無記入も高校(25:11)大学以後(43:25)
と多いが、どの年代でも親・教師と友人が重要であり
次いで親友と異性である。悪い影響としては、小・中
学時代の家族の不和、中学以後のいじめや教師との対
立、女子の高校時代の父との対決などが少数あった。

d. 「印象に残っている教師」

調査1, 2の「私の教師像」では、児童生徒のため
に何でもしてくれ、何でもできる万能な教師が二年次
学生の半数を占める。そして調査5の「教師の印象」
を、よい印象・普通の印象・悪い印象に分けると、小
学校ではよい(8:34)普通(16:27)悪い(5:24)、中
学ではよい(11:38)普通(20:22)悪い(4:16)、高
校ではよい(10:48)普通(14:18)悪い(2:16)であ
り、多様な教師像が描かれ、小学教師への期待は中高
以後の現実の教師の多面性の観察へと推移していく。

e. 体験した友人関係、同性と異性

就学前の幼な友達、小学校の同級生、中校では部活
の友達が多くなり、高校大学へと交友範囲は広がるが
親友ができると前の時代の友達は消え、また各年代と
も友人のない人、あっても親友のない人がいる。

f. 親子関係の変化

両親のイメージが変わったものは男79.3%, 女63.6%,
男子は「優しい・信頼」が多く、「こわい」が中学の
「うるさい・嫌い」と高校以後の「親和・尊敬」へ、
女子は「優しい・尊敬」が多く、変化は中学の「厳し
い・うるさい」が大学で「感謝」に、母を「友達」へ
と移るものなど、いずれも良いイメージに変化する。

考察: 人間関係の変容が人格の変化にどう関係するか
は、個別に多様であり、事例をもとに分析する必要が
あり、人間関係を変容することの可能性を探りたい。

関係状況における自己に関する研究 (II)

土屋 明美

(日本心理劇協会・関係学研究所)

【目的】 学校集団への参加に戸惑いをみせる子供たちにおいて「見られている」意識は彼らの生活を脅かし、行動範囲を限定させるものとして機能している場合がある。見られていることが否定的に働き、保護されている・守られているという肯定的な機能が働きにくくなっているともいえる。「見られている」ことから「見ること」への転換はいかになされるのか、また「見られている」ことの肯定的機能はどのような状況において働くか、臨床事例をもとに考察する。

<見る・見られる関係についての仮説>

1. 自己・人・物を安心して見ることができる関係が維持される時、見られることに肯定的な意味を見いだすことができる。

2. 見る主体として自己が確立し、変動する関係状況の一方の担い手としての自己意識が成立する時、自己が見る対象が顕在化する。

3. 見る・見られる関係の相即的な関係の転換は、それぞれが尊重され共に育つ状況(接在共存状況)が媒介領域に成立することにおいて実現し、視線(の方向性)を共有する関係が形成される。

【結果】 みる・みられる関係について諸事例の行動を、3つの観点から整理する。

(1) 時間の構造化に関して

・ 学校のある時間帯は家にいるが放課後は外出する(公的時間(学校の時間)と私的時間(自分の時間)とを自分で区別して行動する)。

・ 自分にとって、或は他者から期待されて意味のある外出はする(相談に行く、病院に行く) ・ 昼夜逆転の生活(自分が寝つきづらく時間を管理する)

(2) 空間の構造化に関して

・ 自分の目的のためには外出する(学校の場以外の人の目は気にしない)。
・ 登下校の時間帯に、パジャマを着たり部屋のカーテンを閉める(前者行動、後者から身を隠す)。

(3) 集団の自己化に関して

・ もし、学校へ行ったらみんなが何と言うだろうか心配に思う(不安をもたぬ、もしも、が成立する)。
・ 自分は皆から忘れられている存在に違いない。
・ 勉強が遅れているから、どうせ行ってもしかならない。 他に、

(4) 自己意識に関して(将来展望、自己否定意識など)、

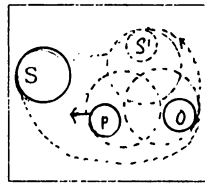
(5) 家族構造の変化に関して(自分だけが、迷惑をかけて、など)の観点が成立する。

【考察】

I みる・みられる関係について

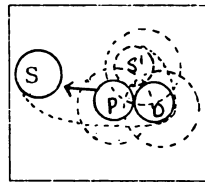
(S記 S'記としての自己 P記としての他 O記としての他)

Aタイプ みる≧みられる



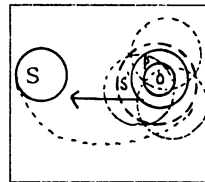
特色：SにとってS'POは自存しており独自性が強調される。運動して変化する手がかりを見だしにくい。技法：S'PO外接化へ。Sがみる対象が定位されるように。

Bタイプ みる≒みられる



特色：SにとってS'POは外接的に存在している。変化が波及しやすい。技法：SPOそれぞれの接点から新しい活動が育つように。創造的活動の充実 Sらしさを育てる。

Cタイプ みる≦みられる



特色：SにとってS'POは同心的に存在している。S'POは未分化であり、変化が層的に拡大する。技法：新たなS'PO関係の形成、新領域の設定。

II 自己において、みられている意識が否定的に機能している場合：現在状況に安定して身をおくことができない(みる存在としての自分をみるができない状況にある)。時間・空間の規定性に生活が支配される。みることに強い価値観が付加されておりそれを受け入れることが出来ない。

III 自己において、みられている意識が肯定的に機能する場合：新たな行動を誘う想像性を獲得する。視線を共有できる人や物との出会いを受け入れることができる。関係状況における「みる・みられる関係」(2者関係)は、視線を共有できる関係(3者関係)を志向することで新たな行動がひらかれる。

IV 関係状況における自己確立を促進する要因：変化する状況に意味を見いだす。変化している事実を受け入れ、未来への展望をもつ。自己についての肯定的評価を得る。豊かな想像力を育てる。

自己愛人格尺度の作成

山本 都久
(富山大学教育学部)

目的 本邦で作成された人の自己愛人格傾向を測定する尺度に佐方(1986)、大平(1988)などのものがある。それらはJ, ラスキン(1979)と同様に、自己愛人格をDSM-IIIの記述特性に基づいて概念化し、因子分析的手法によって尺度化したものであった。しかし、彼らの作成した尺度は、尺度項目が尺度構成因子間すなわち下位尺度間で重複して用いられるケースの多いものであったので、下位尺度の意味が明確化されにくい難点があった。本研究は、この難点を少なくした自己愛人格尺度(NPI)の作成を目的として行なわれたものである。

方法 (1)被験者(Ss)は大学1, 2回生の226名。SsにNPIとYG性格検査を実施。(2)NPIの尺度項目の収集はNPIに関する記述文章を過去の文献(小塚'84, 中西・佐方'86, 中西'87, J, フラウ'89)や尺度項目(佐方'86)から48収集し、尺度項目らしい文章に改めた。それを4件法(はい・とても、ある程度は・かなり、少しは・たまには、はいえ・ぜんぜん)でSsに自己評定してもらった。

結果と考察 心理尺度としてのNPIを作成するために、次のような統計的処理を行なった。(1)NPIの項目分析(G-P分析) まず、各Ssの尺度総点の偏差値を算出して、偏差値が58以上の高得点群(n=59)と42以下の低得点群(n=51)を構成し、各尺度項目での両群の平均得点値の差の検定(t-test)を行なった。項目分析の結果、46の尺度項目では1%水準で有意な差が認められたが、2尺度項目は5%水準でも有意差は認められなかった。そこで識別力のない2項目を削除した。(2)NPIの因子分析と相関分析 次に、46の尺度項目で主因子法(共通性法SMC)による因子分析を行い、固有値1以上の5因子でバリマックス回転を行った。その結果、各尺度項目の各因子での因子負荷量が小さかったり、逆にどの因子にも因子負荷量が大きかったりして、尺度項目の因子的性格がはっきりしないものが16項目あった。それらを削除して、残りの30尺度項目で主因子法(共通性法SMC)による因子分析を行い、固有値0.9以上の5因子でバリマックス回転を行ったら、比較的解釈しやすい因子構造を得た(表1参照)。因子名は第一因子から順に自己顕示・自己宣伝、自我理想の肥大性、自己耽溺、対人関係における利己性

、全能感(有能感)とした。(3)NPIの内的整合性と内部相関 次にNPIの信頼性を検討するために、尺度全体と各下位尺度について α 係数を求めた。全体では.943、下位尺度毎ではそれぞれ.795、.756、.713、.714、.625の値を得たので、尺度の信頼性はあるといえる。内部相関では、全能感が他の因子全部と有意に相関していたが、それ以外では自己顕示と自己耽溺が有意に相関していただけであった。(4)NPIとYG検査との関連 ①YG検査の情緒不安定因子はNPIの自我理想の肥大性、対人関係における利己性と、また、②社会的不適応因子は自己顕示、対人関係における利己性、全能感と、更に、③主導性は自己顕示と5%以下の水準で有意な相関があった。

表1 自己愛人格尺度項目の因子分析結果

自己愛人格尺度項目	F1	F2	F3	F4	F5	総点との相関
1 私は目立ちたがり屋です	.70	.04	.05	-.13	-.04	.50 **
2 私は人に注目されているのが好きです	.67	.06	-.11	-.14	-.06	.51 **
3 私はたいいていことで人に勝つ自信があります	.56	.13	-.18	-.06	-.14	.55 **
4 私は人に一目置かす人間です	.54	.09	-.04	-.09	-.25	.50 **
5 私は非凡な才能(すぐれた能力)があります	.51	.08	-.29	-.01	-.13	.50 **
6 私は気に入ったところ(ステキな点、特徴)が多くあります	.47	.18	-.46	.08	.07	.50 **
7 自分の特徴(個性、スタイル)が気に入っています	.41	.06	-.37	.06	.05	.40 **
8 人が見ていると私はすぐよくなる(してしまう)	.09	.70	.01	-.12	-.08	.44 **
9 私は人の評判を気にするがたです	.05	.56	-.11	-.21	.00	.40 **
10 私は見栄っぱりな人間です	.35	.56	-.03	-.27	.14	.53 **
11 私は、人には「よい自分」を見せています	.03	.55	-.06	-.05	-.33	.40 **
12 私は自分のよい点(理想像)を裏切ることができません	.07	.50	-.13	-.04	-.24	.43 **
13 私は人前で勢って進めたいふるまうようにしています	.00	.46	-.26	.04	-.11	.40 **
14 私は人前でも自分をかまうか立ち直るをい方です	-.18	.40	-.04	-.32	.11	.21 **
15 私は多くの人に好かれています	.21	.01	-.63	.01	-.05	.43 **
16 私は美しい心をもった人間です	.06	-.01	-.53	-.03	-.24	.37 **
6 私は気に入ったところ(ステキな点、特徴)が多くあります	.47	.18	-.46	.08	.07	.50 **
17 私は自分のステキな未来を想像するのが好きです	.06	.20	-.45	-.09	-.34	.52 **
18 私は友だちにしがたる人はい多い	.31	-.06	-.44	.05	.01	.34 **
19 私は誰を見るのが好きです	.17	.20	-.42	-.18	-.12	.49 **
20 私はおしゃべりをして楽しむのが好きです	.18	.23	-.40	-.07	-.00	.43 **
21 どんな場合でも、私は自分が損をするのはいやです	.18	.20	.05	-.65	.00	.43 **
22 ライバルの成功にねたましさをおぼえる	.14	.15	-.07	-.61	-.26	.49 **
23 私は自分が勝つのはいやです	-.10	.23	-.00	-.54	.06	.28 **
24 私のいうことに賛同しない人は好きになれません	.04	.13	.05	-.50	-.40	.40 **
25 私はちよつとの失敗で人に頭を下げるのはいやです	.16	-.06	-.18	-.45	-.05	.36 **
26 私は人のペースで仕事をするのがいやです	.17	-.11	-.03	-.40	-.03	.31 **
27 私はステキな恋や愛の想像を夢見るのが好きです	-.00	.27	-.37	-.18	-.47	.51 **
28 私がリーダーになれば、人々はもっと幸せになれるとおもう	.38	-.05	-.11	-.11	-.47	.43 **
29 私の成功をねたんで邪魔する人が多くいます	.21	.10	-.03	-.15	-.44	.38 **
30 私は人から尊敬されて当然の人間です	.27	.13	-.15	-.04	-.41	.43 **
24 私のいうことに賛同しない人は好きになれません	.04	.13	.05	-.50	-.40	.40 **

累積因子寄与率 37.9% (数字は四捨五入して記入。**は相関値の有意決定でP<.01で有意だったもの。)

自己開示行動の認知と対人魅力

松 田 君 彦
(鹿 児 島 大 学 教 育 学 部)

【目的】

自己開示行動が対人魅力に及ぼす影響については、これまでにもいろんな変数を導入しながら研究が進められてきた。たとえば、開示者と被開示者の関係の親密度、自己開示の適切さ(時と場所をわきまえた自己開示行動)、開示者の動機の種類、開示内容の内面性、開示内容の望ましさ、評価者の個人差などである。本研究では、評価者の個人差要因のなかから向性という性格特性をとりあげ、従来の研究では見られなかった変数の組み合わせを試みた。本研究での変数は開示者と被開示者の親密度(被験者内要因)、開示内容の内面性、開示内容の望ましさ、評価者(被験者)の向性(いずれも被験者間要因)の4つである。

【方法】

被験者: 4年生大学の学生495名(男子:259名,女子:236名)。このうち、性格検査(MPI)で外向性と判定された者155名、内向性と判定された者101名。
実験期日: 平成5年10月~11月。
実験材料 (1)対人魅力尺度: 中村(1986a,1986b)、高木(1992)を参考に因子分析して30項目からなる質問紙を作成。“親和性”“人望性”“活動性”の3因子が抽出された。(2)向性尺度: MPIのなかから向性に関係する24項目とL尺度18項目で構成。分類はMPI採点基準に従い、0~18点を内向型、30~48点を外向型とした。L尺度が11点以上の者は分析から除外した。
実験手続き: 被験者は被開示者という設定で、まず身近な人のなかから“よく知っていてとても親しくしている同性同年代の友人”(親密さHigh群)と、“知ってはいるがあまり親しくしていない同性同年代の知人”(親密度Low群)を思い浮かべ、その人のイニシャルを記入させる。続いて、思い浮かべた人物が話したという設定で開示文を読む。内容の内面性と望ましさの要因が独立に操作された開示文は以下の各群に4題ずつ提示されたが、話題の具体的な内容構成にあたっては中村(1986a,b)に準じ、その操作の有効性も本実験に先立ち141名の被験者を使って事前にチェックされた。開示内容の内面性に関しては表面的開示条件(S条件)群と内面的開示条件(I条件)群とに分かれ、さらにこれが開示内容の望ましさに関して肯定的開示条件群(P条件群:4題すべて望ましいもの)、否定的開示条件群(N条件

群:4題とも望ましくない内容のもの)、混合開示条件群(M条件群:望ましい内容のもの2題と望ましくない内容のもの2題)に分かれる。

【結果と考察】

1. 親和性について:これは「相談に乗りたい」、「仲良くしたい」、「親しみを覚える」といった項目に負荷量が高い因子であるが、この因子得点を基に分散分析をおこなったところ、相互の関係が親密であるほど開示者に対して親和感情を抱くという結果が得られた($t=21.52, df=487, p<.05$)。被験者間要因では被験者の向性($F(1,242)=5.93, p<.05$)で主効果がみられ、外向性被験者の方が開示者に親和性の魅力を強く感じていた。また開示内容の内面性と望ましさの要因間には交互作用がみられたので単純効果を分析した結果、開示内容の内面性は開示内容の望ましさがP条件の時にだけ有意($p<.05$)な差がみられ、表面的な開示より内面的な開示を受けたときに親和性の魅力が高かった。一方、開示内容の望ましさは開示内容が表面的であっても内面的であっても単純効果が有意(それぞれ、 $F(2,237)=12.68, p<.01; F(2,246)=14.21, p<.01$)であり、S条件下ではM条件>N条件>P条件の順に開示者に対して親和性を感じていた(各1%水準)。I条件下ではP条件がM、Nの各条件よりも親和性が高かった(各1%水準)。

2. 人望性について:これは「知的である」、「堂々としている」、「尊敬できる」などの項目に高く負荷している因子である。分散分析の結果、被験者内要因の“親密さ”と被験者間要因の“開示内容の望ましさ”においてのみ主効果がみられ、相互の関係が親密であるほど($p<.01$)、また望ましさに関してはP条件>M条件>N条件の順に開示者に対して人望性の魅力を強く感じていた(いずれも $p<.01$)。

3. 活動性について:これは「おしゃべりである」、「控え目である」といった項目に高い負荷を示す因子である。分散分析の結果、被験者内要因である“親密さ”のについてのみ有意な差がみられ($p<.05$)、同じ開示内容であっても、親密な関係にある者の開示は「控え目である」と受けとめられるのに対して、親密でない者の開示に対しては「おしゃべりである」と受けとめられる傾向が認められた。

役割の志向性に関する検討

時田 学

日本大学文学研究科

はじめに

役割は、一般的に社会化(対人関係)の過程で初めて成立するものと考えられている(Mead,1934)。役割について心理学的に検討する場合、個人的な願望・欲求などが、役割を運行する際の重要な要因であることが考えられる。個人はもっとも適切と予想される役割を運行するが、その役割は、必ずしも個人の願望・欲求とは一致するとは限らない。不本意に運行する役割や、楽しく運行する役割が存在する可能性がある。このような役割を運行することは、個人の間人関係に対する反応の特性を反映している可能性が考えられる。この反応の特性に関して、小学生を対象とした調査では、「なりたいたいもの」としてさまざまな役割を列記させた場合、なりたいたいものとして【人間】をあげる児童と、なりたいたいものとして【事物】をあげる児童の存在が確認された。これらの役割の差異は、彼らが自分の役割について考える場合の個人差を考慮する必要はあるが、児童が役割に対して志向性を持っていることを明らかにしている(時田・渡辺,1978)。一方、大学生を対象とした役割の志向性についての調査では、【人間】・【事物】についてそれぞれ2因子を見いだしている(清水・北川,1990)。しかしこれらの調査は、心理劇の演者体験のある被験者について実施しているため、役割の志向性が一般的に存在するか否かの検討はなされていない。また心理劇以外の演劇体験あるいは演劇経験が影響を与えている可能性も考えられる。今回は、心理劇の演者体験をもたない大学生を対象とし、過去の調査と類似した調査を行った結果について報告する。

方法

被験者：大学生99名(男性64名、女性35名)を対象に調査を行った。年齢は19-25歳(平均年齢19.73歳)であった。質問紙：質問紙は、以下の2つの部分から構成した。①役割の志向性：被験者の演じたい役割・演じたくない役割について、それぞれ10個ずつ記入することとした。さらに、演じたい・演じたくない役割それぞれにその理由も記入することとした。②被験者の演劇体験：演者の経験・観劇の経験、の2点について記入させた。これらの2つの部分のうち①については、演じたい役割・演じたくない役割を尋ねる順序はランダムとした。手続き：被験者には、役割に関する調査であることを告げ、質問紙の教示に沿って記入するように指示した。また、舞台では何でも演じることは可能であり、自分の思う通りになる、何でもできる、などと制限のないことも教示した。

結果と考察

演じたい役割・演じたくない役割、それぞれの理由、についての被験者の反応数の平均値とSDをTable1に示す。

Table1 演じたい・演じたくない役割の平均反応数

役割	平均	SD
演じたい役割	3.27	2.45
演じたくない役割	2.47	2.04
演じたい役割(理由)	3.06	2.39
演じたくない役割(理由)	2.25	2.25

Table1に示したように、演じたい・演じたくない役割の間では反応数に有意差はなく、男女差も有意差はなかった。演劇経験に関する質問項目の回答結果は、演じたい・演じたくない役割の反応数に関しても、有意差はみられなかった。各役割の内容との関連では、演劇を実際に経験している者のほうが、上演されている役割をあげる場合が多くみられた。

演じたい・演じたくない役割の内容に関して、被験者に共通して出現する記述を以下の表にまとめて(被験者の記述に従って明確に判定できるものに限った)。

Table2 演じたい・演じたくない役割に共通する記述

役割	種類	No1	No2	No3
演じたい役割	主役	7	2	1
	脇役	12	7	3
	悪人	10	6	7
	事物	7	6	3
合計/総出現数		36/95	21/73	14/53
役割	種類	No1	No2	
演じたくない役割	主役	15	6	
	脇役	3	3	
	悪人	9	3	
	事物	10	4	
合計/総出現数		38/89	16/58	

Table2に示したように、演じたい・演じたくない役割では主役、脇役の出現数が逆転した結果となった。また悪人、事物は両役割ともに出現数に明確な差はみられなかった。主役になりたいが演じたくない、脇役でよいから演じたいといった傾向は、過去の調査と一致していない。この点から志向性については、被験者は自分の役割を主役とみなすか、脇役とみなすかといった次元で考えている可能性が示唆された。また事物になりたいと回答する学生は少数であった。この点に関しては、今回の質問紙の教示の効果も考慮する必要があると考えられるが、小学生にみられたように、役割に対して柔軟に考えられずに役割=人間と考えている可能性もある。今後さらに調査を継続していく予定である。

「関係学・心理劇式 集団状況・発達評価法」の基礎研究

—関係概念の形成について—

矢吹 美美子 (児童臨床研究会)

1. 目的

本研究会では、1989年より本評価法の作成研究を進めており、1990年の日本応用心理学会では、幼児の思考の展開について、課題項目の1つ「3つで考える—三者関係的思考」の基礎研究として「二者で差異性を考える場合、どちらか一方の特性を基に他者を比較するという思考が展開しやすく、三者で差異性を考える場合には、相対的に独立した三つのものの特性をとらえることと、三者に流れる共通基盤をとらえることができ、三者の差異を構造化して考える思考が展開する傾向がある」ことを明らかにした。本研究はその関連研究であり、幼児において共通性・差異性(同じ・違う)の概念がどのように把握され表現され、形成されるかを明らかにする。

2. 方法

本評価法を活用した幼児(5才児)の発達相談活動の実践体験と本年度資料の分析。本評価法は6~8名の小集団で進められ、本課題は3~4名の小集団に分化して行なわれる。分析数55集団165名。

課題は三者の共通性差異性を問う。①狭、包丁、鋸 ②犬・鳩・かぶと虫 ③トマト・大根・ほうれん草

3. 結果と考察

幼児における三者の共通性・差異性の関係性の展開と内容の把握と表出のしかたの枠組と発達の方向性が明らかになった。(表)

① 差異性とは、共通の基盤において違いを考えることであり、表の関係思考の段階1~10の思考の進め方は、幼児なりに共通の基盤に気づいている。

② 幼児は共通性・差異性を考えるの基盤にA.知覚的イメージ(f~j) B.自己の体験から行為や活動としてのイメージ(b~e) C.知識的に一般共通性でとたえられる性質の意識化(a)を浮び上がらせている。

4. 結論

関係思考の展開は知覚や体験のイメージなど内容の把握はさまざまで、自己においてだけ成立するような差異思考の共通基盤であっても、擬態音で表わされる感覚的把握であっても、状況を共有することで理解できることばの使い方、ことばで説明できず行為で表演する方法であっても、関係思考展開している。「同じ」「違う」という抽象概念の形成は、自己と人ともものとの三者関係的状况において、また、父母子の三者関係的状况において促進されている。

三者における共通性・差異性の関係思考の段階 ↓ 内容把握と表出の段階→		はさみ、包丁、鋸					犬、鳩、かぶと虫					トマト、大根、ほうれん草																				
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	計	a	b	c	d	e	f	g	h	i
1,三者差異	3つの共通基盤においてそれぞれの違い	12	1	1	1	2	17	1	1	1	2	5	7	4	4	2	2	10														
2,三者共通	3つの似ているところ							1	3			6			2	1		12														
3,二者対二者差異	2つの共通基盤はあって、他1つの違い	18	2	3		1	24						1	1			2															
4,二者差異	2つの共通基盤においてそれぞれの違い		1	1		1	7						2	2	1		6															
5,二者対二者比較	2つの共通基盤はあって、他を比較						2	1	1		4	2	11				3	3														
6,一者対二者比較	1つの特性と共通基盤を2つ比較							2	2		3	7	1			3	4															
7,一対各二者比較	1つの特性を2つ他各2者を比較							1				1		1																		
8,二者共通	2つ似ているところ	8	3	1	1	2	21	18	4	1		4	2	11	1	1			1	4	1	8										
9,三者差異基盤	2つ違い成立させる共通基盤	1	1	2	1		5		1	4		3	7		1		6	2	3			12										
10,二者差異基盤	3つ違い成立させる共通基盤							1	1		3	5				1						1										
11,二者比較	2つもの比較	2				2	5	9	5	2	1	4	12		1					1		2										
12,三者の個別性	3つものそれぞれの性質							1	3		1	5	1	1								3										
13,二者の個別性	2つものそれぞれの性質	1	1			1	3	3	1		1	2									1	1	4									
14,一者の個別性	1つものの性質	4	1	1	2		8	7	4		1	6	28	1		1	1					1	4									
15想定	共通の状況を想定して言う	例：黒い犬は黒い鳥と同じ										狭犬	行為活動のイメージ					知覚的イメージ														
16非現実的処理による共通性・差異性の成立		キャベツもはっぱ										4	a					j														
17課題様の非現実的処理(飛躍的)		ぱっと花が咲く、桜は春・										1	b					i														
18課題様の類似的処理(3者のうち1者の連想的变化)		猫とかぶと虫は...										2	c					h														
19同じもの異なるもの仲間分けする異なるもの取り分け		包丁と鋸は同じ、挟違う										3	d					g														
20二者三者についての異同を問う		犬と鳥違う、犬と鳥同じ										8	e					f														
21個別概念が典型類似ものは、一般共通概念化		鳩と鳥は同じ										2	f					j														
22一者と似ていて新しく異なるもの		からず										5	g					i														
23言葉の異なること理解		包丁と鋸で料理を(冷凍ナフ)										3	h					j														
24課題把握における具体的心象による対応		知っている?と聞かぬ自己の思い										5	i					j														
25課題が分かち自己の成立		が										5	j					j														
26前の課題の混同												1																				
27同じことの理解の混同												1																				
28同じことを重なり												1																				

共同研究者：三神静子 水流恵子 小野真理子 柴田 てる子 大田奈緒子 小里国恵 藤和美 顧問 松村康平
文献：児童臨床研究会「関係学・心理劇式 集団状況・発達評価法」関係学ハンドブック1994

「幼児の音の好悪について」

山田 麻有美

(千葉明德短期大学)

<問題と目的>

幼児教育の現場では、様々な形で音楽が取り入れられているが、その多くは、幼児の内的な要求を満たす為のものではなく、教育者が幼児に必要なだと考えた音楽である。

ところで、大人の音楽の好悪については、民族音楽の研究で、詳しくなされているが、子どもの音楽の好悪に関する研究は、一般には知られていない。

子どもにどのような音楽を与えることが必要か、という大人の立場からの主張は多いが、そのことと、子どもの音楽の好悪との関連についての研究は、あまりないようである。このようなことから、次のような作業仮説を立て、検証することを目的とした。

1. 幼児は、女声を好む。
2. 幼児は、ピアノ伴奏の音を好む。

<研究の方法>

① 実験の方法：同一旋律で音を変えたものを個別に呈示し、比較法で幼児の音に対する好悪を問う、という方法を用いた。

② 材料：旋律は、わらべ歌「げんこつやまのためきさん」を用いた。音は、男声、女声、ピアノ、シンセサイザー、各楽器を伴奏とした声の計8種類を用いた。

声の好悪に関しては(実験Ⅰ)、伴奏なしの声のみで「男声*女声」、ピアノ伴奏で「男声*女声」、シンセサイザー伴奏で「男声*女声」の3種類の比較旋律を用いた。伴奏音の好悪に関しては(実験Ⅱ)、「ピアノ*シンセサイザー」、ピアノ伴奏で「男声*女声」、シンセサイザー伴奏で「男声*女声」の3種類の比較旋律を用いた。

③ 対象者：千葉県J市立保育園児

実験Ⅰ；4才児 35名(女13、男22)

5才児 33名(女21、男12)

実験Ⅱ；4才児 28名(女13、男15)

5才児 30名(女16、男14)

④ 指示：「これから、2回続けて音が聞こえて来ます。そのうち、あなたの好きな方を教えて下さい。」

⑤ 実験場所：幼児が通園している保育園内で、当日の保育には使用していない部屋。

⑥ 日時：1994年7月下旬～8月上旬。

<結果> 得られた資料は、各実験ごとに集計を行ない、度数の比較(χ^2 -検定)を行なった。

2つの実験を通して、性別及び年齢別で、音に対する好みの差は、見られなかった。

実験Ⅰ(声の好悪)に関しては、4才児で「声のみ」で「女声」が好まれていたが、全体としては、「声のみ」では、はっきりした好悪の差がみられなかった。伴奏音の違いにより好悪の差があった。「女声」はピアノ伴奏で、「男声」はシンセサイザー伴奏で好まれている。

実験Ⅱ(伴奏音の好悪)に関しては、「音のみ」では、ピアノ音が好まれることが解った。4才児では、「ピアノ伴奏」の女声が好まれ、5才児では、「シンセサイザー伴奏」の男声が好まれた。

表1. 「声の好悪」について(実験Ⅰ)

	声のみ	ピアノ伴奏	シンセ伴奏
4才	$\chi^2=4.84(.05)$ 女声>男声	$\chi^2=6.25(.05)$ 女声>男声	$\chi^2=1.96$ N.S.
5才	$\chi^2=0.16$ N.S.	$\chi^2=6.76(.01)$ 女声>男声	$\chi^2=72.96(.005)$ 女声<男声
全体	$\chi^2=1.96$ N.S.	$\chi^2=6.76(.01)$ 女声>男声	$\chi^2=10.24(.005)$ 女声<男声

表2. 「伴奏音の好悪」について(実験Ⅱ)

	音のみ	女声	男声
4才	$\chi^2=6.76(.01)$ pf>syn	$\chi^2=2.56$ N.S.	$\chi^2=4.00(.05)$ pf<syn
5才	$\chi^2=1.44$ N.S.	$\chi^2=7.84(.01)$ pf>syn	$\chi^2=0.16$ N.S.
全体	$\chi^2=3.24(.10)$ pf>syn	$\chi^2=1.00$ N.S.	$\chi^2=0.36$ N.S.

<考察> 作業仮説1の検討から、幼児の、声の好悪は、同時に呈示される声以外の音の影響を受ける、ということが出来るだろう。作業仮説2の検討からは、幼児は、音だけを取り出した時には、ピアノ音を好むが、伴奏音についての好悪は明確なものでは無いことが示された。これらの検討から、幼児には、違う種類の音を聞き分けていて、音に対する好悪もあるが、日常的な童歌のような音楽を、個々の音の集まりとして聴いているのではなく、全体として聴いている、と言えるだろう。

妊産婦の母性発達に関する研究 (1)

感情と妊娠動機との関係

○和田佳子 (日本大学大学院) 花沢成一 (日本大学文理学部)

【問題】

女性にとって、妊娠・出産・産褥という体験は、身体面のみならず、心理面にも大きな変化をおよぼすことは、すでに多くの人が指摘してきた (e. g. 浜・戸梶 1990)。和田・花沢 (日本母性衛生学会 1993) は、妊娠期、および、産褥期の感情について、未婚女性との比較を行ったところ、未婚女性より、妊婦と褥婦とでは快感情が高くなり、不快感情は低くなる。また、妊婦より褥婦で、いっそう快感情が高まることを報告した。このことから、感情状態と妊娠・出産との間に、何らかの関連性があることが示唆される。本研究では、この点を明らかにするための指針を得ることを目指し、妊婦の感情と妊娠動機との関係について検討した。

【方法】

調査対象：都立A産院外来通院中の妊婦146名 (妊娠18~38週、平均年齢27.95±4.47歳、初妊婦83名、経妊婦63名)。

調査期間：平成6年5月~7月。

質問紙：妊娠動機は、花沢ら (1990) の「妊娠モチベーション質問紙」を使用した。これは、妊娠への動機づけに関する25項目から成っており、回答は、各項目ごとに、「非常にそのとおり」~「そんなことはない」とし、それぞれに4~1点を与えた4件法で求める。感情の評定は、28語の形容詞から成る「感情評定尺度表」を用いた。28語は、「あかるい」、「すがすがしい」等の快感情を表わす14語と、「つまらない」、「こころぼそい」等の不快感情を表わす14語である。評定は、「非常にそのとおり」~「ちがう」に3~0点を与えた4件法とした。

調査の実施：妊婦の外来受診時、「妊娠モチベーション質問紙」および「感情評定尺度表」を配表調査法で施行した。

結果の整理：感情の快得点の平均は18.92 (SD=10.28) 点、不快得点の平均は4.41 (SD=4.71) 点となった。また、拮抗指数 (不快得点/快得点×100) の平均は、20.95 (SD=23.43) となった。各得点および拮抗指数について、高得点群と低得点群 (平均±1/2SD) との妊娠動機平均得点を算出し、t検定を行った。

【結果と考察】

快感情、不快感情、拮抗指数における両群間の妊娠動機平均得点を比較したものが表1である。

表1 快感情・不快感情・拮抗指数の各高得点群 (H) と低得点群 (L) における妊娠動機得点の比較

	群	N	M (SD)	t 値 (df)	
快感情	H	45	74.40(9.91)	7.797(87)	**
	L	44	57.68(10.32)		
不快感情	H	34	65.17(11.18)	0.594(99)	n. s.
	L	67	66.56(11.08)		
拮抗指数	H	30	64.20(11.27)	1.866(82)	+
	L	54	68.85(10.77)		

** p<.01 + p<.10

快感情における両群間の平均の差は有意であった (t(87)=7.79, p<.01)。したがって、快感情の高い妊婦は快感情が低い妊婦より、妊娠に対する動機づけが強いということがいえる。また、不快感情における両群間の差は有意ではなかった (t(99)=0.59, n. s.)。さらに、拮抗指数では、両群間の妊娠動機得点の平均の差は有意傾向 (t(82)=1.87, p<.10) であり、拮抗指数が高い妊婦より、拮抗指数が低い妊婦のほうが妊娠動機が強い傾向にある。以上の結果により、感情と妊娠動機の関連性が確認された。つまり、快感情が高く、感情の葛藤が小さい妊婦において、妊娠への動機づけが強いということ、また、快感情が低く、感情の葛藤が大きい妊婦では、妊娠の動機づけが弱いということが見出された。妊娠動機が強いということは、現在の妊娠を受容し、意欲を持って出産に臨めることができるといえる。そのため、動機づけの弱い妊婦が、10か月間もの妊娠期間を無事に経過し、出産を迎え、さらには育児が行えるためには、快感情を高めるような対策が重要であり、感情面の育成を図る必要性が考えられる。

親子関係の発達に関する研究 I -大学生の親子関係について

吉川 晴美

(東京家政学院大学)

<研究の目的>大学生生活や学生相談などで学生から提起される様々な問題には直接的、間接的に何らかの人間関係の問題が関連し、中心問題を解く重要な鍵となっていることが多い。本研究ではこの人間関係のなかで特に親子関係に焦点をあて、その関係の発達について明かにしようとする。大学期は、発達の的には青年期後期に位置する。子ども期と大人期の間にあつて、発達課題のひとつである社会的自立へむけて、日常生活においてどのように親(父、母)との具体的かかわりを持ち、親子関係を意識し自己を成長させているのか。研究 I においては特に家庭での危機的場面、コミュニケーション、関係認知、満足度などの点から考察する。

<研究の方法>親子関係についての予備調査(自由記述)を参考に具体的危機場面及び各時期の親子関係等を質問枠に、関係学から明かにされている「五つのかかわり方」(内在的、内接的、接在的、外接的、外在的)の概念を主軸にして親の行為、自己の状態などを回答枠として設定した質問紙を実施(94年6月)。対象は本学学生(女子)、161名(大1、大3、18~21歳)。結果を χ^2 検定、残差分析等により分析、考察する。

<研究の結果と考察> 1. 危機場面における親子関係

(1)危機場面の生起: 大学、高校期を通じて帰宅時間、大学期には僅かだが金銭的問題、高校期には成績、進路問題等の生起率が高い。大学期より高校期の方が場面生起率が高い。(2)大学期①父親のかかわり方: 外接(オ.本人にまかせ見守る)、外在(キ.妻にまかせ)が有意に多く、母に比べ外在(ケ.自分のことで忙しい)が有意に多い(P<.01)。②母親のかかわり方: 全体として、外接(イ、オ)が多く、なかでもイ.説教、説得するが父親より多い。内接(エ.気持ちや立場をわかろうとする)も父より有意に多い(P<.01)。(3)高校期から大学期の親のかかわり方の変化: 内在(ア.我が事のように心配したり怒る)が、有意に高校期の母に多く大学期の父に少ない(P<.01)など、父母ともに減少傾向にある。また外接のなかで父母ともに(P<.01)説教型は高校期、見守り型は大学期に多くなっている。接在(ク.意見を交わし合いともに考える)は高校期の母に多く(P<.01)全体としても大学期の方が少ないなど、かかわり方の傾向が接在から外接化への傾向にある。(4)自分が親なら: 全体では外接(オ)接在(ク)のかかわり

が多い。現在の親のかかわりと比べ、有意に内接(エ)接在(ク、ウ.皆が納得できる提案)が多く外接(イ、オ)が少ない(P<.01)。即ち現在の親のかかわりより外接が減り、内接、接在的かかわりが増える傾向にある。また、外接のなかでもイ.説教型よりオ.見守り型を多く選択している。(5)かかわり傾向と親子関係: 危機場面における親のかかわりを外側傾向(相対的にかかわり距離が大)、内側傾向(同、小)と分け(平均=3.55)、子の抽象的レベルの親子関係の認知との相互関連性を見ると、外側傾向の層(具体)には外接的親子関係(抽象)と認知する層が有意に(P<.05)多い。

2. 親子関係の認知: 父子関係を外接、外在、母子関係を接在、内接と認知する層が有意に(P<.01)多い。

3. 親子関係と満足度: 親子関係における自己を内接的(いきいきと充実)と認知する層の満足度が高く、接在的(新しく変わり育つ)と認知する層は中程度の満足を得ている人が有意に多い(P<.05)。外在的(自分が自分でないよう)と認知する層は満足度が低い傾向(P<.10)がある。父母子単位では接在・内接と認知する層が満足度高く、外在・接在が低い傾向(P<.01)にある。

4. 親子のコミュニケーションの頻度とかかわり方:

父子関係においてはくいつも>と内在、くひんぱん>と接在、くたまに>と外接、くほとんどない>と外在の関連性が、母子関係においてはくほとんどない>と外在の関連性が、有意に(P<.01)高い。全体的にはコミュニケーションの多い層では父子間の内在、母子間の内接関係が有意に多く母子間の外接、外在関係が有意に少ない(P<.01)。コミュニケーションの少ない層では、父子関係の外接、外在関係が有意に多く、接在関係が有意に少ない(P<.01)。現在のコミュニケーションの頻度と関係認知にはある程度の関連性があると考えられる。

<まとめ>大学期の日常場面での親子関係は危機的要素が高校期より少し減少し関係は外接的傾向が強まる。母とは接在、内接的、父とは外接、外在的な関係であると認知し、父母と接在・内接関係の組合せの場合に満足する傾向などがある。日常では親に離れて見守っていて欲しいと考える半面、相互に支えあう、交流しあう関係も志向していること等が明らかになった。

参考文献: 関係学会編「関係学ハンドブック」1994 田中敏、他「教育・心理統計と実験計画法」教育出版1992

親子関係の発達に関する研究 II - 親子関係の変遷の認知について

養永 睦子

(東京家政学院大学)

＜研究の目的＞本研究においては、子ども期から大人期へ向かう過程で自分の送ってきた親子関係にどんな印象を持っているのか、また、それに対して、子どもの立場からはどう感じているのか、さらに、自分が親の立場になったときに子どもに対して、どういう親子関係を志向するのか、を明らかにしようとする。

＜研究の方法＞本学学生（1年女子 125名、18～20歳）を対象に、子ども期から現在に至る親子関係についての印象等を尋ねる質問紙を実施（94年 6月）。結果を χ^2 検定、残差分析等により分析、考察する。質問紙では、子ども期から現在に至るまでを①就学前②小学時代③中学・高校時代④大学時代の4つの時期に便宜上区分した。そして、(1)父との関わり・母との関わりの印象、(2)それぞれの時期の親子関係の印象に対する満足度、(3)親の立場になったときに創りたい自分の子どもとの親子関係、を尋ねた。(1)(3)では、それぞれの時期について、関係学から明らかにされている「五つのかかわり方」の概念を主軸にした回答枠を用意した。(内注:びったりと一緒である、内注:助け合い支えあっている、並注:相互に交流しあっている、外注:外側から見守っている、外注:離れて自立している、等。)

＜研究の結果と考察＞1、子ども期から現在へ至る親子関係の傾向 (1)各時期の特徴①就学前：内在または内接で且つ両親が同じ関わりをしていたと受けとめている学生が多い。②小学時代：関わりが多様化し親子関係に距離が生じる傾向がある。③中学・高校時代：全体として距離をある程度保ちつつ関わりを模索していると考えられる。④大学時代：父との関わりは、接在の度合いが増し、母との関わりは依然接在が多いながら関わりが多様化している傾向がある。両親の関わりの組み合わせでは、中学・高校時代と同じ傾向が見られる。(2)時期による親子関係の変化 父との関わり：①就学前、内在が有意に多く、外接・外在が有意に少ない。②小学時代、接在が有意に多く外在が有意に少ない。③中学・高校時代、外接・外在が有意に多く内在が有意に少ない。④大学時代、外接が有意に多く、内在が有意に少ない。乳幼児期には一体的、児童期には相互に交流しあい、青年期前期ある程度またはかなり距離を保ち、青年期後期、距離を保ちつつ関わりが安定してくるといえる。母との関わり：①就学前

、内在が有意に多く、接在・外接・内接が有意に少ない。③中学・高校時代、外接が有意に多く、内在が有意に少ない。④大学時代、外接が有意に多く、内在関係が有意に少ない。母との関わりは、乳幼児期では圧倒的に一体的で、児童期に一転して多様化する。青年期は前期・後期ともある程度距離をとりつつ関わっているといえよう。父と比べ外接関係の連関の程度が緩やかであることから、母のほうがより多様な関わりをする傾向があるといえるだろう。

2、親子関係と満足度 (1)父との関わり：児童期以降外在関係が満足度の低い層に有意であることが目立つ。青年期後期では、満足度の高い層に外接が有意であることと考え合わせると、父とはある程度距離を置いて関わりを保ちたいという傾向が強いといえるだろう。(2)母との関わり：かかわり方が多様化する児童期に満足度の低い層で外接が有意に多いことが目立つがこれは、多くの場合父母が共に外接または外在にあることが関係していると考察される。(3)父母の関わり の組み合わせ：乳幼児期から児童期にかけて、父と母のかかわり方の違いが大きく、しかも父が外接・外在の場合に不満が多い。満足度の高い層で父母ともに内在が有意であることから、両親の関わり方の違いの大きさ、父の不在がち、またはその様な家庭状況のもたらすものが不満の背後にある可能性が考察される。

3、志向する親子関係 (1)各時期の傾向：乳幼児期では内在、児童期には接在・内接が有意に多い。青年期前期は接在が有意であり、青年期後期には外接・外在が有意である。青年期後期に、それまでほとんど志向しなかった外接・外在が増加することによると考えられる。(2)過去の親子関係に対する印象と志向する関係の連関：父母ともに経じて、印象と同じ親子関係を志向する傾向が強く、加えて、乳幼児期・児童期に外在の印象を持つ場合、より子どもと密接な関わりを志向する傾向があると考察される。また、青年期後期になると、接在の印象を持つ場合は、より距離を離れた外接を志向する傾向がある。(3)満足度の高低による志向の違い：どの時期にも有意差は見られない。

参考文献：関係学会編「関係学ハンドブック」1994 田中敏「教育・心理統計と実験計画法」教育出版1992

手書きひらがな文字数量化法の試みと評価

○高澤 則美 関 陽子
(科学警察研究所)

著者らはこれまでに、手書き文字の数量化に基づく筆者識別を行い、筆者識別の観点から見た手書き文字の特性について報告してきた。この過程で、数量化は文字を2次元座標に置き、字画の座標を計測する方法が適切であること、手書き文字は点や線の逐次加算できあがっているのではなく、一個の文字としての形態的まとまりを持つと同時に、文字を書くという動作においても一文字単位のまとまりを持っていること、文字の構造は筆者識別の成績に影響し、字画数が少なく構造の簡単な文字と、逆に字画が多すぎる文字は筆者識別の材料としては適切さを欠くものがあること、などを明らかにしてきた。

これまでの報告において分析対象にしてきたのは、すべて楷書体に近い書体で書かれた漢字であった。字画を直線とみなし、字画の端点とその中間点や転折点測定した。楷書体の場合は、このような測定方法でまとまりを持った形態としての筆跡の姿を数量化できた。しかし行書や草書には曲線的な部分や省略される字画もあるため、転折点の特定や測定が不可能になることがある。そのため、楷書体漢字に適用した方法では筆跡間で統制のとれた数量化が困難であった。同様にひらがなや算用数字も曲線部分が多いため、筆跡それ自体の形態情報をとらえながら統制のとれた計測を行うことが困難であった。さらにひらがなや数字は構造が簡単で個性をとらえにくく、筆者識別の材料として不適切と考えられてきたこともあって、分析の対象からはずしてきた。しかし、我々が文字を習い始めるのはひらがなからであり、ひらがなには十分になじんでいる。また、ひらがなは字種も少ないことから、日常の書字行動においても書かれる頻度は漢字よりも高いと考えられる。筆跡上の個性が書字行動に対する経験の量に依存してできあがっているとすれば、漢字よりもひらがなにおいてより明瞭な個性が認められることが予測される。我々は筆跡を人間行動としてとらえる立場に立って筆者識別を行ってきたが、この立場からもひらがなを分析する意義を見直す必要から、ひらがな筆跡を数量化するための新たな測定法を提案し、筆者識別の観点からその評価を行った。数量化に際しては、1) 書字運動にそった計測を行い、筆跡の形態をできるだけ忠実に数量化すること、2) 統制のとれた数量化のために、測定点を明確に定義すること、3) 測定コストをできるだけ軽減すること、を目標とした。

【方法】対象文字：30人の筆者によって約1カ月の間

隔を置いて繰り返し6回書かれた「か」と「は」、各180字。測定：画像処理装置を用いて分解能1/20mmで各ストロークの座標を測定した。測定点は予め決めずに、各筆跡ごとの形態的情報密度に応じて、ストローク上の任意の点を任意の数だけ測定した。数量化：測定点をスプライン関数で補完した後、データ間で変数の数をそろえるために、各ストロークを等分割してそれぞれの座標を算出して再数量化した。数量化点数は「か」を100、「は」を110とした。この後、各筆跡ごとに縦方向の大きさが1になるように規格化した。

【結果と考察】文字別に相関行列に基づく主成分分析を行った。固有値が1以上であったのは「か」が第11主成分まで、「は」が第14主成分までで、このときの累積寄与率は95%と97%であり、全体の11~13%程度の少ない成分で記述可能であることが分かった。次に、文字別に全ての筆跡間の多次元ユークリッド距離を総当たりで算出した。文字別にある1つの筆跡と残りの全ての筆跡との距離を、180個の全ての筆跡について求め、距離の近い順にデータを並べたときに、第3位までに正しい筆者の筆跡が入っていることをもって正解とした。正解率は「か」が88%、「は」が91%であり、良好な識別結果が得られた。

筆跡鑑定分野では、ひらがなは構造が簡単なために書き手が異なっても似た形になりやすく、また同一個人内で変動しやすいので個人識別には不適切と考えられていた。しかし、漢字を分析してきた結果から、個人内変動の小さい文字が必ずしもよい識別結果を示さないこと、逆に個人内変動の大きな文字で高い識別率を示すもののあることが明らかとなっている。ひらがな筆跡鑑定に不適切と言われてきたのは、ひらがな自体の特性ではなく、目で観察して言葉で記述するという方法に問題があったのではないかと考えられる。筆跡の形態を、伝達可能な形式で的確に言語表現することはほとんど不可能と思われるが、計測による数量化に基づく筆者識別においては、この問題は回避される。ひらがなは漢字よりも書かれる機会が多いことから、むしろ筆跡上の個性はより強固に獲得されていると考えることができる。また、ひらがなの曲線的な字画の方が、漢字の直線的な字画よりも書字運動に関する情報は多いとも考えられる。本報告の結果はこの予想を支持するものであった。今後は、さらに適切な数量化法を工夫しながら、筆者識別の観点からひらがな筆跡の特性を解析してゆく必要があるだろう。

漢字の構造と書字行動との関係

○関 陽子 高澤則美
(科学警察研究所)

【目的】 小学校の国語教育においては、漢字学習に多くの時間があてられており、漢字を正しく、字形を整えて書くことが目標とされている。教科書体活字は、小学校の国語の教科書に用いられていて、文字の習得段階で目にする機会が多い字体であると考えられる。一方、成人が手書きした文字は、教科書体活字とは異なる特徴が観察されることから、文字の習得過程において、手本に忠実に身につける要素とそうではない要素があることが予想される。この要因のひとつには、文字の認知が考えられるが、文字の構造が書字行動に与える影響も無視できないと考えられる。そこで、教科書体活字と手書き文字における文字の構成を比較して両者の違いを明らかにし、文字の構造と書字との関係について考察する。

【方法】 手書き文字は、成人30名により各字種6回ずつ約1ヵ月の間隔を置いて書かれた学習漢字30字種を用いた。各文字は、B4判原稿用紙の1ますに1文字が納まるように書かれた。教科書体活字は、石井細教科書体を用いた。それぞれの漢字について、1文字を2つの構成要素に分けた。30種類の漢字は、構成要素の配置によって、構成要素が左右に並ぶもの(町、状、校、機、村、林、新、親、都)、上下に並ぶもの(今、完、禁、苦、興、息、青、市、常)、「たれ」をもつもの(病、度、府、原、応、座)、「によう」をもつもの(述、近、迷、連、送、追)の4グループに分けた。

各文字ごとに、文字および各構成要素の上下左右端の座標を測定し、文字の縦横比、構成要素間の横どうし、または縦どうしの大きさの比、つまり(後に書かれる構成要素の横または縦方向の大きさ) / (先に書かれる構成要素の横または縦方向の大きさ)を求めた。

【結果】 文字の縦横比を、手書き文字と教科書体活字で比較した。「によう」を持つ漢字は、手書き文字ではすべての文字で横長であったが、教科書体活字では正方形に近い形であった。「によう」以外の漢字についてみると、手書き文字では、教科書体の活字に比べて縦長の度合いが大きかった(活字で縦長の文字はより縦長に、活字で横長の文字では、横長の度合いが小さくなるか、縦長になった)。手書き文字で縦長の度合いがきわめて大きくなる文字は、「常、市」で、最終画が長い縦画で、終筆部は「はらい」の構造であった。

文字の構成要素間のバランスを、ふたつの構成要素の縦どうしの大きさの比、横どうしの大きさの比を用いて比較した。左右に分割される漢字、上下に分割される漢字、「たれ」を持つ漢字では、「状、校」の縦どうしの大きさの比(手書き文字では「つくり」が大きく、活字では「へん」が大きかった)、「度、応」の横どうしの比(手書き文字では、中に入る部分が大きく、活字では「たれ」が大きかった)以外は、手書き漢字も教科書体活字も同様の傾向を示し、たとえば、横方向どうしの大きさの比が、活字で「つくり」の方が大きい文字は、手書き文字でも「つくり」の方が大きかった。「によう」を持つ漢字は、手書き文字も活字も横どうしの大きさは「によう」の方が大きかった。縦どうしの大きさでは、活字では「によう」が大きく、手書き文字では「によう」の方が小さかった。

【考察】 教科書体活字と手書き文字の相違を文字の縦横比と、構成要素間の縦どうし又は横どうしの大きさの比で比較した。文字全体の縦横比では「によう」を持つ漢字以外では、手書き文字は、教科書体活字より縦長に書かれていた。漢字は本来縦書きされてきたので、縦長に書かれやすい構造をもっているのかもしれない。手書き文字で縦長、横長の度合いが大きい文字を見ると、最終画が縦に長く「はらい」で書かれている文字は縦長に、「によう」(最終画が横長ではらいの字面を持つ構成である)をもつ漢字は、横長に書かれやすかった。最終画は他の字面への影響の度合いが、他の字面に比べて少ないと考えられる。はらいは、とめなどに比べて縦方向又は横方向に大きく書かれやすい構造であると考えられる。これらから、はらいを持つ漢字が手書きされる場合は、他の字面との相互関係が少ない字面が縦または横に大きく書かれやすく、文字全体の縦横比に影響を与えていると考えられる。構成要素間の大きさの比で、活字と同様の傾向を示さなかった漢字が「はらい」をもっていることも、はらいが大きく書かれやすいことと関係があると思われる。構成要素間の大きさの関係で、手書き文字では、一字を構成する要素のうち、より複雑な構成要素の方が大きく書かれやすい事がわかった。これは、書字における運動のしやすさと関係していると考えられる。

平仮名及び算用数字による筆者識別Ⅱ

○菅原 博嗣

川村 司

若原 克文

三井 利幸

(愛知県警察本部) (愛知県立旭丘高等学校) (愛知県警察本部) (愛知県警察本部)

〈はじめに〉

筆跡から特定の筆者を識別する方法や、残された筆跡がある特定の筆者によって記載されたものかどうかを判断するには、従来、豊富な経験に基づく方法で行われており、正確な判定ができるまでにはかなりの経験を必要としているのが現状である。

そこで、我々は筆者識別をパーソナルコンピュータを用いて判定する方法の研究・報告を行ってきた。

今回、試料とする平仮名筆跡「あ・そ・な」、算用数字筆跡「2・4・7」を成人10名がそれぞれ6回ずつ記載して、各筆跡を2次元の座標点に置き換え、多変量解析法を用いて検討した。

〈実験方法〉

(1) 筆跡の数値化の方法

試料とする各筆跡をX、Y軸上におき、主として字面の導入、終筆等を座標点として、X座標、Y座標の順序を一定にして1行とする。

以上のように、比較する筆跡を全て数値化し、それぞれの数値の基線（大きさの異なる筆跡を一定の基準によって揃えるための数値）で除し、処理された数値を用いて以下の検査を行った。

(2) クラスター分析による検討

本検討は、数値化した筆跡を2名間で類似性の高いものから順次クラスターを形成させていく方法で、各座標点の最短距離を最小自乗法により求め、最後の2点になるまでクラスター計算を行い、2名間の要素が分離するかどうか筆者識別を行った。

(3) 主成分分析による検討

本検討では、2名間の筆跡の要素の相関係数を求め、この相関係数から主成分分析により要素の共通性を抽出し、この相関係数から得られた主成分得点を固有値で補正した後、クラスター分析を行い2名間の要素が分離するかどうか筆者識別を行った。

(4) 偏差値からのクラスター分析による検討

(2)で述べたクラスター分析による検討で、分析に用いた数値（行列）をそのまま用いると、変化幅の大きい特定の要素のみでクラスター分析が行われる可能性がある。

そこで、2名間の筆跡の要素全てが同一の重み

でクラスター分析が行われるように、要素ごとに平均値になおした数値を用いてクラスター分析を行い、2名間の要素が分離するかどうか筆者識別を行った。

以上の3方法で検討を行い、総合的な判断から筆者識別を行った。

〈結果及び考察〉

(1) 平仮名筆跡について

クラスター分析による分離率は100%、主成分分析及び偏差値からのクラスター分析による分離率は98%であった。

(2) 算用数字筆跡について

クラスター分析及び主成分分析による分離率は82%、偏差値からのクラスター分析による分離率は71%であった。

以上の結果から、平仮名筆跡についてはほぼ100%の分離率を得ることができ、各文字の検討*1)を上回る分離率が得られた。

このことから、文字数及び測定点を多くすることにより、本方法による筆者識別が十分に可能と考えられる。

また、平仮名筆跡には字面構成が簡単に湾曲の多い文字が今回検討した文字の他にもあることから今後検討を行う予定である。

次に、算用数字筆跡についてはほぼ70%の分離率が得られ、各数字の検討*2)と同程度の分離率であった。これは、算用数字は面数が少なく個人内においても変動の幅が大きいことによるものと考えられ、識別精度を高めるための検討が必要である。

今後、複数の算用数字の組み合わせによる検討を含めて、他の算用数字及び数値化の座標点の取り方に検討を加える予定である。

*1),*2) 日本応用心理学会第60回大会論文集

枠内署名筆跡の筆者識別

○川村 司
(愛知県立旭丘高校)

菅原博嗣
(愛知県警察本部)

若原克文
(愛知県警察本部)

三井利幸
(愛知県警察本部)

<1> 緒言

異なる複数個の文字を検査の対照筆跡として筆者を分離するのに、文字毎に分離の程度を調べて総合的に判断する試みは以前に報告した。今回は長方形の枠内に書かれた複数個の文字の構成点の座標データを全文字分一括入力し分析した結果について、さらに文字の配置(配字)データを加えたものをも一括して分析した結果について報告する。

検査筆跡として縦、横が 20mm, 71mm の長方形の中に原田弘治と記入されたものを用いた。一人あたりの筆跡数は10個とし、10人分を無作為に抽出した。

<2> 1文字毎の分析結果

従来報告してきた方法である。筆跡の特徴を捉えるため原、田、弘、治の筆跡にたいしそれぞれ 11, 6, 9, 10 個の測定点を定め、その座標として得られた筆跡データから2人分をとりだす全ての組合せに対し、クラスター分析(測定値、偏差値)、主成分分析、因子分析の4つの手法で筆者別に分離した数を調べたのが表1である。総合的に判断するとは言っても文字によって分離の程度は異なるため一定の基準が作りにくいことがわかる。さて因子分析についてだが、不取束は20個の字に共通する因子がないということで(同一人物の筆跡とは考えにくいという観点から)消極的に分離に相当すると考えるがこの点の解釈をめぐる問題が残るので以後の項では扱わない。

<3> 4文字分一括処理による分析結果

測定する点を減らして筆者の書き癖が特に強く表れる点に限定した。文字毎にそれぞれ 5, 4, 4, 5 点をとりそれぞれ分析してみると測定する点の減少によってすべての場合について識別率が低下していることが

わかる(表2)。しかし4文字分のデータ36個を一括して入力して分析した結果は9割という高い識別率を示した。

<4> 枠内の配字による分析結果

一つの文字の測定点を配字の特徴を観察するのに必要最小な3点とした。図1のように座標軸をとり、4文字分計12点の座標を読み分析したものは6割程度の識別率しか得られず満足できるものではなかった。

<5> [文字のデータ+配字データ]一括処理の結果

<3>と<4>のデータを一括入力し分析した。全文字一括処理と比べて、測定値のクラスター分析では識別率が下がったが主成分分析、偏差値のクラスター分析では上昇した。

<6> 結論

氏名などのようにまとまったデータにたいしては一括して分析する方が有効であることが確かめられた。また枠内に書かれたものであれば配字にも考慮することによりいっそう精度の高い分析結果が得られることが確認された。

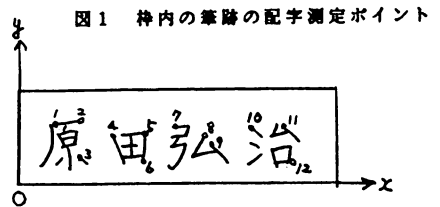


図1 枠内の筆跡の配字測定ポイント

表1 筆者識別状況Ⅰ ○分離 **不取束 ×混合

文字	K-M分析		主成分分析		因子分析			偏差値K-M分析		4つとも○	3つ以上○	2つ以上○	1つ以上○
	○	×	○	×	○	**	×	○	×				
原	41	4	36	9	4	35	6	38	7	30	36	38	45
田	27	18	28	17	7	20	18	30	15	23	26	28	34
弘	31	14	25	20	0	30	15	30	15	18	30	34	38
治	41	4	38	7	3	35	7	36	9	29	38	42	45

表2 筆者識別状況Ⅱ ○分離 ×混合

文字	K-M分析		主成分分析		偏差値K-M分析	
	○	×	○	×	○	×
原	15	30	16	29	9	36
田	20	25	14	31	12	33
弘	17	28	16	29	15	30
治	19	26	18	27	18	27
全文字	42	3	40	5	40	5
配字	26	19	29	16	29	16
全文字+配字	34	11	43	2	43	2

多変量解析による筆者識別 — 鑑定手法への導入 —

○ 若原克文 菅原博嗣 三井利幸 川村 司
 (愛知県警察本部) (愛知県警察本部) (愛知県警察本部) (愛知県立旭丘高校)

〈緒言〉

多変量解析法を用いての筆者識別は、長年にわたり筆者等が検討し一応の成果を修めたが、現状の筆跡鑑定に導入するにあたり、多変量解析法のいかなる分析法が有効であるか、分析の手順、また、鑑定のどのレベルにおいて活用することができるのか問題点の抽出を試みた。

〈方法〉

検討した資料は、実務鑑定で使用した2名の氏名筆跡(「橋、光、広」「河、合、見」の6文字)で検査文字と対照資料(それぞれ同一氏名が10回、11回記載のもの)である。また、比較試料として10名にそれぞれの氏名筆跡を10回記載した筆跡中、第4、5回目の氏名筆跡及び同一筆者に対し検査文字の氏名筆跡の写真を提示し、作為的に模倣して2回記載するよう教示した筆跡を使用した。入力データは、筆者等が従来から行っている拡大文字の座標点を読み取り、標準化のために基線を決め、その基線の長さで除した数値を使った。分析方法は、素点からのクラスタ分析、主成分分析からのクラスタ分析、偏差値からのクラスタ分析の順で行い、(1)対照文字間、(2)検査文字と対照文字間、(3)検査文字及び対照文字と比較試料間、計12回を個々の文字及び3文字の全データで分析した。比較試料の模倣筆跡については検査文字及び対照文字と模倣比較試料間で10回の分析を試みた。

〈結果及び考察〉

検査文字と対照文字間の分析結果は全て混合、個々の文字間での分析は「橋」分離9混合1「光」分離1混合9「広」分離8混合2「河」分離9混合1「合」分離5混合5「見」分離4混合6、3文字間の分析は「橋光広」分離8混合2「河合見」分離10混合0であった。なお、各クラスタ分析のうちひとつでも混合するデータについては混合、全クラスタ分析で分離したデータを分離したものとして結果を出した。また、3文字の検討では、分析方法(1)における資料内変動の大きい資料を削除したデータとの分析結果である。

分析方法(1)の結果より、クラスタの分離数とクラスタ距離との関係から、クラスタ距離の大きな資料は、その筆者の個人内変動の幅が大と判断でき、小さければ安定した資料と確認できる。また、分析方法(2)及び

(3)の分析に際し、資料内で分離幅の大きい資料については削除した上で分析し、分析精度の向上をはかることができる。分析方法(2)では、検査文字と対照文字間のクラスタ位置より同一筆者の記載変動の範囲内の文字であるか否かの検討ができる。つまり検査文字のクラスタ位置が対照文字内に存在しクラスタ距離が、他の対照文字間のクラスタ距離内にあれば、同一筆者の記載変動の範囲内の筆跡と判断できる。他方、クラスタ位置が対照文字のクラスタの端に位置し、クラスタ距離が大きく離れる検査文字については異なる筆者の筆跡と判断できる。今回の結果からは、各条件において検査文字が対照文字と混合及びクラスタ距離が近似し同一筆者の範囲内に存在すると認められた。分析方法(3)の結果では、比較試料文字との間に、個々の文字間、3文字間のいずれも完全な分離結果を得ることができなかったが、多くはクラスタの端に位置しクラスタ距離の大きい位置での混合である。検討すると、1個々の文字間は基線の取り方に問題がある可能性もあり、「光、合」の基線を変え、再度分析したが結果は同様であった。2比較試料が2文字のため比較文字の傾向抽出が不十分で明確な分離ができなかった公算がある。従来2名間の筆者識別ではいずれも最低5文字の文字間での対照を行っており、現在、追試中である。3データ数が増える3文字間の分析では識別率が向上し、個々の文字間より複数の文字間での分析が有効であることが確認できた。

模倣筆跡の対照では、個々の文字間でのみの分析で分離と混合の割合が5割前後の比率であり、今回の分析方法では対応できない。現在行われている実務鑑定でも、多くは鑑定不能であり今後の課題である。

〈結論〉

多変量解析法を用いた筆者識別を実務鑑定に導入する前段階の検討を試みたが、今回指摘できた問題点の多くは自然筆跡であればいずれも解決できる。現在行なわれている筆跡鑑定の中で、検査文字と対照文字間が同一筆者の記載変動の範囲内の筆跡か否かの判断の一方法として、従来の鑑定手法と併用することによって客観的な証明力を与えるものである。今後、複数の県の実務担当者に協力を要請し、基礎データを集積し実務鑑定に導入をはかる。

変死動向 (III)

○ 三井利幸
(愛知県警察本部)

若原克文
(愛知県警察本部)

〈緒言〉

昨年、自殺者について自殺者数の推移と自殺方法について報告した。今回は、1974年から1982年までの19年間における変死者数の推移と社会情勢との関連について検討した。今回対象とした変死は、病院で治療を受けていなかった病死者、自殺者、犯罪による死亡者、事故死者(交通事故死者は除く)である。自殺者については、すでに昨年報告したので、それ以外の原因による変死者について説明する。

〈犯罪による死亡者〉

死亡原因として、絞死、扼死、溺死、窒息死、損傷死、刺切創死、銃創死、新生児殺、焼死、ガス類死、傷害致死に分類した。総死亡者数は1974年から1980年の間が年間約90名、それ以後は年間約60名前後であった。このうち新生児殺は経済的な余裕ができたことによる医療機関での処置と、簡単な避妊方法の開発により、1981年から緩やかな減少傾向を示している。ガス死も都市ガスが天然ガスに変換されてきた1984年頃から急激に減少し始め、1987年以後は年間1名程度になっている。焼死、溺死、窒息死は各年ごとの変化がランダムであり、死亡者数も窒息死が最高で16名程度、その他が8名程度とそれほど多くはない。犯罪死で多いのは絞殺、傷害致死、刺切創殺である。これらの死亡者数は平均で絞殺が約10名、刺殺が約15名、傷害致死が約12名である。いずれも男性の死亡者のほうが女性より多い。被害にあった原因も、最近は何情怨恨によるものが増加傾向にある。

〈事故死〉

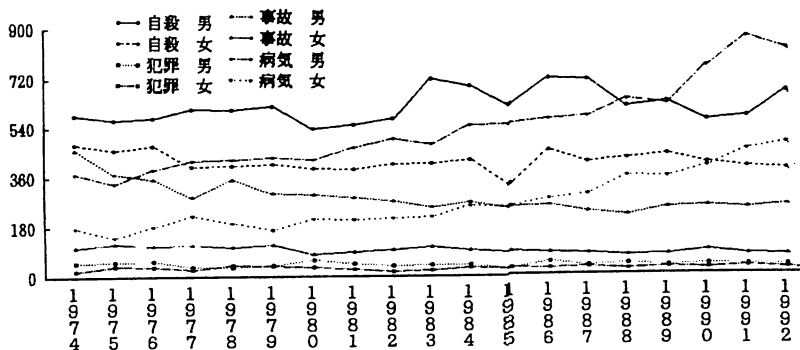
事故死には、溺死、窒息死、転落死、れき死、損傷死、焼死、凍死、劇毒物死、ガス類死、労災死等がある。これらのうちで溺死、窒息死、焼死、労災死以外は死亡者が比較的少なく、19年間の間で目立った変動もない。焼死者は、ここ10年間60才以上の高齢者の増加が目立っている。溺死は全体として減少傾向にあるが、1974-1982年は1-9才の幼児の死亡者が30-70名と多いのに対して、それ以後は70才以上の老人の死亡者が幼児の死亡者と同程度の平均15名になってきている。これは、出生率の低下が原因と考えられる。窒息死については、1974年から1978年にかけて乳児の死亡者数が20名前後と多いが、これは子育て方法の変化によるものと考えられる。労災死は、死亡者の年齢が徐々に高齢化にシフトしてきている。労働環境が変化してきて、危険な作業が機械化されてきたにもかかわらず全体の死亡者数が50-80名とそれほど減少しないのは、死亡者の大半が資本力の弱い零細企業に集中しているためである。労災死はまた当然なことであるが、女性の死亡者は少なく平均して男性の1/10程度である。

〈病死〉

通院の経緯がなく、病気で自宅或いは外出先で死亡した人を病死として計算した。変死者数の内で最も数が多い。病死は、そのほとんどが脳溢血と心臓死である。特に心臓死の死亡者が極端に多い。これは、他の病気で死亡した人も、最終的に病名が心不全とされることが多いためである。近年これが問題となってきている。脳溢血は40才台から20名前後と急激に増加して

きており、80才台までは圧倒的に女性の死亡者と比較して男性の死亡者の方が多い。心臓死は、50才台から100名を超え急激に増加してきている。特に1988年以降50-60才台の男性と70才台の男女の死亡者が約150名と、1974-1977年と比較して3-5倍になっている。これは、日本の社会構造が高齢化にシフトしてきたためと考えられる。

過去19年間の自殺・犯罪死・事故死・病死による変死者数



●テーマの背景

従来のマーケティングの分野における香り評価調査においては主にSD法などを中心とした質問紙法が中心であった。しかし、大脳生理学的な測定に比べ客観性が疑問視されつつあると同時に、嗅覚の特殊性に関する近年の研究結果からすると嗅覚の感覚内容は予め調査主体の側が設定した軸(項目)にそって整理・回答しがたいものであるということも指摘され始めた。

一方、香りが人間の心身へもたらす影響や効果について大脳各部位の興奮や鎮静といった形以上の内容を心理学的に明らかにすることもまた求められている。

それは、香り刺激に対して人が起こす内的な反応や変化をいかに引き出し、検討するかということに外ならない。そこで以下の点を明らかにすることを目的として、実験を行った。

●目的

1. 「香り」から人が連想し描きだすイメージの特徴
2. 「香り」から人が連想し描きだすイメージの個人差と共通性
3. 「香り」から人が連想し描きだすイメージの「香り」評価方法としての応用可能性と今後の課題

●方法

「香りイメージ連想法」

香り刺激を提示しながら、「女性像」のイメージ連想を求め、連想内容の採集、分析を行った

- ・提示した香り刺激：一般に市販されているシャンプー8商品(ABCDEFGH)を使用
- ・対象者：法政大学男女大学生18(のべ144)人
- ・場所：法政大学心理学実験室
- ・実験期間：1994年6月~7月

●結果

・シャンプーの香りからイメージされた女性像を整理すると、どの香りの場合もイメージは対象者によって大きく異なることはなく、大変一致度の高いものとなった。

・例えば、Bの香りからはふわふわまとわりつくイメージ、乗り物や動く感覚、友好性や干渉性、古さ等がイメージされ、Dの香りからは白色、未熟さ、活動性、非女性性、そして集団の話し声等のイメージが対象

者から共通して頻出した。

- ・このような連想内容はシンボルとして置き換えてみると、幾つかの共通の軸に整理可能であった
- ・各軸の方向性もSD法のそのように意味的な反対語にはならず、一部を除いて同方向の質的・量的な差として理解できるものであった
- ・各刺激によって「音」や「温度」「皮膚感覚」「色」「大きさ」「明るさ」「動き」「干渉性」「圧迫感」など他の感覚器官との通様相性あるいは共感覚の存在を想像させるイメージも多かった
- ・香りが苦手、弁別できないという対象者においても連想イメージの混乱はなく、かつイメージへの置き換えによって香りの記憶保存も可能であった
- ・香り自体の好悪と、連想イメージへの好悪は必ずしも一致せず、あるものにその香りがついたときの社会的効果や意味についても語られることがわかった

●考察

・香りから人が抱くイメージはいきなり内面に沸き上がるようないわく言いがたい「感じ」や「気分」の投影にも似て、論理的な整合性を越えた複合のようなものとして語られた

- ・またそれは香料の素材からくるイメージ(グリーン、エレガントな、等)とは全く関係がなかった
- ・しかも、そのイメージを語る対象者にはその内容に対して強い確信や生々しい情動反応が伴う所に特徴があった。これも人の嗅覚刺激に対する反応の重要な特徴と言えるだろう

・そして、その内容は個人差よりも共通性の方が大きい、一方では文化(留学生)や性の違いによってある種の香りのイメージのある部分が反転するなどの結果も見られ興味深い検討課題となった

◎この方法をさらに深めることによって、従来の質問紙法では得られなかったような香りに対する個人の情動的なものまで含めたより深い質的な評価、香り使用に対する社会的な意味や効果、あるいは香りの使用によって多くの人が共通して受ける時間感覚や温度感覚など感覚的なものや、対人認知、行動面での影響等、幅広い問題においても明らかにできるのではないかと考える。

方向感覚に関する一考察

豊村 和真
(北星学園大学)

【目的】

方向感覚に関わる心的過程を明らかにするために、方向感覚という用語に最もよく適合すると考えられている方位評定課題(竹内, 1990)を行なわせるが、この時、被験者がどの程度評定対象の空間に関わってきたかについての統制を計るため、CGによる空間探索プログラムを作成し、被験者がCG空間内の建築物について方位評定を行なう際の反応時間や誤りを検討する。また、方位評定課題で示される心的過程と、諸橋(1992)の方向感覚質問紙による意識水準での方向感覚の優劣との関連を検討する。

【方法】

被験者は、2年次の大学生56名(男子11名, 女子45名)である。使用した装置は、パーソナルコンピュータ(FM-TOWNS)のセットである。なお、使用したソフトウェアはFM-TOWNS用のC言語(HIGH C)によって記述された。

被験者は、まず全員で方向感覚質問紙に答えた後個別にCGによる方位評定課題を行なった。それは、パーソナルコンピュータによって実現された仮想的な空間(以下CG空間)を被験者に探索させ、その空間に対する認知地図を形成させる段階と、CG空間内で現在いる場所から、同じCG空間内の任意の建物の方角を答える段階との2つの段階に分けて行なわれた。後者では、スタート地点から目標とするCG空間内の建造物に正対した状態を基準方位からの身体のズレ0°として、真上から見て時計まわりに、0°, 45°, 90°, 135°, 180°, -135°, -90°, -45°と身体を回転させた時の光景の静止画像が提示された。被験者は刺激提示後に自分の身体の向きを中心とした各建物の方角を、8方向のテンキーを使用してできるだけ速やかに回答することが求められた。試行は、練習試行10試行を含めて50試行行なわれた。

実験後各コンピュータの磁気記憶装置には、学籍番号、性別、身体の向き、被験者が答えた方角、正解の方角、および反応時間が記録された。

【結果と考察】

基準方位からの身体のズレの角度が0°~135°間と-135°~0°間で、反応時間の一次関数的な増加傾向、減少傾向がみられた。即ち、180°を除いてズレの角度が時計回り・反

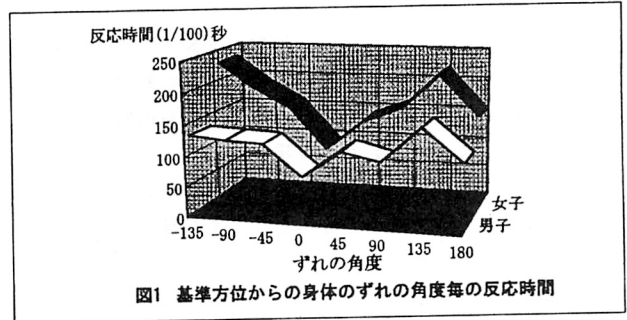


図1 基準方位からの身体のずれの角度毎の反応時間

時計回りとも大きくなるに従って、一定の反応時間の増加がみられた(図1)。これは心的回転(Shepard & Metzler, 1971)実験の反応時間のパターンに近いものであると考えられる。すなわちこの結果は、与えられた視覚刺激と基準方位との関係把握において、ズレの角度の大きさがそのまま反応時間に影響するような、アナログ的な記憶表象の操作を被験者が行なったことを示唆している。

次に、方向感覚質問紙の22項目について因子分析することによって2因子が得られた。第1因子は、先行研究との関わりでみると、第一因子は方位・方角に関する記述の多さから、竹内(1990)の「方位と回転」因子や、谷(1987)の「東西南北音痴」などの因子と共通の因子であろうと考えられる。第2因子は、高い因子負荷量を示す項目が少なく、先行研究と比較することが難しいが、主に注意や記憶に関する記述が含まれる項目が一定の因子負荷量を示しているため、竹内(1990)の「記憶と弁別」因子が該当するのかもしれない。

さらに被験者毎に、CGによる方位評定課題の全試行の平均反応時間、誤りの数の合計を求め、先に算出した因子得点、及び方向感覚質問紙の各項目との間で相関分析を行なった。その結果、第一因子とCGによる方位評定課題の平均反応時間との間に $-0.389(p < .01)$ の相関を得た。また、第一因子とCGによる方位評定の誤りの数との間に、 $-0.244(p < .1)$ の相関がある傾向がみられた。これらより、自己の方向感覚を良くみなす者は空間に自己を定位する能力が高い傾向があることが示唆された。

本研究は非学会員の皆川一郎との共同研究である。また、本研究の核となる視点移動に関連するライブラリの提供、及びノースの改良に多大な協力をいただいたYS-11(山川総司)氏に強く感謝する。

キルリアン写真による気功の心理生理学的研究(2)

藏本逸雄・内田誠也 菅野久信
MOA九州生命科学研究所

【はじめに】

前回、私たちは気功を施した木の葉および冥想訓練者の指先のキルリアン写真の定量的評価による変化を報告¹⁾した。しかし、キルリアン写真測定は、ストリーマ放電を利用しており、一回一回の放電は不安定である。そこでキルリアン写真を厳密に考察するために、木の葉および機械本体の安定性を考慮する二つの実験を、環境実験室内(26±1°C)で行なった。

(1) 気功を施した木の葉のキルリアン写真の解析

自然放置状態の木の葉のキルリアン写真の変動を考慮に入れたコントロール実験を行ない、気功を施した木の葉のキルリアン写真と比較した。

(2) キルリアン放電の連続測定

被施術者の指先の連続キルリアン撮影を行ない、途中2分間の気功を施した。

【実験方法および解析手法】

実験(1) 気功を施した木の葉のキルリアン写真の解析

2枚の木の葉(a葉、b葉)を同時に枝から切り取り、キルリアン写真を各々8枚撮影し、温度一定の部屋で20分間シャーレの中に置いて放置した後、再び各々8枚ずつ撮影した。これらのキルリアン写真を画像解析し、20分放置前後の木の葉の変化量の差を求めた(コントロール実験、n=25)。また、これとは別に2枚の木の葉(c葉、d葉)を同時に切り取り、キルリアン写真を各々8枚撮影し、各々シャーレの中に置き、2枚中1枚(c葉)の木の葉に気功を10分間施し、20分後また同様に各々8枚ずつ撮影した。これらを同様に画像解析し、気功前後の木の葉の変化量の差を求めた(気功実験、n=25)(図1)。但し、木の葉はホンコンカボックを用いた。

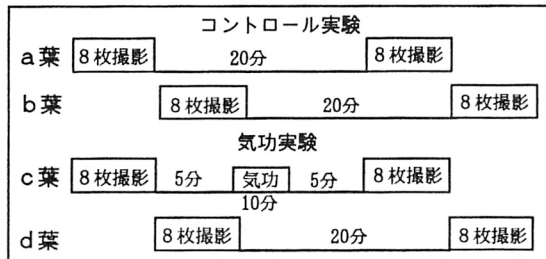


図1 気功実験(1)の方法

実験(2) キルリアン放電の連続測定

透明導電プラスチック(グンゼ株)を放電板とし、被験体の下から放電状態を鏡で反射させ、暗視カメラ(ナイトピニアC3100, 浜松フォトニクス株)で撮影し磁気テープに記録した。この画像データをアナログ画像取り込みボードを介してコンピューターに取り込み、画像解析ソフトで発光

量を解析した。取り込み解像度は640(H)×480(V)dpi、1フレーム1/30sec.で2sec.間加算した。

【結果】

実験(1): 2枚間(a-b間あるいはc-d間)の変化量を算出し、その変化の数学的検定(ANOVA)でp<0.05の場合を有意な変化と見做した。その結果、a-b間で、a葉の有意な増加が2例、b葉の有意な増加が7例、残り16例については有意な変化はなかった。c-d間において、c葉の有意な増加が7例、d葉の有意な増加が6例、残り12例について有意な変化はなかった(表1)。そこで、a-b間とc-d間の差を χ^2 検定を行なった結果p<0.005の有意差が生じた。

表1 気功施術木の葉のキルリアン写真の解析結果

	Control		Qi-Gong
a葉 > b葉	2	c葉 > d葉	7
a葉 < b葉	7	c葉 < d葉	6
有意差なし	16	有意差なし	12
合計	25	合計	25

実験(2): 被験者の人差し指の周りの発光量を、40秒おきに解析した結果を図2に示す。120秒後気功が始まると発光量の減少が見られ、240秒後発光量の回復が見られた。

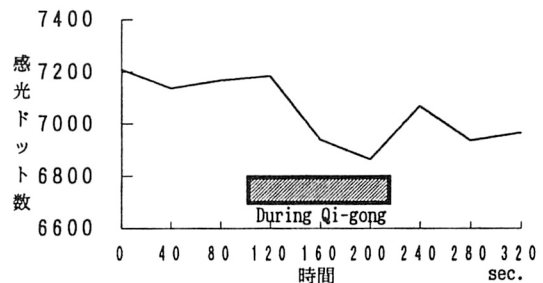


図2 連続撮影における感光数の時間的变化

【考察】

実験1の結果より、コントロール実験でも結果のばらつきが見られたが、それ以上に気功を施術された方の木の葉の放電量の増加が確認された。また、実験2の気功による放電量の減少は、局所的に変化しており、ばらつきによる変化とは言い難い。よってキルリアン写真は気功の研究における一つの指標となりうると思われる。今後、放電現象の増加および減少の意味について検討したい。

参考文献

- 1) 藏本逸雄他、キルリアン写真による気功の心理生理学的研究(1)、日本応用心理学会第60回大会発表論文集 252-253、1993

気功訓練に伴う不安傾向の変動

○ 藤 永 誠 (山岡 淳) 大 村 政 男

(日本大学大学院) (日本大学文理学部)

目的

気功は、リラクセーションと関連し、調身、調心、調息を通じて、心身統一の状態を目指す健康法と言われている。本調査は、気功訓練をしているものは、気功訓練前と比較して、訓練によって不安傾向が変動するかどうかについて検討したものである。

方法

被験者は気功教室を毎週1回自分の意志で通っているひと22名(男2名, 女20名; 29歳~70歳)である。

日大版のSTAI「自己評定質問紙(SEQ-STAI)日大版II」を用い、調査を行った。

調査は、気功訓練を始める前と、その4~6月後に行った。

結果

Table 1は、状態不安傾向の変動を示したものである。訓練前のMは39.8(SD8.3)、訓練後のMは34.4(SD7.1)、相関係数(r)は+0.38である。差の検定をしてみると、 $t. = 3.14$ ($p < 0.1$)で、気功訓練前後の状態不安の有意差を立証できる。

また、22名の中、3名(13.6%)は訓練後に少し状態不安上昇しているが、1名は不変で、ほかの18名(81.8%)は状態不安が低減している。

Table 2は、特性不安傾向の変動を示したものである。訓練前のMは41.3(SD9.7)、訓練後のMは36.9(SD8.2)で相関係数(r)は+0.80である。差の検定をしてみると、 $t. = 3.78$ ($p < 0.01$)で特性不安も気功訓練前後に有意差がみられる。

また、22名の中、4名(18.2%)は訓練後に、特性不安が少し上昇しているが、1名は不変で、ほかの17名(77.3%)は特性不安が低減している。

考察

調査の結果からみれば、気功訓練に意欲的なものは状態不安と特性不安の両者を低減させる傾向を持っていると言える。実際に状態不安あるいは特性不安が少し上昇したのもあるが、気功訓練を積極的に行うことで、情緒面の安定化がみられることが示唆されたといえよう。

Table 1 気功訓練に伴う状態不安の変動

状態	N	M	SD	r	t.
気功前	22	39.8	8.3	+0.38	3.14
気功後		34.4	7.1		

Table 2 気功訓練に伴う特性不安の変動

状態	N	M	SD	r	t.
気功前	22	41.3	9.7	+0.80	3.78
気功後		36.9	8.2		

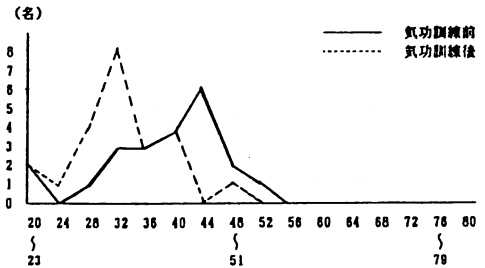


Fig.1 気功訓練に伴う状態不安の変動

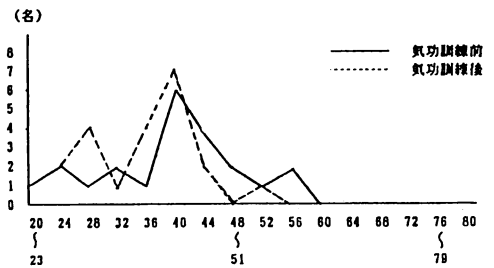


Fig.2 気功訓練に伴う特性不安の変動

音刺激と振動刺激の生理心理学的影響 (1)

○山岡 淳

日本大学文理学部

時田 学

日本大学大学院

はじめに

音楽や音に関する研究は多く行われているが、これらのほとんどは、可聴域の音を刺激として用いている。人間の可聴範囲は約20Hz~20kHzであるが、それ以下の可聴範囲外の振動は、音楽や音を知覚する場合や、情動、リラクゼーションなどとの関連で無視できないはずである。この低周波振動は、従来もっぱら公害として身体に与える影響が多く研究されてきた。しかし山田(1987)は、生理的影響は個人差が大きく、公害問題になるような閾値レベルであってもその影響は現れ難いとしている。このような振動を刺激としてとらえた場合、その受容器を、聴覚系のみならず体性感覚系もあわせて検討するべきであると考え、音と振動刺激を同時に提示し、SD法で測定を行った実験の結果、量因子の増加が顕著であった(吉川・山室, 1987)。今回、音刺激に音楽刺激を用い、生理的指標を測定した実験を行った結果について述べる。

方法

被験者: 大学生4名(女子4名)、平均年齢22.2歳。
刺激装置: 音刺激装置は、コンパクトコンポネントシステムMX-M5(VICTOR社製)を用い、振動刺激はBODYSONIC AMPLIFIER MODEL PH-500(BODYSONIC社製)を用いた。

刺激: 音刺激は、2種類のヒーリングミュージック①「Life, 1993」(宮下, 1990)、②「大空」(宮下, 1991)の一部を用いた。①は楽曲中主に約100Hzの低音がリズムに用いられており、②では主に高音が使用されている。今回用いた2種類の音楽は、高音と低音の構成成分による比較をするために、あえて同一の作曲家が作曲したヒーリングミュージックを使用した。

測定: 脳波計1A98(NEC三栄社製)を用いて脳波、呼吸、脈波の測定を行った。脳波は、国際10-20式電極配置法の12部位に電極を装着した(時定数0.3s)、呼吸はサミスターを用い鼻孔より導出し(時定数3.2s)、脈波は耳朶より導出した(時定数3.2s)。導出した各指標は、紙書き記録を行うとともに、データレコーダXR-710(TEAC社製)で記録した。

手続き: 被験者は電極およびピックアップ装着の後、シールドルーム内で仰臥し、音刺激および振動刺激の提示を受けた。振動刺激は音刺激の音楽によって振動している。刺激の提示は、①ボディソニックを用いずスピーカのみで音刺激を提示する場合、②ボディソニックを用いて振動刺激を提示し、同時にスピーカから音刺激を提示する場合の2条件を設定した。各条件で、2種の刺激をそれぞれ90s提示した。提示順序は被験者ごとにカウンターバランスした。また実験後にその刺激の評定を求めた。

結果と考察

被験者の各指標のうち、今回は心拍数および呼吸数に関しての結果を述べる。各音刺激提示時の平均心拍数、平均呼吸数はFig1のとおりである。

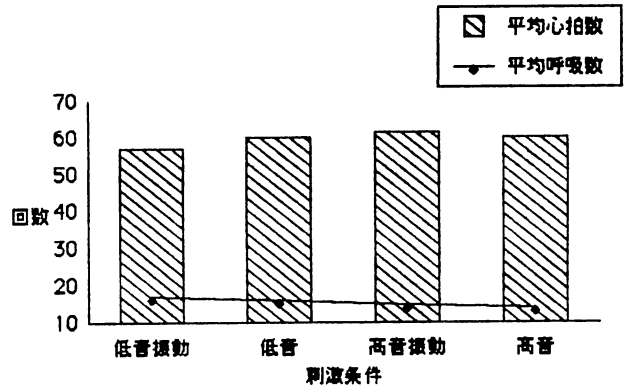


Fig.1 各音刺激提示時の平均心拍数、平均呼吸数

振動刺激を提示した場合、音楽刺激により心拍数は異なった。呼吸数は顕著な変化は示さなかったが、低音刺激で振動刺激を提示した場合に呼吸数が増加した。この一時的な上昇は、(被験者の内省からも)低周波振動刺激は明確に知覚されるという事実から、振動開始時点で振動に注意が向けられたことによって、一時的に呼吸が乱れたと考えられる。他方心拍数は、一般に音楽に対する反応として、増加することが知られている(Harrer&Harrer, 1977)のに、今回は、振動刺激の提示によって心拍数が低下したのは大いに注目すべきことである。低周波振動の周波数を変化させて、今後も検討を加えていきたい。

プロレス観戦の心理

富 家 孝

(日本女子体育大学)

【はしがき】 わたくしは応心第60回大会(鹿児島大学主催)において「プロレスについての社会的態度の研究」を発表した。これは、プロレスに対する社会的態度と柔道に対するそれとを、リッカート法による20アイテムの尺度上において比較したものである。わたくしがずっと以前から新日本プロレス・リングドクター(コミッション・ドクター)をしている関係からこのような発表をしたのであるが、今回は、観戦の心理について報告をする。

【目的と方法】 プロレスをどのような心理で観戦しているかを、アンケート法によって調査し、その性的差異を追究するのが本研究の目的である。アンケートのアイテムは次のとおりで、これらに対して2件法(○×)によって回答するというものである。

【男子プロレスについてのアイテム】

- (1) 壮絶な戦いだから。
- (2) おもしろい技が見られるから。
- (3) 男っぼいショウ(興行)だから。
- (4) 乱闘(場外での)がおもしろいから。
- (5) ムシャクシャしているとき気分が晴れるから。
- (6) 自分の闘争心をかき立てるから。
- (7) 社会不安を解消させるから。
- (8) 自分の不安を解消させるから。
- (9) ごひいきの選手がいるから。

【女子プロレスについてのアイテム】

男子のアイテムと異なる部分は次の2問である。

- (3) 色っぼいショウだから。
- (10) 男子の試合よりも美しいから(新設アイテム)。

【調査対象】 男子学生79人、女子学生44人、合計123人である。調査対象は男子学生132人、女子学生85人であったが、プロレス(男・女)を実際に、あるいはテレビで見していない者のデータは除外してある。

なお、データはSASによって整理してある。この処理に当たっては、都立世田谷工業高校の谷嶋喜代志教諭(日大心理博士後期課程出身)の援助を受けた。ここに記して感謝の意を表しておく。

【結果】 結果の主要なものは次のとおりである。

男子アイテム(1): 男子よりも女子のほうが壮絶な戦いだと思う人が多い($P < 0.05$)。

アイテム(2): 技におもしろさを見出しているのは男子に圧倒的に多い($P < 0.01$)。

アイテム(3): 男っぼいショウということについては男女間に有意差は見られない。

アイテム(4): 場外乱闘については男子よりも女子のほうがおもしろさを感じている($P < 0.01$)。

アイテム(5): ムシャクシャしているときに気分が晴れると思うということについては、男女間に有意差は見られない。

アイテム(6): 男子は圧倒的に女子よりも闘争心がかき立てられることが多い($P < 0.01$)。

アイテム(7): 社会不安の解消については男女間に有意差は見られない。

アイテム(8): 自分の不安の解消についても(7)と同じである。

アイテム(9): 女子よりも男子のほうにひいきの選手がいる人が多い($P < 0.05$)。

女子アイテム(1): 壮絶な戦いと思うことについては男女間に有意差は見られない。

アイテム(2): 技のおもしろさを見出しているのは男子に圧倒的に多い($P < 0.05$)。

アイテム(3): 女子プロレスを色っぼいショウと見るのは男子に圧倒的に多い($P < 0.01$)。

女子アイテム(4)~女子アイテム(9)については、いずれも男女間に有意差は見られない。

アイテム(10): 女子プロレスが男子プロレスよりも美的かどうかについては、男女間に有意差は見られない。

【結論】 男子のプロレス観戦は、男子プロレスについては、技のおもしろさ・闘争心のかき立て・ひいきの選手の存在といったことが、また、女子プロレスについては、技のおもしろさ・色っぼさがその要因になっている。女子のプロレス観戦は、男子プロレスに対して、壮絶な戦い・場外乱闘におもしろさを見出すという特徴はあるが、観賞の心理としては比較的シンプルである。これらのことを興行サイドから考えてみると、観客に男性が多ければあらゆる技を出しあって壮絶に戦い、観客に女性が多ければ場外乱闘のおもしろさを見せることが、プロレス観戦のファン心理を満足させることになる、と言い換えることもできる。

看護学生の性の考え方・行動に影響を及ぼす要因の分析(その4)

○村本淳子

内海 澁

(東京女子医大看護短大)

(千葉大学看護学部看護実践研究指導センター)

<はじめに>

看護の場において、患者・家族の性の問題に対し援助を考えていく時、その援助方法は看護者の性の価値観・考え方によって異なる。したがって看護者自ら、自分の性の価値観を明らかにしておくことは必要である。また教師にとっては看護学生の性の考え方・行動に影響を及ぼす要因を明確にしておくことは適切な指導を行ううえで必要である。

我々は58回の本学会から看護学生と助産課程専攻の学生の性の考え方・行動に影響を及ぼす要因について生育歴や環境の側面から報告してきた。今回は看護学生自身の性に関する体験・行動に着目し、体験・行動の違いと影響因子について明らかにすることを目的とする。

<方法>

調査対象は都内の3年課程私立看護短期大学の2年次の学生 113名で、平均年齢は19.7才である。

調査方法は選択法の質問用紙を用い、アンケート方式で調査した。質問内容は学生の性行動の実態、家庭の環境20項目、性に対する自分の考え12項目、性のイメージ20項目、異性の親(ここでは父親)のイメージ20項目である。

<結果および考察>

回収率は100%で、そのうち有効回答は 111名(98.2%)であった。

1. 性行動・体験の実態

性行動の実態は表1のとおりである。1993年度の青少年の性行動に関する調査結果と比較すると、性行為の体験はやや高かったものの、疑似性行為(キス・ベッティング)は全国の平均とほぼ同様な結果であった。

表1. 看護学生の性行動の実態

質問項目	体験の有無		体験あり		体験なし	
	人数	%	人数	%	人数	%
性行為の体験がある	54	(48.6)	57	(51.4)		
キス・ベッティングの体験がある	69	(62.2)	42	(37.8)		
痴漢にあった体験がある	101	(91.0)	10	(9.0)		
セクシャルハラスメントを受けた体験がある	54	(48.6)	57	(51.4)		
性に関して友人に相談した体験がある	67	(60.4)	44	(39.6)		
高校時性教育を受けた体験がある	81	(73.0)	30	(27.0)		

2. 性行動・体験に影響を与える因子

「家庭内のこと」「自分自身について」「性ということばのイメージ」「父親のイメージ」の4領域についてそれぞれバリマックス回転法により、因子分析を施行し、それぞれ3因子を抽出した。(表2参照)

FACTOR LOADINGS

<家庭内のことについて>

	f 1	f 2	f 3
家庭は楽しいところである	0.86	-0.01	-0.22
暖かい家庭である	0.84	0.14	-0.13
心やすまる家庭である	0.84	0.06	-0.16
雰囲気は明るい	0.78	0.06	-0.15
何でも話せる雰囲気がある	0.68	-0.09	-0.46
コミュニケーションがある	0.67	0.22	-0.26
親の愛を感じる	0.62	0.11	-0.04
雰囲気は自由である	0.60	-0.35	0.02
家庭内の決定権は父親にある	-0.01	0.66	-0.02
親が何かと干渉する	-0.07	0.64	-0.29
両親は仲がいい	0.50	0.63	0.07
両親は互いに尊敬あっている	0.50	0.63	0.08
しつけは厳しい	0.02	0.59	-0.26
母親は性役割を明らかにする	-0.04	0.26	0.82
性について話せる雰囲気がある	0.30	-0.17	-0.64
母親とあなたの会話はあ	0.24	-0.01	-0.81

<自分の性に対する思い・考え>

	f 1	f 2	f 3
性の話しを聞くことが好きである	0.90	-0.00	0.21
性の話しをすることが好きである	0.86	0.06	0.29
異性に関心がある	0.56	0.33	0.26
女性であることがうれしい	0.11	0.85	0.16
女性であることがいや	0.06	-0.80	0.00
女性であることが誇り	0.14	0.76	0.10
女性であることが恥かしい	-0.00	-0.68	0.03
学校で性についての教育を受けた	-0.09	0.11	0.90
性について学習したい	0.34	0.09	0.71
性に関する本を読むことが好きである	0.46	-0.20	0.56
性に関する知識はある方だと思う	0.34	0.11	0.55

3. 性行動・体験と影響を与える因子との関係

それぞれの性行動・体験別に12因子の学生個々の因子スコアの平均値を算出した。その結果、12因子の中で性行動・体験の違いにより有意の差が多くあった因子は「自分の性に対する思い・考え」で、逆に「父親イメージ」は3因子ともに性行動・体験と有意の差はみられなかった。

描画テスト・GHQ・CASに示された看護学生の健康度についての検討(2)

○川本利恵子(産業医科大学医療技術短期大学)、金山正子(山口大学医療技術短期大学部)、田中マキ子(山口大学大学院)、内海澁(千葉大学)

目的：看護教育における臨床実習は人間関係面の教育の場として重要である。しかし、臨床場面は一般大学生には経験できないようなストレスとなって看護学生を襲う。そこで、看護学生は、精神的健康性が必要となる。前回、我々は、HTPテストとGHQを用いて看護学生の社会的成熟度と健康度を調査し、看護学生は成熟途上であることと神経症的傾向と不安がかなり高いという結果を得た。今回はCASを用いて実習前後の不安の変化と健康度を検討することを目的にした。

対象：S医療技術短期大学看護学科3年生60名である。年齢構成は、19～21歳である。

方法：

HTPテストと日本語版GHQ精神健康調査票(General Health Questionnaire)とCAS不安診断検査(Cattell, R. B.により開発され、対馬・辻岡らによって邦訳、標準化したもの)を用いて測定する。

HTPテストはオリエンテーションの4月(I)の1回のみとし、CAS・GHQは4月(I)と特にストレスの高いと予想される外科系の実習前後(II・III)と卒業前3月(IV)に集団法で実施した。

日本語版GHQについては、標準的に4段階方式の評定を求め、0-0-1-1のGHQ採点法を適用した(中川、大坊、1985)。HTPテストはBuck, J. Nの量的分析項目つまり家屋画116項目、樹木画103項目、人物画126項目の解釈項目のチェックにより、出現率を算出した。まず出現率から量的分析を行い、次に質的分析を行なった。

CASはまず5因子別得点と不安粗点を求め、換算表によって標準得点を求めた。

結果及び考察：

1. 各テストに示された傾向

HTPテストの結果：PRG値のTは66.3±20.0であり、Tは81.3±12.6、Pは74.4±9.9であった。全体の平均は74.0±7.3となった。分析的側面であるDetails・Proportion・Perspective別のPRG値は日常の処理能力、関心の高さが傾向として示された。

GHQテスト結果：GHQ得点は、0～60点の得点幅を持つ。4月(I)の結果は14.7±10.9であった。GHQ得点の分布低得点に分布のピークがあった。最高得点は44点であり、45点以上の高得点者はいない。大坊氏の研究結果の大学生群の分布と同傾向である。神経症との臨界点である16/17点以上は6名(10.0%)、平均得点7.4±7.8という結果が得られた。GHQ得点の4要素のスケール(A：身体的症状、B：不安と不眠、C：身体的活動障害、D：うつ状態)の結果では、A・B値に高値を示した。

CASの結果：CAS得点は4.7±2.0であった。高不安得点者(CAS得点7点以上)は14名(23.3%)であった。因子別得点はQ₁・Q₂因子の得点が高かった。

以上の結果から、看護学生の中には約10%程度不安や精神的に不健康な状態になりやすい者が存在すると考えられる。またその不安や不健康の要因は、身体的な問題や、不眠、不安などであり、不安は緊張・衝動による緊迫状態と考えられる。

2. HTP・GHQ・CAS得点の関係と実習前後による変化

HTPとGHQ・CAS高得点群の関係をまず検討した。GHQ・CAS高得点群のPRG値に特徴はみられなかった。

次に実習前後の変化について検討した。GHQの5月(II)の結果は、22.0±12.1と高得点の傾向へと変化した。16/17点以上は39名(65%)と増加した。要素スケールの結果は、やはりIIにおいて4要素とも得点が高くなり、IIIにおいて低下した。CASの因子別得点には特徴的な差はなかった。さらに、PRG値の低値群、GHQ高得点群、CAS高得点群別に、実習前後の変化について検討した。CASの得点においては変化がみられなかったが、GHQ得点においては実習前(II)において得点が高くなり検定で有意差を認めた。CAS因子得点はQ₁がいずれも高く、GHQ要素スケールではBスケール値が高い結果を示していた。以上の結果から、実習前にはストレスが高まると考えられる。

看護学生の情意的発展

その3 看護実習別の特性

金井 悦子

日本赤十字武蔵野女子短期大学

<研究目的>

看護学生の情意的発展の特性を看護実習別に考察する。

<研究方法>

1) 期間・対象

平成4年10～11月 3年生46名

平成5年10～11月 3年生39名

2) 方法

- ・「関係発展評価法」を用いて、看護実習終了直後に○印をつける。これをひとり5回つける。
- ・「関係発展評価法」につけられた○を1点として発展点の数量化をし、実習別に20の中項目、4の大項目の平均率を算出し、関係発展構造図による類型をする。

<結果及び考察>

3年次の10～11月にかけての8週間の期間に学生はそれぞれ地域・母性・小児・老人・精神の看護実習の他に成人看護学における選択実習として、リハビリテーション・ホスピス・がん・成人保健・救急・透析の実習を行っている。

85名の学生が認意に5回つけた総数は425でこの11の実習別平均発展率を、自己との関係、人との関係物との関係、集団内関係別に示した(表1)。

これを各実習別に発展構造図として類型化したのが(図1)で、これを看護実習別発展類型(表2)にまとめた。発展構造図の④全体領域発展型(表2)地域・小児・老人・成人保健・救急の5実習で、自己・人・物・集団内関係の比率の差が少なく、社会的広がりの中で、4領域全体に均等に情意的発展が

みられている。⑥自己との関係発展型は透析看護実習で、透析者と共感しながら自己の分化・拡大において発展している特徴がとらえられる。③人との関係発展型は、精神・ホスピス・がん看護実習で情報や場面における人とのかかわりでの情意が育っている。

①集団内関係発展型は、母性・リハビリテーション看護実習で、ここでは対象者や、家族、医療職者とのチームワークやかかわりを重視した実習であることにおいて集団内関係が発展しているといえる。

<まとめ>

3年後期の看護実習に「関係発展評価表」を活用して、11の看護実習別に情意的発展の特徴を考察し、次のことが明らかになった。

1)11の看護実習別の特徴は ④全体領域均等発展型 ⑥自己との関係発展型 ③人との関係発展型 ①集団内関係発展型の4型に類型できる。 2)学生はそれぞれ違う対象者とのかかわり活動を展開することによって、新たに実習の意義を見出しているといえる。今回の研究はそのことの一歩を実証したものと考える。

表1. 看護実習別「自己・人・物・集団内関係」平均発展率

大分目	①地域	②母性	③小児	④老人	⑤精神	⑥自己	⑦ホスピス	⑧がん	⑨成人	⑩救急	⑪透析
	N=74	N=50	N=53	N=77	N=89	N=27	N=19	N=9	N=7	N=8	N=12
自己との関係	51.796	48.128	46.042	41.292	49.808	56.044	56.044	38.512	55.236	52.496	56.108
人との関係	53.958	53.996	50.562	40.774	56.1	62.802	62.802	44.44	57.138	59.164	51.662
物との関係	49.814	45.198	45.906	35.492	44.416	52.834	58.134	35.548	52.374	54.994	51.106
集団内関係	54.142	55.464	46.534	38.174	48.758	73.082	51.224	28.144	50.472	50.832	41.106

表2 看護実習別発展類型

発展類型	看護実習
④ 全体領域均等発展型	地域 小児 老人 成人 救急
⑥ 自己との関係発展型	透析
③ 人との関係発展型	精神 ホスピス がん
① 集団内関係発展型	母性 リハビリ

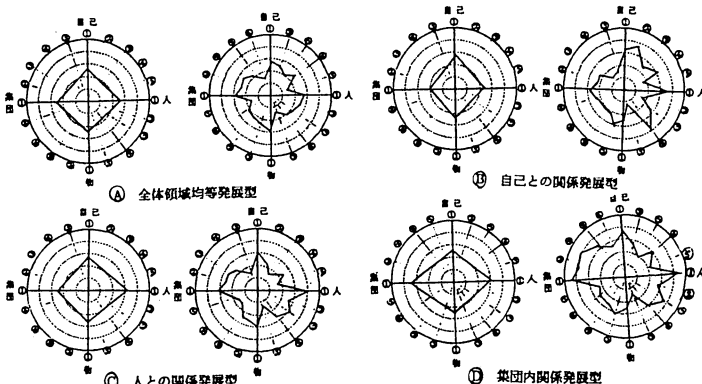


図1. 類型別発展構造図

看護短大生の死に関する意識調査

○松尾典子

秋田大学医療技術短期大学部

内海 凜

千葉大学看護学部

看護は、死を目前にした患者や死の不安を持つ患者に、積極的にかかわる場合がある。したがって、看護婦にとって人間の死へのみとりはさけることができない問題である。そこで、死と看護の学習の一環として、当大学医療技術短期大学部看護学科学生（以下、看護短大生という）に死に関する意識調査を行う。

研究目的：以下により看護短大生の死に関するイメージや意識を明らかにする。

- 1). 死から連想する言葉や色のイメージ
- 2). 死について意識する時
- 3). 身近な者の死に出会った学生の死に対する意識
- 4). 学生自身の死についての意識

研究対象：A大学医療技術短期大学部看護学科学生1年次学生233名（平成2年，3年，4年度入学）

研究方法：年度前期後半に質問紙法にて実施。

その結果は因子分析を行い検討する。

結果と考察

1. 死から連想する言葉や色のイメージについて
死から連想する言葉は、恐怖42名18%、靈魂39名16.8%現実的な出来事、すなわち葬式、骨、棺桶など31名13.3%、悲しみ25名10.7%、人生の終り24名10.3%が上位の回答である。色については黒117名50.2%白52名22.3%、灰色36名15.5%が上位の回答である。回答した言葉と色名の範囲から看護短大生の死に対するイメージは、暗い恐怖、悲しみの世界を同定している。

2. 死について意識するとき、身近な者の死に出会った学生の死に対する意識、学生自身の死について回答25項目の結果を因子分析し、8因子を抽出した。

表1は看護短大生233名の因子分析による8因子における因子負荷量の高い項目である。項目の内容から第1因子は人生を重要視、第2因子は死に対する悟り、第3因子は死に対する近接感、第4因子は現実直面、第5因子は偶然的思考、第6因子は死に対する抵抗、第7因子は死に対する意義、第8因子は死に対する無関心とみることができる。

3. 因子分析、8因子における対比回答項目の差
死について考えたことがあるかどうかの有無では、第1因子人生を重要視、第2因子死に対する悟り、第3因子死に対する近接感、第5因子偶然的思考に有と答えた学生の方が無と答えた学生より1%危険率で有意であった。また、第6因子死に対する抵抗、第8因子死に対する無関心では無と答えた学生の方が有と答えた学生より有意であった。本人の宗教の有無では有意差はなかった。家族の宗教の有無では第5因子偶然的思考に有の方が無より有意であった。また第6因子は死に対する抵抗では無の方が有意であった。看護短大生の死に対する意識は本人より家族の宗教により影響を受けているようである。学生自身が死に直面した経験の有無では、第3因子死に対する近接感で、無と答えた学生の方が有と答えた学生より有意であった。死から連想する言葉、恐怖と靈魂で、第2因子死に対する悟りには靈魂、第5因子偶然的思考には恐怖と答えた学生の方が有意であった。

表1 看護短大生233名の因子分析による8因子における因子負荷量の高い項目

因子	項目	係数	内容
第1因子	9. 生命の尊さを改めて感じ自分の人生を大事にした いと思ふようになった。	0.73	人生を重要視
	5. 死に臨んだことが書いてある本を読んだとき。	0.67	
	22. 無いを獲さないよう精一杯生きる。	0.44	
第2因子	13. 死よ永遠の命であり、天国への歩みだと考えるよ うになった。	0.61	死に対する悟り
	19. 死ぬことに対する覚悟はない。	0.57	
	11. 死に対する覚悟が湧いてきた。	0.53	
第3因子	17. 死はいつか必ず訪れるもの、運命であり仕方がな い。	0.49	死に対する近接感
	1. 両親、友人というような身近な者の死に直面した 時。	0.79	
	8. 死というものを身近に感じるようになり、生命と ははかないものだと思ふようになった。	0.76	
第4因子	3. 患者の死に出会った時。	0.67	現実直面
	2. 自分自身が死に直面した経験がある。	0.66	
第5因子	6. 夜など一人ぼんやりしているとき。	0.57	偶然的思考
	18. 死に対する不安、恐怖を感じる。	0.57	
	10. 死の恐ろしさを再認識した。	0.52	
第6因子	12. 永久に死にたくないと思ふようになった。	0.51	死に対する抵抗
	25. 何も感じない。	-0.65	
	7. 自分が準備であると感じたとき。	-0.59	
第7因子	20. 死んでしまえば全てが終わりでである。	-0.42	死に対する意義
	23. 楽に死にたい。	-0.72	
	21. なにかをなしとげてから死にたい。	-0.47	
第8因子	24. 死ぬことより新しく生まれ変わることに希望があ る。	0.41	死に対する無関心
	4. 自己にゆきづまりを感じ、悩み、挫折感をもった とき。	-0.59	
	14. 充実した人生は死によって証明される。	-0.59	
第8因子	15. 遠い先のことでは現実の問題としてとらえがたい。	0.45	死に対する無関心
	18. 死ぬことなど考えたくない。	0.39	

看護学生と大学生における 劣等感と自己教育力

○ 森 千 鶴 佐藤 みつ子 内海 凜
(東京都立医療技術短期大学) (千葉大学看護学部)

1. 研究の目的

自己教育力は自分で自分を教育する力をいう。これは、自分の中に教育する自分と教育される自分を持ち、葛藤を通してよりよい自己を形成する営みのことを指している。このように自己教育力が、形成される過程においては、その人の心理的な要因も関連すると考えられている。劣等感は、その内容によって、学習への意欲を持ったり、意欲を喪失させることがある。そこで本研究では、自己を教育しようとする意欲と関連がある学生の劣等感をとりあげ、検討した。

II. 方法

1. 調査対象：看護短期大学生78名、女子大学生60名。
平均年齢は、18.7歳でした。

2. 調査内容：榎田が独自に作成した自己教育力調査項目に劣等感の有無、内容、劣等感を感じた相手、劣等感に対する解決方法についての質問項目を作成した。

III. 結果：有効回答数は、125名、92.7%。

1. 劣等感の有無

看護短期大学生も、一般大学の女子学生も劣等感はあると回答したものが、約8割を占めていた。

2. 劣等感の内容

看護学生の劣等感の内容で最も多いものは、『体格』であるのに対し、女子大生は『成績』であった。しかし第2位ではどちらも『容姿』であった。

3. 劣等感を感ずる相手

劣等感を感ずる相手は『友人』と回答した看護学生は、59.2%、女子大生は55.3%であった。

4. 劣等感を感じたときに解決する方法

看護学生の場合『あきらめる』が最も多いのに対し、女子大学生の場合『自分には長所・短所がある』と考える」と回答した者が最も多かった。

5. 自己教育力調査項目の因子分析

累積寄与率は49.9%で、信頼性を示すクロンバックの α 係数は0.74であった。各因子に集結した質問項目から、第1因子は『目標達成意欲因子』、第2因子は『プライド因子』、第3因子は『学習嫌悪因子』、第4因子は『自己嫌悪因子』、第5因子は『自己統制因子』、第6因子は『向上因子』とそれぞれ命名した。

6. 劣等感の有無による因子得点の比較

劣等感があると回答した者は、第3因子の学習嫌悪因子においてマイナスに負荷し、劣等感のない者はプラスに負荷していた。すなわち、劣等感のない者の方が学習嫌悪が強いことが示された。

7. 対象別劣等感の有無による因子得点の比較

看護学生、女子大生別に劣等感の有無で比較したところ、女子大生には有意な差の認められた因子はなかった。しかし、看護学生では、劣等感のない者に自己嫌悪が強い傾向が認められた。

また、看護学生は、容姿に劣等感を持っている者は、劣等感をもっていない者に比べ、自分の考えや行動が批判されても腹を立てないなど、向上への意識が高い傾向が推察された。容姿は、青年期にある学生が劣等感を感ずやすい内容ですが、この劣等感を克服しようとし、さらにその劣等感を昇華させようとする意識が働くために、自己を向上させようとするのではないかと考えられた。一方、性格に劣等感を感ずている者は、感ずていない者に比べ、向上しようとする意識が低い傾向が認められた。

IV. 考察

劣等感とは、他人との比較を意識することによって強く自覚される。学生たちは、自分の一番身近にいるために、友人を自己と比較する対象として意識していることが明らかになった。劣等感の内容で、看護学生女子大生ともに容姿が上位にあげられたことは、青年期女子の特徴が現れているものと思われた。一般に劣等感とは、『身体的要因』、『社会経済的要因』、『知的要因』、『性格行動的要因』など様々なことによって生じ、これらは年齢特性によって変化するといわれている。そして青年期になるにつれて、知的要因や性格行動要因が強くなるとの報告がある。しかし、本研究の結果は、『体格』や『容姿』を気にする学生が多く、身体的要因においては、先の研究と異なる結果が認められた。劣等感を感じたときの解決方法として最も多いもので比較すると、看護学生は、あきらめるという消極的解決方法をとることが多く、女子大生は自己の良さを認めようとするなど積極的な解決方法をとっていることが明らかになりました。

劣等感を持つことによって学習意欲をかき立てられ、自己受容できるようになるのではないかと考えられた。

看護教育による精神病に対する看護学生の意識構造の変化—3年間の継続的研究—

○金山正子

田中マキ子

川本利恵子

内海 滉

(山口大学医療技術短期大学部) (山口大学) (産業医科大学医療技術短期大学) (千葉大学)

I. 研究目的

看護学生は、精神疾患や精神疾患患者に対してさまざまな意識や不安を持っている。前回、我々は看護学生の意識構造と不安が実習により変化することを報告した。今回は、看護学生の精神病に対する意識構造がどのように変化するか、1生次から3年次までの3年間にわたって継続的に調査し、検討した。

II. 研究方法

1. 対象：Y短期大学部の1991年度入学生80名。

2. 調査方法：精神病に対する意識の質問紙を用いて、1年次、2年次、3年次精神科実習前、3年次精神科実習後の4回の時期に調査を行った。なお、2年次は精神保健の講義の履修後であり、3年次は成人看護学Ⅱ(精神疾患と看護の講義)履修後である。

3. 分析方法：4回の調査すべてに回答した学生70名の調査結果を使用した。質問紙の回答を「非常にそう思う」～「まったくそう思わない」の5段階とし、「非常にそう思う」を5、「まったくそう思わない」を1として数値化し、因子分析(バリマックス回転)を行った。調査時期により4群に分類し、項目別平均値および因子得点平均値の差の検定を行った。さらに、4つの各群で因子分析を行い、因子構造を比較した。

III. 結果

1. 項目得点の比較：23の項目別平均値の差の検定で有意差を認めた項目を表1に示す。1年次と2年次の比較では3項目に、2年次と3年次実習前の比較では5項目に有意差を認めた。また、3年次の実習前後では11項目に有意差を認めた。「患者は近づきにくい、自分の世界に閉じ籠る、気味が悪い、危険、人間関係が困難、怖い、何をするかわからない」「病院は暗い」などの否定的な項目は、和らいだ回答に変化し、「身近な病気」「患者は純粋」などの肯定的な項目は、より肯定的な回答に変化した。

2. 因子の抽出と因子得点の比較：因子分析の結果、累積寄与率48.51%で4因子を抽出し、恐怖・嫌悪因子、理解的因子、社会的疎外因子、否定的因子と命名した。因子得点平均値の差の検定結果、恐怖・嫌悪因子と社会的疎外因子に有意差を認めた。恐怖・嫌悪因子は、1年次と2年次では差はないが、3年次実習前に低くなり(P<0.01)、実習後はマイナスに大きく負荷

し、変化を認めた(P<0.01)。また社会的疎外因子は、1年次と2年次とで有意差を認め(P<0.05)、精神科看護に関する知識のない学生の方が、社会的疎外に関する態度をとる傾向があった。

3. 因子構造の比較：1年次は、不安因子、理解的因子、否定的因子、恐怖・嫌悪因子、社会的疎外因子の5因子を抽出した(累積寄与率52.2%)。2年次は恐怖・嫌悪因子、理解的因子、社会的疎外因子、否定的因子の4因子を抽出した(累積寄与率50.0%)。3年次実習前は、恐怖・嫌悪因子、理解的因子、否定的因子、肯定的因子の4因子を抽出した(累積寄与率50.7%)。3年次実習後も同様に、恐怖・嫌悪因子、理解的因子、否定的因子、肯定的因子を抽出した(累積寄与率51.0%)。学習の進行により、因子を構成する項目の内容に違いがみられ、変化する姿が示された。

IV. 考察

1年次から3年次実習前までに変化を認めた項目は少ないが、実習後に変化を認めた項目が多く、看護学生は実習により否定的な見方が和らぎ、肯定的な見方に変化していることが示された。2年次の変化には精神保健の講義の影響が考えられ、知識を得ると社会的疎外の態度をとらない傾向がある。また、2年次から3年次の実習後にかけては、恐怖・嫌悪の態度をとらない傾向がしだいに強くなる。これは、成人看護学Ⅱの講義の影響と臨床実習の影響が推察される。特に、臨床実習の影響が大きいことが理解でき、看護学生の看護観の形成に臨床実習が大きな役割を果たしていることが推察される。以上のことより、看護学生の精神病に対する意識構造は、精神科看護に関連する学習の進行により変化し、講義や臨床実習に影響される。

表1. 項目別平均値の有意差の検定

項目	1年次と2年次	2年次と3年次実習前	3年次実習前と3年次実習後
1精神疾患患者は近づきにくい		*	***
3精神疾患患者は自分の世界に閉じ籠る			*
5精神疾患患者は気味が悪い		*	***
6精神疾患患者を支えることが必要である		*	
7精神疾患は身近な病気である			**
8精神疾患患者は危険である			**
9精神疾患患者は人間関係が困難である			**
10精神病院は暗い			***
13精神疾患患者は怖い		**	***
17精神疾患は結婚の障害になる			*
19精神疾患は遺伝する	*		
20精神疾患は心の病気である	*		
21精神疾患患者は何をするかわからない	**		*
22精神疾患患者は純粋である			**

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

青年期の自己開示に関する研究(4)

— 対人関係の親密さとの関連について(3) —

今 林 俊 一

(鹿児島大学教育学部)

【 目 的 】

今林(1991,1993,1994)は、対人関係図によって対人関係の質的分析を行い、対人関係の親密さと自己開示の程度、開示動機、開示状況等との関係を明らかにしている。しかし、自己開示動機については開示相手を親しい同性の友人と限定しているために、開示相手との心理的距離の違いによる開示傾向については明確でない。

そこで、本研究では、開示相手との関係の親密さが自己開示動機に及ぼす影響について検討することを目的とする。

【 方 法 】

〔調査対象者〕鹿児島県内の4年制大学の学生 359名(男子 159名, 女子 200名)。

〔調査期日〕1993年7月上旬と11月上旬。

〔調査場所〕学生が受講している大学の講義室内。

〔調査材料及び手続き〕①対人関係図の描画: 岡野・古城(1988)の「円による対人関係図」を用いた。直径1.2cmの自己を表す円が中央に印刷されたB5版用紙上に、現在自分と関わっている、あるいは気になっている他者を円で描き、同時にその他者の性別、自分との関係、描画順を明記することを求めた。その際、円の大きさや配置、数は自由であるとした。

②自己開示動機の測定: 小口(1989)の作成した3因子12項目で構成されている自己開示動機質問紙を用いた。親、対人関係図で自己の円の最も近くに描いた親以外の相手(以下、近い人)、最も遠くに描いた親以外の相手(以下、遠い人)に自分のことを話す際に、

各項目がどの程度あてはまるか5件法で回答を求めた。
〔処理〕自己開示動機の得点化: 各項目について自己開示の高い反応から5~1点とし、個人内で意図性、規範性、感情性のいずれの動機が優勢であるかを調べるために、小口(1989)に従い各動機の比率(各動機の平均値÷各動機ごとに算出した項目の平均点の和)を開示動機得点とした。

【結果と考察】

Fig.1~Fig.3は、開示相手との関係の親密さ別に自己開示動機得点を示したものである。関連の分散分析を行った結果、全ての相手において開示動機の主効果が認められた(親: $F(2,718)=71.71$; 近い人: $F(2,716)=62.83$; 遠い人: $F(2,714)=44.00$, 全て $p<.001$)。すなわち、親や心理的距離の近い人に対しての自己開示は、意図性や感情性の動機より規範性の動機が低く、心理的距離の遠い人に対しては、意図性や規範性の動機より感情性の動機の低いことが明らかにされた。

これらのことから、青年個々は、親や親しい相手に対しては、自分を取り巻く状況や規範に左右されずに、自分とその相手との人間関係を円滑に調整したり、ありのままの自分の感情を打ち明けて蓄積したものを浄化させるように努めていると思われる。一方、あまり親しくない相手に自己開示する場合は、周りの状況や規範に注意深くなり自分の感情を極力抑え、またはコントロールしながら、適切な自己開示ができるように努めていると考えられる。つまり、青年個々は、開示相手との親密さを考慮しながら上手に開示動機のパランスを保っているといえよう。

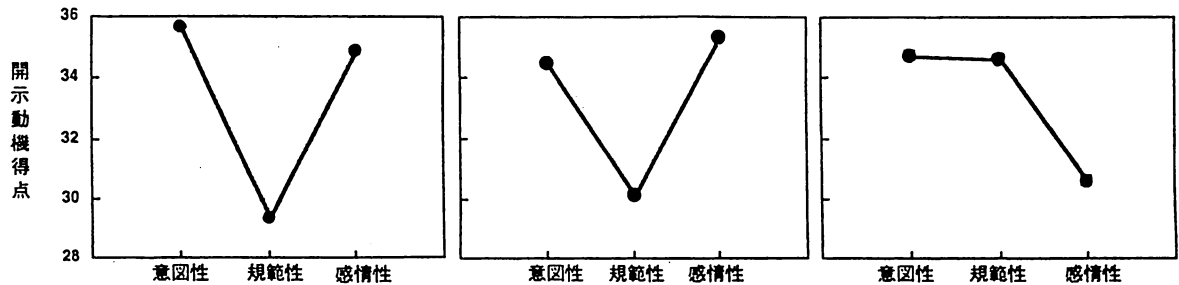


Fig.1. 親に対する開示動機得点 Fig.2 近い人に対する開示動機得点 Fig.3 遠い人に対する開示動機得点
(心理的距離の近い人) (心理的距離の遠い人)

「血液型性格学」は信頼できるか：第11報 [I]

——キャテルの16PFとの関連(その1)——

日本大学 ○ 大村 政 男 富士短期大学 浮 谷 秀 一

序 論 R・B キャテルの16PFの日本版についての評価はあまり——というより、まったくよくない。この16PFについて理路整然とした批判を展開したのは、村上宣寛(富山大学教育学部助教授)の著書「コンピュータ診断 性格テスト——ここは測れるか」(1994年 日刊工業新聞社刊)である。この本は、16PFだけでなくYGもMPIも槍玉にあげている。その16PFとABO式の血液型とを対応させようとする研究が、この第11報の[I]と[II]である。わたくしたちも「16PFはいったいなにを測定しようとしているテストだろう。そのB形式のNO.32の項目に「銃に実弾がはいっていると、弾をぬくまで気が気でない」というのがある。どうしてこのような項目を日本版のテストに入れたのだろう。作成者はいったいなにを考えているのだろう。」と思っている。そういうことを踏まえての研究であることを承知しておいてほしいと思う。

なお、この第11報の[I]は、大村・高山紀代・浮谷の共同研究(1984)として、第11報の[II]は、浮谷・若色智子・大村の共同研究(1992)として発表する。

方 法 16PFのA形式のうち、B因子の「知的に低い—知的に高い」(低知能・高知能)を除く15PFについて集団的な場面でテストが実施された。B因子の項目を削ったのは、それが一見して「知能」を測定することができないと思ったからである。村上宣寛もそれを的確に指摘している。

被験者 日本大学文理学部各学科の学生と日本大学通信教育部の学生、O型：80人、A型：76人、B型：49人、AB型：26人、合計231人(男女合併)。この血液型分布は、 $\chi^2=3.19$ で、このサンプルにゆがみがないことを示している。

15PFの内容 人格特性15対の内容は次の表1のとおりである。星屑のような因子が並んでいる。

表1 15PFの因子別説明

因子	低得点の場合	高得点の場合
A	打ち解けない(分離性)	打ち解ける(感情性)
C	情緒不安定(低い自己統)	情緒安定(高い自己統度)
E	謙虚(服従性)	独断(支配性)
F	慎重(高漸性)	軽率(高漸性)
G	責任感が弱い(低い自己統)	責任感が強い(高い自己統)

因子	低得点の場合	高得点の場合
H	ものおじする(鬱病性)	ものおじしない(冒険性)
I	徹底した現実主義(堅韌性)	防衛的な情緒過敏(敏感)
L	信頼しやすい(信頼性)	疑り深い(懐疑性)
M	現実的に考える(現実性)	空想的に考える(幻想性)
N	技巧がない(率直性)	見通しがきく(巧妙性)
O	確信的である(明朗性)	心配性である(寡黙性)
Q ₁	保守的(保守性)	革新的(急進性)
Q ₂	集団依存(集団依存性)	自己充足(自己充足性)
Q ₃	放縱的(低い自己統合性)	自律的(高い自己統合性)
Q ₄	くつろいでいる(エルグ楽観)	固くなっている(エルグ緊張)

結 果 ABO式血液型群のそれぞれについて各因子の平均値が比較されている。表2は通常のt検定、あるいはコ克蘭・コックスの検定によるものである。

表2 15PFにおける各血液型群の平均値の比較

NO.	因子	O:A	O:B	O:AB	A:B	A:AB	B:AB
1	A	>*					
2	C				<*		
3	E						
4	F	>*			<***		
5	G						
6	H						
7	I	(キャテルたちはここでA型の機敏性を見出している)					
8	L						
9	M						
10	N						
11	O						
12	Q ₁				<***	<*	
13	Q ₂						
14	Q ₃	<*					
15	Q ₄						

表2の結果を記述すると、(1):O型はA型よりも感情性が高い。(2):B型はA型よりも高い自我強度を示す。(3):O型はA型よりも高潮性が高く、B型もA型よりも高潮性が高い。(4):B型はA型よりも急進性が高く、AB型もA型よりも急進性が高い。(5):A型はO型よりも高い自己統合性を示している、ということになる。キャテルたちの研究(1964)よりは収穫は大であったが、このような資料をいくら山積しても血液型と性格との積極的な関連を導き出すことはできない。

「血液型性格学」は信頼できるか：第11報〔Ⅱ〕

——キャテルの16PFとの関連(その2)——

富士短期大学 ○ 浮谷 秀一 日本大学 大村 政男

序論 ABO式の血液型と性格(気質をベースにしたところの)との関連を求める研究は、1916年(大正5年)7月、原来復と小林栄が「医事新聞」954号に掲載した論文に端を発している。その後、軍隊における研究を経て、古川竹二のいわゆる「血液型気質相関説」が出現する。この学説は1927年に発表され、1938年ごろにはそれが内包する思考錯誤(試行錯誤ではない)的な論理によって崩壊してしまう。それから1984年までの約50年間、この魅力的な領域は空白になっていた。この端境期に出現したのが能見正比古の「血液型人間学」という古川学説のコピーである。そして、能見が1984年の日本応用心理学会第51回大会以来批判され、さらにその批判は古川学説の思考錯誤性にも波及していったのである。

問題 溝口元(立正大学短期大学部教授・理博)の血液型気質相関説についての史的探求の業績は実に顕著である。彼は「科学史研究」Ⅱ, 32(1993)に「外国における“血液型とパーソナリティの関係”をめぐる研究」という論文を載せ、そのなかでわたくしたちがここで研究課題にしている、R. B. Cattell, H. Boutourline Young, J. D. Hundleby たちによる“Blood groups and personality traits”(American journal of human genetics, 16-4, 1964)を紹介している。そこで使われたテストは、キャテルたちの“High school personality questionnaire”(HSPQ)であるが、内容は“16PF”の袖珍版といえる。第11報の〔Ⅰ〕で触れたように、かれらはA型が他の血液型よりも“Tender-minded”(繊細性)が高いと報告している。わたくしたちは第11報の〔Ⅰ〕に引き続いて、16PFと血液型との関連を探索してみようと思う。

方法 16PFのうち、B因子(低知能・高知能)を除く15PFについて集団的な場面でテストした。B因子の削除の理由は第11報の〔Ⅰ〕と同じである。

被験者 女子大学生168人。その内訳は、O型: 55人, A型: 68人, B型: 31人, AB型: 14人である。この血液型分布は、 $\chi^2=1.64$ で、このサンプルにゆがみがないことを示している。

結果 16PFのうち、B因子を除いた15因子における各血液型群の平均値の比較は表1に示したと

おりである。平均値の検定は、通常のt検定、あるいはウエルチの検定によっている。

表1 15PFにおける各血液型群の平均値の比較

NO.	因子	O:A	O:B	O:AB	A:B	A:AB	B:AB
1	A						
2	C						
3	E	*>			<*		
4	F						
5	G						
6	H						
7	I						
8	L		<**		<*		
9	M						
10	N		**>		**>		
11	O						
12	Q ₁				<*		
13	Q ₂						
14	Q ₃						
15	Q ₄						

第11報の〔Ⅰ〕では、16PFの二次因子には触れていなかったが、ここでは二次因子の面からも考察してみよう。

表2 二次因子における各血液型群の平均値の比較

低得点-高得点	O:A	O:B	O:AB	A:B	A:AB	B:AB
QⅠ内向性:外向性				<**		
QⅠ低不安:高不安						
QⅡ心情的:行動的	B因子を削除したところはブランクになる。					
QⅢ依存性:独立性	*>			<**		

第11報の〔Ⅰ〕の表2にあげられている結果と、第12報の表1にあげられている結果とを対応させると、12番目のQ1因子(保守性-急進性)において、A型よりB型のほうが急進的であるという結果しか共通点が見当たらない。血液型と性格とが密接に関連しているならば、多数の共通点が発見されなければならない。それが無い——というのは、結局、そこにはなにもないといってもいいのではないだろうか。16PFは正当な理由で批判されているテストであるが、それにしても第11報の〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕の間の共通点が少なすぎる。いくらテスト自体がおかしいにせよ、90対の対応のうち共通点が1つしかないのは不思議である。

発達についての社会意識と家族意識

中原弘之
(茨城大学)

目的

本研究では、現代社会において社会意識の中に人々の発達観がどのように浸透しているかを分析すると共に、その発達観と人々の家族意識との関係性を探り、今後の家族関係研究法への新しい視点について検討を行なうことを目的とする。

方法

1. 調査の内容

(1) 発達観尺度の構造について

現代社会の急速な変化を様々な視点から「～化」としてランダムに取出し、それらの中から特に現代社会において社会的に「発達」として是認されていると思われる事象を選択した。更にそれらを変化の特性から質・量・速さ、変化の対象として人・物に分類し、表1のような構造に基づき尺度作成した。

表1 発達観尺度の構造

対象	質	量	速さ
人	1 欧米化	7 高齢化	13 早教育化
	2 国際化	8 高所得化	14 競争化
	3 レジャー化	9 人口流動化	15 能率化
物	4 技術革新化	10 高層化	16 高速化
	5 合理化	11 物質化	17 インスタント化
	6 都市化	12 消費化	18 電算化

変化の特性の3分類と変化の対象の2分類との組み合わせによる6セルに各々3、都合18トピックスを配置し、これらの18トピックスについて、A現代社会の目指している合理主義的な変化(発達)を志向する意見と、B反合理主義(自然主義)的な変化を志向する意見を対にして、回答者にいずれかを選択させることによって発達観を捉える。

(2) 家族意識について

結婚後、親と同居したいと思うか(拡大家族志向) 結婚後、女性は夫の姓を用いることがよいと思うか(家制度受容)、もう一度生まれるなら同じ親から生まれたいと思うか(親への求縁)の3項目として2件法で回答を求めた。

2. 調査の対象と期日

大学生225名(男79、女146)。1994年1月。

結果

1. 項目の通過状況から

(1) 全体による特色

Bの反合理主義的变化を内容とする項目を選択する傾向が高い。特に3、13、17、19、7の順に高く、この変化に対して批判的であるといえよう。Aの選択率が高い項目は18、1、5、12、2などであり、それらの変化は社会が歓迎しているものである。

(2) 性別による特色

A選択率の高い項目では性差はないが、B選択率の高い項目では男女の順位が異なる。一般に男性の方が女性よりA選択の傾向がある。女性のA選択率が男性より高い9、13は性役割への反発が窺われる。

(3) 出生順位による特色

第1子(含一人っ子)はそれ以外の子よりA選択率が高く、特に1、5、6、7、10の項目において顕著である。

2. 項目間の関連性から

18対の意見項目間の ϕ 係数と χ^2 値を算出したところ、5%水準での有意な項目数は27、1%では15、0.1%では表2の10項目であり、いずれも正の関連を示している。

表2 高い関連性の10組

順位	関係項目	順位	関係項目
1	6-9	6	8-9
2	10-17	7	4-9
3	6-13	8	8-14
4	11-12	9	12-14
5	6-8	10	5-12

3. 家族変数との関連性から

(1) 家族意識の3項目への回答特色

拡大家族志向肯定は約3割。この傾向は男性>女性。第1子<以外の子。家制度受容肯定は約6割。この傾向は男性>女性。第1子<以外の子。親への求縁肯定は約7割。この傾向は男性<女性。第1子<以外の子

(2) 発達観尺度と家族意識との関連

拡大家族志向と9、親への求縁と7および9においていずれも5%水準で有意な関連が認められた。

考察

1:2の割合でAよりBの意見が支持された。Aの支持率は男>女。18項目間の関連では、一貫した意見の反映が認められ、家庭と社会の両生活面での変化に関する意見も一貫性がみられた。

家族意識の3項目からは、回答者の自己中心的な意識と同時に、保守的、依存的な意識の強さが背景に存在するように思われた。

大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてII

○藤田 勉 久東光代 川島 真

(長野県短期大学) (日本女子大学) (尚美学園短期大学)

目的

藤田と川島(応用心理学会第80回大会)は、大学生による講義評価の内容に影響すると考えられる変数として試験の得点、出席状況・授業態度・試験の成績についての自己評定値、単位のとりやすさに関する認識の違いに着目し、講義評価の総合点との関係について調べた。その結果「試験の得点が高い学生ほど講義内容や講義形式を高く評価しやすい」という傾向は認められたものの、他の四つの変数については講義評価の総合点との間に明白な関係は見られなかった。しかし、この研究では、出席状況・授業態度・試験の成績に対する自己評定を4段階、単位のとりやすさを5段階で評定させたため、評定値間で著しい分布の偏りが見られ、そのことが講義評価との関連を不明確にしていた可能性も考えられる。本研究では、こうした前発表の不備を補い、より厳密に上記変数と講義評価との関連について検討した。

方法

被験者 平成5年度前期に発表者(藤田)が担当する一般教育科目「心理学」を受講した女子短期大学生257名。

手続き 「心理学」の試験時に質問項目が書かれた用紙(授業評価シート)を配付し調査を実施した。授業評価シートには、前発表で用いられた講義評価に関する質問項目(「講義はわかりやすかったか」、「講義はまとまっていたか」、「板書は見やすかったか」、「声の大きさはどうだったか」などの10項目)と出席状況・授業態度・試験の3点について自己採点させる質問項目が含まれている。本研究では、講義評価に関する質問項目は0点(非常に悪い)~10点(非常に良い)で評定するよう求め、出席状況・授業態度・試験の成績については0~100点で自己採点してもらった。また、新たに「心理学の成績のつけかたについてどのように思うか」、「今日のテストの難易度はどうだったか」の項目をもうけ、前者は0点(とてもやさしそう)~100点(とても厳しそう)、後者は0点(とてもやさしい)~100点(とても難しい)の間で評定させた。

授業評価シートを配付した際、各質問項目に対する回答は成績をすべてつけ終わってから集計することを

学生に伝え、各質問項目に対してどのような答え方をしても成績にはまったく影響しないことを強調した。なお、当日の試験は30問の穴埋め問題(配点は各問3点)からなり、授業評価シートのすべての質問項目に回答した者には試験の得点に10点を加算する旨学生に伝えた。

結果

講義評価に関する質問10項目の評定値を合計したものを講義評価の総合点とした。総合点は最低で81点、最高で100点で、平均は92.20点($SD=8.08$)であった。

講義評価の総合点と実際の試験の得点、および前述の各質問項目に対する評定値間の相関係数を算出した。結果を表1に示す。講義評価の総合点と有意な相関があったのは、試験の得点($p<.01$)、出席状況の自己採点($p<.01$)、授業態度の自己採点($p<.01$)、試験の自己採点($p<.05$)であった。これより、前年度の

発表で指摘された「試験の得点が高い学生ほど講義内容や講義形式を高く評価しやすい」傾向が本研究において再確認されたとともに、「出席状況・授業態度・試験の成績

表1. 講義評価の総合点と各変数間の相関係数

試験の得点	.26**
出席状況の自己採点	.22**
授業態度の自己採点	.28**
試験の自己採点	.15*
成績のつけかた	-.01
試験の難易度	-.05

* $p<.05$, ** $p<.01$

についての自己採点が高い学生ほど良い講義評価をしやすい」という傾向も認められた。一方、成績のつけかた(≒単位のとりやすさ)や当日の試験の難易度に関する認識の違いは講義評価の総合点と明白な関係をもたなかった。

考察

本研究の結果からも推測されるように、学生による講義評価は必ずしも講義の内容や形式を正確に反映するものではなく、学生側の様々な変数によっても影響を受けることが考えられる。近年、学生による講義評価を実施する大学が増加しているが、今後学生の「講義評価行動」に影響を及ぼす変数を明らかにし、その妥当性を詳細に検討する必要があると思われる。

大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてⅢ

○川島 真 久東光代 藤田 勉

(尚美学園短期大学) (日本女子大学) (長野県短期大学)

目的

講義の質的改善を図ることを目的に受講学生に講義評価を求めるケースが増加しているが、学生による講義評価は必ずしも講義の内容や形式を正確に反映するものではなく、学生側の様々な変数によっても影響を受けることが考えられる。そうした変数の一つに学生の性格特性(行動傾向)がある。本研究では、学生に講義評価を求めると同時に、性格検査を実施し、講義評価と性格特性間の相関関係について検討した。

学生の性格特性を測る手段としてはエゴグラム(山本,1990)を用いた。エゴグラムは交流分析の理論に基づいてアメリカの医師デュセイ(J.M. Dusay)が開発した心理テストで、全ての観察可能な行動を五つの自我状態に分類し、それらの発生頻度をグラフ化したものである(新里ら,1988)。五つの自我状態とは、CP(父親的自我状態;「批判的, 厳格, 命令的」行動傾向)、NP(母親的自我状態;「保護的, 養護的」な行動傾向)、A(大人の自我状態;「冷静, 客観的」な行動傾向)、FC(自由性;「天真爛漫, 自由気まま」な行動傾向)、AC(順応性;「我慢強い, 他人に追従的」な行動傾向)で、これら五つの自我状態のバランスにより個人の性格特性を測ることができる。

方法

被験者 一般教育科目「心理学」を受講した女子短期大学生257名。

手続き 「心理学」の試験時に試験用紙とともに「授業評価シート」を配付し、講義に対する評価を求めた。講義評価は10項目(「講義はわかりやすかったか」、「講義はまとまっていたか」、「板書は見やすかったか」、「声の大きさはどうだったか」など)からなり、各項目に対して0点(非常に悪い)~10点(非常に良い)で評定してもらい、これら10項目の評定値の合計を講義評価の総合点とした(藤田・久東・川島,1994 参照)。また、エゴグラムは「心理学」の講義中に実施した。

結果

対象となった女子短大生257名について、講義評価の総合点とエゴグラムの五つの尺度間の相関係数を求めた。結果を表1に示す。

エゴグラムの五つの尺度のうち、講義評価の総合点

と有意な相関が見られたのは、NP, A, FCの3尺度であった。すなわち、同じ講義を受講していても「保護的, 養護的」、「冷静, 客観的」、「天真爛漫, 自由気まま」といった性格特性を強くもつ学生ほど講義を高く評価しやすい傾向が認められた。中でもNPは3尺度の中でも最も高い相関を示しており、NPの値と講義評価の総合点が深く関連していることが示唆された。

表1. 講義評価の総合点とエゴグラムの五つの尺度間の相関係数

CP	NP	A	FC	AC
.107	.188**	.142*	.152*	.028

* $p < .05$, ** $p < .01$

エゴグラムの開発者であるデュセイは、CP, NP, A, FC, ACの得点総和を心的エネルギーの総量としてとらえているが、五つの尺度の得点総和と講義評価の総合点の間の相関係数を求めたところ $r = .255$ となった($p < .01$)。このことから「心的エネルギーが高い学生ほど良い講義であったと評価しやすい」ことがわかる。

また、エゴグラムの五つの尺度値と試験得点の間でも相関係数を算出したが、有意な相関が見られたのはCP($r = .123, p < .05$)においてのみであった。

考察

本研究では、講義評価の総合点と性格特性間の相関関係について検討したが、エゴグラムの五つの尺度のうち三つの尺度(NP, A, FC)において講義評価との間に有意な相関が見られた。こうした傾向が「心理学」の講義だけに限らず他の講義科目についても一貫して見られるのか、つまり、NP, A, FCが高い学生は他の科目の講義を評価した際にも高い評価をしやすいのか否かについて今後検討する予定である。

引用文献

- 藤田勉・久東光代・川島真 1994 大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてⅡ 日本応用心理学会第81回大会発表論文集(印刷中)
- 新里里春・水野正憲・桂戴作・杉田峰康 1988 交流分析とエゴグラム チーム医療
- 山本晴義 1990 人間関係ゲーム 廣済堂出版

ストレス刺激に対する拇指球上MVの変動

徳田 豊
(鳥取県警察本部)

1 はじめに

身体表面には目に見えない微細な振動がありこれを生体微細振動(Micro-vibration: MV)と呼んでいる。MVの発生機序は 1)心弾動に由来するもの 2)筋原成分とするもの 3)これら両者の複合したものなどが提唱されているが統一した見解は得られていない。ところがMVは骨格筋の緊張状態を鋭敏に反映することから、心理的、精神的な緊張や不安の指標として臨床的な立場から用いる試みがなされている。また、薬物を投与して自律神経との関連も明らかにされている。

今回、座位状態でのストレスとMVの関係を明らかにするため、能動的対処事態である暗算と受動的対処事態である冷水負荷の実験を行った。合わせて仰臥位と座位との差も実験した。

2 MVの検出装置

MVの検出は半導体型加速度ピックアップ(AVS-2GA:共和電業)を使用し、オペアンプで増幅する簡易なMV検出装置を作成した。装置の周波数特性は4~30Hzでフラットであった。MV波形はLafayette社製ポリグラフの各指標(呼吸、GSRおよび指尖脈波)の出力波形と共にデータレコーダ(HR-30:共和電業)に記録した。

3 実験方法

被験者は成人男子9名(21~27才)で実施した。

各指標の検出装置は、腹部に呼吸チューブを、左手示指と環指にGSR電極を、左手中指に脈波用ピックアップを装着し、左手拇指球上にはセンサーを両面粘着テープで取り付け、取付角度が40~50度になる

ように調整した。実験はまず仰臥位で波形が安定した後、安静状態を3分間計測する。その後、肘掛け椅子に座らせ、安静-暗算-安静-冷水負荷-安静の順序で各3分間隔で実施した。暗算は3000から17を連続引き算を無言で行わせ、終了後に結果を答えるよう指示した。冷水負荷は約14℃の水に右手首まで浸させた。

4 データ処理

データレコーダより再生されたMVのデータは、サンプリング周波数100HzでA/D変換器を通してコンピュータに取り込みMEM分析(データ数2048、次数66)を行った。分析区間は20secごとに8系列行い、1系列目を除いた残りの5系列からアーティファクトのない3系列を選別した。

5 結果と考察

Fig.1に各状態における θ (4~8Hz)、 α (8~13Hz)、 β_1 (13~20Hz)、 β_2 (20~30Hz)の出現率を、Fig.2にMV積算値と心拍数を示す。安静と暗算を比較すると β_1 、 β_2 の速波成分の増加と θ 、 α の徐波成分の減少が見られる。MV積算値は増大、心拍数は加速している。T検定の結果、 θ 、 β_1 は5%水準、 α 、心拍数は10%水準で有意差が認められる。安静と冷水負荷を比較すると、 β_1 、 β_2 の速波成分の減少と θ 、 α の徐波成分の増加が見られる。MV積算値は増大しているが、心拍数の変化は見られない。T検定の結果、 β_2 は5%水準、 α は10%水準で有意差が認められる。

以上のことから、拇指球上MVの周波数帯域の分析により、能動的対処事態と受動的対処事態の両ストレスを分離できることが示唆される。

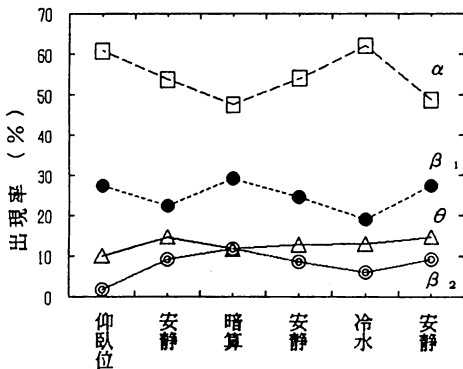


Fig.1 ストレス負荷時の出現率の変動

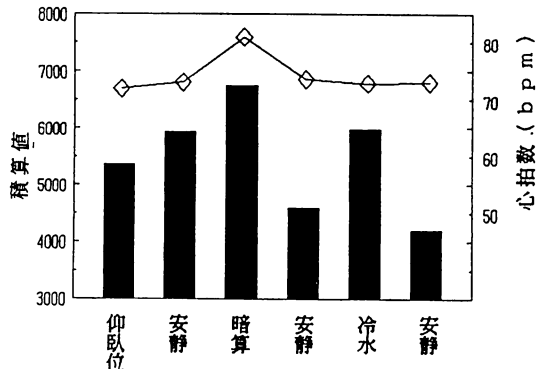


Fig.2 ストレス負荷時のMV積算値と心拍数の変動

感情の特殊な表現文字について

中島 彩花

(日本大学大学院文学研究科)

問題 最近、本来は濁点や半濁点をつけることができない文字にそれらをつけた文字が、若者達の間で使用されている。佐伯玲子(1992)は、中学生が〈あ, い, う, え, お, む, ん〉に濁点をつける場合があることを報告している。また、それらの文字は、ある特定の感情の表現ではないか、と指摘している(『読売新聞』, 1994.4.29.)。以下、このような文字を「新文字」と呼ぶ。本研究では、「新文字」の存在を検証し、「新文字」によって感情があらわされている可能性を検討する。

予備調査

新聞で取り上げられたJR山手線、代々木駅に、保管されていた駅構内の落書き(ポスターの裏を使用し、自由に落書きを許していたもの)を51枚(1993年12月~1994年5月)について、「新文字」の存在を調べた。その結果、〈あ, う, の, ま〉に濁点のついているものを9件確認した。しかし、佐伯の調査に見いだされた〈い, え, お, む, ん〉は確認されなかった。

調査1

目的 どのような文字に、濁点、半濁点のつく可能性があるのかを確認する。

方法 大学生273名(男子135名, 女子138名)について質問紙を用いて調査を行った。質問紙は旧仮名文字を含む平仮名48文字をランダムに並べたものを使用した。被験者には、一般的な表記を無視した上で、濁点や半濁点がつくと思われる文字を○で囲むよう指示した。

結果と考察 48文字の平仮名のうち、本来は濁点のつかない文字は28文字、半濁点のつかない文字は43文字である。それら71文字には全て「新文字」が認められた。「新文字」を1文字以上認めた被験者は、43.0%の117名(男子50名-37.04%, 女子67名-48.55%)であった。なお、濁点のつく「新文字」を認めた被験者の平均回答数は、3.58文字であった。半濁点のつく「新文字」を認めた被験者の平均回答数は、2.93文字であった。濁点、半濁点をあわせた「新文字」を認めた被験者の平均回答数は、6.51であった。表1、表2は、結果を人数別にまとめたものである。

濁点がつく文字「新文字」の方が、半濁点がつく「新文字」より多く認められたのは、一般的に表記されている平仮名の方では、濁点がつく文字の方が多く、

半濁点より見慣れていたためであろう。

表1:濁点がつくと思われる文字

文字	う	あ	え	む	ん	い	ま	ぬ	ゑ	の	み	め	や
人数(名)	76	34	33	21		20	18	14	12	11			
文字	よ	ら	わ	ゑ	お	も	り	に	を	る	ら	ゆ	れ
人数(名)	11				10		9	8		7		6	2

表2:半濁点がつくと思われる文字

文字	く	た	つ	ち	す	か	き	こ	さ	せ	て	と	ろ
人数(名)	20	18		17	13	12		11					
文字	け	し	そ	の	る	ま	も	あ	め	よ	り	ゑ	ゑ
人数(名)	10				9	8	7			6			
文字	む	ら	ん	や	ゆ	れ	う	ぬ	を	い	え	お	な
人数(名)	5			4			3			2		1	

調査2

目的 「新文字」により、感情があらわされる可能性を検討する。

方法 被験者247名(男子学生88名, 女子学生159名)について質問紙を用いて調査を行った。質問紙は一般的な表記の平仮名73文字、「新文字」71文字、計144文字をランダムに並べ、24文字ずつ6種の質問紙に分割したものを使用した。被験者には、それらの質問紙をランダムに2枚組にして配布し、感情があらわされていると思われる文字に○をつけ、○をつけた文字はどのような感情があらわされているかを記入するよう指示した。全ての被験者は、それぞれ48文字ずつに対し、回答することになった。なお、質問紙1には80名、質問紙2には83名、質問紙3には90名、質問紙4には76名、質問紙5には81名、質問紙6には85名がそれぞれ回答した。

結果と考察 全員が、「新文字」に対しても回答した。「新文字」では、最も多くの被験者が、「感情があらわされている」とした文字は、〈えゝ(質問紙1, N=80)〉の60名(75.0%)であった。なお、〈えゝ〉があらわしている感情として、「驚き(37名-57.81%)」が多く挙げられた。一般的な表記の平仮名の中で、最も多くの被験者が、「感情があらわされている」とした文字は、〈げ(質問紙4, N=76)〉の59名(77.63%)であった。なお、〈げ〉があらわしている感情として、「嫌悪(27名-45.0%)」が多く挙げられた。

これら、感情をあらわしている文字は、感嘆符であると思われる。今後は、感情場面を設定した上で、その感情をどのような文字であらわすか、といった調査へ進めたいと思う。

適応度テスト開発について (その2)

松井 洋

土屋 隆裕

○玉井 寛

(川村学園女子大学文学部)

(統計数理研究所)

(日精研リサーチ)

目的:

松井・玉井(1993)によって開発された適応度テストは、人間関係・自律性・金銭感覚・情緒安定性・熟慮的態度という5つの領域について、社会的な適応性を測るものである。このテストの信頼性や妥当性については、高校生に実施した結果と教師の評定値との一致度を見ることによって、ある程度は調べられている。しかし、教師が各高校生の適応度、特に金銭感覚について熟知するのは困難であるため、基準となるべき教師評定値の信頼性が低いという問題点があった。すなわち、さらに他の基準との関連を見ることにより、信頼性・妥当性の検証を進めることが求められていた。そこで、本研究では、再テスト法を用いることで、適応度テストの信頼性を調べることを目的とする。

方法:

松井ら(1993)において、適応度テストを受検した高校1年生に対し、約1年6カ月の期間をおき、高校3年生になった時点で、再びテストを実施した。2回のテストを共に受検した高校生は186名であった。

結果:

テストを構成する76項目はそれぞれA、Bという値をとる2値変数である。そこで、2回のテスト結果から、まず項目ごとに2×2のクロス集計を行ない、コーエンの一致係数を求めた。ただし、通常の一致係数は最大値が1とはならない。そこで、周辺度数を固定した上で、理論的な一致係数の最大値を算出し、これに対する比である相対一致係数を求めた。ここではこれをκ係数と呼ぶ。76項目についてのκ係数のヒストグラムをFigure1.に示す。最大のκは64番目の項目の0.59であり、最小は35番目の項目の0.10である。また、49個の項目のκが0.25から0.45の間に入っている。

次に、全ての項目から2×2の分割表を作成した。その結果をTable1.に示す。この分割表に対する相対一致係数は0.37であった。

また、5つの領域ごとに領域得点を算出し、2回のテストの間での相関係数を求めた。この結果をTable2.に示す。最も高い相関は人間関係の0.56であり、逆に

最も低い相関は自律性の0.42となっている。

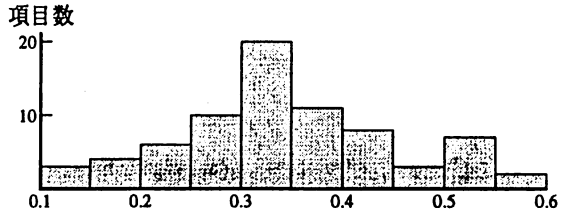


Figure1. κ係数のヒストグラム

Table1. 全項目を用いた2×2分割表

		第2回目実施		計
		A	B	
1 回	A	4833	2181	7014
	B	2151	4522	6673
目 計		6984	6703	13687

Table2. 領域別相関係数(r)および第1回目・第2回目得点平均値(m₁, m₂)

領域名	r	m ₁	m ₂
人間関係	.56	10.65	10.61
自律性	.42	8.59	8.34
金銭感覚	.46	9.41	9.13
情緒安定性	.46	8.60	8.30
熟慮的態度	.44	8.45	9.51

考察:

再テスト法により求められた適応度テストの信頼性係数は、全体的にあまり高いとは言えない。しかし、このことは直ちにテストの信頼性の低さを示すものではない。なぜなら、ここで用いたのは、1年6カ月もの期間をおいた高校生のデータだからである。この時期は心理面での成長が特に著しいために、2度のテスト実施の間に高校生自身が変わってしまったということが十分に考えられる。例えば、熟慮的態度の平均値が、前回に比べ今回は約0.9も高くなっているのは、この仮説を裏づけるものであろう。今後、様々な集団に対してテストを実施し、テストの特性をさらに検証することが求められる。

参考文献:

松井・玉井 1993 適応度テストの開発について
第60回日本応用心理学会発表論文集

適応度テスト開発について (その3)

○ 土屋 隆裕 松井 洋 玉井 寛

(統計数理研究所) (川村学園女子大学文学部) (日精研リサーチ)

目的:

松井・土屋・玉井(1994)に引き続き、適応度テストの妥当性について検証する。本稿では YG 性格検査を外的基準とし、これとの関連を見ることで、適応度テストの妥当性を調べることを目的とする。

方法:

松井ら(1993)において、適応度テストを受検した高校1年生に対し、同時に YG 性格検査を実施した。2つのテストを共に受検した高校生は219名であった。

結果:

適応度テストの5つの領域と YG 性格検査の12の領域との間で正準相関分析を行ない、第5正準変数まで求めた。正準相関係数、および各正準変数の構造ベクトルは Table1. に示す通りである。第1, 第2正準相関係数の値は.77, .61と高いが、第3以降の正準相関係数は低くなっている。母正準相関係数に対する尤度比検定の結果でも、第3正準相関係数が0であるという仮説は棄却されない。

次に、構造ベクトルの値を見てみると、第1正準変数では、適応度テストの人間関係と自律性、YG 性格検査の社会的外向と支配性大、神経質、活動的、抑うつ性大に対して絶対値が大きくなっている。自律性その他の領域との関連はやや理解しづらいが、自律性の値が負に大きいのは、人間関係との相関が-.51と大きいためであろう。すなわち、自律性のうち人間関係と関連した部分がここにあらわれていると考えられる。また、第2正準変数では、適応度テストの熟慮的態度と情緒安定性、YG 性格検査の思考的外向の絶対値が大きい。ここでも、熟慮的態度との相関の高さ(-.34)から、情緒安定性の値が大きくなったものと思われる。第3正準変数では、適応度テストでは金銭感覚の値が大きく、YG 性格検査では活動的の値がやや大きい。第4正準変数では、適応度テストの情緒安定性と YG 性格検査の気分の変化大、第5正準変数では、適応度テストの自律性と YG 性格検査の劣等感大の間にやや関連が見られる。

また、テスト全体としての関連の程度を調べるために、冗長性係数を求め、Table1. に示した。どの正準変数においても冗長性係数の値は高くはない。すなわち、2つのテストの間で関連の強い領域はあるものの、テ

スト全体の関連はそれほど強いとは言えない。

Table1. 正準相関分析結果

領域名	正準変数				
	1	2	3	4	5
適応度テスト					
人間関係	.97	.08	.10	.02	.18
自律性	-.60	-.07	.29	-.40	.63
金銭感覚	-.33	.40	.73	.28	-.36
情緒安定性	.51	-.64	-.01	-.52	-.27
熟慮的態度	-.40	.73	-.35	-.18	-.40
冗長性係数	.218	.082	.021	.014	.015
YG 性格検査					
社会的外向	.81	.32	-.04	-.15	.16
支配性大	.76	.41	.03	-.19	.03
思考的外向	.43	-.67	.14	.25	-.02
のんき	.54	-.16	.33	-.07	.01
活動的	.67	.26	.56	.09	.01
攻撃的	.16	.37	-.08	.36	-.11
非協調的	-.22	-.04	-.35	.37	-.21
主観的	-.27	-.07	.21	-.06	-.10
神経質	-.70	.33	.16	.38	.26
劣等感大	-.48	-.22	.08	.22	.44
気分の変化大	-.33	.20	.08	.38	-.27
抑うつ性大	-.66	.20	.05	-.05	-.21
冗長性係数	.178	.037	.008	.008	.004
正準相関係数	.77	.61	.38	.36	.31

考察:

第1, 第2正準変数ともに得られた結果は納得できるものである。すなわち、人間関係と熟慮的態度という領域については、YG 性格検査との関連において、その妥当性が確かめられたと言ってよいであろう。第4正準変数では、正準相関係数は低いものの、理解できる結果が得られている。情緒安定性は、熟慮的態度と関連する部分を除けば、妥当性があると言ってよいかも知れない。しかし、熟慮的態度との相関を低くし、正準相関係数が高くなるよう、さらに項目を精練していく必要がある。第3, 第5正準相関変数に関しては、正準相関係数が低く、解釈もやや難しい。この理由としては、1) 自律性や金銭感覚という領域の妥当性が低い、2) YG 性格検査ではこれらの領域を測定していないため、という2つの原因が考えられる。特に、金銭感覚については後者が主たる原因であろう。情緒安定性を含めたこれら3つの領域の妥当性を、今後さらに検証する必要があると思われる。

参考文献:

松井・土屋・玉井 1994 適応度テスト開発について(その2) 第61回日本応用心理学会発表論文集

児童が認知する顔の目立ちやすさの要因

○ 福本 純一 (山口県警科学捜査研究所) 福田 廣 (山口大学教育学部)

本研究は、児童の顔認知における視覚情報の構造を明らかにするため、顔全体のゲシュタルト的特性に基づいて判断される目立ちやすさ(示差性:吉川,1990)を指標として、顔を認知した際に得られる情報を形態的、印象的次元から明らかにし、発達段階からみた顔認知の因子構造について検討することを目的とした。

また、目立ちやすいと判断される顔について、児童が持つ意味空間を明らかにし、成人の場合と比較検討も行った。

＜ 方 法 ＞

【被験者】公立小学校の低学年児童(2年生、8才)

72名、高学年児童(6年生、12才)78名

【評定刺激】男性の首から上部のモノクロ顔写真(年齢19~26才)を評定者に提示し、顔の目立ちやすさについて5段階尺度による評定を求め、得られた平均評定値を基準にして上位及び下位から各6枚の顔写真を高評定群(目立ちやすい顔)、低評定群(目立ちにくい顔)として使用した(福田ら,1988参照)。

【評定尺度】福田ら(1990)の使用した56項目について予備調査を行い、児童用に修正した形態項目18項目、印象項目29項目の計47項目とし、項目によっては理解しやすいように、教示の際に絵などにより説明を加えた。なお、評定は7カテゴリからなる双極性尺度(表中の項目は、同一極の言葉を示す。)によった。

【手続き】被験者に高評定群、低評定群の中から各1刺激(手札大)をそれぞれB5版台紙中央に貼付し、評定用紙とともに配布し、各項目について評定判断を求めた。

＜ 結 果 ＞

顔写真ごとの評定項目別の平均値を、主因子法、バリマックス回転により因子分析を行った(Table1,2)。

1) 児童の顔評定の因子構造
高学年では因子負荷量の絶対値が0.5以上の項目について解釈を行い4因子を抽出した。第I因子は対象の顔の人物との接触を持つことの好ましき、疎ましきを内容とする「接近・回避」の因子と命名した。第II因子は男らしき、女らしきを意味する「男性度・女性度」の因子と命名した。第III因子は好ましい印象を導く「品位・望ましき」の因子と命名した。第IV因子は顔の形や造作に関する項目であることから「輪郭・隆起」の因子と命名した。

一方、低学年群の場合、因子負荷量の絶対値が0.4以上の28項目について解釈を行い、25項目が含まれる第I因子は「好感度」の因子、第II因子は「男性・女性度」の因子と考えられた。

2) 目立ちやすい顔の意味空間

高評定群と低評定群の平均因子得点について、学年ごとにt検定を行った結果、高学年では、4因子すべてにおいて、群間に有意な差が認められ($t=3.37, P<0.01, t=8.58, P<0.01, t=3.79, P<0.01, t=5.72, P<0.01$)、目立ちやすい顔を4種類の判断次元でとらえ、目立ちやすい顔は、回避性、男性度において高く、望ましき、品位において低く、形態的には丸みがない顔として評価された。低学年では、第I因子において差が認められ($t=5.74, P<0.01$)、目立ちやすい顔は好感度の低い顔として評価された。

また、因子別に各項目別の評定点について、群間の有意差検定を行った結果、両学年とも、ほとんどの項目において差が認められた。

＜ 考 察 ＞

高学年と低学年の抽出因子数及び内容の結果から、年齢の発達により顔の情報処理能力が向上し、顔処理の深化と分化が進み、高学年では大学生にちかき処理次元を有することが明らかとなった。本結果は、12才前後の発達段階において、成人の再認あるいはコーディング能力に近い水準に達するという顔の認知と年齢に関する一連の結果(Goldstein,1977, Carey,1980)を質的側面から裏付けるものと考えられる。

目立ちやすいと評価される顔は、発達段階の違いにより、negativeな意味空間をもつ共通性がみられ、印象次元の情報が大きく関与しているといえる。

Table1 抽出因子の因子負荷量(高学年)

Item	Factor				h ²
	I	II	III	IV	
37 にぎやかな	0.667	0.098	-0.132	-0.198	0.512
11 近づきやすい	-0.133	-0.172	0.019	0.423	
25 感じのよい	0.587	-0.160	-0.569	-0.074	0.699
1 ゆかしい	0.572	0.004	-0.209	0.080	0.378
24 暖かい	0.572	-0.194	-0.395	-0.005	0.521
5 やさしそう	0.568	-0.205	-0.498	0.131	0.635
35 意地悪な	-0.521	0.305	0.267	-0.192	0.472
2 思いやりのない	-0.531	0.150	0.215	0.066	0.355
30 こわい	-0.613	0.433	0.322	0.039	0.668
18 暗い	-0.646	-0.077	0.131	0.272	0.514
15 たくましい	-0.111	0.583	-0.304	-0.049	0.447
13 大胆な	-0.198	0.532	-0.056	-0.151	0.348
12 上がり眉	-0.092	0.515	0.160	0.084	0.307
33 強情な	-0.356	0.513	0.368	0.027	0.526
23 不真面目な	-0.226	0.035	0.624	-0.220	0.490
3 下品な	-0.222	0.293	0.605	-0.215	0.547
9 年寄りじみた	-0.148	0.130	0.545	0.311	0.432
29 しつこい	-0.105	0.193	0.512	-0.050	0.313
39 しまりのない	0.015	-0.218	0.505	-0.148	0.325
4 賢い	0.147	-0.014	-0.508	0.143	0.301
46 好きな顔	0.015	0.040	-0.625	-0.076	0.666
40 かわい	0.513	-0.121	-0.627	-0.046	0.673
8 清潔な	0.187	-0.202	-0.641	-0.085	0.494
19 きらんとした	0.018	0.066	-0.671	0.096	0.465
44 角張った顔	0.020	0.131	0.057	-0.585	0.364
10 顔が長い	0.219	0.036	-0.023	-0.629	0.446
20 頬のこけた	0.093	0.017	0.032	-0.704	0.506
固有値	5.658	3.941	5.772	2.786	
寄与率(%)	20.6	14.4	21.1	10.2	

Table2 抽出因子の因子負荷量(低学年)

Item	Factor			h ²
	I	II	III	
24 暖かい	0.828	-0.136	0.704	
5 やさしそう	0.792	-0.231	0.680	
8 清潔な	0.741	0.185	0.583	
25 感じのよい	0.740	0.094	0.556	
4 賢い	0.678	0.164	0.486	
19 きらんとした	0.667	0.276	0.522	
46 好きな顔	0.658	0.015	0.434	
40 かわい	0.639	-0.005	0.353	
1 ゆかしい	0.594	0.276	0.522	
11 近づきやすい	0.566	0.079	0.320	
37 にぎやかな	0.537	0.204	0.360	
43 賢い	0.529	-0.290	0.364	
21 口の小さい	0.415	-0.005	0.173	
41 細い眉	0.406	-0.088	0.172	
39 しまりのない	-0.464	-0.185	0.250	
29 しつこい	-0.594	0.030	0.354	
17 目つきの悪い	-0.614	0.102	0.387	
9 年寄りじみた	-0.637	-0.165	0.432	
32 下品な	-0.639	-0.020	0.408	
23 不真面目な	-0.645	-0.287	0.499	
2 思いやりのない	-0.663	-0.040	0.442	
18 暗い	-0.673	-0.032	0.454	
33 強情な	-0.706	-0.043	0.501	
35 意地悪な	-0.800	0.015	0.639	
30 こわい	-0.825	0.187	0.715	
13 大胆な	0.354	0.464	0.341	
42 元氣な	0.348	0.498	0.369	
16 女性的な	-0.255	-0.562	0.381	
固有値	11.939	2.371		
寄与率(%)	44.2	8.8		

※ 本研究のデータ収集は、筆者らの指導の下に西村雅美(旧姓:森田、花岡小学校勤務)が行った。記して感謝の意を表す。

日付推論におけるアクセシビリティ仮説の検討

○ 越智啓太

(警視庁科学捜査研究所)

相良陽一郎

(学習院大学人文科学研究科)

1、問題

事件などのパブリックな出来事がいつ起こったのかを推定するのは意外と困難な課題であり、いくつかの系統的なバイアスがかかってくる事が知られている。例えば、印象的だったり目立ったりする出来事はそれが実際に起こった時よりもより最近起こったものだと感じるという“forward telescoping”効果(Loftus and Marburger 1983;Robinson 1986)や直前に一度検索された事象については同じ時期に起きた別の事件よりもより最近に起こったものだと感じるという効果(Brown et al.1985)などが存在することが知られている。これらの効果を検討する中でBrownらは出来事が起こった日付の推定においては、アクセシビリティヒューリスティクスが用いられており、それによって推定にバイアスがかかるのだと述べている。これは、その出来事について検索される情報の多さを手がかりにして事件の生起日時を推定するヒューリスティクスで、検索される情報が多ければその事件は最近のものだと推定されるというものである。ところがこのアクセスされる情報については事件についての意味的な知識情報なのかそれとも事件についての情緒的なインパクトの情報なのかなど不明な事も多い。そこで本研究では、いくつかの事件について被験者がもっている知識の種類と量と日付の推定におけるバイアスとの関連について検討してみることにした。

2、実験と考察

【手続き】実験は1990年8月に実施した。被験者は20歳から28歳の大学生、大学院生15名であった。1985年から1989年に生じた大きな事件・事故9個づつ計45個を朝日年鑑などから選択した。この各イベントについて各被験者に(1)事件についての客観的知識の量(2)事件を初めて知ったときのフラッシュバルブメモリの鮮明さ(3)事件を知ったときの衝撃度(4)友人などと話題にした頻度などについて7段階で評定させるとともにその出来事がいつ起きたかについて日付を推定させた。実験は質問紙に記入させる方法で行った。

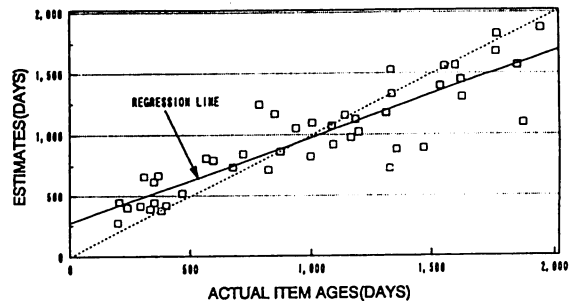
【結果と考察】各事件についての評定値と推定された日付のバイアスとの関連について相関分析を行った。バイアスの指標としては、(実際の事件の生起日時-推定された日付)として算出される forward telescoping 傾向 (この数値が大きいほど事件をより最近に知

覚している)と実際の事件日時と推定日時のズレ(この数値が大きいほど現実の日付と推定された日付の誤差が大きい)をとった。これらの指標と各評定値の偏相関係数を求めたところ Table.1 のようになった。つまり、事件についての知識がある程、日付推定は正確になり、また、事件の生起日時が古いほど forward telescoping 傾向が大きかった。直近の出来事については backward telescoping が起きており実際の事件の生起日時よりも推定された日付のほうが古くなった。これは、Ferguson et al.(1983)が日付推定における回帰効果と名付けた現象と同様のものと思われる。事件の日付が古くなるほど日付推定値の分散が大きくなるという傾向は見られた($r=0.57^{**}$)が、予想に反して事件についてのインパクトやフラッシュバルブメモリの存在は日付推定のズレには関係していなかった。

Table.1 評定値と Forward Telescoping 傾向及び日付推定のズレとの偏相関

	FT傾向	推定誤差
知識の量	-.22	-.34*
F B M	-.22	.09
衝撃	.24	.06
リハーサル	-.24	-.07
実際の日付	-.65**	-.17
重相関係数	.65**	.54*

(** P<.01, * P<.05)



推定された日付と実際の日付の関係 (数字は実験日と事件日との差)

中学生のクラスの動機づけ構造の認知に関する検討

谷島 弘仁

(筑波大学大学院)

学校教育においてクラスを単位とした学習が基本であり、また、指導する上で様々な複雑な要因が存在している。最近では、動機づけの観点からクラス構造を捉え直し、得られた知見を教育実践に適用しようとする研究の流れがある。教育実践におけるクラス単位での動機づけを問題とする研究においては、クラスにおける動機づけの下位構造を設定し、その下位構造に基づいて動機づけ方略を採用し、生徒を動機づけていくという考え方が提案されている(Epstein, 1988, 1989)。すなわち、クラスを動機づけの次元にしたがって構造化し、その各々について教授方略を提案し、その効果を分析していく、理論的研究と授業実践を結びつける方法がとられている(Maehr & Midgley, 1991)。

Epstein (1988)は、クラス構造を以下の6つの側面に分類し、これらの頭文字を取ってTARGET構造と名づけた。それぞれ、課題(task)、権限(authority)、報酬(reward)、グルーピング(grouping)、評価(evaluation)、時間(time)の各次元から構成される。このような構造化の基本的な前提は、クラスは操作可能な構造から構成されているというものであり、またクラスを下位次元に分類し、それぞれの次元において指導方略を設定することで、教師は効果的に生徒の行動を改善していくことができると仮定されている。

本研究では、日本のクラスにあてはまるクラスの動機づけ構造の次元を新たに構成することを第一の目的とする。つぎに、構成されたクラスの動機づけの次元と、関連する個人の様々な特性およびクラスにおける諸要因との関係を探索的に検討することを第二の目的とする。

方法

調査対象 中学校1年生350名(男子175名、女子175名)。

手続き 以下の質問項目が作成され、集団で実施された。回答は4段階評定で測定された。

(1) クラスの動機づけ構造スケール

日本におけるクラスの動機づけ構造の下位次元が因子分析結果から以下の4因子であることが明らかにされた。第1因子がクラスにおける承認への動機づけであり、第2因子が課題志向の動機づけである。第3因

子が参加への動機づけであり、第4因子が協調への動機づけである。クラスの動機づけ構造を測定する質問項目には、内部一貫性、安定性ともに信頼性が認められた。

(2) 個人の要因を測定する項目

個人の動機づけに関する認知的指標として原因帰属を、学業達成に関連した認知的指標として、生徒の能力認知に関する測度を使用した。個人の性格特性を表わす測度として自尊尺度を採用した。

(3) クラスの要因を測定する項目

クラスに関する認知的指標として、生徒のクラスへの適応に関する測度を使用した。クラスの動機づけ構造に関連する測度として、Maehr & Fyans (1989)が作成したクラス文脈測度を使用した。クラスの雰囲気に関する測度として、モラール測度をクラスに関する指標として使用した。

結果と考察

1. クラスの動機づけ構造と個人に関する諸要因との関連

クラスの動機づけ構造の各次元と原因帰属の関連については、成功事象において能力因と承認構造に有意な相関が認められた。努力因とクラスの動機づけの4構造すべてに有意な相関が認められた。課題因および努力因と動機づけ構造の間には特徴的な相関パターンは認められなかった。失敗事象についても、クラスの動機づけ構造の各次元と努力因の間に有意な相関が認められた。この結果は、中学生は自分の努力によって動機づけの環境を変化させることができると認知していることを示唆しているとも考えられる。

2. クラスの動機づけ構造とクラスの諸要因との関連

クラスの動機づけ構造の各次元とクラスの諸要因との相関について検討した。その結果、クラスの動機づけ構造の4つの次元と生徒のクラスへの適応、クラス文脈の認知、依存の次元を除くクラスのモラルの5つの次元との間にすべて1%水準で有意な相関が認められた。とりわけ、クラスの雰囲気指標であるクラスのモラルの各次元とクラスの動機づけ構造の下位次元とのあいだには特徴的な相関パターンが存在していた(相関係数については、配布資料を参照のこと)。

コンピュータ学習時における初心者の心理的特性Ⅱ

久東 光代

(日本女子大学西生田計算研究所)

目的

高度情報化社会が進み、大学での情報教育は、専攻を問わず、必要不可欠となった。情報機器は学習や思考を支援する有効な道具だが、新奇な装置やソフトウェアの知識と操作学習に初心者には戸惑うことが少なくない。

久東(応用心理学会第60回大会)は、「数学やメカ操作が苦手」な文系女子大生を対象にコンピュータ授業履修前後に試みた調査から、授業履修後、「コンピュータ嫌い」が進行したという結果を報告した。

本報告は、「コンピュータ嫌い」進行に関わる要因を機器の所有状況、操作経験等の実態と、知識や情報の認知、動機づけ、操作の困難・不適応感や確信度等の心理的特性との関連から探ることを目的とする。

方法

被験者 N女子大学人間社会学部1年生の内、一般教育「電算機演習」履修者 113名。

手続き 集合調査法で、履修前後とも授業時間内に実施した。実施時期は1992年5月と1993年1月であった。

解析対象調査項目 履修前のみ：情報機器所有状況、機器操作経験(以下機器経験) 履修前後：情報熟知感、用語知識の認知、コンピュータ、ワープロ操作嗜好、到達希望レベル 履修後のみ：操作困難と確信度の自己評価、必要度、達成・論理的性格特性、授業外利用状況

結果

(a) 実態と心理的特性との関連と変化

各心理的特性の評定値が、各実態の'あり'なし'間で差があるかどうか確かめるため、t検定を行った。

コンピュータ、ワープロ嗜好の評定に違いがあった(図1、2)。コンピュータ操作は履修後好ましくなくなり(p<0.01)、各実

態条件で差がない。ワープロ嗜好は前後で変化なく、ワープロ所有(前 p<0.01)とワープロ経験(前 p<0.01, 後 p<0.05)で差があった。

用語知識はパソコン経験(前 p<0.01)、ワープロ経験(前後とも p<0.01)で差があり、情報熟知感も含め知識評価は履修後上昇した。操作困難・不適応感はワープロ経験、確信度はワープロ経験、授業外利用で有意差(p<0.01)があった。パソコン所有状況はどの項目とも関連がなかった。主にワープロの経験と所有が'シフト'に影響するらしい。

(b) 心理的特性の各項目間の構造

15項目の因子分析結果から4因子が抽出された(表1)。コンピュータ嗜好は操作適応・不適応因子に集約され、'コンピュータ嫌い'は操作に関する'シフト'な自己認知と関わっているらしい。因子4は解釈できないが、ワープロ嗜好と達成・論理的性格(逆転)が集約されたのは興味深い。

考察

ワープロとコンピュータ学習での操作認知に違いがあり、初心者は授業で特にコンピュータ操作の困難に直面し、履修前のイメージの評価が現実の評価に変わることがわかった。

情報教育分野で、キーボード操作が重要であるといわれるが、初心者はキーボードを多用するワープロ操作に抵抗がないので、コンピュータ操作には、機器やソフトウェアの操作の理解、高度な情報処理能力'に起因する別のレベルの不適応があることは否めない。

このまま情報化社会が進み、大学での教育が必須ならば、ユーザ・インタフェースの改善(Windows環境、マウス操作等)に加え、「真の情報教育とは何か」が問われるべきであろう。今後、初心者の学習過程の分析から、ワープロ教育主流の文系学部の効果的な情報教育を検討したい。

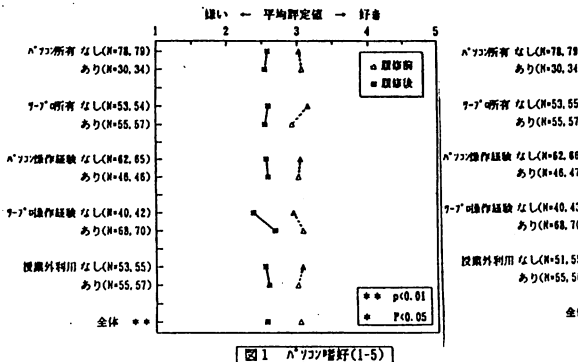


図1 コンピュータ嗜好(1-5)

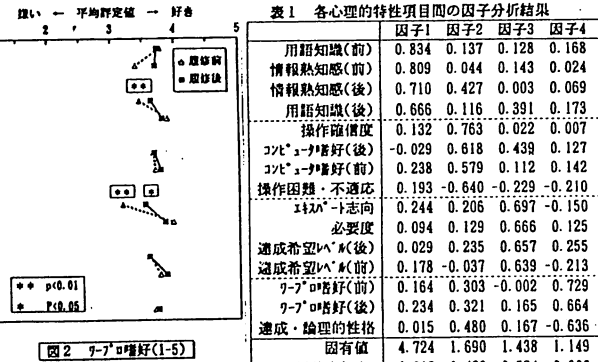


図2 ワープロ嗜好(1-5)

表1 各心理的特性項目間の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4
用語知識(前)	0.834	0.137	0.128	0.168
情報熟知感(前)	0.809	0.044	0.143	0.024
情報熟知感(後)	0.710	0.427	0.003	0.069
用語知識(後)	0.666	0.116	0.391	0.173
操作確信度	0.132	0.763	0.022	0.007
コンピュータ嗜好(後)	-0.029	0.618	0.439	0.127
コンピュータ嗜好(前)	0.238	0.579	0.112	0.142
操作困難・不適応	0.193	-0.640	-0.229	-0.210
キーボード志向	0.244	0.206	0.697	-0.150
必要度	0.094	0.129	0.666	0.125
達成希望レベル(後)	0.029	0.235	0.657	0.255
達成希望レベル(前)	0.178	-0.037	0.639	-0.213
ワープロ嗜好(前)	0.164	0.303	-0.002	0.729
ワープロ嗜好(後)	0.234	0.321	0.165	0.674
達成・論理的性格	0.015	0.480	0.167	-0.636
固有値	4.724	1.690	1.438	1.149
累積寄与率	0.315	0.428	0.524	0.600

因子1：知識認知
因子2：操作適応・不適応

獣医系大学のカリキュラムについて

— 就職動向から見た一考察 —

岡本善之

(麻布大学)

研究の目的：獣医系大学（獣医師資格が取得できる学部、学科）は、6年制になって、修業年限では医学部（更に一年間のインターンが加わり実質的には7年）や歯学部と同等になっている。このようなこともあって、専門職志向、資格・免許志向の傾向からも、志願者が増加する傾向がある。しかし、新学制の中で4年制で出発（旧陸軍と共に発展してきたので、陸軍の消滅によって獣医学部を欧米並みにすることをためらったようで、このことがいちやく6年制にした歯学部と異なる）、その後、修士課程積み上げによる6年制そして学部6年制という過程をたどって来ているためもあって、カリキュラムもかなり流動的である。各大学によって進路・就職動向がかなり異なることから、各大学にあったカリキュラムをこのような動向を基に考察する。

方法：「獣医学部・学科卒業生に対する需要調査結果中間報告」（1993.9.28 国公立大学獣医学協議会事務局）所載の資料によって考察する。

結果：獣医系大学（国立10公立1私立5）入学者に占める女子の割合が近年急速に増加している（84年28.7%, 85-28.8, 86-28.5, 87-32.9, 88-33.6, 89-39.7, 90-38.5, 91-47.1, 92-50.0, 93-52.9. 学内進学方式校では少ない）。

92.3時点の全体の就職先は開業・開業見習31%, 地方公務員26%, 企業20%, 畜産団体11%, 中央官庁2%, 特殊法人1.5%, 大学・短期大学0.7%, 研究生等0.7%, 進学7%

就職先の割合を女子のみで見ると、男子に比して、開業・開業見習、地方公務員、企業が多い。特に開業・開業見習が多い。

大学別就職先で見ると、旧帝大系2校では進学と企業で殆どを占め両者の割合はほぼ同じである。旧専門学校系国立大ではG大のように開業・開業見習が1/3以上を占める例もあるが一般に地方公務員の割合が高い。私大ではいずれも開業・開業見習の割合が最も高く、次いで一般に地方公務員、企業の順になっている（北海道のR大では企業よりも畜産団体が多い）。

考察：男女比は1982年から1986年まではほぼ7:3で一定であったが1987年以降は急激に女子の比率が増加し1992年50%, 1993年53%と過半数を越え、今後この傾向は強まるのではないかとと思われる。薬学部にみら

れるような現象が生じて来ているように思われる。94年度志願者数を93年度と比べると有名女子大は軒並み減少しているが、薬、保健、農系の学部への女子の流入が顕著にみられる。米国では1987年に獣医学部・学科への女子入学者が既に50%を越えているので、わが国でも女子の専門職・資格志向はますます進むのではないかとと思われる。女子就職先には開業・開業見習が多く35%強を占める（男子では25%強）ので臨床系、特に小動物関係科目の充実等をカリキュラムに反映させていくことが必要と思われる。

旧帝大系では進学と企業が殆どを占めることから獣医師免許状は殆ど活用されないものと思われる。またこれらの大学は大学院大学化をたどるものと思われるので、研究者養成を中心においたカリキュラムを考えていくべきものと思われる。

旧専門学校系の場合は地方公務員が多く、獣医職として採用されるものと思われるので獣医師資格の取得と公衆衛生分野での活躍を念頭に置き、また畜産団体に就職する者が多く酪農地帯にある地方国立大学の場合にあっては大動物臨床系の科目を充実したカリキュラムを考えていくものと思われる。

私大の場合は開業・開業見習に進む者が多いのでまずこれに対応したカリキュラムを考える必要がある。また地方公務員に進む者もかなりあるので食品衛生を中心とした公衆衛生関係の科目の充実も必要と思われる。また畜産団体への就職がかなりある場合はこれへの十分な対応が必要である。

大学によって、小動物臨床を充実させる、大動物臨床に力を入れる、公衆衛生での活躍を念頭に置く、研究者の養成を志向するなど、特色のあるカリキュラム作成が求められているものと思われる。

また企業に就職する者もかなりあるが、その就職先は製薬・バイオメディカル関連が多く、多くの場合、研究職または製品開発職となるものと思われるので、これに対応できるような内容のカリキュラムであることも必要と思われる。

多様化するニーズに対応できるカリキュラムであると同時に、専門性を高める努力が必要である。高度の専門職にあっては、倫理性、道徳性、教養性などに関わる科目もカリキュラムに必要である。

文章産出からみた理解

高橋 たまき

(日本女子大学人間社会学部)

目的：本研究の目的は、呈示された一定の情報を、人が吸収する過程を明らかにすることである。ある新しい情報を呈示されたときに、人は既に獲得している情報と照合しつつ、その新しい情報を既存の情報体系に組入れる。その組入れが整合性をもつとき、新しい情報を「理解した」と感ずると思われる。このような意味での整合性を探る方法は幾つかありうるが、本研究においては、産出された文章を手掛かりとして使用する。

方法：(1) 被験者 — 大学・学部において「心理学史」を受講している3・4年生および聴講生のうち、実験場面とした授業3回(3週)すべてに出席した15名。(2) 配布教材 — B.J. Baars (1986); The Cognitive Revolution in Psychology, The Guilford Press 中、U. Neisser の紹介と、Neisser へのインタビュー部分の英文テキスト。(3) 手続 — W. Wundt 実験心理学の背景、成立過程、Wundt 構成主義の特質、機能主義の背景、成立、特質を数回にわたって講じた後、上記教材を第1回目に、受講生1人々に配布した。行動主義、ゲシュタルト、人間性心理学等を扱う前に、認知心理学の端緒を拓いた Neisser 関係のこの種の教材を扱った理由は、a) 現代心理学の方向性を示唆して、学習者の興味を刺激しようとしたこと、b) この種の教材は学部学生がアクセスするのが比較的困難であるため、誰にとっても新奇性が高く、条件統制がより容易であると考えられたことによる。本教材は、著者 Baars による Neisser の簡単な紹介(“Cognitive Psychology,” 1967 の著者であること、この著者において心理学の新しい枠組を結晶化させ、それに名前を与えたこと、等々)、およびそれに引続く Neisser へのインタビュー記録か

ら成り立っている。11ページから成る全体を量的に3分割し、それぞれを3回にわたる1回々々の授業において扱った。表1は、各回において出現したテーマ数と命題数を示している。ここでテーマとは、例えば、「行動主義批判」とか、「視覚的探索」のような事象カテゴリーを指し、命題とは、そのような事象カテゴリー内の、意味の最小単位を示す。なお各回とも、90分間の授業のうち、最初の60分間に訳と解説から成る講義を行い、残りの30分間に、「理解したこと」および「理解できず、質問したいこと」を記してもらった。質問事項は数が少なかったため、今回は「理解した」項目のみを分析対象とした。

結果および考察：表2は、平均記述数および、呈示テーマ数に対する記述テーマ数の比率と、呈示命題数に対する記述命題数の比率を示したものである。テーマ数比、命題数比とも、回を追うごとに上昇する(それぞれ、 $\chi^2 = 6.33, df = 2, p > .05$; $\chi^2 = 9.94, df = 2, p > .01$)。しかし、テーマ数比は、1回目から2回目にかけて有意に増大する($\chi^2 = 4.38, df = 1, p > .05$)のに対して、命題数比は、3回目に至って1回目とのあいだに有意差を生ずる($\chi^2 = 9.04, df = 1, p > .005$)。

上の結果から、人が呈示された情報の理解を進めるに際して、先ず大枠としての事象カテゴリーを把握し、次いで、大枠カテゴリーの細部を埋める形で、命題への注目がなされることが推察される。そして、命題間の有機的な関連づけが緊密になればなるほど、理解が深まると言っよいと考えられるが、この点は今後の検討課題である。

表2 記述されたテーマ数と命題数

表1 呈示されたテーマ数と命題数

回	1		2		3	
	テーマ数	命題数	テーマ数	命題数	テーマ数	命題数
呈示数	12	42	9	41	9	43

回	1		2		3	
	テーマ数	命題数	テーマ数	命題数	テーマ数	命題数
平均記述数	2.73	6.73	3.53	10.07	3.80	16.40
記述比(%)	22.75	10.02	39.22	24.56	42.22	38.14

教育評価の研究（その34）

——生涯学習時代に於けるあり方をさぐる——

岸本 英男

（大泉四期会）

目的

日進月歩の科学の発達、高度情報化社会を生み、科学物質文明の爆発的促進は、既存の人間の適応能力を以てしては、制御できない所まで質量的に先端技術の跋行的肥大をもたらしたが、結果的に人間性それ自体への深刻な見直しがポスト冷戦を契機に世界的に浮上しつつあるとされる¹⁾。他方21世紀への先行投資の選択に凌ぎを削る国家間競争は、教育の面に於ける草の根レベルの効率向上を目指すという美名で擬装した受験産業の市場価値を教育評価の独立変数として既に久しいが²⁾、先の大東亜戦争が世界史的に批判され脱亜入欧の成果としての経済繁栄が今後期待され難くなる客観的状況が予測され、必然的に脱欧入亜的国策大転換乃ちGNPの縮小に伴う国家レベルの生活水準の低下によるフラストレーションであるが、それをいかに政治理念でカバーするか。55年体制崩壊後の連立政権の当面する最大の課題として今日政治家個人の識見と手腕に期待される。乃ちシビアーな人物評価の時代に突入しつつあると言える³⁾。而しながら今日の所謂国民の選良と称される政治家は、大東亜戦争の戦後の混乱期に乗じて政権を獲得し壊滅的打撃を受けた国家経済の復興を達成したと自画自賛し、所謂55年体制の成果に奢り、高額所得階層として飽くなき私利私欲に走り、既にアジアの一角から1965年頃指弾され始めたエコノミックアニマルぶりを遺憾ながら実証してしまった事になる。侵略戦争でアジア諸国に及ぼした精神的損害はほう大な経済援助を以てしても猶評価されず、血税を以てあがなった筈の先の湾岸戦争への協力も西側から評価されず、55年体制が謳歌した経済復興は所詮一部特権階級の私利私欲への奉仕に終始したにすぎなかった事⁴⁾。に漸く気づき始めた国民が今日の連立政権に世直しのチャンスを与えた事になるが、受験産業にゆがめられて過当競争を強いられ続けた学校教育の退廃⁵⁾。乃ち教育基本法を空洞化し、そこに期待された「教育の力」を圧殺し続けた結果としてのつまり世界市民としての政治的教養に欠けた今日の日本国民大衆社会状況をもたらしてしまった事になるが⁶⁾。折角のチャンスをも十分に生かして21世紀を切り開き得るか、ジャーナリズムの責任は重い。この憂うべきわが国の政治社会的病理現象に対する処方箋の一つとして教育力の回復が既に提唱され続けているが⁷⁾、本研究は、そこに「教育評価」のあり方を見定め、よりよき仮説を創造する事を目的とする。

るが⁷⁾、本研究は、そこに「教育評価」のあり方を見定め、よりよき仮説を創造する事を目的とする。

経過と方法

学校教育に於ける評価は、児童生徒の学校で修得した学業、行動の結果を偏差値に置きかえ数量化して比較し、個人内及び個人間のグレードアップの資とする事が目的であるが、この考え方は敗戦という苦い経験の下に日本がアメリカから学びとった貴重な教育的遺産の一つであった事になる。乃ち $E = f(G, A)$ であるが更に時間を従属変数に加えた関係弁証法的関数として生涯学習時代に於ける教育評価の一つのあり方として定着している⁸⁾。同時にマルチメディアにソフト面で機能する教育としての情報処理を評価する際のパラダイムとしながら「教育力を回復するための教育評価はいかにあるべきか」の課題にさまざまな角度からアプローチしつつある。

結果

- 1) 教育心理学的観点から
「教育評価は、学校教育に於ける『する側とされる側』とのカウンセリング関係である」
- 2) 教育社会学的観点から
「教育評価は激変する政治的社会的状況のトポロジカルな共同幻想としての価値観の従属変数である」※
- 3) 精神医学の立場から
「教育評価は、ストレス社会に於ける実存的不安を解消する処方箋の一種である」

考察

- (1) 従来教育テククラットによる密室裡の教育評価であった指導要録が「される側」の請求に基づき、次第に開示され始めている。学校教育という縦社会での適応の技術を学ぶ場に、適応の意味を問い直す機会が漸増しつつある事になる⁹⁾。
- (2) テレビCMによるなりふり構わぬ予備校宣伝に始まり、格調高き社説を掲げながら、受験産業戦略にのめりこむ大新聞の重商主義、教育評価がジャーナリズムのアキレス腱となりつつある事になる¹⁰⁾。
- (3) 「絶叫療法」や「ほめ殺し」（心理劇に於ける fading）各種アートセラピーやビブリオセラピー、特にロゴセラピー等「される側」から「する側」へのロールプレイング¹¹⁾。生涯学習社会時代の self-evaluation となりつつある。
※「変わってきたか、日本のイメージ」 国際教育情報センター、'93.5.

大学教育における心理劇(4)

—演習における多種多様な活用—

黒田 淑子

(お茶の水女子大学生活科学部)

【目的】

この研究の目的は、大学教育におけるひらかれた心理劇の活用の可能性を探り、活動内容や参加者の養成過程に応じた教育プログラムを作成し、その効果や実施上の留意点について探究していくことである。これまで、第1報(1991)においては心理劇の5つの要件に対応する養成課題について、第2報(1992)においては講義演習と実習を組み合わせた教育プログラムにおける監督・補助自我チームについて、第3報(1993)においては初心者への心理劇の導入のしかたについて研究してきた。今回は養成過程のⅡ～Ⅲ期(監督・補助自我チームの体験を経て、監督として独り立ちしていく過程)に位置づく演習での活用のしかたについて、次のような観点から考究を進める。(1)心理劇と他の方法(講義、文献ゼミ、フィールドワーク、集団討論など)を組み合わせた教育プログラムの作成、(2)演習における監督体験・オリジナルな心理劇の創造、(3)小グループをいかした教育集団活動の展開。

【方法】

○大学における演習の具体例(1993年度後期3年次選択「児童臨床学演習」、参加者13人)を取り上げ、それまで数年間の資料も参考にしながら、上記の目的にそった分析・考察を行う。

【結果】

1. 教育プログラムの作成—1993年度児童臨床学演習初めに教官が、余白のある企画を提示し、授業を進める過程で、参加者と共に作成したプログラム。

- 1)ミニレクチャー：授業の概要、児童臨床、心理劇についての基礎講義他、2)問題・課題の設定：個々の関心・問題提起から4つの小グループをつくり討論する→共通テーマ、サブテーマ、個人のテーマの設定、3)問題・課題の探究(その1)：心理劇第1部、4)問題・課題の探究(その2)：フィールドワークの資料に関する集団討論、5)問題・課題の探究(その3)：文献ゼミ第1部、6)問題・課題の探究(その4)：心理劇第2部、7)実践・研究のまとめ(その1)：文献ゼミ第2部(学術論文)、8)実践・研究のまとめ(その2)：授業のまとめ、集団討論他、9)実践・研究のまとめ(その3)：小冊子の作成(レポート ほか)・配布
2. 課題の探究

共通テーマ：《人間関係におけるマイクロコスモスとマ

クロコスモス—自分のものさしと他人のものさし—
サブテーマと個人のテーマ：Aグループ「異なった人間間での関係のつくり方」—「弱者について」「人間性への同化・異化」「自分の中の他者—立場の違いをこえるもの」、Bグループ「自分の世界を保持しつつ、相手に開かれた関係をめざして」—「価値観の違いやベースの違いの上に成り立つ人間関係とは何か」「共存する—相手の立場に立つということについて」「ありのままの自分で、相手のあり方も認める人間関係を探る」「人と人との関係のあり方を探る」、Cグループ「自己との出会いとかかわり」—「違和感の変容」「閉じた心を開く」「新しい状況への一歩」、Dグループ「親子の転機」—「子供の成長と家族関係の変化」「孤立する状況と本質的な問題」「自己を主張しながら、家族と共に生きること」

3. 多種多様な心理劇の創造

心理劇第1・2部を通して、全員が監督の役割を担い、具体的、仮説的、予測的な場面を設定して、オリジナルな心理劇を創造する。1つの心理劇の行演の前半・後半で監督の役割を交代する場合もある。第1部の心理劇：“上下関係”“ひらくととじる”“葛藤状況における問題を探る”“心の声を具現化する”“自己の世界と他者の世界の距離と転換”“価値感の違いを認め合い、関係を豊かにしていく”、第2部の心理劇：“立場の転換”“シールがもらえない—学級集団の人間関係”“人と人との関係のあり方を探る”“転校生—新しい人間関係に入っていくとき”“思春期の孤立をめぐって”

【考察】

- (1)心理劇と他の方法を組み合わせると、例えば、講義、文献ゼミから基本的なコンセプトが明確になる、フィールドワークと重ねて日常生活につながる行演ができるなど、多面的総合的なアプローチが可能となる。
- (2)心理劇を活用していくには、監督の役割をとれることが必須となるが、自ら、オリジナルなものを創造する体験は、心理劇との柔軟なかかわり方を育む。
- (3)小グループを構成することによって、集団の人間関係構造が重層的になり、個々の存在をいかしあう関係づくり、監督を支える補助自我チームの役割連担など、個・集団・課題の相即的發展が促される。

〈研究協力者〉1993年度「児童臨床学演習」参加者

臨床・相談2-1

長期入院中の精神分裂病患者の生活環境が痴呆様症状の出現及び進行に及ぼす影響について
—老人健康度検査によるコントロール群との比較検討—

○石川 正人
(下館病院)

福井 嗣泰
(江戸川女子短期大学)

はじめに

長期入院中の慢性精神分裂病患者を対象に老人健康度検査(江戸川式)を施行し、その結果の検討を行った。慢性精神分裂病患者は、一見痴呆様に見えるが知的・記憶機能に障害はないといわれている。これは、無為・自閉・感情鈍麻などの情意障害によるものと、長期入院に関係するものと考えられる。そこで、これらの精神内部の機能異常が健常者のそれと、どの様に異なるのか、その特徴はどの様なものなのか?その点について老人健康度検査を用いてその特徴を明らかにすることを目的とする。

方法

検査対象 医師により精神分裂病と診断された閉鎖病棟で長期入院中(平均28年)の満年齢60才以上の者40名

検査日時 1994, 2~1994, 5の期間

検査方法 病院臨床心理士によって老人健康度検査を施行した。検査は、全て検査者が問題を読み上げて被検査者がそれに回答する形で行われた。

検査項目 問題回答式: A, エピソード記憶・見当識 B, 意味記憶, C, 操作記憶, D, 短期記憶, E, 知覚判断, 以上の5項目。主観的評価式: F, 一般的物忘れ G, 境界水準物忘れ, H, 障害水準物忘れ, I, 感情・情動, J, 身体不調, K, 意欲水準, 以上の6項目。

結果の処理

個人の名検査項目得点を算出し、次に60才代と70才代の各検査項目の平均と標準偏差を算出した。また、健常者群との各項目ごとの平均の差の検定を(コクラン・コックス法)行った。

検査結果

問題回答式: A, エピソード記憶・見当識は、40名中20名が障害水準、6名が境界水準、14名が健常水準となった。B, 意味記憶は、32名が障害水準、8名が健常水準となった。C, 操作記憶は、13名が障害水準、2名が境界水準、15名が健常水準となった。D, 短期記憶は、7名が障害水準、1名が境界水

準、32名が健常水準となった。E, 知覚判断は、28名が障害水準、7名が境界水準、5名が健常水準となった。主観的評価式: F, 一般的物忘れは、2名が障害水準、2名が境界水準、36名が健常水準となった。G, 境界物忘れは、9名が障害水準、3名が境界水準、18名が健常水準となった。H, 障害物忘れは9名が障害水準、2名が境界水準、19名が健常水準となった。I, 感情・情動は、4名が境界水準、36名が健常水準となった。J, 身体不調水準は、2名が境界水準、38名が健常水準となった。K, 意欲水準は、4名が、障害水準、5名が境界水準、31名が健常水準となった。

また、60才代と70才代の慢性精神分裂病群の名検査項目の平均得点についての差の検定結果は、短期記憶において有意差がなく、その他の項目は、危険率0.001で全て有意となった。

考察

慢性精神分裂病患者の問題回答式の全体的傾向はエピソード記憶・見当識、意味記憶、操作記憶、知覚判断、これらの項目において障害が顕著である。しかし短期記憶には障害が少ないことが表われている。このことは慢性分裂病患者は、日常生活における即時的知覚判断は可能であることを意味するものと思われる。それが本来の痴呆と異なり、無為・自閉などの精神症状と関係するものと思われる。又、長期間入院していることによる外界との遮断による無刺激状態の影響も関係しているものと思われる。

主観的評価式の結果からは、感情・情動、身体不調の尺度より、不安・心配が少ない傾向が現れておりこれは、現実認識欠如による症状と結びついていることを示唆するものと思われる。その他の項目からは特に明らかにされることはないように思われる。

おわりに

今回の結果が、長期入院という生活環境によるものか、精神分裂病の症状の特徴であるのか否かの判断は同じ慢性精神分裂病在宅患者を対象に調査を今後実施し考察を深めてゆくものとする。

本原稿をまとめるにあたり、御指導、御協力を頂きました下館病院 羽田忠先生、斉藤由美子先生、江戸川女子短期大学 福井嗣泰先生に深く感謝致します。

介護場面における行動観察による老年期痴呆の障害像

○大瀧法子

荻野七重 木下安子 小林結美

(特別養護老人ホーム蔵サンクチュアリ)

(白梅学園短期大学)

はじめに

老年期における痴呆は様々な疾病に起因し、妄想や幻覚等の精神症状とも相乗し多彩な表出を認めるが、いかなる病態にも『日常生活への不適応』が問題となる。慢性疾患・身体機能の衰退と対峙する介護の場面では、高次な知的機能の保持の如何より、生活の維持に必要な最小限な知的能力の残存水準が、適応状態に影響することが強く意識される。一般には、痴呆の『知能水準や記憶力の低下』が強調されがちだが、介護に於いてはさらに広義な概念、『生活環境への知的適応力の異常・失調』状態として把握されている。

目的

介護時に於ける痴呆性老人の行動観察を基盤に、生活環境への適応に不可欠な知的能力の異常が行動に現れた場面を設定、介護専門職員がこれをどの程度の痴呆と評価するかを調査し、生活障害像の概観を示す。

方法・手続

調査対象 介護専門職員 102名

1. 介護時に観察された『痴呆老人に特有な行動』の中で、生活への適応障害となるものや知的障害の表出を示唆するものを挙げた。これは、以下の8つの知的機能領域【a自己、b・c時間(短期・長期)の2種、d対人、e対物、f数量、g順序・系列、h位置・方向、の認知・理解・操作】の異常や失調に由来すると考えられる。

2. 8つの領域に従って各7つずつの行動場面を設問として選出し、計56問の質問紙を作成した。

3. 回答は、設問それぞれに対して「このような行動が観察できたとき、その老人の痴呆の程度をどう判断するか」と質問、評価は重度・中度・軽度・痴呆ではないの4段階とし、丸印を付ける方法で採った。

結果

重度の評価を3.0 中度2.0 軽度1.0 痴呆なしを0と、

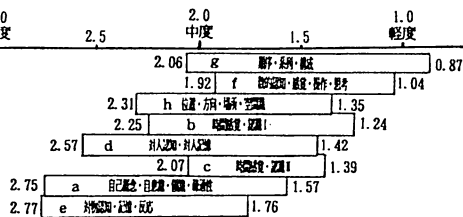


図1 知的障害領域における評価の分布

得点化し平均値を算出し、図1として知的障害領域ごとの7設問の評価平均値分布を、続いての表1は平均値上位の行動を挙げた。これは中度2.0以上(保護・観察・介助は不可欠)の状態から重度3.0(特に注意を要する)までの判断を受けたものである。

表1 評価の平均2.0以上の行動

平均	標準偏差	表出行動
2.03	0.63	21-c 季節や年月を尋ねるとそのたび違う答えになる。
2.06	0.71	44-g 着衣の順番がわからず奇妙な着かたをする。
2.06	0.70	16-c 一年前のことも一週間前のことも区別できない。
2.06	0.74	9-b 時計を見ても時間がわからない。(その時間だと認めない)
2.07	0.76	19-c 自分の年齢の見当がつかない。
2.08	0.78	34-e 見慣れているはずの品物なのに、それがなにかわからない。
2.14	0.69	6-a 自分の物と他人の物の区別ができない。
2.17	0.66	33-e 明らかに目的とは違う用途の物を使おうとする。
2.24	0.79	8-b 暗くなっているのに夜だと思わない。
2.25	0.89	10-b 食事の時間であれば、間食をして満腹であっても平気で食べる
2.31	0.63	50-b 同じ場所を行き来していてもそのことに気付かない。
2.34	0.72	4-a 話しかけてもわからない、または違った意味に受け取る。
2.40	0.80	35-e 腐っていてもわからずに食べてしまう。
2.57	0.60	25-d 肉類とそうでないものの区別ができない。
2.58	0.62	29-e 危険なもの(火気・刃物)がわからず手にしてしまう。
2.66	0.57	2-a 鏡・写真の中の自分の姿がわからない。
2.75	0.58	1-a 自分の名前を尋ねられてもわからない。
2.77	0.46	32-e 食べるものとそうでないものの区別ができない。

考察

痴呆の障害像は、知的適応水準の低下が生活の中で異常な行動として顕在化し、それが認知されることによって成立する。介護上、その強弱と質の判断は、観察された不適応行動への対処の困難さや保護の緊急性必要性などの条件に基づいている。

痴呆の強弱を意識させる知的適応能力の異常が、どのような領域に示されているのかをみると、e a dの知的障害領域に、より重度の評価が傾く一方、g fの知的障害領域は軽度から中度の評価を受けている。

これは、g fなどの障害は生活の混乱を招くが環境の整備や生活習慣の改善で対応が可能なものであり、それに比較してe a dの障害は、精神症状と相乗した場合、常に目が離せない状態に陥る事が十分に予想できる事と同時に、障害に対し決定的な効果が期待出来る対応の方法がない、すなわち『介護困難』という経験的見地から生じた評価の差異だと言える。

次に行動別では、誤認行為等の合理性の欠如を感じさせる行動や失認・失行が重度の評価を受ける傾向にある。これは、記憶機能の異常も然る事ながら問題解決に關係の深い能力の異常も、重篤な適応障害の背景として認識されている事を示している。

複雑な家庭背景から発病した音大中退の境界人格障害

飯塚幸子 (横浜市立大学医学部附属浦舟病院 小児精神神経科)

1 はじめに

近年欧米先進諸国では、アルコール依存症、薬物乱用などの嗜癖行動や幼児虐待などの深刻な問題が増加の一途をたどり、それに伴ない患者をとりまく家族の精神障害も社会問題となっている。日本でも今後同様の傾向を示すものと推測される。今回神経性過食症(BN)で、境界人格障害(BPD)にみられるアルコール依存症家族の成人した子供(ACOA)の治療を経験したので報告する。

2 症例

23才の女性。主訴：死にたい。人と話せない。傷つくのがこわいため家族とも口をきかない。

大学中退で公務員の父(58才)と、高卒でパート勤務の母(53才)、大卒で銀行員の兄(25才)の4人家族。発育歴、既往歴に特記すべきことはない。家族歴では父が中学及び高校で一時的ではあるが精神科通院歴があり、結婚以前から深酒の傾向があった。現在に至るまでアルコール依存症で、父方祖父も酒乱であった。兄も治療経過中にうつ状態で精神科を受診した。

現病歴：小学校高学年から親の機嫌をとりながら育ち、中1頃から父のアルコール依存に気付いた。母は家族以外の人にはもちろん、家族にも父の状態を隠した。高1から不登校傾向が始まり、高2から肥満を気にして休みだし、高3で全く登校できなくなった。

高卒後音大に入学し遠方のため寮に入ったが、対人関係のストレスから過食が始まった。寮から出てマンションを3回変わったが、かえって過食はひどくなり嘔吐も加わった。2ヶ月後には精神科を転々とし、5カ所目の精神病院に摂食障害を主訴に家族療法を受ける目的で入院したが2日で退院。以後外来治療となるもカウンセラー(CP)に幼児体験を話し始めた矢先に自宅台所に放火、同病院に2ヶ月間自主入院した。大学を1年留年し新年度より復学予定であったが症状が再燃し2年半在籍後中退。両親も離婚調停となり、過食拒食に加えリストカット、拒食、家庭内暴力も加わり、以後は母子同席のカウンセリングを3年間受けた。母の知人の紹介で当科初診となった。紹介状による診断はBPDで、脳波は正常であった。両親は離婚調停不成立のまま1年間の約束で別居中。自閉、過食、嘔吐、家庭内暴力、企死念慮が主症状であった。

3 治療経過

eye contact なく、下を向いてやっとの思いで自分の気持ちを伝える。遠方のうえ、母の運転する車でしか来院できないので、継続して通院できるかどうか考えてくるように話す。身長158cm体重60kg。

通院に迷いがあり些細なことで母に暴言を吐き、衝動的にデパートの屋上から飛び降りようとしたが断念した。以前のCPに会い当科通院を決意。4回目にやっとeye contact がつき、服薬にも応じた。服薬により興奮状態が改善したが、父との別居後母にむかうようになった攻撃性や、否定的感情は続いた。過食嘔吐で受診できない時に、スケッチブックと日記を治療者(T)へと母に託した。言いたいことが言えるようになり、過食嘔吐も月に1回位と頻度が減る。母子関係も改善のきざしがみられ、7回目には1人で電車で来院できた。小学校、中学校といじめにあったため「人に嫌われるのを極度に恐れる」ようになったことや自分の潔癖症に対して内省がみられるようになった。企死念慮はなくならないが嘔吐できなくなり、母子関係が改善するにつれ、外での人との出会いを求めるようになった。夢の中で母との一体感を味わい、現実場面でも退行。兄、友人との関係も改善し、強迫症状も軽減。但し異性からの誘いにはまだのれなかった。髪をすっきりと切り外来に現われるが、「何か大切なものを見落としているような気がする」と不安定な自分の方により安心感を抱く。「死ぬことと同じ位生きることが重要」という言葉に感動。その後折にふれTに小さなプレゼントを送る。父に対する全面的拒否感が和らぎ、人間としてかわいそうという気持ちがわく。Tに対するライバル意識を表現でき、書き終えた日記を預ける。以前のCPと別れた後に支えてくれた叔母と些細なことで決別したり、兄が悩んだ末に退職し精神科を受診したことが重なり母との関係もぎくしゃくし、戻りかけていた人への信頼感を再び失いそうになる。嘔吐はほとんど消失していたが、気持ち悪くて吐くという初めての経験をする。自閉状態から1ヶ月で立ち直り企死念慮はなくなる。母との旅行を機に再び母子関係が改善し友人とも交流、叔母とも和解し過食や暴言もない。人間関係は不安だがアルバイトもしたいと意欲をみせる。考察は紙数の都合上当り報告する。

乳幼児の成長発達および家庭環境条件に関する研究

草野美根子 佐賀医科大学
 中 淑子 産業医科大学医療短期大学
 ○内海 混 千葉大学

目的

乳幼児の発達は様々な環境要因によって影響を受けている。特に乳幼児では家族など人的条件のなかでも母親の条件に左右される。今回、乳幼児の発達と家庭の条件である母親の養育に対する意識や態度との関連を明らかにすることを目的とする。

研究対象および方法

研究対象は母親の妊娠、分娩時に異常がなく6歳まで追跡された16名（男児11名、女児5名）とその養育者である。出生時状況として在胎週数はすべて満期出産で、平均出生体重は各々3178±302g、3389±396g、アプガール点は各々9.0、9.5であった。

研究方法は新生児期から6歳までの発達状態と家庭環境条件を調査した。家庭環境はCaldwellの研究を参考とし、次のような6項目で調査した。「母親と子どもとの相互関係」、「母親の子どもに対する行動や態度」、「環境」、「オモチャの与え方」、「子どもを知ろうとする母親の行動」、「母親以外の子どもに対する刺激」である。これらの項目の内容は各々11、8、6、9、6、5の45項目であり 0 1点とした。

表1 家庭環境と発達指数の相関

(年齢)	家庭環境					
	6M	1Y	2Y	3Y	5Y	6Y(年齢)
6Y	0.44	0.36	0.50*	0.64*	0.35	0.33
5Y	0.13	0.03	0.38	0.58*	0.44	0.35
3Y	0.38	0.47	0.82*	0.38	0.41	0.40
2Y	0.15	0.54*	0.53*	0.41	0.40	0.35
1Y	0.41	0.57*	0.45	0.58*	0.35	0.45
6M	0.33	0.59*	0.40	0.65*	0.27	0.30

*p<0.01

結果

1) 乳幼児の発達別にみた家庭環境のタイプ分け

乳幼児の発達を分析した結果、各年齢の発達指数が平均値より高い群、平均値より低い群、変化が大きい群の3群に分けることができた。更に、家庭環境を発達傾向に応じて分析すると、家庭環境の得点は全期を通じて得点の高い値、低い値、中間の値を示す3群に分類できた。それらの乳幼児の発達状態の3群と家庭環境の3群とは密接な関係が認められた。(図1, 2)

2) 乳幼児発達と家庭環境

乳幼児の発達は家庭環境と関連があり、3歳時までの発達は6カ月からの家庭環境に影響を受けていた。5歳、6歳時については相関は認められなかった。(表1)

3) 出生順位別と家庭環境

第1子をもつ母親の場合「子どもとの相互関係」や「子どもを知ろうとする母親の行動」において、第2子以降をもつ母親よりも母親の意識や行動は高い傾向を示した。

4) 母親の就労状況と家庭環境

「子どもとの相互関係」は1歳までは働いている母親の方が専業主婦の者よりも高い得点であった。又、「子どもとの相互関係」の項目で、働いている母親は専業主婦の者よりも努めてかかわろうとする態度が1歳まではみられるが、それ以後は母親の養育態度に差はみられない。

5) 乳幼児の性別と家庭環境

男女別の家庭環境の得点の差は3歳では「子どもとの相互関係」や「子どもを知ろうとする母親の行動」、5歳の「子どもとの相互関係」に差があった。又、すべての項目において、わずかではあるが男児の方が女児よりも平均値が高かった。

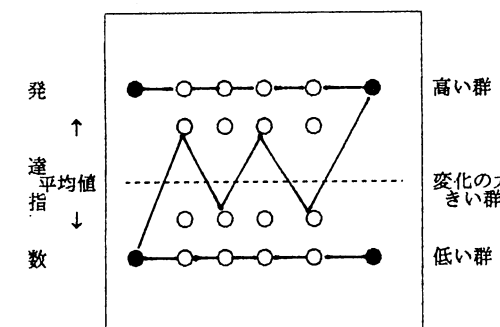


図1 発達指数による発達区分

家庭環境項目	(5)
母親と子どもとの相互関係(11)	
母親の子どもに対する行動や態度(8)	
家庭の環境(6)	
オモチャの与えかた(9)	
子どもを知ろうとする母親の行動(6)	
母親以外からの子どもに対する刺激	
家庭環境の総得点(45)	(5)

家庭環境項目	B型群の子ども発達	A型群の子ども発達	C型群の子ども発達
母親と子どもとの相互関係(11)	10.4	8.8	8.7
母親の子どもに対する行動や態度(8)	6.9	6.5	6.2
家庭の環境(6)	5.7	5.2	4.4
オモチャの与えかた(9)	7.0	6.2	5.9
子どもを知ろうとする母親の行動(6)	5.4	4.5	4.3
母親以外からの子どもに対する刺激	4.4	3.4	3.3
家庭環境の総得点(45)	42.8	35.8	34.8

図2 家庭環境と母親の養育態度

エイズ啓蒙期におけるエイズの意識

— 看護婦の場合 —

○中 淑子、新小田 春美、深田 高一、草野 美根子、内海 澁

(産業医科大学医療技術短期大学) (佐賀医科大学) (千葉大学)

目的：エイズは決定的な治療法がないことやエイズに対する正しい知識のないことから多くの人々はエイズに感染することや、感染者との接触を嫌う傾向にある。私共は1990年より看護学生、一般男性などを対象にエイズについての意識を経年的に把握してきた。今回は看護婦の意識を解析したので報告する。

方法：1) 対象：M県看護婦191名。2) 調査時期：平成5年11月。3) 調査方法：エイズに関する講演会に集合した看護婦に開始直前に自記式調査表を配布・回収。(1) 質問紙Ⅰ-1990年より我々が用いている質問紙で、エイズのイメージを40項目質問し、「そう思う」から「思わない」までを5段階評価とし、数量化を可能にしたもの。(2) 質問紙Ⅱ-対象者の背景とエイズ患者や感染者への行動をみるもの。4) 評価：①因子分析による因子の抽出、②対象者の背景や感染者等への行動郡別に因子との関係を見るため因子得点の平均値の差の検定。

結果

1. 因子分析による因子の抽出(表1)：

累積寄与率47.11%にて6つの因子を抽出した。第一因子より順に社会的否定因子、社会的肯定因子、誤

解認識解消因子、否定的感情因子、思索的因子、肯定的感情因子と命名した。6因子の中でエイズを社会的側面と感情的側面から否定的にみている因子と肯定的にみている因子が存在する。他の因子は過去の誤解認識の修正や思索的思考である。エイズ問題が一般化され、人々への啓蒙活動の効果も手伝い、肯定する意識や誤解認識の修正が特徴的である。

2. 各因子と対象者の背景の関係(表2)：第一因子では既婚で40歳台と比較的年齢の高い、しかも看護経験年数が20年以上の熟練者や感染経路への差別意識のある人、感染者の入院や同僚に感染者がいたら避けたいと思う人に社会的否定の意識が強い。第二因子ではエイズに関心と理解を示す人、自分に関係があると思う人は社会的肯定の意識が強い。第三因子では、これまでエイズの感染源は様々な誤解を招いていた。エイズをの研修会に参加し学習機会を積極的に得ている人はこれまでの誤った知識を解消させている。第四因子では50歳より20歳と若く、従って看護の経験年数も浅い看護婦やエイズに対する理解が少ない人は感情的な否定が強い。第五因子ではエイズに対する理解のない人や少しと自覚する人はエイズは不思議や不可解という思索的意識をもっている。第六因子はエイズへの関心と理解を示す人、施設での感染者の受入れが前向きで、感染者の入院や同僚に感染者がいる場合には、エイズを感情的に肯定するという傾向が強い。

表1 因子分析 累積寄与率 47.11%

項目	f1	f2	f3	f4	f5	f6	因子命名
25 身から出た膿び	0.71	-0.02	0.01	0.27	0.07	-0.13	社会的否定因子
17 靴もつな	0.70	0.04	-0.09	-0.02	0.23	-0.09	
16 感心しない	0.69	-0.15	-0.06	-0.08	0.13	-0.05	
24 迷惑な	0.64	-0.15	-0.07	0.08	0.03	-0.38	
13 みっともない	0.59	-0.15	0.13	-0.11	0.21	-0.38	
4 性行動の乱れ	0.55	0.22	-0.31	0.01	0.03	-0.14	
34 同性愛者理解できない	0.54	-0.05	-0.14	-0.29	-0.34	0.03	
9 汚らしい	0.49	0.15	-0.09	-0.13	-0.02	-0.47	
23 放っておけない	-0.08	0.75	0.02	-0.23	0.02	-0.02	
22 同とあてあげたい	-0.24	0.63	0.05	-0.32	0.03	-0.11	
38 身近な問題	0.12	0.61	0.07	-0.11	-0.12	0.32	
39 患者への理解	-0.13	0.61	0.03	0.00	0.02	0.19	
24 人間的な	-0.15	0.54	0.05	-0.02	0.06	-0.16	
35 関心ある	-0.02	0.53	-0.04	-0.13	-0.01	0.14	
37 日本の問題	0.07	-0.48	0.26	-0.10	-0.03	0.20	
33 セックスちゅうちょ	0.09	-0.02	-0.68	0.03	0.03	0.05	誤解認識解消因子
31 恐ろしい	0.19	0.05	-0.56	-0.25	0.18	0.08	
31 精血大丈夫	0.02	-0.01	-0.54	-0.09	-0.02	-0.18	
32 キスちゅうちょ	0.06	-0.22	-0.55	-0.05	-0.05	-0.24	
8 大変な	0.04	0.14	-0.53	0.27	0.40	0.12	
40 異性間交渉考えて	0.03	0.41	-0.46	0.05	0.06	0.19	
30 精血大丈夫	0.08	0.02	-0.42	0.09	-0.12	-0.30	
18 かわいそうな	0.00	0.10	-0.13	-0.83	0.10	0.05	否定的感情因子
19 気の毒な	-0.17	0.13	-0.18	-0.83	0.13	-0.01	
21 あわれな	0.27	0.19	-0.06	-0.63	0.09	0.02	
15 不思議な	0.11	-0.04	0.04	-0.13	0.62	-0.07	思索的因子
16 不可解な	0.16	0.02	0.00	-0.10	0.19	-0.04	
12 奇妙な	0.23	0.00	-0.16	-0.14	0.62	-0.08	
1 きたない	0.48	-0.03	-0.10	0.01	0.14	-0.60	肯定的感情因子
2 いやらしい	-0.54	-0.12	-0.09	-0.00	0.11	-0.59	
3 外国の病氣	-0.00	-0.02	0.00	-0.01	0.08	-0.57	
2 近寄りたがたい	0.00	-0.07	-0.02	-0.08	-0.01	-0.55	
29 公共トイレさげたい	0.22	-0.17	-0.22	0.13	-0.12	-0.51	
27 血友病患者さげたい	0.31	-0.14	-0.19	0.08	0.04	-0.45	
寄与率 (%)	16.84	10.45	5.82	5.37	4.76	3.88	

表2 各因子と対象者の背景の関係 (有意差を示すもの)

因子	f1	f2	f3	f4	f5	f6
背景	社会的否定因子	社会的肯定因子	誤解認識解消因子	肯定的感情因子	思索的因子	肯定的感情因子
1. 年齢	40>20** 40>30*			20>50**		
2. 所属の所属	既婚>未婚***					
3. 経験年数	20年超>1-9年			6-10年>11-20年		
4. 研修会参加			2回以上>初めて			
5. エイズへの関心	{(144)>(144)*** {(144)>(144)*** {(144)>(144)***					{(144)ある*
6. エイズへの理解	ある>ない*	ある>少し*	少し>ない*			少し>ある** ない>ある**
7. エイズは自分に関係	あり>ない***					
8. 感染経路への差別	ある>ない*** ***	ない>ある**				ない>ある*
9. 感染者の職場での受け入れ	ある>ない**	わからない>ある				
10. 感染者が入院したら	さける>考え* さける>普通**		普通>さける*			普通>考える*
11. 同僚に感染者が出たら	考える>普通*					普通>考える*

*検定 *** p<0.01 **p<0.01 *p<0.05

看護場面における接触の研究 (第4報)

——対人的接触における意識構造——

○宮島 直子

内海 滉

(北海道大学医療技術短期大学部) (千葉大学看護学部)

I. 研究目的

我々は、接触の研究第2報・第3報として、看護学生を対象としたアンケート調査を基に、接触頻度とイメージについて調べた。

結果として、①接触頻度によってイメージは変わり得ること、②1年次と3年次の比較においては、1年次より3年次に各発達段階における人の認知の明確化・定型化がなされていること、③ある対象の接触が他の対象のイメージに影響を与え得ることが推定された。

今回、同様のアンケート調査を臨床の看護スタッフに実施したので報告する。

II. 方法

「乳幼児」「小児」「青少年」「成人」「老人」のそれぞれに対するイメージと接触頻度についてアンケート調査を行った。

調査期間：平成6年3月

対象：臨床の看護スタッフ67名(女性)

年齢 21~54才 平均年齢 28.8才

勤務年数 1~20年 平均年数 5.6年

アンケート内容：イメージについては、50項目の形容詞を前回と同様の方法で取り上げ、それぞれの対義語と組み合わせて25項目とした。評価は5段階とし、最もふさわしいと思う箇所を○で記入してもらった。

接触頻度については、その頻度を1.ほとんど毎日、

2.一週間に数回、3.一か月に数回、4.年に数回、5.ほとんど接することはない、の5段階評価とし、該当する箇所に○を記入してもらった。但し「接する」とは身体接触に限らず、日常社会的交流とし、それぞれの主観により判断したものとした。

III. 結果および考察

イメージの対象別接触頻度は、「ほとんど毎日接する」者が老人では88%、成人では99%と圧倒的多数を占めるのに対して、青少年では16%、小児では6%、乳幼児では12%と少数であった。特に小児と乳幼児については「年に数回」又は「ほとんど接することはない」者が70%前後であった。

次にイメージと接触頻度との関係であるが、接触頻度とイメージ項目の主な相関係数を表1に示した。

接触頻度が多い程、乳幼児では「明るい」「強い」「豊かな」「親しみやすい」「大切な」というイメ

ジを持ち、小児に対しては「強い」、青少年に対しては「厳しい」「抜け目がない」また、老人に対しては「美しい」というイメージをもっていた。

乳幼児、小児、老人に対しては、接触頻度が多いほどプラスのイメージをもつものに対して、青少年に対しては接触頻度が多いほどマイナスのイメージをもつ傾向があった。危険率5%以下で相関関係を認める相関係数に着目すると「ある対象の接触とイメージの対象が異なる項目」が全体に占める割合は74%であった。とくに、乳幼児の接触頻度と成人に対するイメージ項目に、相関関係を認めるものが多かった。

前回の看護学生1年次と3年次を対象としたアンケート結果との比較において、接触頻度と相関関係を持つイメージ項目に一致するものは認められなかった。しかし「接触頻度が多いほどプラスのイメージをもつが、青少年に対してはマイナスのイメージをもつ」という傾向や「ある対象の接触とイメージの対象が異なる項目」が全体に占める割合が多いという傾向は、看護学生1年次の結果と類似していた。

表1の結果を更に勤務年数別・年齢別にみると(それぞれ3つのグループとした)勤務年数では、1~3年のグループにおいて、接触頻度と相関関係があるイメージ項目が多いのに対して、年齢別ではどのグループ

においても、接触頻度と相関関係のあるイメージ項目が多くみられた。但しいずれも乳幼児の接触頻度とそのイメージ項目が多く、全体の70~80%を占めていた。

以上よりイメージは接触頻度、勤務年数、年齢に影響を受け、とくに乳幼児との接触が乳幼児のみならず、ほかの対象のイメージに影響を与え得ると推定された。

表1 接触頻度とイメージ項目との相関係数

対象	乳幼児	小児	青少年	成人	老人
乳					
幼					
児					
少					
年					
青					
少					
年					
成					
人					
老					
人					
明	**0.285	-0.227	-0.132	-0.069	0.110
暗	-0.078	-0.114	-0.173	**0.247	-0.171
強	**0.246	0.181	0.177	-0.152	-0.152
弱	**0.251	-0.057	0.082	-0.043	0.031
豊	-0.159	*0.254	-0.029	-0.076	0.077
乏	-0.284	-0.201	-0.063	-0.113	-0.097
親	0.092	0.240	-0.157	0.009	0.023
遠	**0.252	-0.106	-0.124	0.054	0.100
好	**0.285	-0.143	-0.042	*0.056	-0.085
悪	-0.180	*0.242	-0.153	0.031	0.101
小					
児					
明	-0.158	-0.184	**0.241	0.027	0.088
暗	-0.164	**0.262	0.102	-0.137	0.081
強	-0.112	-0.081	-0.136	0.057	*0.249
弱					
豊	**0.259	**0.256	-0.058	-0.065	0.068
乏	*0.018	-0.017	**0.260	-0.003	0.125
親	-0.130	0.080	*0.250	-0.146	-0.137
遠	*0.236	**0.253	*0.234	-0.031	0.022
好	0.087	-0.148	-0.083	0.077	*0.249
悪					
明	-0.083	-0.047	*0.265	-0.017	0.115
暗	**0.265	-0.162	0.076	-0.143	-0.151
強	-0.205	**0.246	0.034	0.143	0.114
弱	**0.236	-0.218	-0.024	0.127	0.092
豊	*0.292	0.207	0.110	0.131	-0.011
乏	**0.337	0.176	0.018	-0.118	-0.010
親	0.122	0.132	*0.260	-0.002	0.091
遠	**0.328	0.120	-0.087	-0.031	0.020
好	-0.056	0.080	*0.250	0.061	0.101
悪	*0.240	0.184	-0.227	-0.031	0.016
平	0.097	-0.075	*0.253	0.026	0.125
凡					
老					
人					
明	-0.177	-0.118	0.177	-0.206	*0.253
暗	0.012	0.015	*0.202	-0.225	0.111
強	0.008	-0.126	*0.282	0.026	0.117
弱	0.020	0.101	0.045	*0.251	-0.093
豊	0.014	*0.287	-0.182	-0.073	-0.100

*危険率5%で相関関係を認めるもの
**危険率1%で相関関係を認めるもの

看護場面における

言語的コミュニケーションの研究 (第1報)

○ 久木原博子
(久留米大学)

内海 澁
(千葉大学)

1. はじめに

言語活動は、様々な場において、各種の形態をとるが、基本的には相互の情報交換することに要約される。医療の場においても、医師-患者、看護婦-患者、医師-看護婦、あるいは患者同士など、数多くの情報の交換がなされ、医療活動の基礎となっている。

現代の医療の混乱には、会話の不在による医療不信や情報の過多による医療過信が重要な因子と考えられ適切な情報交換の調整こそは理想の医療行動の確立に望ましいものと思われる。

筆者は、小児科病棟における、学生受持ち患児の母親と臨床実習指導者との会話を、計量言語学的に分析することにより、両者の意志疎通の關係に、いささかの知見を得たので、ここに報告する。

2. 方法

臨床実習指導者と患児の母親4例との会話を、K病院の小児科病棟で、テープレコーダーにより録音し、浜¹⁾、北尾²⁾の方式に従い、プロセスレコードに復元した。

録音は、相手に了承をえて行った。

相談面接の過程を、その内容に關係なく、形式的に臨床実習指導者と患児の母親の発言比率を求めて、両

者のいずれがより多くの発言をなしたかを検討した。すなわち、プロセスレコードの発言した会話について個々にその発言時間を計測し、一定時間により等分しかつ発言の比率を時間的区分により追跡してその消長を調べた。

言語速度は次の如く定めた。

単位言語量 (モーラ)

$$\text{言語速度} = \frac{\text{単位言語量}}{\text{発言時間}}$$

3. 結果

図1は、言語数を縦軸に、発言時間を横軸にとったものである。臨床指導者と母親は、ほぼ交互に発言しており、両者の発言時間の比率をみると、会話全体をとおして、母親の発言時間が大である。

前半では、臨床指導者は情報を収集する立場としてうなづく、質問するなどであったが、後半は自分の意見もまじえ、会話が進んでいる。しかし、後半でも、臨床指導者の言語量が母親の言語量を上まわることはなく、傾聴の姿勢は最後まで保たれている。

言語速度をみると、母親と臨床指導者との關係がみられ、相互言語速度において若干の傾向をみとめた。

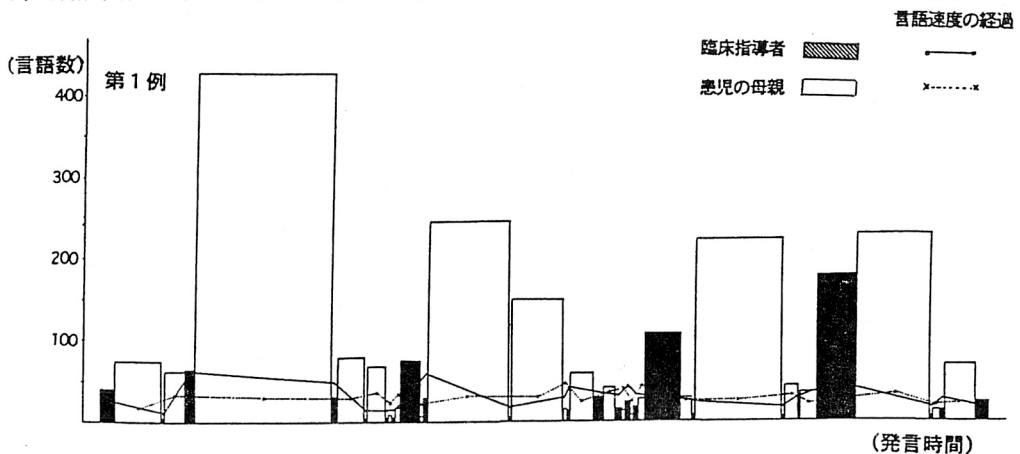


図1 言語量経過

看護場面における指導者および学生の患者に対する言語量の研究 VII

○山本勝則

(秋田大学医療技術短期大学部)

内海 澁

(千葉大学看護学部)

はじめに

会話は人間に安らぎを与えるための有力な手段である。したがって、医療場面で会話が適切に用いられるならば患者にもたらされる恩恵は大きい。会話を適切に用いるためには、言葉の使い方だけでなく間合いの取り方も大切である。そこで我々はこれまで発言交代時の沈黙時間について検討してきた。そして、前回の報告では「個人個人の話し方の特徴が、沈黙時間の取り方にもある程度現れる可能性」があると述べた。会話は、高度に知的な行動であり非常に柔軟性がある。反面、緊張するとうまく話ができない人や早口の人があるなど、個人の特徴や場面の影響が反映するものでもある。この個人の特徴の反映の仕方や場面の影響を明らかにすることが出来れば、会話の分析が容易になり、話し方を調整する一助にもなると考えられる。

方法

精神科実習初日の 3 年生の看護学生と、不活発で発言も少ない精神分裂病の患者 (57 才) との会話を録音した。引き続いて、この患者と臨床実習指導者との会話を録音した。これらの会話の発言交代時の沈黙時間、すなわち、一方が発言し終えてから他方が話し始めるまでの時間を 0.5 秒単位で測定した。一方が話し終える前に他方が発言した場合は -0.5 秒とした。0.5 秒単位で得られた沈黙時間の出現回数を百分率にし、「学生の発言が終了してから患者が発言するまでの間の沈黙時間 (図 1 の P)」と「患者の発言が終了してから学生が発言するまでの間の沈黙時間 (図 1 の S)」との比較、および「指導者の発言が終了してから患者が発言するまでの間の沈黙時間 (図 2 の P)」と「患

者の発言が終了してから指導者が発言するまでの間の沈黙時間 (図 2 の I)」との比較を行った。

結果

学生と患者の会話 (図 1) における、学生の発言の前の沈黙時間は 0 秒が最も多く 47% である。次いで、0.5 秒が多く 36% である。1.5 秒以上の割合は 7% である。平均は 0.36 秒である。一方、患者の発言の前の沈黙時間は 0.5 秒が最も多く、31% である。次いで 1 秒が多く 28% である。0 秒では 21% である。1.5 秒以上の割合は 17% である。平均は 0.83 秒である。

指導者と患者の会話 (図 2) における、指導者の発言の前の沈黙時間は 0.5 秒が最も多く 34% である。次いで、0 秒が多く 25% である。1 秒では 11% であり、1.5 秒以上の割合は 21% である。平均は 0.81 秒である。一方、患者の発言の前の沈黙時間は 0.5 秒が最も多く、40% である。次いで 0 秒が多く 21% である。1 秒では 11% である。1.5 秒以上の割合は 25% である。平均は 0.79 秒である。

考察

以上の結果は以下の傾向を示している。第 1 に、患者は話し相手が異なっても類似した間合いの取り方をした。反面、ある程度の違いもあった。第 2 に、指導者と患者との間合いの取り方は類似していた。第 3 に、学生と患者との間合いの取り方はかなり異なっていた。これらのことから言えることは、話し方が紋切り型になりやすい分裂病者でも相手や場面により間合いの取り方がある程度変化するという、および、同一の患者に対する会話でも、学生と指導者では間合いの取り方が非常に異なっていたということである。

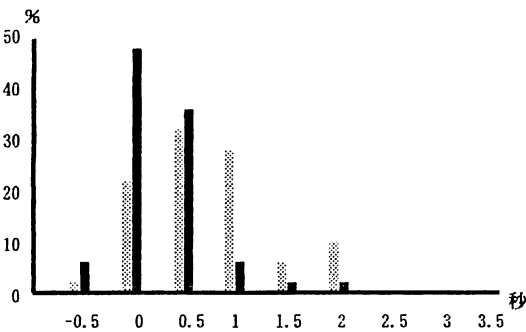


図1 P (●) - S (■) の比較

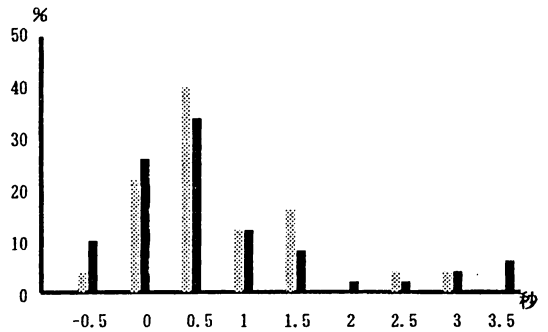


図2 P (●) - I (■) の比較

小児看護学実習におけるコミュニケーション能力が向上するための指導方法 — 第3報 —

○岡村千鶴 日沼千尋, 内海 滉
東京女子医科大学看護短期大学, 千葉大学看護学部看護実践研究センター

<研究目的>

学生の患児とのコミュニケーション（以下com.とする）能力の変化と、向上のための指導方法をcom.アンケートの回答を分析することにより検討する。

<研究方法>

1993年5月から11月に小児看護学実習を行った本学3年生40名を対象とし、実習の直前、中間、終了時の3回com.アンケート（第1報参照）を実施した。アンケートに記載された516場面を研究者が考案したcom.レベルと形態の6カテゴリ（第2報参照）に分類した。分類に際しては、客観性を保てるように複数の研究者で行った。今回は、年齢、カテゴリ、言語的・非言語的com.の関係に着目し、場面数と文字数について分析した。

<結果及び考察>

1. 年齢と場面数・文字数の関係

学生が観察した子どもは223名で、年齢不明者を除外した188名の平均年齢は、4.5歳であった。年齢毎の場面数の分布は、対象児の年齢分布に比例して、対象児の多い年齢層の場面数は多かった。しかし、子ども1人当たりの平均場面数を年齢別に観察すると、9～11歳が最も多く、年齢分布とは逆に、高年齢層の方が低年齢層よりも多い傾向にあった（図1）。

また、年齢毎の平均文字数は120前後で、年齢によりばらつきがあり8～8歳が最も多かった。文字数が、学生の意欲・関心やcom.の複雑さを表すと考えると、学生はこの年齢層に対し、関心が高く意欲的に記述しており、com.が複雑化していることが予測される。

2. 年齢と言語的・非言語的com.の場面数・文字数の関係

子ども1人当たりの言語的com.と非言語的com.の場面数を年齢毎に観察すると、言語的com.において、11歳までは年齢が高くなると共に場面数は増加するが、12～16歳で減少する。一方、非言語的com.においては、3～5歳で一時減少し、言語的com.と同数になるが、その後増加を続ける。12～16歳において言語的com.が減少し、非言語的com.が増加するという現象が認められた。この年代は、論理的なものに関心が高く、言語的com.が増えると予測される。しかし、今回の結果では、思春期のこの時期に学生は、非言語的com.を多くとらえており、性別や疾病との関係が今後の検討課題である。

3. カテゴリと場面数・文字数の関係

カテゴリ毎の場面数は、com.レベルに関して、Ⅱ、Ⅲ、Ⅰの順に多く認められた。また、カテゴリ毎の平均文字数は、分散分析にて有意差が認められた。Ⅲの文字数が最も少なく、中でもcom.レベルに関しては、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの順に多くなる。このことから、学生は、明確なものに対しては積極的に、不明のものに対しては消極的な記述をしていると考えられる。

4. 年齢とカテゴリ別場面数・文字数の関係

カテゴリ別の子ども1人当たりの平均場面数を年齢別に観察すると、Ⅱ、Ⅲ、Ⅰの順に多く、高年齢層の方が、低年齢層に比し多く認められる。Ⅴは、5歳以下と9～11歳に認められるが、発達段階の特徴から、両者は質的に異なることが予測される。

平均文字数に関しては、各カテゴリとも年齢による差はほとんどなく、カテゴリ毎にほぼ一定である。

5. カテゴリと言語的・非言語的com.の場面数・文字数の関係

子ども特有の表現であるⅤのみが言語的com.が非言語的com.の2倍を示した他は、非言語的com.の方が多く認められた。中でも、Ⅰ、Ⅱに関しては、2倍以上非言語的com.の方が多かった。com.レベルに関して、言語的com.の場面数は、Ⅲ、Ⅱ、Ⅰの順に多く、非言語的com.については、Ⅱが最も多く、ついで、Ⅲ、Ⅰであった。学生にとって、非言語的com.が言語的com.より断えている内容を予測し易かったり、分からなかったものに言語的com.が最も多いことが興味深い点である。

平均文字数に関しては、言語的com.と非言語的com.に有意差はなかった（図2）。

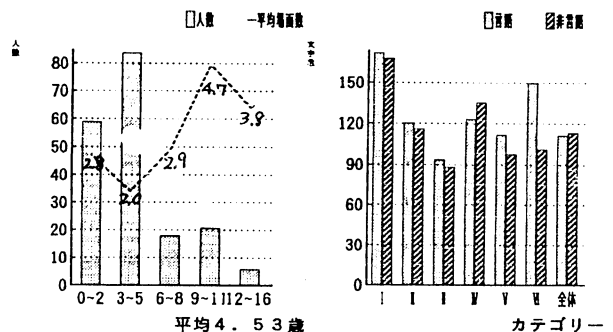


図1 小児の年齢分布と平均場面数

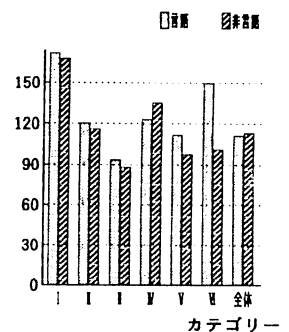


図2 カテゴリ別の文字数(言語・非言語)

他者からの影響と自己評価的意識

○佐藤 みつ子、森 千 鶴
(東京都立医療技術短期大学)

内海 滉
(千葉大学看護学部)

【研究目的】

青年期は、一般に、変容する自己の身体への関心をきっかけとして、自己そのものに対する関心が増大する時期であり、自己意識の形成や発達にとって重要な意味をもっている。本研究は、自己評価的意識が、人とのかかわりの中で他者の受容や拒否など、他者の身振りや発言、態度および身近にモデル的人物がいるか否かによって影響を受けやすいと言われていることから、他者からの影響と自己評価的意識の関連について明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

調査対象：138名(看護短期大学生1年次学生78名、女子大生1年次学生60名)。

調査内容：梶田による自己評価的意識調査項目に学生に影響を与えたと考えられる人に関する質問項目を加え5段階のスケールで調査する。本研究では学生に影響を与えたと考えられる人については、学生の自由記載ではなく、看護学生の場合は、看護教員や他の教員、友人、実習場での看護婦や患者など。女子大生の場合は、大学の教員、他の教員や友人、家族などをあげた。そのほかに異性の友人、理想の人の有無についても質問項目に加える。

【研究結果】

回答は、数値化し統計処理し分析する。質問紙の回収は、125名(看護学生78名、女子大生47名)、有効回答率は90.6%である。

1. 調査対象の状況

平均年齢は、看護学生、女子大生ともに18.7才である。影響を受けた人では、「友人」が58.7%で最も多く、次いで、「家族」「短大あるいは大学の教員」の順である。看護学生および女子大生ともに、圧倒的に友人が多い。異性の友人のいる者は79.2%で、看護学生よりも女子大生の方がやや多い。理想の人では、「NA」が45.6%、「両親」19.2%、「誰もいない」16.8%である。この順位は、看護学生、女子大生も同じであるが、「NA」は、看護学生に多く、「両親」や「誰もいない」は、女子大生に多く違いがみられる。兄弟姉妹のいる者は93.6%でほとんどの者が兄弟がいる。兄弟のいる者は女子大生に多く、姉妹のいる者は看護学生に多いことがわかりました。

2. 因子分析の結果

調査項目の30変数をバリマックス回転法で因子分析し、5因子を選択する。累積寄与率49.5%。第1因子は自信因子、第2因子は自己嫌悪因子、第3因子は自己劣等因子、第4因子は自己不信因子、第5因子は自己受容因子と命名する。

3. 因子得点の比較

1) 影響を受けた人による比較

影響を受けた人別の因子得点の平均値の比較では、『自己嫌悪因子』において、教員と友人の間に5%の有意差があり、友人から影響を受けたと回答した者は、自己嫌悪意識が低い傾向が認められる。

2) 異性の有無による比較

異性の有無では、『自己受容因子』において5%の有意差が認められ、異性の友人のいる者の方が自己受容意識が高い傾向であった。

3) 理想の人による比較

理想の人を「両親」とあげた者と「誰もいない」との間に『自己劣等因子』、『自己不信因子』においてそれぞれ1%、5%の有意差が認められ、両親とあげた者の方が劣等や不信意識が高い傾向であった。

【考察】

多くの学生が、他者からの影響を受けており、影響を受けた対象は、看護学生、女子大生ともに友人が最も多く、青年期の学生にとって友人の存在が大きいことが明らかになった。さらに、友人からの影響は、教員に比べ好意的感情をもっていることも推察される。

異性の友人のいる者は約8割で、いない者より自己受容意識が高い傾向が認められた。これは、友人関係が最も重要な意味をもつ時期であり、異性の友人は、学生にとって共通の問題を理解し、同情し、勇気づけ、不安定な自我を支えたり、考え方や価値観などに影響を与えることにより、自己反省や自己理解を深める契機になるためではないかと思われる。

理想の人では、無回答のものが多く、これらに対して無関心であることがわかり、両親と回答した者は自己劣等や自己不信意識が高い傾向が認められた。このことは、親の生活態度、思考、知識、性格などの人格的側面への批判が強まるという青年期特有の親とのかわり方が表出されたのではと考えられる。

喫煙の研究—禁煙による心身への影響—

○飯島昭子

内海 澁

埼玉医科大学付属病院

千葉大学付属看護学部

喫煙者にとっての禁煙によるストレスは、生体に大きな影響を与えていると思われる。そこで、禁煙が及ぼす影響について喫煙時と禁煙時との心身の状態を皮膚血流・S T A Iなどを通して観察した。

〔研究方法〕

対象：26～36歳の健康な女性20名

期間：平成4年11月25日～平成5年1月22日

方法：被験者に対し、24時間の禁煙をはさんで、3回の喫煙実験を行った。S T A I、血圧・脈拍測定、皮膚血流測定を行い、禁煙時の状態を調べるために、禁煙状況調査項目を作成し、5段階評価の20項目にてアンケートを行った。

〔結果〕

1. 禁煙状況調査項目

禁煙状況調査項目は、バリマックス回転にて因子分析を行った。累積寄与率は66.34%で、第1因子は身体的動揺因子、第2因子は精神的動揺因子、第3因子は情緒的動揺因子を抽出した。

2. 血流

血流の変動の平均は、第1回目（喫煙実験）の喫煙前が25.27 μ l、喫煙後は32.45 μ l。第2回目（禁煙実験）の喫煙前が20.27 μ l、喫煙後は25.22 μ lであった。

血流による各変数との相関係数は、第1回目は、喫煙後の血流とS T A IのTに負相関がある。第2回目は喫煙前の血流と第三因子に負相関があった。

3. S T A I

S T A Iの平均値は、第1回目の状態不安（S）が37.6、特性不安（T）は38.3。第2回目のSが50.3、Tは37.75。2時間後のSが38.65、Tは37.8。第3回目（禁煙実験終了3日後）はSが39.05、Tは37.4であった。S T A Iの得点別にみた血流の変動は、第1回目では、S T A Iの得点が高いほど血流の変動は小さくなる。第2回目は、不安による著明な変化は認められない。S T A Iによる各変数との相関係数は、Sは、第1回目に脈拍の前後差と負相関があった。Tは、第1回目は、喫煙前の最低血圧、喫煙後の血流、最低血圧に負相関があり、喫煙後の脈圧に正相関があった。第2回目は、情緒的動揺因子にのみ正相関があった。

4. 血圧による脈拍との相関係数

第2回に、喫煙前の血圧と喫煙前後の最低血圧に

正相関があり、喫煙後の血圧と喫煙後の最低血圧に正相関があった。

〔考察〕

皮膚血流の変動の平均値は、禁煙時に少ない。これは、ニコチンの血中濃度が低かったためであると理解される。

S T A Iの平均値は、禁煙時に高値を示した。禁煙によるストレスの強さを表している。2時間後には、ほぼ喫煙時の値にもどっている。これは、喫煙を再開したことにより、ストレスが緩和されていると思われる。このことから、禁煙及び喫煙が精神面に及ぼす影響が大きいことが理解される。

S T A IのTによる各変数との相関係数は、各変数において、第1回目には高い相関関係を保っていたものが、第2回目には消失している。これは、喫煙していることで保たれていた心身の法則が、禁煙することによって失われたものと考えられる。

S T A Iの得点別にみた血流の変動は、第1回目では、不安が少ない場合には血流の変動が大きく、不安が強い場合には血流の変動が小さくなっている。しかし、第2回目には、不安と血流の関係は変化している。不安と血流との関係系に何らかの変化を起こしたものと考えられる。

血圧と脈拍との関係は、第2回目において相関がみられた。これは、心身極限状態における防衛機序とみなされ、危機状態に陥った生体の恒常性を維持して行うこととするホメオスタシスの現象と思われる。

禁煙状況調査項目各因子の負荷量

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	因子価
14. スパイロを聞くとき立つ	.85	.34	.15	身体的動揺因子
5. スパイロの間違いになる	.83	.28	.30	
10. 心臓の動揺が気になる	.83	.25	.25	
15. 朝食はいらぬ	.69	.63	.30	
9. 口さびしい(何か食べるといい)	-.67	.45	.13	
7. かつたまくなる	.66	.52	.43	
20. からだがぼてる	.65	.17	.31	
2. (つかいだ気分は)	-.15	-.92	.08	精神的動揺因子
1. 気分がよい	-.10	-.88	.20	
4. 泣いている	-.21	.79	.48	
3. 涙がでない	.09	.74	.53	
7. ぶさいなことが気になる	.36	.72	.13	
12. 大やけどがこわい	.34	.10	.77	情緒的動揺因子
13. 大やけどしたくなる	.08	.54	.73	
16. 鼻の涙がよすぎる	.32	-.08	.71	
11. 中風がこわい	.18	-.08	.68	
15. 頭がぼてる	.18	.57	.43	

電話利用の心理学的研究～「電話スキル」について～

(財) 郵政国際協会 電気通信政策総合研究所
山田 隆

【問題】 電話を利用した電話コミュニケーションは、通常の対面コミュニケーションから音声だけを取りだしたものでない。電話機(という機器)を使うこと、通話料金が必要であること(料金を意識してしまうこと)、相手との間に物理的距離(感)があることなど、電話コミュニケーション独自の特性がある。

したがって、電話コミュニケーションは対面コミュニケーションと同一の枠組で把握することはできない。対面コミュニケーションを順調に進めるためには言語的情報や非言語的情報を運用するスキルが必要であるように、電話コミュニケーションにおいても、ある種のスキルが要求される。この電話コミュニケーションを進めるために要求されるスキルを、「電話スキル」と呼ぶことにしたい。この電話スキルが豊かであれば、電話コミュニケーションの質は、その人にとって満足できるものとなるはずである。反対に電話スキルが低ければ、かけるべき電話がかけれない、あるいは伝えるべきことが使えられないという点で、自己の電話利用に不満が生じやすいものであろう。

【目的】 上のように規定した「電話スキル」の尺度を構成し、電話スキルの特性および規定因について明らかにする。

【方法】 質問紙調査を実施した。調査項目は、電話スキル、社会的スキル、個人的な電話の利用状況など8項目であるが、今回の報告では関係する項目のみを取りあげる。対象者は、経済学あるいは人間科学を専攻する大学生男女で、授業時間を利用して調査した。記入に不備のある数名を除外し、男子144名、女子142名、計286名を分析対象とした。

【結果と考察】

(1)電話スキル尺度の構成： 電話では、発信側の「かける」、受信側の「受ける」という手順を経てから「会話をすることになるが、これにしたがって、ここでは電話スキルを「発信スキル」、「受信スキル」、「会話スキル」との3つとして考えることにした。電話スキルを表現している42項目のうち、発信、受信、会話に相当するものそれぞれに関して主成分分析を行い、第一因子に対する負荷量と信頼性係数(α 係数)を参考にして、尺度に採用する項目を決定した。その結果、項目数は、発信スキル10、受信スキル5、会話スキル10となった。会話スキルには性差があり、女子が高得点である。

(2)電話スキル相互間の関係： 3つの電話スキルは一連の動作に関わるものであり、互に相関しているものである。計算すると、男子では、 $r=0.579\sim 0.678$ 、女子では、 $r=0.367\sim 0.504$ の値($p<.01$)であった。男女間では、女子で相互相関の値が低い傾向があり、その中でも会話スキルと受信スキルの相関係数は、男子0.678、女子0.367であり、男女間に有意差がある($p<.01$)。

(3)電話スキルと電話利用の関連： 電話スキルは、電話利用の頻度と関連しているものであるが、単に相関関係が強いものでもないだろう。各自にとって満足できる電話利用の頻度には個人差があるからである。その人の置かれた状況や通話料金なども関連するが、短い電話を数多くかける人、長い

電話を少なくかける人などがある。

「かける回数」、「受ける回数」、「電話の時間」と、3つの電話スキルとの間で相関係数(r)を算出すると、男子では0.267～0.494、女子では0.136～0.319の値(絶対値)だった。多くが有意相関ではあるものの、その程度は予想されるほど高いものではない。電話の利用状況だけで、電話スキルが形成されているのではないものと考えられる。

また、ここでも男子より女子で相関が低い傾向が見られる。電話の利用量には性差があることが一般に指摘されているが、電話スキルの関連(形成)要因にも性差があるものと思われる。

(4)電話スキルの規定因： 個人的に利用される電話は対人関係の維持、発展のため道具であり、電話スキルの規定因としては、対人関係のスキルも関わっていると考えられる。今回は、対人関係のスキルとして、和田(1994)の「関係維持」、「関係開始」、「自己主張」の3尺度を取り上げ、各々の尺度項目から4項目ずつを実施した。これらの尺度得点と電話の利用状況から電話スキルが予測できるものと考え、重回帰分析を実施した(表1)。重回帰係数は0.430以上であり、予測は可能なものと判断できる。

[男子] 発信スキルでは、「関係開始」に最大の重みがあるが、「かける回数」は変数増加法で採用されなかった。電話スキルとしての発信スキルには、電話を利用する頻度よりも他者との関係を開始するスキルが規定因として大きいという結果である。受信スキルについても同様の傾向であり、実際の電話を「受ける回数」より「関係維持」のスキルである。会話スキルでは、「話す時間」と「関係維持」に重みがある。

[女子] 発信スキルでは、「関係開始」に最大の重みがあるが、「かける回数」にもある程度の重みがみられる。受信スキルでは、他と比較して重回帰係数の値が低くなっているが、「かける回数」に最大の重みがあり、「受ける回数」は採用されなかった。会話スキルでは、「関係開始」に最大の重みがあるが、「話す時間」にもある程度の重みがある。

一般的には、①電話スキルは電話の利用状況と対人スキルのどちらか一方ではなく両者によって規定されていると言える。②電話をかける回数と発信スキル、電話を受ける回数と受信スキルは、それぞれ前者が後者を単純に規定しているのではないようである。③関係開始という社会的スキルが、電話スキルの種類と男女を通じて、説明力の大きい要因であった。これは対人コミュニケーションへの積極性ということでもあろう。電話スキルは、社会的スキルの部分を成しているとも考えられよう。④電話を受ける回数は、電話スキルの規定因としての重みが少ない。かける回数ではある程度の係数が出ていることからすると、電話をかけることと受けることでは心理的な意味に差があるのかもしれない。

以上、電話スキル概念について分析した。人々の電話(メイト)利用は、スキルから眺めることも有益ではないだろうか。今後は、新しい電話サービスや利用法の採用に関しても分析してゆくつもりである。

表1 重回帰分析結果(標準偏回帰係数) 変数増加法

	男子(n=144)			女子(n=142)		
	(1)発信	(2)受信	(3)会話	(1)発信	(2)受信	(3)会話
[1] かける回数	-	-0.168	-0.160	-0.207	-0.266	-0.116
[2] 受ける回数	-0.145	-	-	-	-	-
[3] 話す時間	0.162	0.121	0.351	0.166	-	0.272
[4] 関係開始	0.425	0.255	0.164	0.309	0.190	0.363
[5] 関係維持	-	0.299	0.307	0.185	0.160	0.153
[6] 自己主張	0.114	-	0.104	-	-	-
重回帰係数	0.591	0.641	0.752	0.540	0.430	0.570

(注)「かける回数」と「受ける回数」は、選択肢において数値の大きい方が回数の多い方としている。「-」は、 $f=2.0$ を基準とした変数増加法で採用されなかったもの。

【文献】 和田実 1994「社会的スキル尺度のこと」 菊池・堀毛(編)『社会的スキルの心理学』 川島書店

異文化コミュニケーションの研究 I

○高橋浩子
山手心理教育研究所

中村安子
大東文化大学

〔目的〕

国際交流が盛んになりつつある現在、日常生活においても異文化と接する機会が増えている。本研究では、海外経験や、英語に関する意識調査を行うことにより、学生が異文化にたいしてどの様に感じているのか、また昨今もてはやされる英語教育が、学生の意識の中で、はたして国際化と結び付いているかをあきらかにすることを目的とする。

〔方法〕

調査期間 1993年 4月から10月
被験者 首都圏の大学生393名（男性320名、女性73名、18才から27才、平均年齢 19才）

被験者のうち調査Aの対象 187名（男性163名、女性24名18才から24才、平均年齢19才）、調査Bの対象206名（男性157名、女性49名、18才から27才、平均年齢19才）

調査票の作成

予備調査で英語にたいするイメージ等に関する自由記述をもとめ、それをもとに調査用紙を作成。内容は、調査A、調査Bの2種からなる。調査A調査Bの共通の項目としては、海外経験の有無を問い、どの様な形で海外経験が役にたっていると思われるか、また英語に関してどの様な考えを持っているか等がある。調査Bでは、実際に英語で外国人と話したことがあるか等の項目が加えられている。

〔結果〕

調査の結果、海外経験のあるものは64名（男性47名、女性17名）で全体の約17%であった。そのうち海外経験が役にたっていると考えたのは31名で約41%であった。海外経験が役にたつたか、役に立たなかったかということについて、渡航年齢、渡航回数、性別による差はみられなかった。

調査Bにおいて、「外国人と英語で会話したことがありますか」「会話したことのある人はどの様な気持ちになりましたか」という間にたいして、渡航経験者がうれしさやはがゆさなどをあげているのに対し、非渡航経験者は、焦り、緊張などをあげている（表1）。非渡航経験者で外国人と英語で話したことがないと答えた被験者のうち、今後機会があれば話したいと答えたのは40名で74%を占めるが、その理由として英語の勉強のため、自分の実力を試すというものが21名で52%を占めた（表2）。

〔考察〕

海外経験に関しては、それをどの様にうけとめているかにより、本人にとって役立つ方向がかなり異なるようである。共通しているのは、視野が広がった、積極的になった、度胸がついたというような心理的な側面の変化であった。今回の調査からは早い時期に海外に行くことや、長期に滞在することがプラスに働くと言うよりも、海外渡航時の本人の準備状態が重要な要素になっているようにおもわれる。

日本の英語教育に関し、渡航経験後感じたことについての回答を求めた結果、批判的な記述が多数みられた。内容は、その非実用性について言及するものであった。これは海外経験を通して言語がコミュニケーションのひとつの手段であることに気づいたのではないかとおもわれる。

非渡航経験者が外国人と英語で話したい理由としてさきにふれたような結果が得られたことから、非渡航経験者においては、英語の習得がまだ目的のものになっており、コミュニケーションの手段とはとらえられていないということが推察される。

表1 外国人と英語で話した感想（調査B）

	緊張	焦り	恐怖	不安	歯がゆさ	意外に易しい	難しい
渡航経験あり (N=24)	0	1	1	1	3	2	4
渡航経験なし (N=136)	29	4	1	7	0	4	9
渡航経験あり	興味	不思議さ	うれしさ	優越感	イメージと違う	その他	
渡航経験あり	0	0	5	3	0	4	
渡航経験なし	4	3	14	3	4	54	

(数字は人数)

表2 外国人と英語で話をしてみたい理由（調査B 非渡航経験者N=40）

勉強のため	14	実力を試す	9	特に意味はない	2
優越感にひたる	1	考えを知る	9	人間感がかわる	1
外国人に慣れる	1	友達になる	1	その他	2

(数字は人数)

異文化コミュニケーションの研究 I I

○中村 安子
大東文化大学

高橋 浩子
山手心理教育研究所

目的：国際化に伴って起こる異文化コミュニケーションと世界における共通語としての英語との関連性を今の大学生はどのように考えているのかを調査することにある。

'80年代以来、国際化時代に対する日本の対応はどのようであるべきか、そして、国際化という言葉の意味についての論議がかつてないほど盛んに行なわれている。また、それに呼応するかのようには英語学校（主に、英会話学校）と英語上達法に関する情報と出版物（英会話、翻訳、通訳そして、各種の検定）が氾濫している。このような状況にあつて、今の大学生は英語に対しどのような意識を持ちまた、異文化コミュニケーションと英語の関連性をどのように考えているのかを調査することにこの研究発表の目的がある。

方法：異文化コミュニケーション I にて言及
結果：問 2 の「今、日本の社会において英語を話す能力が必要だという声は多くありますが、あなた自身はどのように思いますか。」に対し a. その通りであると答えたのは、海外経験あり（70%）、海外経験なし（85%）となっている。一方、b. そうは思わないと答えたのは、海外経験あり（30%）、海外経験なし（15%）となっており、英語の重要性をほとんどの学生が認めていることがわかる。

問 2 に関連して問 3-1の「なぜ英語を話す能力が必要だと言われていると思いますか」に対しては、調査 B については以下のとおりである。（答えの多い順に列挙）

1. 世界の人々との交流が盛んになり、今後ますます共通語としての英語の必要性が増すから（83人）
2. 日本にいるあらゆる国の人々と話をするために（62人）
3. 海外旅行のときのために（57人）
4. 就職の際の有力な手段として利用するために（55人）
5. 外国人に道を聞かれたときの手段として利用するために（41人）
6. 日本にいる英語圏とヨーロッパ圏の人々と話をするために（38人）
7. 英会話ができると格好いいから（現代の流行だから）（35人）
8. 日本にいる英語圏の人々と話をするために（29人）
9. 日本にいるアジアの人々と話をするために（17人）
10. 将来、英語圏の国に留学するために（4人）

問 4の「日本人の多くが英語を話すことができないのは学校教育に問題があると思いますか」については海外経験あり a. はい（25人） b. いいえ（3人）海外経験なし a. はい（157人） b. いいえ（17人）そしてその理由として90%以上の学生が高校までの文法中心の受験勉強を挙げている。

考察：多くの学生が国際化に伴う英語の重要性を認めてはいるが、異文化を持つ人々との交流は、英語圏とヨーロッパ圏の人々と話したいからと答えた学生はあわせて67人。何故、英語が必要であるかの理由の上位2番であり学生の欧米指向を窺わせる。そして、就職の際、有利であるから5位（41人）にきており、また、格好がいいからも7位（35人）に挙がっており現代っ子ぶりも見られる。

日本人の多くが英会話ができないのは、自分たちが受けてきた教育に最大の問題があるとしている。英語を話す機会のほとんどない高校までの受験教育が英語嫌いにさせていると考えている。

今回の調査の予備調査として、同じ学生たちに「英語に対するイメージ」と「高校までの英語の授業に対するイメージ」を調査した。結果は、90%以上の学生が英語は苦手嫌い、憧れ（必要性）はあるけれど英語を勉強したくない、英語の授業は堅苦しく文法中心、暗記ばかりで興味が湧かなかったというものであった。学生たちにとって英語ができるようになるということは話すことができるようになるということであり、文法や読解を重要視していないかのようなのである。英語に対し積極的になろうという気持ちと半ば諦めている気持ちとが交差していることが窺える。

外国・外国人の受容に関する認知的研究

○ 田中 直子 ・ 大坊 郁夫
 (北海道大学文学部) (北海道大学 文学部)

【問題】 「国際化」とよく言われるようになり、多くの外国人が日本にいるが、実生活での交流がどれだけ成されているのだろうか。学生にとって最も身近な外国人といえば、留学生であろうが、日本人学生と留学生は親しくなりにくい(横田、1991)というのが現状のようだ。意識の上では留学生と親しくなりたいと考えている者は多い(白土・権藤、1990)のに、実際の行動にはつながりにくい要因があると思われる。

この研究の目的は、行動の前提となるであろう外国・外国人の受容度を調べることである。

【方法】 被験者 国立教育系大学2校 1~4年生 138名(男子49名 女子88名 不明1名)。

質問紙の構成 先行研究(田中、1992他)で用いられていた質問紙の項目を参照し、15種類の尺度(1メディアへの関心、2海外への関心、3外国人・帰国子女の受入れ、4外国人・帰国子女に対する拒否的感情、5日本中心の心情、6人種差別、7対人コミュニケーション技能、8日本への帰属意識、9日本人としての誇り、10生活圏への外国人受容、11個人指向性、12地球市民意識、13国際社会で必要と思われる能力・資質、14白人重視傾向、15非戦争心情)に分類した65項目に、「将来どこの国に住みたいか」を加えた計66項目。

【結果と考察】 先の15種類の尺度の構造を確かめるために、各尺度ごとに主成分分析を行った。ほとんどの尺度で一元性が確認されたが、一因子構造が得られなかったものは項目を差し替え分析し、あらたに尺度構成をした。その結果、尺度12と13をまとめて「地球市民」とし最終的に14種類の尺度が得られた。

全体の受容度 各尺度ごとに合成得点を算出。得点が高いほど各尺度への関心・賛成度が高いことを表す。合成得点の平均値から「海外関心度」「国際的教育観」はやや高く、「外国人との直接関与の受容度」も高い。それに準じて、「外国人・帰国子女拒否度」「日本中心度」「人種差別度」は低いので外国・外国人の受容度は高いといえる。しかし、「日本への帰属意識」が高く「地球市民度」がそれほど高くないので、実生活と直接関与しない一般論を述べているとも考えられる。

さらに、主因子法(VARIMAX 回転、固有値1.0)で分析した結果、14因子が抽出された。

性差の検討 「人種差別度」「日本人としての誇り」で男>女。「非戦争心情度」では男女共に肯定してるが、女で非戦争心情が強い。概ね女性の方が、外国人の受入れや、海外への関心が強い傾向にあるとみられる。男女の回答がどの因子に重みがあるかを見たところ、

因子5(排他性・人種差別)で最も高く、次いで因子10(同調要求)、因子4(メディアへの関心)で相関があった。判別分析も行ったところ3因子の判別係数は相対的に高い。潜在的に男性の方が保守的、差別的な側面が見られるが、それは何故なのかを先行研究と合わせて今後より深く検討していく必要がある。

教師志望意志の有無による検討 「自己コントロール」「外国人との直接関与の受容度」「地球市民度」で希望者の方が有意に高い。「外国人・帰国子女拒否度」「白人重視度」は非希望者が有意に高い。希望者は、外国人・帰国子女の学校への適応問題や日本社会の閉鎖性などについての認識が高いと思われる。

海外渡航経験の有無による検討 「海外関心度」「国際的教育観」「外国人との直接関与の受容度」「地球市民度」「白人重視度」「非戦争心情度」は、渡航経験者が高い。渡航経験は、興味・関心を高めるのみならず、教育の国際化や地球市民的な視野の形成に影響を及ぼすと考えられる。渡航理由のほとんどが観光や買い物で、渡航先も欧米に偏っていることは、白人重視の傾向が高いことと関係すると考えられる。

「将来どこの国に住みたいか」という質問項目で、「日本」と答えた者と「外国」と回答した者とで比較すると、「日本」と回答した者は、日本への帰属意識が高いことが排他性や閉鎖性と関連があると考えられる。「海外関心」「外国人との直接関与の受容度」「国際的教育観」では「外国」の方が有意に高く、海外への関心は広く柔軟な思考と結びついている。また、「非戦争心情度」でも「外国」で有意に高く、世界平和や協調ということに対する考えの違いがうかがえる。

各因子ごとに「日本」「外国」への重みを見たところ、因子2(海外指向)で最も高い相関が得られ、海外指向との強い結びつきが確認された。因子3(日本人意識)と因子12(国際的資質)でも有意である。判別分析においてもこの3因子は相対的に高い判別係数が得られており、国際感覚や異文化受容の根底には日本人としての自覚・誇りが重要視されているといえる。

先の14種類の尺度を二次分析すると、人種差別度・白人重視度・非戦争心情度を一纏まりとする因子とそれ以外の二因子が得られた。本調査での受容度の高さは観念的なもので、実際の交流に対する意識を越えられない人種・肌の色の違いなどに抵抗があるといえる。(本研究を進めるにあたってご指導いただいた北海道教育大学札幌校の戸田まり助教授に心より感謝し致します。)

人名によるステレオタイプのイメージの形成

大坊 郁夫

(北星学園大学文学部)

【問題】 印象形成の手がかりは多様に求められている。個人差に由来するIPTの形成に際しては、容貌などの外見的特徴による影響はこれまでも多く指摘されている。また、外見、そして職業によって(今川,1990)と同様に、時に「人名」が受け手に大きな影響をもたらすことも知られている(Burning & Albott,1974)。日本においては、多く用いられている「漢字」の表意性もあって、表音よりも表意を推論して苗字(約20万種)と名前から受けるイメージは、その語義と結びつくことが多いであろう。また、頻度の多寡による親和性と注目度の高さが任意な推論過程を引き起こすであろう。

【方法】 予備調査：男女大学生93名を対象として、印象的な苗字、職業と結びつく苗字、Personality印象と結びつく苗字について自由記述形式で把握した。その結果および全国県別に見た最多の苗字群を基にして、本調査での呈示苗字を構成した(予備調査から10種類、県別最上位苗字12種類)。本調査：女子短大・大学生(各125、76名)を対象として、自分の苗字についての満足度など、上記呈示苗字についてPersonality評定、職業イメージ認知の回答を求めた(5points)。

【結果と考察】 1. 多数派の苗字とは 多数を占める苗字は、佐藤>鈴木>高橋>田中>渡辺と続いている。ただし、県別に見ると、一様ではなく、山本、山口などが1位となる県もあり、地域的な多様性がある。

2. 印象的な苗字 パーソナリティ・イメージ：上品、美人、高貴について、白鳥が、高貴=伊集院、親しみやすい=佐藤、山田、鈴木、田中、暖かい=山田に集中した対応が見られる。職業イメージ：農業=山田、田中、教員=佐藤、公務員については頻度の高い苗字との対応が見られるが、他の職業については分散が大きい。

3. 自分の苗字のイメージ 概ね肯定的イメージを抱いており、特に、まじめ、頼れる、女性的(-)、美しい(-)と評定されている。満足度の平均は2.94と中点にあるが、やや以上の満足は43.3%、やや以下の不満層は32.3%と分かれている。苗字自体にこれを分ける特徴は明確ではないが、高頻度、ないし稀少な苗字には不満傾向がある。職業イメージとしては、一般性の高い公務員イメージが最多であった。また、Personality認知評定値について行った主因子分析の結果、最低固有値1.0の基準で、エレガンス(洗練)-美しい-、親和性-健康な-、信頼性-頼りない(-)-の3因子抽出された。

4. 呈示した苗字のイメージ 呈示苗字によって評定傾向は多様であるが、マスコミの影響もあってか「小和

田」が、外向的、感じの良い、まじめな、しっかりしたと評定されており、「白鳥」は、上品、美しい、女性的、伊集院=知的、冷たい、との特徴が顕著である。なお、まじめ、しっかりした、親しみやすいでは評定値の変動は小さい。この評定値を基にして主因子分析を施したところ、エレガンスと親和性の2因子が抽出され、自身姓の信頼性因子はエレガンス因子に吸収されている。

5. 呈示苗字のクラスタリング 平均距離法によってPersonality認知データのクラスタ分析を行ったところ、A.親和的な苗字(山田、青木、坂本など)、B.親しめず、感じの悪い苗字(金城、勅使河原など)、C.上品でクールな苗字(白鳥、綾小路、伊集院)に大別され、これにD.理知的な苗字(小和田)がある。職業イメージデータについての同様の分析では、上記のA.に相当するクラスタとして「公務員、教員」がほぼ対応し、接触頻度の高さ、一般性が認知されたステレオタイプがあると思われる。金城、小和田、勅使河原は国会議員・医師・弁護士、伊集院、黒木、望月、御手洗は作家イメージのクラスタであることが示されている。なお、「山田」姓は独自のである。

名前に由来するイメージは、文化、時代に応じながら変遷しながらも、一定のステレオタイプ性を示すものである。とりわけ、接触頻度の多少は語義・語音、マスコミ親和性の影響は大きいと思われる。接触頻度は地域によって異なるものであり、地域によってステレオタイプが異なることも推測できる。

姓氏の由来からすると、職業、地域の自然・地理的特徴と結びついたものが多いが、歴史的にその特異性は減退し、むしろ、語感やマスコミ的なエピソードに影響されたステレオタイプが作られやすいものと考えられる。自分の苗字は親しみのあるはずであるが、必ずしも徹底しておらず、むしろ、満足度も多様である。また、苗字に由来するイメージは、頻度の低さによる注目度の高さが語義やマスコミによる役者や他の行動の特性を高める傾向があると考えられる。即ち、IPTと地域的なステレオタイプとがあると言えよう。それ故に、適切な認知がなされ難く、誤解や対人関係の歪みの契機になることも考えられる。名前が一つのステレオタイプの認知の要因になっていることが考えられるので、他の要因と同様の手がかり性を持つものとして、検討に処し得るものと言えよう。

調査実施に際して柏谷由紀嬢に協力を得たものである。

中国・台湾における日系進出企業に対する地域住民の評価

○外島 裕 片岡大輔
人材開発情報センター

【はじめに】1980年代に入り、日系企業の海外進出はさらに増加する傾向にある。貿易摩擦解消という理由のみならず、近年の日本および世界の経済構造の変化にともない、今後も海外進出は増大していくと思われる。このような状況のなかで進出企業が地元住民の意識に対して、どのような影響を与えているかを把握することは、きわめて重要である。なぜならば、日系企業の進出によって地域社会の労働環境や生活環境にさまざまな変化をもたらしていると考えられるからである。いうまでもなく、歴史や文化を異にする海外で有効に企業活動をおこなうためには、物理的・経済的な要因を把握するだけでなく、地域の人々がもっている意識構造といった心理的な要因をも考慮する必要がある。本報告では、日系企業が進出した地域の住居者を対象に、日系企業および日本人に対する意識やイメージを把握することを目的とする。

【方法】対象：次の2地域を調査対象とした。北京近郊（中国）526人・台北近郊（台湾）530人の合計1056人うち男性54.9%・女性45.1% それぞれの2地域はどちらも、同一の日系電気製造業が進出していた。調査実施：北京近郊は直接面接によるインタビューを用い、台北近郊は電話によるインタビューを用いた。インタビューは、全63項目から構成された。分析項目：調査した項目のうち、今回の分析には、日系進出企業に対する評価1項目「日本企業を迎えたくない」（11段階評定）と日本人に対する意識・イメージをたずねる7項目（3段階および4段階評定とした）を主に用いた。分析方法：各項目への回答について、カイ2乗検定を用いて住民の意識の様子を調べる。日本人および日本に対する評価と日系進出企業に対する評価との関連について、前者を独立変数、後者を従属変数と設定し分散分析を行なう。

【結果】表1は、日本人に対する意識・イメージをたずねる7項目についての回答の度数と各回答者群ごとの日本企業への評価得点を示したものである。日本人に対する意識・イメージをたずねる各項目について回答頻度をカイ2乗検定した結果、進出企業の地域住民は日本人について、適応力があると思っており、日本人のやり方は理解できるが、日本人は階級的でかつ集団主義的であり、物質万能主義的であると評価してい

ることがうかがえた。とくに日本人を階級的であると評価している住民が非常に多かった。日本人に対する意識・イメージをたずねる7項目について、評価ごとに地域住民を分類し、日系進出企業に対する評価の差異を分散分析・下位検定した結果、日本人に対して、物質万能主義・集団主義的・接触が容易ではない・階級的と思っている地域住民は、日本企業にたいしても低い評価をもっていることが示唆された。しかし、各項目での「日本企業を迎えたくない」の得点は4点から5点の間にあり、住民全体としては日本企業を迎えたくないとは思っていないようであり、それほど日本企業にたいしてネガティブな評価をしているわけではないと推測できる。

以上の結果から、日系の進出企業に対する評価は、地域住民の日本人に対する意識・イメージと関連していることが示唆された。今回の調査では、どのようにして日本人・日本企業に対する意識や評価が形成されたかについては把握することができなかつたが、海外に企業を進出する際には、進出先の地域住民がもっている日本人や日本に対する意識・イメージを考慮することが重要であると考えられる。

表1 各尺度の回答者群における日本企業評価の得点

日本及び日本人に対する全体的な印象	大変好ましい 好ましい どちらでもない 好ましくない 全く好ましくない				
	N	81	507	288	101
	MEANS	4.2	4.6	5.0	6.3
	SD	3.4	3.1	3.2	3.7

日本人のやり方に対する理解度	大変難しい いくらか難しい いくらかやさしい 大変やさしい				
	N	122	293	378	128
	MEANS	4.9	4.7	5.0	4.6
	SD	3.4	3.2	3.1	3.5

	N	下位回答者群		上位回答者群
		回答者群	回答者群	回答者群
日本人は物質万能主義か	298	321	435	
	MEANS	4.3	5.1	5.1
	SD	3.3	3.0	3.4
日本人は集団主義的か	156	340	580	
	MEANS	4.2	5.1	4.9
	SD	3.3	3.2	3.3
日本人の接触は容易ではない	489	332	235	
	MEANS	4.5	5.0	5.5
	SD	3.4	3.0	3.4
日本人は適応力を持つ	106	287	663	
	MEANS	4.7	5.1	4.8
	SD	3.6	3.0	3.4
日本人は階級的である	147	313	594	
	MEANS	4.3	5.1	4.9
	SD	3.3	3.2	3.3

商業集積における商店主の経営意識 ～ 後継者問題を中心に ～

○高石 光一

荻久保 嘉章

(中小企業事業団)

(朝日大学)

1. 目的

商店街では、個店としての商品力、接客力などと同等にイベント・スタンプなどの共同事業への取組みが商業集積としての魅力・集客力を決定する要因として重視されている。一方、多くの商店主は後継者問題を抱えており、後継者の有無は、将来への個店経営への意欲・方針等のみならず、共同事業への取組み姿勢についても影響を与えるものと推測される。本研究では、商店主の後継者の有無と個店経営への意欲及び商店街としての共同事業に関する態度の関係を考察する。

2. 方法

北海道の中央部の近隣型商業集積であるA町商店街(人口4,600人、商店数67、年間販売額32億41百万円、売場面積4,454㎡(平成3年度商業統計表))の町おこし事業の一環として、A町商店街で営業する小売業・サービス業のすべての商店主に対し、以下の内容について調査を実施した。

- ・フェース項目：業種、年齢、後継者の有無 等
- ・経営方針：営業継続、立地場所、価格政策 等
- ・共同事業：セール・売出し、共同広告 等

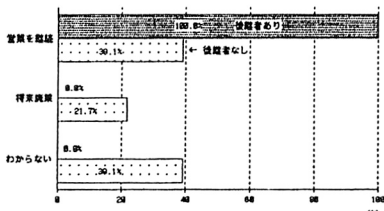
調査時期である平成4年10月時点では60店が対象であり、58店から回収がなされた(有効回収率96%)。「後継者がいない」店舗は23店(40.4%)で「後継者がいる」店舗の16店(28.1%)を上回っている。

3. 結果

(1) 後継者の有無と経営意識

後継者の有無による営業の継続の意思(図1)をみると、後継者のいる商店主が将来に向けての営業継続の意思を示すのに対し、後継者のいない商店主の意思の差は不明瞭であることが確認された。

図1 営業の継続



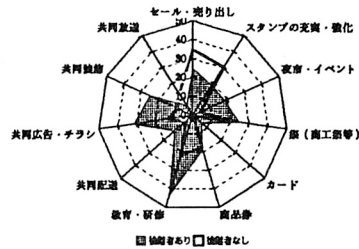
また、後継者の有無による経営方針に対する態度の

差を調べてみると、「立地場所」、「価格政策」などの現行の商店経営の根幹に対する差はみられないものの、「店舗改装」のように設備投資を要する項目については明確な差がみられた。

(2) 共同事業に対する姿勢

商店街の統一性を図るうえで重要性の高い共同事業のなかで、特に積極的に取り組みたい事業内容についてまとめたところ、後継者の有無により重視する事業内容に差が見られた(図2)。さらに数量化理論第Ⅲ

図2 共同事業に対する姿勢



類により、後継者の有無によるパターンの差を求めたところ、明確な差は認められなかった。

以上の結果から、後継者のいない商店主は個店経営に比較的、保守的でありチャレンジングではないようであること。また、共同事業については、後継者を有する商店主が商店街の集客力向上のためのソフト事業に関心を持つのに対し、後継者のいない商店主には、直接個店での売上向上を意図した事業に興味を示す傾向が見受けられた。

しかし、全体としては経営の諸側面にわたり、商店主の意識には共通した方向性があるものと考えられる。よって、商店街の魅力・集客力向上を図るために、共同事業の推進、再配置、街づくり等に取り組む際には、後継者の有無による事業主の意識の差と共通性に対応した組織づくり・役割分担などを十分考慮しながら推進することが重要と考えられる。

4. 考察

企業の浮沈を左右し企業永続のための重要課題である後継者問題は、従前から研究対象として取り上げにくい分野であり、本研究では、一実態の把握を試みた。今後、この分野への社会科学的アプローチによる経営実務に寄与する研究が一層望まれる。

中小企業の組織環境に関する研究1 ～S県を例とした労働環境への投資について～

○辻 昭 小森田哲哉 小林 東 佐野 毅 松田 浩平
(東海大学短期大学部)

1. 研究の目的

日本における中小企業、そして地方の中小企業は、独特の強みとネットワークを形成しながら日本経済成長の中核を担ってきた。しかしこの度の円高と国際化それにとまう産業構造の変革は中小企業の基盤をゆるがしかねない事態となっている。そこで地方の中小企業がその中でどのような組織風土を形成し経営戦略の展開や労働環境整備への投資を行っているか研究調査を行うこととした。

留意したのは次の諸点である。a、労働環境については大企業の事例がとかく紹介されてそのまま理解されている、中小企業はもっと異なった面を持っているのではないか。b、組織風土の状況と労働環境への投資との相関はみられるか。c、企業経営戦略は組織風土の実態とどう係わっているのか。d、S県中小企業の組織風土の特徴が抽出できるか。

2. 研究の方法

アンケート調査及び面接調査からの集約を行った。

a、アンケート調査。S県主要5都市の中小企業の中から1000社を無作為に抽出し、郵送によりアンケート調査を実施した。調査時点1993年9月、有効回答480社(有効回答率48%)

b、面接調査。異分野の企業11社を訪問し経営者に直接面接調査を実施した。

3. 研究結果と考察

主要調査研究結果と考察は次の通りである。

a、S県の中小企業の組織風土は全国と比較して、組織化がうまく進められ、マネジメントが行届いている傾向がみられた。経営者は自信を持って方針を内外にアピールしながら推進できる環境である。

b、リストラクチャリングへの取組みは「経営全般にわたって検討している。」が第1位(64.2%、308社)ではあるが、鍵となる当面の経営戦略については「現在の製品やサービスの提供を品質向上し、そのまま続ける。」が第1位(52.7%、253社)で第2位が「新分野への進出を検討する。」(51社、31.5%)となっている。つまりどちらかというと新分野を狙わず、従来路線の延長線上で考えようとする

傾向がある。このことは将来の生残りのチャンスを失うことにもなりかねないのではないか。

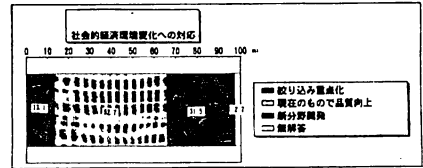


図1

c、中間管理職の数は「ほぼ適正。」が第1位(290社、60.4%)で「やが多い。」が第2位(100社、20.8%)、第3位が「不足している。」(17.5%、84社)、「やが多い。」と「不足している。」がかなり接近した回答となっている。ここで大企業とははっきりと異なる中小企業の姿、中間管理者を核とする人材の確保と活用への意欲が強くみられる。

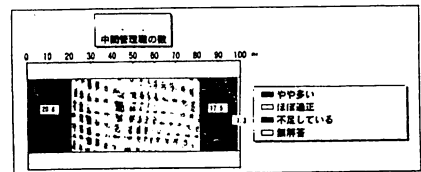


図2

d、自社の総労働時間について、現状では「2000～2100時間」が第1位(31.9%、151社)であるが、2年後を「1900～2000時間」と想定している企業も多く(33.5%、161社)2年間で約100時間の短縮を予想している。そのほかの労働環境の改善についても着実に進められている。

e、能力給については「増やす」との回答が高く(40.8%、196社)中小企業だから採用しやすいと思われる、能力重視の賃金体系への指向がみられる。

以上がS県を例とした中小企業の労働環境への投資について、組織風土と関連させた研究の主要点である。今後も組織実態における仕組みの革新に注目しながら各テーマごとに追及を行ってゆきたい。

中小企業の組織環境に関する研究 II

- S県における組織風土因子の構造について -

○佐野 毅・辻 昭・小森田 哲哉・小林 東・松田 浩平

(東海大学短期大学部)

1. はじめに

現在の日本経済社会は、かつて経験したことのない大きな転換期を迎えている。このような状況の中で、中小企業の組織風土がどのようになっているのかをS県において調査した。

2. 組織風土のタイプ

今回の調査では、[1]で示された、Moosによる職場環境尺度を応用したD_o因子とPDS因子の2つの職場環境因子を組み合わせ、その強弱により組織風土を捉えることとした。

D_o因子は、強制命令的な風土を表す。

PDS因子は、マネジメントのPlan・Do・Seeがよく行き届いている風土を表す。

3. 調査方法

調査対象：S県内に本社をもつ資本金1億円未満の従業員300人程度未満の中小企業

回答者：経営者

調査方法：1000社を無作為に抽出し郵送にて無記名でのアンケート調査

有効回答：511社

調査時点：1993年9月

4. 結果と考察

最初に、S県における因子パターンを求めた。方法は、中小企業研究所で報告されてきた因子パターンを仮設的構成因子とし、最小残差法により初期解を求め、仮設的構成因子をターゲット行列とした斜行プロクラテス法である。得られた因子パターンは、因子パターンの絶対値が小さいため各項目の共通性が低くなっているものの、全国サンプリングの製造業による因子パターンと酷似していた(表1)。このことにより、S県においても、D_o因子とPDS因子で職場環境の測定が可能であることが確認できた。

そこで、得られた因子パターンをもとに最小自乗因子スコアを各サンプルについて求め、業種別に平均値と標準偏差を求めた。

結果は、表2のとおりである。

このような組織風土のなかで、それぞれの企業が企業経営をどのように考えているのかを、今後の課題としたい。

参考資料

[1] 梶原, 地代, 羽石, 外島, 松田 「中小企業における組織改革の進め方」 中小企業事業団, 中小企業研究所 1991年3月

表1 S県での職場環境尺度の因子パターン

項目	Do因子	PDS因子	共通性	項目	Do因子	PDS因子	共通性	項目	Do因子	PDS因子	共通性
1	-0.311	0.178	0.152	16	-0.363	-0.019	0.130	31	0.123	0.618	0.365
2	0.411	0.029	0.190	17	-0.238	0.273	0.159	32	-0.236	0.208	0.120
3	0.315	-0.123	0.131	18	-0.446	0.146	0.248	33	-0.229	0.367	0.223
4	-0.256	-0.099	0.064	19	-0.195	-0.216	0.067	34	0.027	0.559	0.307
5	0.399	0.193	0.164	20	0.259	-0.278	0.175	35	-0.104	0.593	0.389
6	-0.401	0.005	0.161	21	-0.221	0.332	0.191	36	0.056	0.667	0.432
7	0.356	-0.036	0.134	22	-0.154	0.479	0.285	37	-0.184	0.538	0.365
8	0.251	-0.141	0.098	23	0.314	0.374	0.188	38	-0.287	0.274	0.191
9	0.411	-0.125	0.206	24	-0.207	0.332	0.182	39	-0.132	0.191	0.065
10	-0.414	0.192	0.242	25	0.301	0.317	0.150	40	-0.260	-0.024	0.066
11	-0.394	0.228	0.245	26	-0.126	0.519	0.313	因子寄与			
12	0.407	0.015	0.164	27	0.247	-0.232	0.139				
13	0.321	-0.229	0.187	28	-0.230	-0.064	0.051				
14	-0.384	0.134	0.187	29	0.341	0.433	0.241				
15	-0.532	0.181	0.357	30	-0.368	0.389	0.340				

表2 因子スコアによるS県の業種別職場環境パターン

業種	件数	D _o 因子		PDS因子		組織パターン
		平均	SD	平均	SD	
一般機械器具製造業	34	-0.17344	.71466	-0.22459	.94906	放任型
輸送用機械器具製造業	22	-0.07923	.94319	-0.37327	1.03555	PDS否定型
電気機械器具製造業	21	-0.06471	.80254	-0.02662	1.04098	不定型
木製品製造業	11	-0.21618	.52536	-0.31582	.83035	不律型
プラスチック製品製造業	19	-0.04242	1.13983	-0.14347	1.07362	PDS否定型
食料品製造業	23	-0.30457	.86404	-0.27300	.89879	強制型
その他製造業	48	-0.01742	.72572	-0.18981	.86050	PDS否定型
サービス業	58	-0.04252	1.09894	-0.02771	.92595	不定型
卸売業	105	-0.01343	.91627	-0.17272	.82959	PDS肯定型
小売業	48	-0.04550	.91517	-0.08898	.89005	不定型
理髪業	52	-0.03448	1.07420	-0.02412	.94395	不定型
その他	70	-0.09953	.89649	-0.04474	.96119	不定型
合計(平均)	511	-0.02259	.91800	-0.00790	.92294	

大学生向就職適性検査Career Focusに関する研究(7)

- 診断結果と就職後の適応状況との関連性について -

○ 橋川 真彦 松原 達哉 服部 環 国方 健一
(宇都宮大学教育学部) (鶴見大学文学部) (宇都宮大学教育学部) (大学生向職業適性検査共同研究会)

【目的】

筆者らは、CF診断結果が就職準備行動に及ぼす効果に関し、結果フィードバック直後(第1回追跡調査)及び内定までの就職活動過程(第2回追跡調査)について分析・報告してきた。その結果、CFは、開発時に設定された所期の目的を十分達成しており、就職指導において有効な適性検査であることが実証されてきた。

本研究はこれらの追跡研究の最終局面である就職後の適応状況に焦点をおき、CF診断結果との関連性を明らかにすることを目的とする。関連性が示されるとすれば、就職後の適応状態も視野に入れたより積極的な大学での就職指導も可能となると思われる。

【方法】

(1)調査対象：1991年10月～1992年3月に本検査を受検した大学生(39大学、16,032名)の内、第1回追跡調査(1991年10～1992年3月)及び第2回追跡調査(1992年10月)ともに回答した受検者、1,796名。回収された有効票数は、1,046名(回収率58.2%)である。その内訳は、男子348名、女子698名、4年制1,021名、短大25名である。

(2)調査期日：1993年12月中旬～1994年1月中旬

(3)調査方法：郵送法による質問紙調査法。記憶を呼び起こして頂くために結果帳票も改めて同封した。

(4)調査項目：1.CF記憶状況、2.就職後のCF活用度、3.職場定着状況、4.退職理由、5.勤務先(業種・職種)、6.満足度からみた適応度

【結果及び考察】

1. 適応指標の作成

(1)職場定着状況

定着群が92.6%と圧倒的に多い。退職再就職群1.9%と退職定職無群1.6%を併せても、37名と少数であり、また、そのうち不適応のために退職したと思われる者は15名であった。それ故、職場定着を適応指標とした統計的分析は不可能である。

(2)満足度からみた適応度

今の仕事(職種・職務)に対する満足度を中心とした仕事適応度、人間関係を中心とした職場適応度、事業所(業種・会社)への所属意識からみた会社適応度について各6項目ずつ用意し、各得点計をそれぞれの適応度得点とした。さらに、職場の外的条件を3項目

加えた得点計を総合適応度得点とした。

2. CF診断結果と適応状況

(1)性格の傾向

総合適応・仕事適応・会社適応におけるH群(上位33%)は、外向性及び熟慮性得点が有意にL群(下位33%)よりも高い。また職場適応では、H群は外向性及び柔軟性尺度得点が有意に高い。CFによって診断された性格の傾向は、就職後1年目の適応状況をも予測する要因となり得る。

(2)社会的強み

4つの適応指標全てにかかわっている尺度は、ストレス耐性、適応力、自己統制力、説得力、共感性、指導性であり、いずれもH群が有意に高い尺度得点を示している。意欲及び現実的態度は、総合・仕事・会社適応と関係し、協調性は、総合・仕事・職場適応と関連している。国際性とコンピュータ耐性は、総合適応に関しては有意差は認められなかったものの、前者は職場適応と、後者は仕事及び会社適応と関連している。

様相の異なる尺度は、創造的態度尺度であり、いずれの適応指標とも関連はみられなかった。日本の職場の特徴なのか、新人には創造的な仕事を与えられる機会がないためか、判断は難しい。

いずれにしても、創造的態度を除き、いずれかの社会的強みを持つことは就職後の適応と深く関わっているといえる。

(3)能力の強み

職場適応及び会社適応において、若干の下位能力との関連はみられたものの、全体的にはCFで測る能力尺度は新人の職場適応を予測する要因とは言い難い。

(4)職業観

4つの適応尺度共に、H群のCF受検時点での職業観得点が有意に高い。学生時代に職業観を確立し、就職活動した学生ほど就職後の適応が良いと言えよう。

(5)適性職種群

全ての適応尺度との強い関連性が認められる。一つでも適性職種群有りと診断されれば、就職後の適応が高い可能性がある。

(6)選職志向性

一部関連が認められるが、適応予測には他の要因に比し相対的に重みのある要因とは言い難い。

大学生向就職適性検査Career Focusに関する研究(8)

— 検査の利活用と就職後の適応状況との関連性について —

○ 服部 環 松原 達哉 橋川 真彦 国方 健一
(宇都宮大学教育学部) (鶴見大学文学部) (宇都宮大学教育学部) (大学生向職業適性検査共同研究会)

【目的】

ここでは、検査結果の利活用のされ方と就職後の適応状況との関連を検証することを主たる目的とする。また、その際、適性診断結果と実際の就職先及び配属先とのマッチング状況と就職後の適応状況との関連をも検討し、CFの予測的妥当性を検証する。

【方法】

連続発表(7)と同様である。

【結果及び考察】

1. 適性と就職・配属先の関係が適応度に与える影響

(1) 選職志向性(職業興味)と業種

CFのSEARCH①(10尺度)の4・5段階点(適性有)を示す尺度が、就職した事業所の業種と一致している場合を一致群、1・2段階点(適性無)に属する尺度と業種とが一致している場合を不一致群とし、両群の適応得点を比較した。その結果、総合・仕事・会社適応指標共に、一致群の適応得点は有意に不一致群よりも高い。

(2) 選職志向性(仕事の条件)と勤務先のタイプ

一致群及び不一致群を同様に設定した結果、両群間の適応性得点にはいずれも有意差は認められなかった。就職初期の適応には、ここで取り上げたような仕事の条件は重要な要因でないのかも知れない。

(3) 適性職種群と配属先職種

総合・仕事・職場・会社適応指標いずれにおいても、CFのSEARCH②において適性有りと診断された職種群に実際に配属された群(一致群)は、適性無しと診断された職種群に配属された群(不一致群)よりも、適応性得点が有意に高い。

以上のことは、職業興味と関連の深い業種に就くか、あるいは、適性職種に配属されるかが、就職後の適応を大きく左右する要因であることを示唆している。また、同時に、CFの診断結果が、就職後の適応予測の点からみても予測的妥当性の高い検査であることを示すデータであると言える。

2. CFの利活用状況の影響

(1) 診断結果の有用性

CF結果をフィードバックした直後の受検者の有用性認知(追跡調査1)と就職後の適応状況との相関を求めると、低い正の相関が得られた。すなわち、全体

有用性効果、動機づけ効果、自己理解効果、自信への効果があったとする受検者ほど、総合・仕事・会社適応得点が高くなる傾向があった。検査結果のフィードバック時点での効果が、就職後の適応状況にも僅かながら影響していることが示唆されている。

(2) CF結果の活用度

就職活動におけるCF活用度(追跡調査2)と適応性とをみると、CFの活用度の高い者ほど適応性得点が高くなる傾向にある(有意差は仕事適応度のみ)。

(3) 就職活動後のCFへの評価

就職活動に対するCFの評価(追跡調査2)が高い者ほど、4つの適応指標のいずれにおいても、有意に高い適応度得点を示している。

これらのことは、CFを十分利活用し、自己の適性と進路との関係を吟味し慎重に選職し、計画的な準備の基に就職した者ほど就職後の適応が良いことを示している。

3. その他の要因

(1) 希望就職先の実現

学生時代に最終的に就職内定した就職先が、第一希望あるいは第二希望であったか、あるいはそうでなかったか(追跡調査2)という希望の実現は、職場適応指標を除く3指標において関連がみられる。

(2) 最終就職先の満足度

内定段階での最終就職先への満足度(追跡調査2)が高いほど、4適応指標とも有意に高い得点が得られている。

(3) 大学就職部の活用度及び信頼度

在学中における就職部の活用度(追跡調査2)と就職後の適応度とは関連性はみられない。しかし、就職部への信頼度の高い者ほど、総合・仕事・会社適応が有意に優れていることが示された。

就職初期の適応には、本人の希望を如何に満たすかが重要であり、それを支援する就職指導は不可欠の要因であるといえる。

【おわりに】

今回追跡調査の結果、就職後の適応状況からみた場合の診断結果の予測的妥当性は高いことが判明した。また、検査を利用したガイダンスの充実によって、適応面での効果も一層高まる可能性が示唆された。

顔の表現用語とその分析

大沢 光

(富士通株式会社・感性技術推進室)

1. はじめに

筆者は、モノ(生活用品や工業製品)の外観についての「心理感覚の計測」や「感性工学」などに関する研究^{[2][3]}の前提として、表現用語(説明語と印象語)の調査と分析を行っている。この稿は、この研究に関連して行った「人の顔」の表現用語の調査とその分析に関する報告である。

2. 顔の表現用語の調査

(1) “ある”会社の従業員の協力を得て、成人男女各約200名の顔の「正面の顔」のカラー写真を収集し、それぞれの顔について、5～8名の回答者(延べ約2300名)に、それぞれの顔の表現用語を、自由申告法によって、回答してもらった。なお、この調査では、「横顔」や「表情」などは、対象としなかった。

調査の結果は、男性の顔について、表現用語は延べ21562語の回答があり、それぞれの顔につき、回答者1名当たり2～59語、平均で17.9語の回答があった。女性の顔の場合は、延べ19198語の回答があり、それぞれの顔につき、回答者1名当たり2～57語、平均17.6語であった。

(2) ちなみに、モノの外観の表現用語の調査では、それぞれのモノにつき、回答者1名当たりの回答は、平均で、説明語が約4.7語(45%)、印象語が約5.8語(55%)、合計で約10.5語であり、モノの場合に比べて、顔の表現用語の回答数が、非常に多いことが分かる。私たちは、一人一人の顔を区別する必要性から、他人の顔を詳細に観察しており、また、説明できる能力があることが推定される。

3. 顔の「説明語」の分析

(1) 表現用語のうち、顔の特定の部品やその特性などを含んでいるものを「説明語」、そうでないものを「印象語」に分類すると、男性の顔の表現用語のうち、説明語は74.0%、印象語は26.0%であった。女性の顔の場合は、それぞれ77.6%と22.4%であった。

顔の表現用語は、モノの場合に比べて、説明語の構成比がかなり大きい。これも、私たちが、他人の顔の部品やその特性を、詳細に観察しており、また、説明できる能力があることを暗示している。

(2) 男性の顔の「説明語」に対応する顔の部位の構成比は、回答数の多い順に、大別して、髪(11.1%)、目(10.6%)、形(9.3%)、口(5.9%)、眉(5.0%)、鼻(4.6%)、肌(4.4%)、耳(3.8%)、黒子など(2.7%)、額(2.8%)、顎・髭(2.3%)、髭(2.2%)、眼鏡(1.7%)、表情(1.2%)、頬(1.1%)、化粧(0.1%)であった。また、回答には、首(0.6%)、喉(0.1%)、体つき(4.7%)、服装(0.4%)も含まれていた。

なお、「髪」には、髪型と髪の毛などが、「目」には、睫毛、瞳、目つきなどが、「口」には、唇と歯などが、「黒子など」には、えくぼ、シミ、そばかす、ニキビ、キズなどが、「化粧」には、装飾品が含まれている。

人は、顔の部品のうち、「髪」「目」「形」「口」「眉」「鼻」などを“よく”観察しているが、「黒子など」「額」「顎・髭」「頬」などは、相対的な意味で、あまりよく観察していないようである。また、「首」「喉」「体つき」「服

装」なども、同時に、観察しているようである。

(3) 女性の顔の「説明語」の構成もほぼ同様であったが、口(9.8%)、耳(2.6%)、髭(0.0%)、化粧(3.5%)で、“有意な”差がみられた。「髭」および「口」と「化粧」は、男性および女性の特徴であり、「耳」は髪型の影響であろう。

4. 顔の「印象語」の分析

(1) 男性の顔の「印象語」の構成は、その意味と概念を分類すると、回答数の多い順に、印象(7.8%)、性格(7.3%)、仕事・地位(2.7%)、年齢(2.7%)、能力(1.5%)、スポーツ(1.1%)、趣味・社交(0.9%)、健康(0.8%)、育ち・家庭(0.6%)、出身地(0.5%)に分類できた。このうち、その顔の人の社会的な立場を表す言葉(仕事・地位、年齢、能力)は、7.0%あり、また、生活を表す言葉(スポーツ、趣味・社交など)は、3.9%あり、その顔の人の印象は、概ね「印象」「性格」「社会的な立場」「生活」の4つの視点から構成されていることが推定される。

ちなみに、モノの印象語の構成は、印象のほか、品質、使いやすさ、用途など、人とモノの“関係”を視点にしているのに対して、顔の印象語は、人とその(顔の)人の“関係”を視点にしたものになっているようである。

(2) 男性の顔の「印象」を表す印象語をさらに分類すると、好悪(4.0%)、強弱(1.4%)、美醜(0.5%)、態度(0.2%)、その他(1.3%)とあり、また、「性格」を表す印象語は、好悪(4.6%)、強弱(1.6%)、金銭(0.1%)、好色(0.2%)、その他(0.8%)であった。したがって、「印象」「性格」とともに、「好悪」と「強弱」が、その内容の大きな割合を占めることが分かる。

(3) 女性の顔の「印象語」の構成も、ほぼ同様であった。

5. おわりに

次のステップでは、説明語と印象語の「表記・表現の異なり」を「意味の異なり」にまとめる「シソーラス」を構築し、これに基づいて、表現用語同士の関係付けや顔画像の特徴量との関係付けを行い、説明語や印象語から顔画像を検索するシステムの研究を行う予定である。

【文献】

- [1] 香原志勢：顔の本、中央公論社(中公文庫)、平成元年6月
- [2] 大沢光：「ヒトの感覚モデル」の構築の試み、日本応用心理学会第60回大会、平成5年9月
- [3] 大沢光：「心理感覚モデル」のための「同時関係分析法」の開発、情報処理学会第49回(平成6年後期)全国大会論文集、平成6年9月

この報告で利用した分析方法の一部は、通商産業省・工業技術院の産業科学技術研究プロジェクト「人間感覚計測応用技術」の一環として、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)と社団法人人間生活工学研究センター(HQL)を経て、委託を受けて実施した研究によるものである。関係の方々には謝意を表す。

索 引

人名索引

数字はページ数で、斜体は公開シンポジウム、公開特別講演、パネル・ディスカッションの担当者、ゴシック体は口頭・ポスター発表者、明朝体は連名発表者を示す。

-ア-

青木 玲子 61
青山真奈美 36
足立 浩平 31
荒木美千子 43
安藤 詳子 42
飯島 昭子 119
飯塚 幸子 111
井口 拓自 18
石川 正人 108
市川 康夫 110
今林 俊一 90
岩村 暢子 78
上垣 博和 34
浮谷 秀一 91, 92
宇佐見万喜 37
内田 誠也 80
内海 滉 39, 40, 41, 42, 84, 85, 87,
88, 89, 112, 113, 114,
115, 116, 117, 118, 119
尾入 正哲 47
王 晋民 58
大沢 光 58, 59, 131
大瀧 法子 109
大村 政男 20, 81, 91, 92
岡村 千鶴 117
岡本 善之 104
小川 隆章 51
荻久保嘉章 126
荻野 七重 50, 109
越智 啓太 101
小原 伸子 61
恩田 彰 5

-カ-

垣本由紀子 32
片岡 大輔 55, 125
金井 悦子 86
金山 正子 85, 89
上村 雅子 10

川島 大司 27
川島 真 94, 95
川村 司 74, 75, 76
川本利恵子 85, 89
岸本 英男 106
橘川 真彦 129, 130
木下 安子 109
木村登紀子 2
久木原博子 115
草野美根子 112, 113
久東 光代 94, 95, 103
国方 健一 129, 130
久米 稔 27
蔵本 逸雄 80
黒田 淑子 107
越河 六郎 44
古寺 充 52
小林 東 127, 128
小林 結美 109
小森田哲哉 127, 128

-サ-

斎藤 勇 50
齋藤幸一郎 25
相良陽一郎 101
佐藤 達哉 19
佐藤 啓子 61
佐藤みつ子 88, 118
佐藤 嘉晃 110
佐野 毅 127, 128
志津野知文 13
新小田春美 113
菅野 久信 80
菅原 博嗣 74, 75, 76
鈴木 昭弘 31
鈴木 正子 3
関 陽子 72, 73
關戸 啓子 39
薛 永斌 81

-タ-

高石 光一 126
 高澤 則美 72, 73
 高嶋 正士 1, 22
 高橋 敷 45
 高橋 たまき 105
 高橋 浩子 121, 122
 瀧本 孝雄 35
 竹内 由則 29, 32
 蓼沼 康子 11
 田中 熊次郎 23
 田中 寿一 15
 田中 直子 123
 田中 富士夫 28
 田中 マキ子 85, 89
 玉井 寛 98, 99
 大坊 郁夫 48, 123, 124
 塚本 尚子 60
 辻 昭 127, 128
 土屋 明美 63
 土屋 隆裕 98, 99
 寺沢 充夫 26
 時田 学 66, 82
 徳田 豊 96
 外島 裕 55, 125
 豊村 和真 36, 79
 - ナ -
 中 淑子 112, 113
 中尾 忍 54
 中島 彩花 97
 中原 弘之 93
 中村 安子 121, 122
 永澤 幸七 24
 成田 猛 38
 新田 茂 34
 - ハ -
 橋本 泰子 7, 110
 長谷川 啓 9
 長谷川 藤一郎 62
 畠山 彰文 48
 服部 環 129, 130
 花沢 成一 69
 濱 保久 49
 林 潔 24, 35
 原口 知子 40
 馬場 房子 16
 日沼 千尋 117
 廣島 克佳 46

深田 高一 113
 福井 嗣泰 33, 108
 福田 廣 100
 福本 純一 100
 富家 孝 21, 83
 藤田 主一 17, 22
 藤田 勉 94, 95
 堀口 陽子 40, 41
 本多 敏雄 57
 - マ -
 松井 洋 98, 99
 松尾 典子 87
 松下 由美子 43
 松田 君彦 65
 松田 浩平 127, 128
 松原 達哉 129, 130
 三島 二郎 26
 三井 利幸 74, 75, 76, 77
 水口 有 59
 宮島 直子 114
 向井 希宏 56
 村井 健祐 53
 村本 淳子 84
 望月 稔 26
 本明 寛 6
 元山 美貴 40, 41
 森 千鶴 88, 118
 森下 高治 54
 森津 純子 4
 - ヤ -
 矢木 公子 8
 谷島 弘仁 102
 矢吹 芙美子 67
 山岡 淳 81, 82
 山田 隆 120
 山田 麻有美 68
 山本 勝則 116
 山本 都久 64
 横山 正明 14
 吉川 晴美 70
 義永 睦子 71
 - ワ -
 若原 克文 74, 75, 76, 77
 渡辺 昭一 30, 31
 渡邊 憲子 42
 渡辺 好章 12
 和田 佳子 69

日本応用心理学会第61回大会賛助団体御芳名

株式会社 アポロン	株式会社 三京房
株式会社 医学出版社	株式会社 三耀
株式会社 栄美通信	ホテルサンロード
株式会社 大林組	株式会社 実務教育出版
株式会社 学文社	新日本航空サービス 株式会社
家政教育社	(城西大学トラベルセンター)
川島書店	新興洋行 株式会社
株式会社 京王プラザホテル	株式会社 ナカニシヤ出版
啓明出版 株式会社	福村出版 株式会社
株式会社 芸林書房	八千代出版 株式会社
坂戸グランドホテル	学校法人 城西大学
坂戸ホテル	(五十音順)

本大会の開催にあたり、上記の諸団体より多大なご支援をいただきました。
ここに、その御芳名を記して、感謝の意を表します。

1994年11月22日

日本応用心理学会第61回大会
準備委員長 渡 辺 好 章

駒崎 勉 渡辺 好章 岡村 一成 藤田 主一



準備委員紹介

佐藤 惣三



大村 政男



和田 美知子

清水 公一



佐藤 嘉晃



水田 祐

外島 裕



高嶋 正士



堀江 光



細部 国明



福田 高光



橋本 泰子

日本応用心理学会第61回大会準備委員会

名誉委員長	駒崎 勉（城西大学経済学部教授）
準備委員長	渡辺 好章（城西大学経済学部教授、経済学部長）
副委員長	岡村 一成（富士短期大学教授、城西大学経済学部講師）
事務局長	藤田 主一（城西大学女子短期大学部助教授）
委員	大村 政男（日本大学文理学部教授）
	佐藤 惣三（城西大学経済学部事務長）
	佐藤 嘉晃（城西大学女子短期大学部助教授）
	清水 公一（城西大学経済学部教授）
	高嶋 正士（共立女子大学家政学部教授）
	外島 裕（日本能率協会マネジメントセンター開発部長）
	橋本 泰子（城西大学女子短期大学部助教授）
	福田 高光（城西大学女子短期大学部事務長）
	細部 国明（城西大学経済学部教授）
	堀江 光（城西大学女子短期大学部教授）
	水田 祐（城西大学事務局総務課）
	和田美知子（城西大学女子短期大学部助手）

〈編集 藤田主一・和田美知子〉

日本応用心理学会第61回大会発表論文集

発行日 1994年11月22日
発行者 日本応用心理学会第61回大会準備委員会
委員長 渡辺 好章
〒350-02 埼玉県坂戸市けやき台1番1号
城西大学
TEL 0492-71-7786 FAX 0492-71-7982